富田川

―― 飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告(4) ――

昭和59年3月

教育委員会

序

富田川に架した富田橋・新宮橋を含む河床に城下町が姿を現し、衆目を注がれるようになってから早や20年が過ぎようとしています。

昭和48年以来、数次にわたる調査により少しずつ遺構が姿を現し、白い陶磁器の1つ1つにも、その昔山陰・山陽を掌握した大名の栄華が偲ばれます。またこれらの調査により遺跡の歴史学的・学術的価値の大きさが改めて明らかにされ全国でも数少ない中世城下町遺跡として注目されています。そして中国製染付・青磁・白磁や、伊万里焼・唐津焼、宋銭・明銭などの出土により各地との広い交流がうかがわれ、福井朝倉氏遺跡とともにまさに中世日本海文化を代表するものであります。

私達の先人が営んだこれらの遺産を我々は正しく後世に伝えねばならぬという責務を感ずるとともにこれらの成果を広くご活用いただき文化財に対する一層のご理解を賜われば望外の喜びであります。

なお、本書を刊行するにあたりご協力いただいた地元関係各位に衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和59年3月

島根県教育委員会教育長

栗　栖　理　知

目　　次

Ⅰ　調　査　組　織……1

Ⅱ　凡　　例……2

Ⅲ　調査に至る経緯……3

Ⅳ　調　査　の　概　略……（内田　律雄）7

Ⅴ　遺　構　の　概　要……（　〃　）8

Ⅵ　遺　物　の　概　要……44

1.　中世以前の遺物……（内田　律雄）44

2.　石　製　品……（　〃　）51

3.　金属製品……（　〃　）52

4.　古　　銭……（　〃　）52

5.　木　製　品……（丹羽野　裕）53

6.　中国陶磁器……（内田　律雄）71

7.　李朝系陶磁器……（　〃　）72

8.　唐津系陶器……（　〃　）78

9.　信楽系陶器……（　〃　）82

10.　伊万里系磁器……（　〃　）116

11.　備前系陶器……（丹羽野　裕）120

12.　美濃・瀬戸系陶器……（　〃　）134

13.　か　わ　ら　け……（　〃　）137

14.　円盤状土製品……（内田　律雄）143

15.　瓦……（　〃　）144

16.　火縄式銃砲……（　〃　）155

17.　その他の遺物……（　〃　）155

Ⅶ　小　　結……（　〃　）157

Ⅷ　遺　物　一　覧　表……159

Ⅸ　写　真　図　版

I 調 査 組 織

調査主体　島根県教育委員会教育長　水津卓夫　　栗栖理知

事 務 局　文化課課長　　福田治夫　　美多定秀
同　　主査　　藤間　亨
同課長補佐　　長谷川行雄　　蓮岡法暲
文化振興係長　　岩崎況一郎
同　　主事　　吉井良夫
埋蔵文化財第一係長　　勝部　昭
同　　第二係長　　石井　悠

調 査 員　主　　事　　内田律雄
（兼）主事　　丹羽野裕

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会委員・島根大学名誉教授）、町田　章（同委員・奈良国立文化財研究所）、住田　勇（日立金属和鋼記念館）、原　宏（島根県文化財保護審議会委員・島根大学教授）、池田満雄（同　委員・県立松江農林高校教諭）、松下正司（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所長）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、日東勝郎（土岐市美濃陶磁歴史館）、長瀬治義（可児市教育委員会）、小野正敏（朝倉氏遺跡調査研究所）、尾崎葉子（有田町歴史民俗資料館）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、田中義昭（島根大学教授）、渡辺貞幸（島根大学助教授）、高安克己（島根大学助教授）、大塚則久（東京大学医学部）、小笠原好彦（滋賀大学教授）、村上　勇（島根県立博物館）、間壁葭子（倉敷考古館）、関口広次（日本考古学協会々員）、西谷正（九州大学助教授）　　（順不同・敬称略）

調査協力　広瀬町教育委員会、藤原久良、西尾良一、竹中　哲、内田雅己、実重四郎、宮沢明久、富田修治、渡辺陽一、石倉一弘、井上治夫、浅沼政誌、房宗寿雄、片岡詩子、安部正道、成瀬經男、篠原芳秀、村田久美子、田中いずみ、加納裕子、吉岡七江、宍道正年、三宅博士

発掘調査参加者

永島　勝、小川岩吉、竹内　基、深田千尋、坂田幸雄、村上忠雄、若月　博、岩田三郎、加藤峰一、須藤佐一郎、樋野勝彦、真先　栄、木次健一、吉川幸市、深田明夫、瀬尾末子、吉川勝代、山崎美代子、宇山益子、清山勝子、岩田　環、岩田久美枝、松岡美保子、吉野好枝、竹内真理子、岩田君子、村田弘子、大久保徹也、後藤　太、坂田　操、荒金純治、飯塚康剛、松本光生、石田幸夫、宇山　智、林　高好、市川健治、青木龍也、藤井康二、増岡語志、藤原哲也、山崎誠吉、田中文子、浦田和彦

遺物整理協力者

宅和真由美、竹内信枝、佐藤順子、堀　友子、田根裕美子、石倉由子、繁浪真理、大菅ちえみ、出雲友佳子、片寄厚子、石倉敬子、因幡久美子、森山紀美子、小原明美、森山悦子、鍜冶正彦、荒木利幸、村上亨子

Ⅱ　凡　　例

1. 本書は島根県土木部河川課の委託を受けて、島根県教育委員会が昭和57年度に実施した、飯梨川河川改修工事に伴う富田川河床遺跡の発掘調査の概要である。
2. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
   ＳＢ――建物跡。建物に関係する遺構。ＳＡ――柵列。杭列。ＳＤ――溝状遺構。ＳＥ――井戸。ＳＫ――土坑状遺構。ＳＸ――建物跡及びそれに関係する遺構を仕切る石列。主要な遺構と方向を異にする石列。ＳＺ――特殊遺構。第３遺構流砂――Ⅱ区の第３遺構面の上に堆積した流砂。
3. 本書で使用した方位は調査時の磁北を示す。
4. 本書の編集は内田律雄が行った。
5. 本書の執筆は、丹羽野裕、内田律雄が行い、それぞれの文責は目次に示した。
6. なお本書を作成するにあたって、昭和55年・56年度発掘調査の成果を十分取り入れることができなかった。関係各位には深くお詫びする次第である。

Ⅲ　調査に至る経緯

富田川（とだがわ）河床遺跡は国指定史跡富田城跡の西方を流れる富田川（古名飯梨川）の河床一帯にある中世から近世初頭にかけての尼子・毛利・堀尾三代の城下町遺跡である。

慶長16年（1611年）に堀尾氏が城を松江に移した後も、富田の城下町は飯梨川流域の中枢的町として繁栄していたが、寛文６年（1666年）秋に襲った大洪水により瞬時にして潰滅し、その後300年以上も河床に埋没することになった。

ところが、昭和30年代に建設された床止め堰堤やダムによって、富田川河床の土砂の堆積が少なくなり、昭和40年代に入ると、それまで埋没していた城下町遺構の一部が水面に露出するようになった。当時は「まぼろしの城下町」の出現として注目されるとともに、遺跡の重要性と調査の必要性が説かれはじめた。

そこで、広瀬町教育委員会を中心に、昭和49年から３ケ年間にわたり、新宮橋下流域の一角で発掘調査が開始された。この調査によって建物跡をはじめとする道路跡や石組井戸などの旧城下町の一部が検出され、同時に多量の出土品をみた。この３ケ年間の発掘調査の記録は、広瀬町教育委員会より『富田川河床遺跡発掘調査報告』（昭和52年３月）としてまとめられ刊行された。

さらに、昭和55年からは島根県土木部が行う飯梨川河川改修工事に伴って島根県教育委員会が工事区域内の発掘調査を実施し、57年度はその３年次に当る。以下は昭和57年度の発掘調査の概要である。

昭和57年６月22日（火）　広瀬土木事務所、広瀬町教育委員会、広瀬町立歴史民俗資料館、永島勝氏等と調査についての打合せ。

６月23日（水）　Ⅰ区の発掘に入る。基準杭打ち。

６月25日（金）　第１遺構面あらわれる。

６月30日（水）　Ⅱ区に試掘坑を入れる。

７月６日（火）　Ⅱ区流砂発掘。

７月12日（月）　Ⅰ区第２遺構面検出。ＳＥ０１検出。

７月19日（月）　プレハブをⅡ区へ移動。Ⅱ区ＳＥ０１付近より絵唐津壷出土。

７月21日（水）　Ⅱ区で第１遺構面を検出。堺市教育委員会の嶋谷和彦、森村健一氏来跡。

７月31日（土）　西日本人文系学芸員研究集会々員の見学（村上勇氏他50名）

8月3日（火）　渡辺陽一氏来跡、島根大学渡辺貞幸助教授見学。

8月4日（水）　Ⅰ区第3遺構面検出。

8月7日（土）　Ⅰ区第3遺構面の下より火縄銃出土。

8月10日（火）　Ⅰ区ＳＥ０２検出。

8月20日（金）　Ⅱ区第1遺構面実測。本日より富田城関連遺跡西ノ坊調査区の発掘はじまる（川原和人調査）。

9月3日（金）　Ⅱ区第2遺構面検出。

9月11日（土）　倉敷考古館間壁葭子先生来跡。

9月13日（月）　水の浸入を防ぐために築いたⅡ区の堤防が前日の増水により決壊する。修復に1日かかる。

9月25日（土）　大雨の為、増水し遺跡は完全に水没する。寛文6年の洪水を彷彿とさせる。濁流は3日間引かず。遺構大破。遺物多数流失。

9月29日（水）　広瀬町内より麻袋を集めて堤防修復。2日かかる。

10月1日（金）　Ⅱ区第3遺構面検出。

10月3日（日）　くにびき国体はじまる。内田は競技役員として東出雲町へ。6日まで発掘作業中止。広瀬町はフェンシング会場になる。

10月8日（金）　Ⅱ区の流砂中より三彩の水注出土。

10月14日（木）　群馬県立歴史博物館の外山和夫・嶌村真也両氏来跡。第3遺構になって伊万里が出土しなくなった。

10月22日（金）　関口広次氏来跡指導。

11月6日（日）　調査員・作業員全員で同じ中世の遺跡である福井県一乗谷朝倉氏遺跡を見学する。小野正敏氏講師。

11月16日（火）　Ⅱ区第4遺構面検出。永島・小川両氏による徹夜排水はじまる。

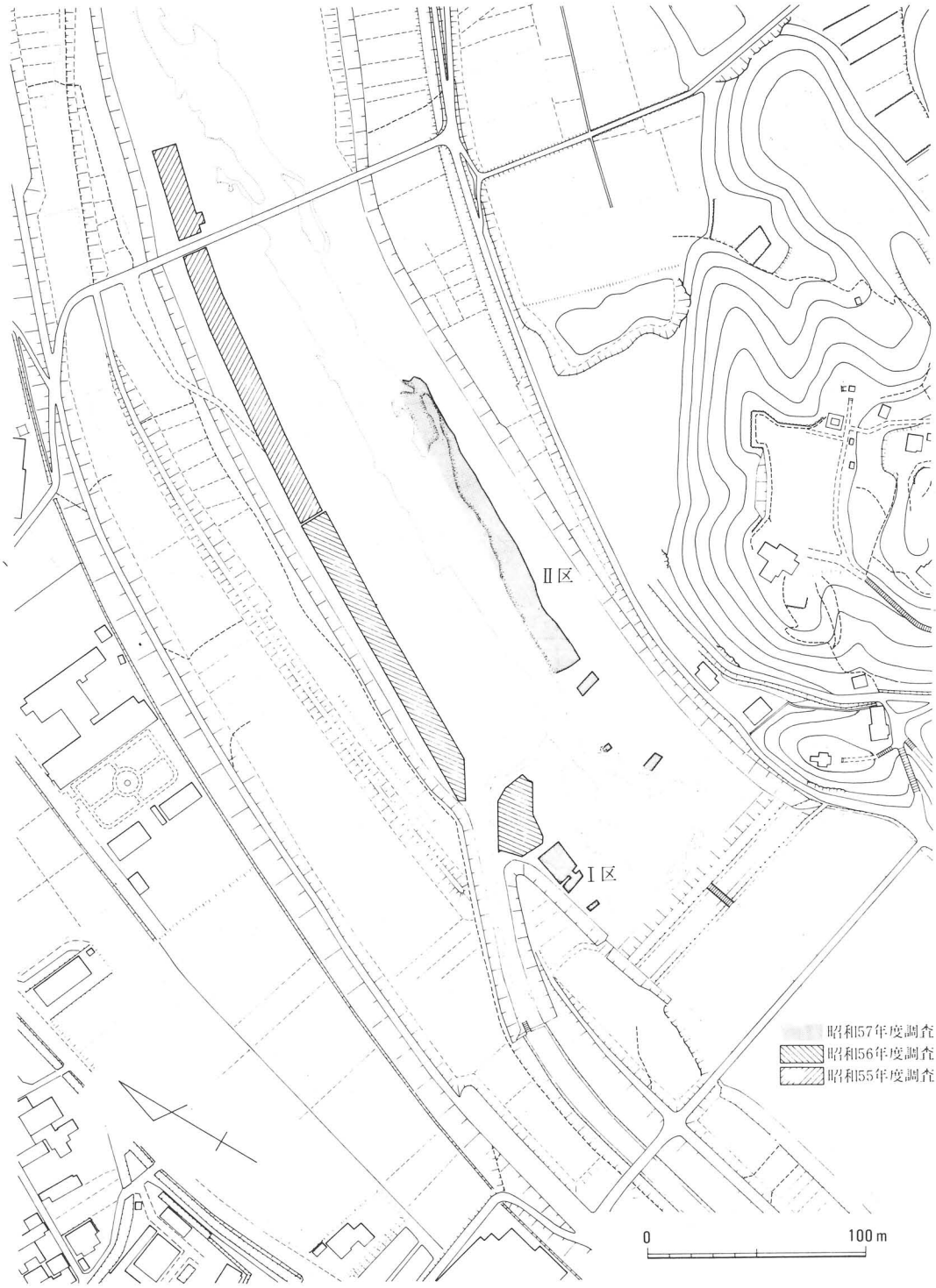
12月11日（土）　山本清、原宏、池田満雄、渡辺貞幸諸先生による調査指導。

12月25日（日）　島根の文化財を学ぶ会見学。内田・丹羽野・竹中講師。

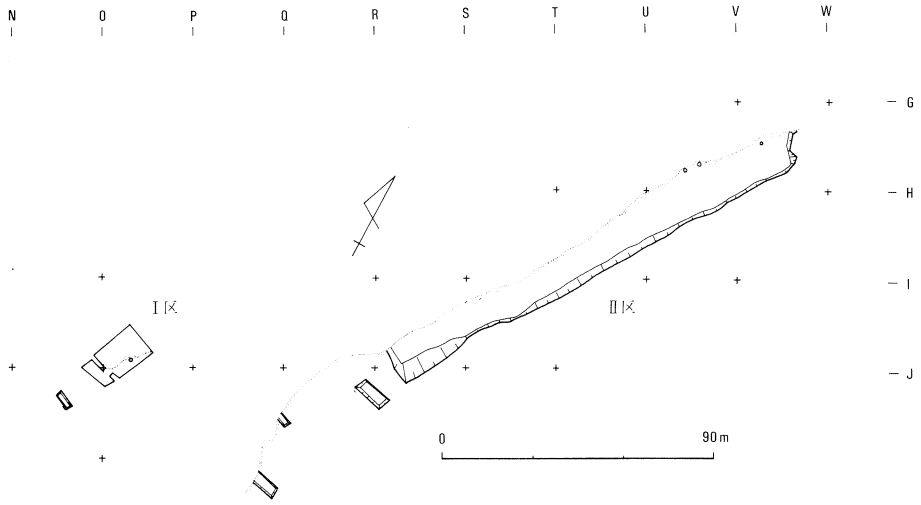
12月27日（火）　発掘作業終了。本日までの調査成果の検討会。

昭和58年2月8日（土）　佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二氏による調査指導。

3月2日～5日　富田川河床遺跡出土の美濃・瀬戸系陶器同定のため、愛知県、岐阜県へ内田、丹羽野調査。吉岡七江同行。



第 1 図　発掘調査区位置図



第 2 図　調査区設定図（各ポイントは右〔東側〕を先に上〔北側〕を後に読む）

流　　砂		1666年（寛文6年）
第 1 遺構面	SB01・02・03・14・15 SX01・05・06 SA01・02・03 SD01	
第 2 遺構面	SB07・08・09・16 SX04・08・09・10・11・12 SA04・05・06・07	
第 3 遺構流砂		1635年（寛永12年）
第 3 遺構面	SB04・05・06・10・11・12 SX03・14・15 SA08 SD02 SK01	
第 4 遺構面	SB04下層・05下層・06下層・12下層 SX13 SA10・11 SZ01	1600年頃
砂　礫　層		古墳～奈良時代

第 3 図　II区遺構・土層関係

Ⅳ 調査の概略

昭和57年度の富田川河床遺跡の発掘調査は、昭和55年度、同56年度調査区続きの富田川左岸上流部と、発掘調査としては初めての右岸を行った。前者は幅11 m、長さ30 mでⅠ区とし、後者は幅11 m、長さ150 mの範囲で、これをⅡ区と呼ぶことにした。このⅠ、Ⅱ区の調査範囲以外にも、それぞれの上流側に2～3箇所の小トレンチを入れ遺構、遺物の有無を確認したが、何らそれを発見することはできなかった（第2図）。従ってこれらの部分は発掘調査の対象からはずすことにした。恐らく、幾度も、くりかえされた洪水によって遺構は流失したものと考えられた。

Ⅰ区は比較的残存状態良好な遺構を検出した。上層部よりそれぞれ、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面としてこれを精査した。その結果、第1遺構面と第3遺構には石列による建物を区画していたと考えられる遺構を、第2遺構面には4間×5間以上の掘立柱建物跡、柵列等を検出した。また、これらの遺構と関係すると考えられる石組井戸を検出した。

遺物は各遺構面、構築土全てから出土し、陶磁器には中国製青磁、白磁、染付、伊万里系磁器、唐津系陶器、備前系陶器、美濃瀬戸系陶器があった。特に第3遺構面構築土からは、これまで全国でも発掘例のほとんどなかった火縄式銃砲が出土した。

Ⅱ区は流砂の下の遺構の残存状態が極めて悪く、富田川の流路が変った寛文6年（1666年）の大洪水以降から現在まで、場所によっては幾度も増水による遺構の破壊が行なわれていたことが知られた。従って部分的にはかなり下層の遺構が露出していたところもあり、層序関係の確認に難航した。発掘期間中に経験した二度の増水はさらに調査を困難にするものであった。

Ⅱ区の遺構は4面検出し、上層のものから、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面、第4遺構面とした。第1遺構面から第4遺構面まで存在するのは、Ⅱ区の中でも上流側で、下流部分については、第3、第4遺構面しか残っていなかった。それぞれの遺構面には、建物を区画したと考えられる、石列、杭列、溝状遺構があった。また、下流側において、三基の石組井戸を検出した。遺物には陶磁器として中国製青磁、白磁、染付、伊万里系磁器、唐津系陶器、備前系陶器、美濃瀬戸系陶器の他、李朝系陶磁器や瓦器がみられた。全体的にみると、唐津系陶器の量がとりわけ多く、備前系陶器や伊万里系磁器がこれに続くものである。また、木器の保存状態も良好で、種々の下駄、椀等が出土した。

V 遺構の概要

1 Ⅰ区（第4図 図版3～9）

富田川の左岸をⅠ区とし、右岸をⅡ区と呼ぶことにした。Ⅰ区では三つの遺構面を確認した。

（1）第1遺構面（第5図 図版3、4）

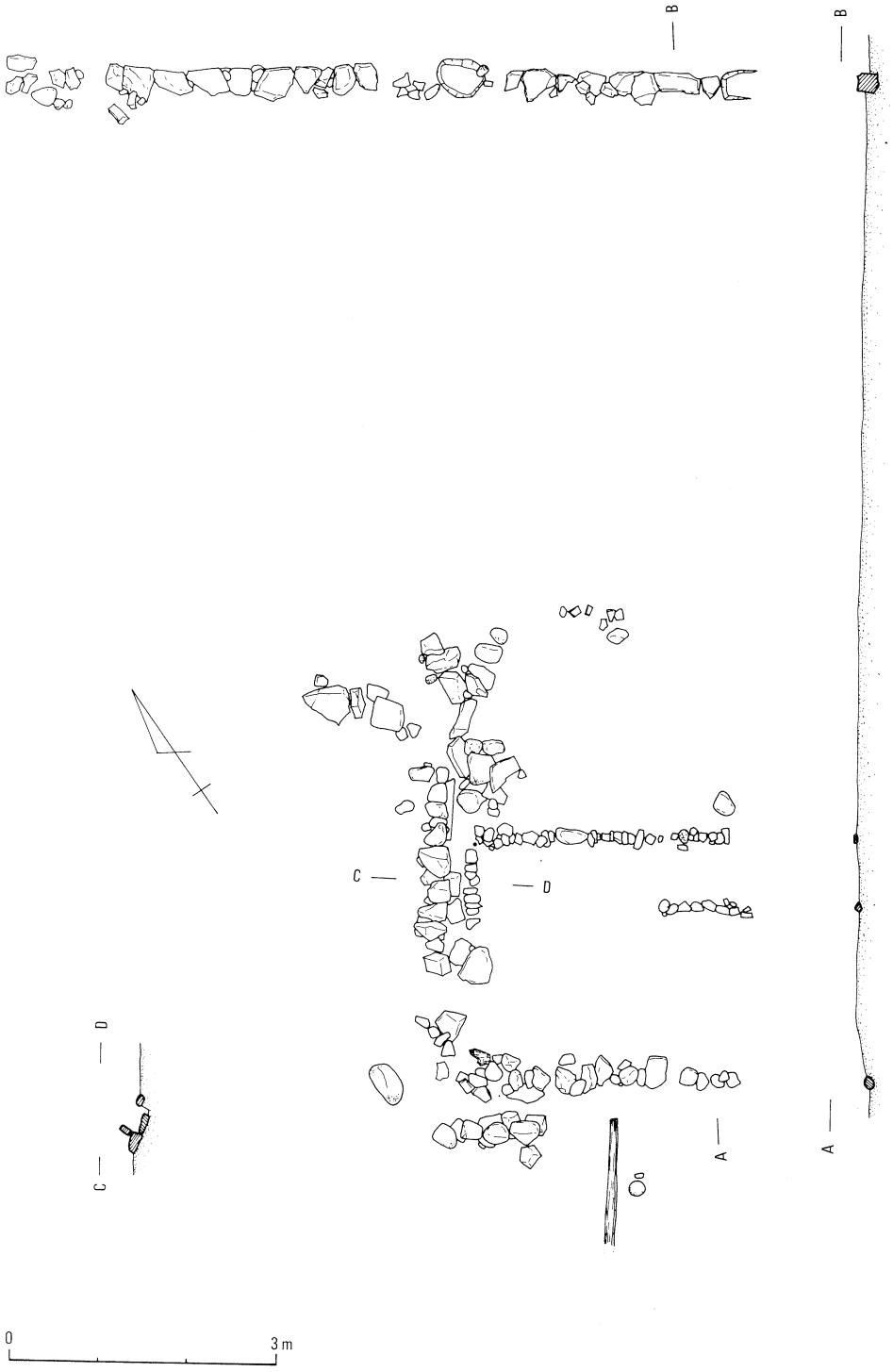
第1遺構面では流砂の下より建物に伴うと考えられる石垣状の石列と比較的小さな石による石列を検出した。ＳＢ０１東側の石列は径約50㎝の比較的大形の自然石や割石によって作られているが、2段以上に積み上げられている部分はなかった。恐らく寛文6年の洪水によって失われたものであろう。長さは北西から南東、すなわち、富田川に直行する方向に約10ｍ残っていた。石垣の面は東側（下流の方向）に向けられている。この石垣の南側は14ｍにわたり整地されており平垣面をなす。東側半分は10×6ｍの広い平垣面、西側は3×2ｍの小区画が石列を共有しながら並んでいる。Ｃ－Ｄセクションからわかるように中央の小区画の北西側に幅約30㎝の溝状の石列が作られている。この溝状石列の北西側にも石列による区画があったと思われるが、遺構は水流によって破壊されており存在しなかった。最も南側の小区画の床面からは建築材と考えられる柱状の木が検出された。全体に川側は破壊されており、遺構面は今少し南東に広がっていたと考えられる。従って、後述するＳＥ０１との関係は明らかにできなかった。

（2）第2遺構面（第4図 図版5、6）

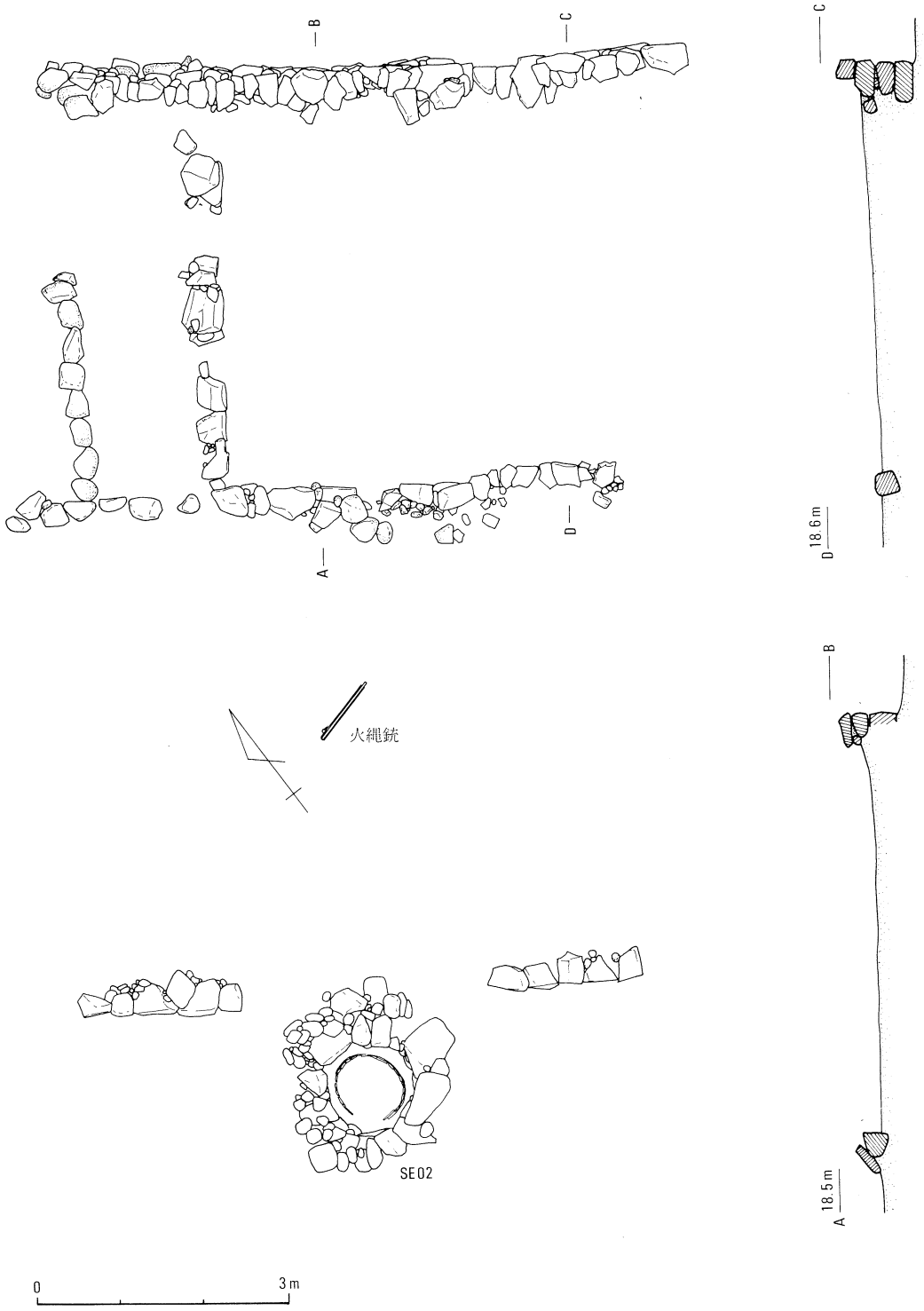
第1遺構面の下に検出した掘立柱建物跡（ＳＢ０２、ＳＢ０３）と柵列（ＳＡ０１）を中心とする遺構である。ＳＡ０１以外の建物は皆第1遺構面で検出したＳＢ０１の方向とほぼ一致する。ＳＢ０２は4間×5間もしくはそれ以上で、柱間距離は1～1.4ｍである。ＳＢ０３はＳＢ０２の北東側に約1.2ｍ離れた建物で、川に直交する方向に3間の柱穴を検出した。元来の規模はＳＢ０２と同様であったと思われる。柱間距離は1.3～1.9ｍでありＳＢ０２に比較してやや長い。ＳＢ０２の南側に幅約10㎝、厚さ5㎝ほどの粘土による小区画を検出したが性格は不明である。ＳＢ０２やＳＢ０３と同一レベルにあり、方向もそれらと同じであるので、ＳＢ０２の付属施設、もしくはさらに上流側にあったと考えられる遺構に関係するものであろう。また、以上の遺構の方向を無視したＳＡ０１も同一面で検出したが互いの先後関係はつかめなかった。ＳＡ０１に使用されているのは径5㎝前後の雑木で間隔も不揃である。ＳＢ０２、ＳＢ０３、ＳＡ０１のいくつかには柱痕が残存

第1遺構面
JO
SB01
SE01
第2遺構面
SB02
SB03
SA01
JO
第3遺構面
JO
SE02
SB04
0
5m

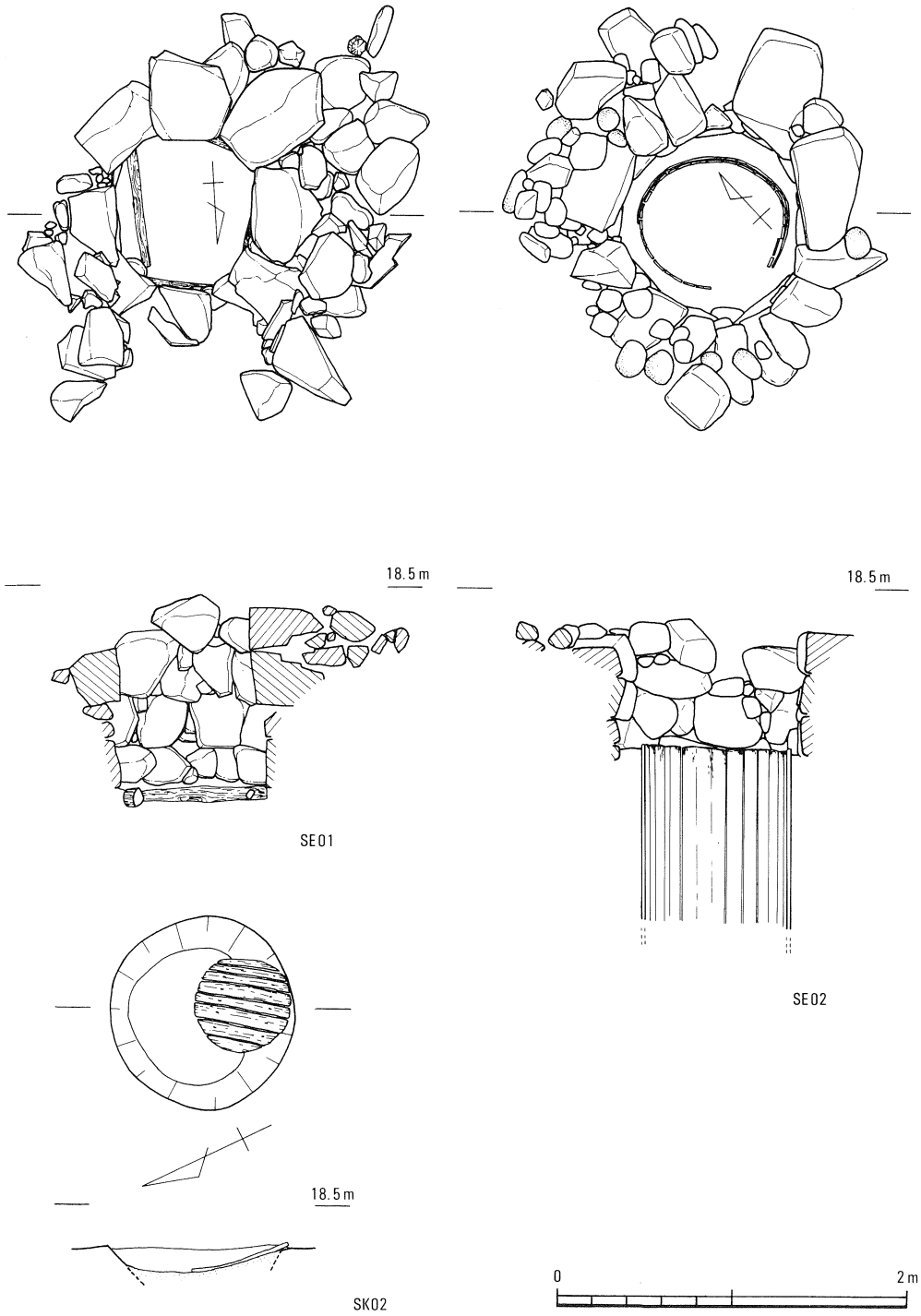
第 4 図　Ⅰ区遺構配置図



第 5 図　Ⅰ区第１遺構面実測図



第 6 図　Ⅰ区第３遺構面実測図



第 7 図　Ⅰ区 SE01、02、SK02 実測図

しているものもあった。

（3）第3遺構面（第6図　図版6、7）

建物跡（ＳＢ０４）に伴うと考えられる石列と、井戸（ＳＥ０２）を検出した。石列の方向は、第1遺構面、及び第2遺構面の石列や柱穴群とほぼ同一である。最も北側にある石列は多いところで4段（1 m）に積み上げられ（Ｃ－Ｄセクション）、裏込め石がみられた。この石列は川の近くほど高く積み上げられており（Ａ－Ｂセクション）、もともとの地形が、現在の富田川の方向に低くなっていたことを示していた。この石列の南側は整地されている。中央の石列までは5 mを測る。その間をこれらの石列に直交する方向（川の方向）に二列の石列が検出された。さらに最も西側の石列はＳＥ０２によって中ほどがとぎれたかたちで検出された。

（4）井戸

ＳＥ０１（第7図　図版8）

Ｉ区の富田川よりに検出した井戸である。ほぼ円形で、深さは約1.1 mを測る。底に雑木による簡単な木組の施設がある。自然石と割石を用いて構築されている。底の径は0.8 mであるが底より0.5 mほどの高さから石を内部にせりださせており、径が約10cm小さくなっている。自然石や割石の大きなものは60×50×30cm前後で井戸の周囲にめぐらせている。裏込石は径10～20cmほどの自然石が用いられている。底は砂地である。

ＳＥ０２（第7図　図版8）

Ｉ区第3遺構面に検出した井戸である。平面円形プランで径は1 mを測る。石積みは自然石や割石を用いており3～4段あり、深さは0.7 mまで確認した。それより下は桶を埋めている。径は0.85×0.75 mで深さは約1 mまで確認することができたが、発掘途中で横水の為に井戸の壁が崩れ、危険と判断し、調査は図示したところまでで打ち切ることにした。第3遺構面のＳＢ０４に伴うものと考えられる。

ＳＫ０２（第7図　図版9）

第2遺構面と第3遺構面の間層中に発見した。遺構として疑わしいところもあるが、若干周辺と異なる土が認められた。径約1.1 cmの浅い円形の土坑状を呈す。深さは約15cmある。土坑の南壁よりに径55cmの円形の木製の蓋があった。8枚の板をつなぎあわせ二つの把手をつけたものである。

2.　Ⅱ区

富田川の左岸の調査区をⅡ区とした。幅14 m長さ150 mの範囲である。よって調査区のかなりの部分は、現在の水路部分におよんでいる。従って遺構は、Ｉ区のそれよりも悪い

残存状態であった。川岸に近い部分は、寛文６年（1666年）以後も幾度も水による遺構の破壊をうけていることが知られた。発掘調査の結果、Ⅱ区には二箇所特に遺構の崩壊の著しいところがあった。調査期間中にも、二度の水害に見舞われたが、その時発掘調査区内の富田川よりに水の浸入を塞ぐために築いた堤防の崩壊箇所は、前述の遺構破壊箇所と二度とも一致した。

Ⅱ区では最上層の流砂の下に遺構面を４層にわたり確認した。それを、順次上層より、第１遺構面、第２遺構面、第３遺構面、第４遺構面と呼ぶことにした。

（１）第１遺構面（第８図　図版１、10～14）

第１遺構面は調査区内のほぼ上流側½の区域で、下流側は全て遺構は破壊され流失していた。第１遺構面では東西方向の溝と、その両側に、いくつかの石列による建物の区画、掘立柱建物跡、杭列等を検出した。

ＳＤ０１（第８図　図版１）

南西から北東に走る幅0.8ｍ、深さ約0.7ｍの石積みの溝である。調査区内での長さは38ｍであるが、もともと川や未調査区の方向にさらに続いていたものと考えられる。第１遺構面の他の全ての遺構はこのＳＤ０１の方向に沿って検出された。ＳＤ０１はＳＢ０２付近に最も石積みがよく残っているが、他の部分は、恐らく寛文６年の洪水によって流失したのであろう、溝の中には多量の遺物とともに石列の石材が転落していた。

ＳＢ０１（第９図　図版12）

掘立柱建物跡である。ＳＤ０１の方向に３間のみ検出した。下流側の柱穴には下流の方向に傾いている16×16㎝の断面方形の柱根が残っていた（Ｐ１）。他の柱穴にはみられなかったが、Ｐ１のみみられたのは建物の角に位置する柱であった為であろう。柱間距離は2.4ｍである。尚、ＳＢ０１をあたかも囲むかのように、雑木類による柵列（ＳＡ０１第８図）を検出した。西側はＳＸ０５によって区画されていたと考えられる。

ＳＢ０２（第10図、11図）

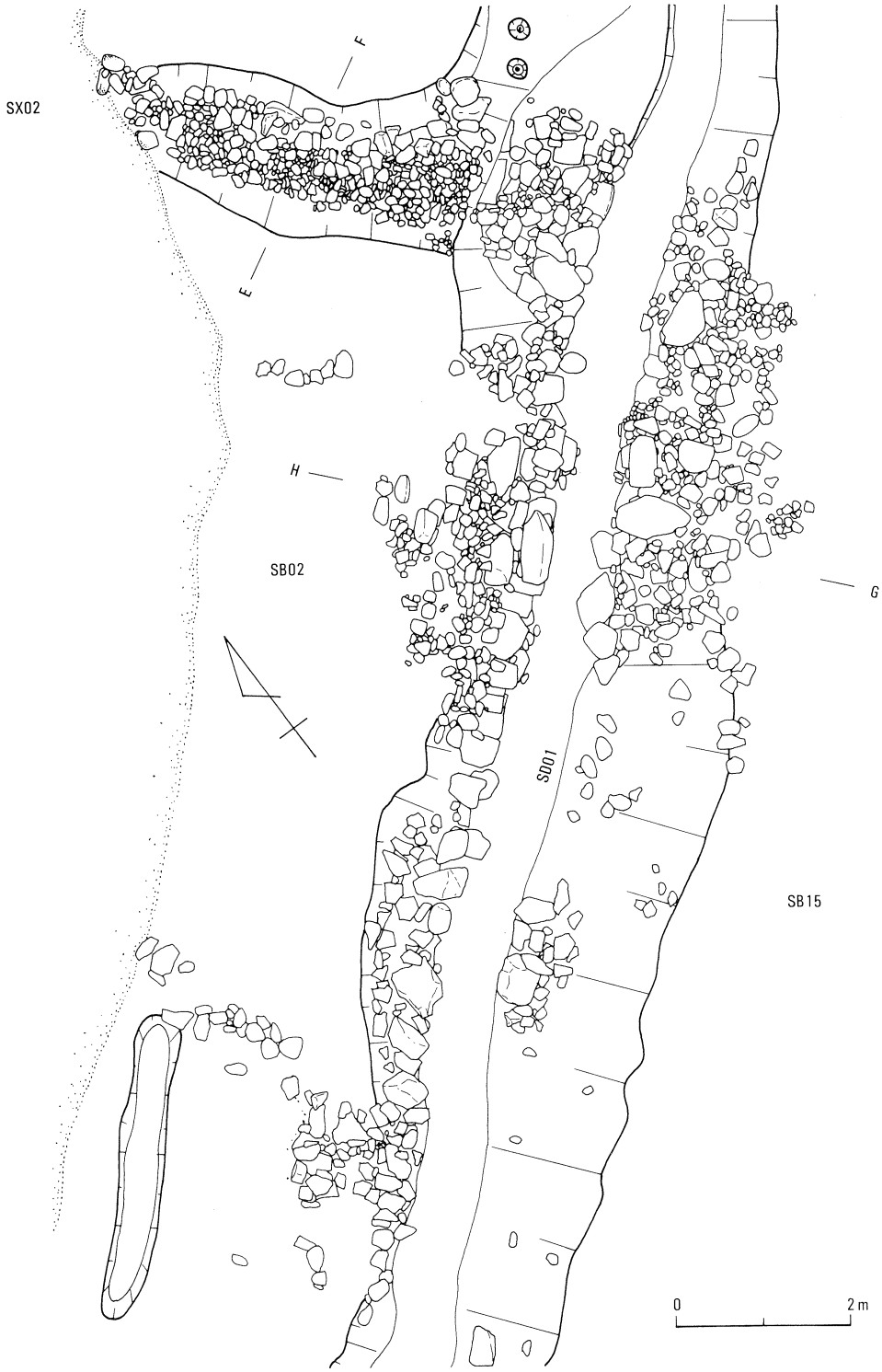
ＳＢ０１の東側の平坦面である。ＳＤ０１、ＳＡ０１、ＳＸ０２に囲まれた範囲である。掘立柱跡、礎石等の施設は発見できなかった。残存部は約10×3.6ｍある。

ＳＢ０３、ＳＡ０２、０３、ＳＸ０２

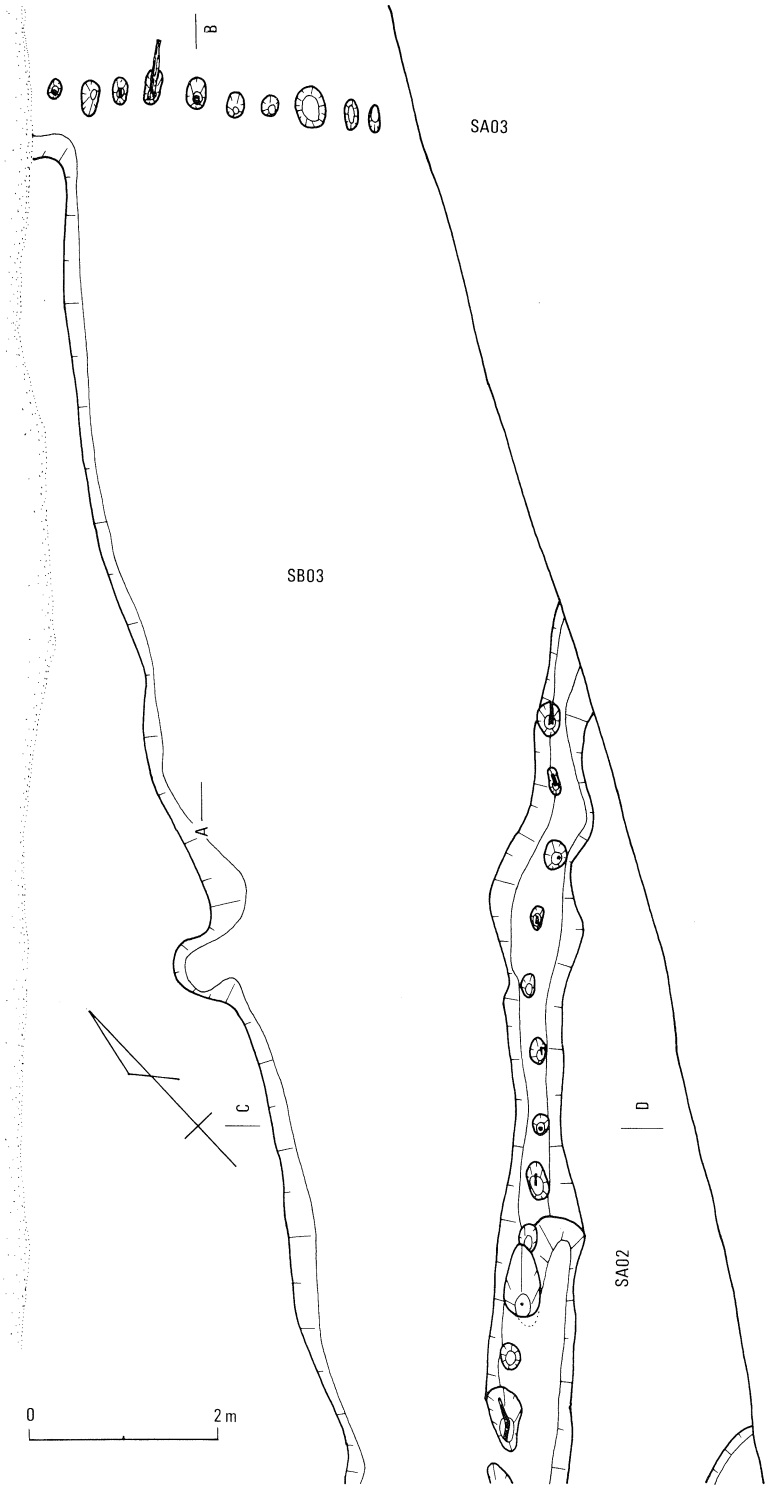
ＳＢ０２、及びＳＸ０２の東側にＳＡ０２、ＳＢ０３の柵列と、それらに囲まれた平坦面であるＳＢ０３を検出した。ＳＢ０３は残存部が16×5.2ｍあり、ＳＢ０２とＳＸ０２によって仕切られている。ＳＡ０２とＳＡ０３は南側の未発掘区域につづき連結するものであろう。この柵列に使用されているのは径10㎝以下の雑木類で、杭が残っているものは皆

第 8 図　Ⅱ区第１遺構面遺構配置図

第 9 図　Ⅱ区第１遺構面実測図（１）



第 10 図　Ⅱ区第１遺構面実測図（２）



第 11 図　Ⅱ区第１遺構面実測図（３）

下流の方向に傾いているのがみられた。柵列の中は庭、あるいは広場のようなものと考えられる。ＳＸ０２の中には、いわゆる鉄鏃を使用している部分もあった。

ＳＢ14、15、ＳＸ01・06

ＳＸ01とＳＸ06とによって区画された幅10ｍの平坦面をＳＢ14とした。柱穴や礎石等は検出できなかった。ＳＸ06の中心線はＳＤ01をはさんで、ＳＸ05の中心線に続くものである。しかし、ＳＸ01の中心線は、ＳＤ０１をはさんでＳＸ06と同様に対応する施設がない。最も近いＳＡ01とは約2.8ｍの差がある。

ＳＢ15はＳＸ01の東側の平坦面である。ＳＢ14と同様に礎石、柱穴等は検出できなかった。ＳＤ01の北側のＳＸ02に対応する石列がなく、ＳＢ15は幅16ｍ以上あることになる。ＳＤ01の北と南とでは、区画の幅のとりかたに違いがみられる。また、ＳＢ14、ＳＸ06の西側にも平坦面があるが、石列、杭列等の施設は発見できなかった。

（２）第２遺構面（第12図　図版16）

第２遺構面は、第１遺構面の直下に検出された遺構である。両者の関係は第１遺構面のＳＸ02と第２遺構面のＳＸ04の断面図（第23図）に示した如く約60cmの構築土が間にみられる。第１遺構面を取り除くと、第１遺構面でみられたＳＤ01はなくなり企画の幾分異なる石列を検出することができた。第２遺構面は東側に石列群、西側に柵列群とが明確に分れていることが特徴である。

ＳＢ08・09、ＳＸ04、ＳＡ07

ＳＢ08・09、ＳＸ04は、第１遺構面のＳＢ02、ＳＸ02に対応するものである。ＳＢ09はＳＸ04とＳＡ07によって区画された残存部8.0×3.2ｍの平坦面である。礎石、柱穴等は発見できなかった。第１遺構面のＳＤ01の縁より約1.5ｍ北にＳＢ09の石列が存在した。ＳＢ09に関係する石列の方向は第１遺構面のＳＢ02のそれらと一致する。ＳＢ08は残存部5.6×3.0ｍの平坦面でその西側には石列は続いていない。ＳＢ09とはＳＡ07によって仕切られる。石列はＳＢ09のそれと不整合に続いているのでこれをＳＸ10とすることにした。柱穴、礎石状のものは発見できなかった。

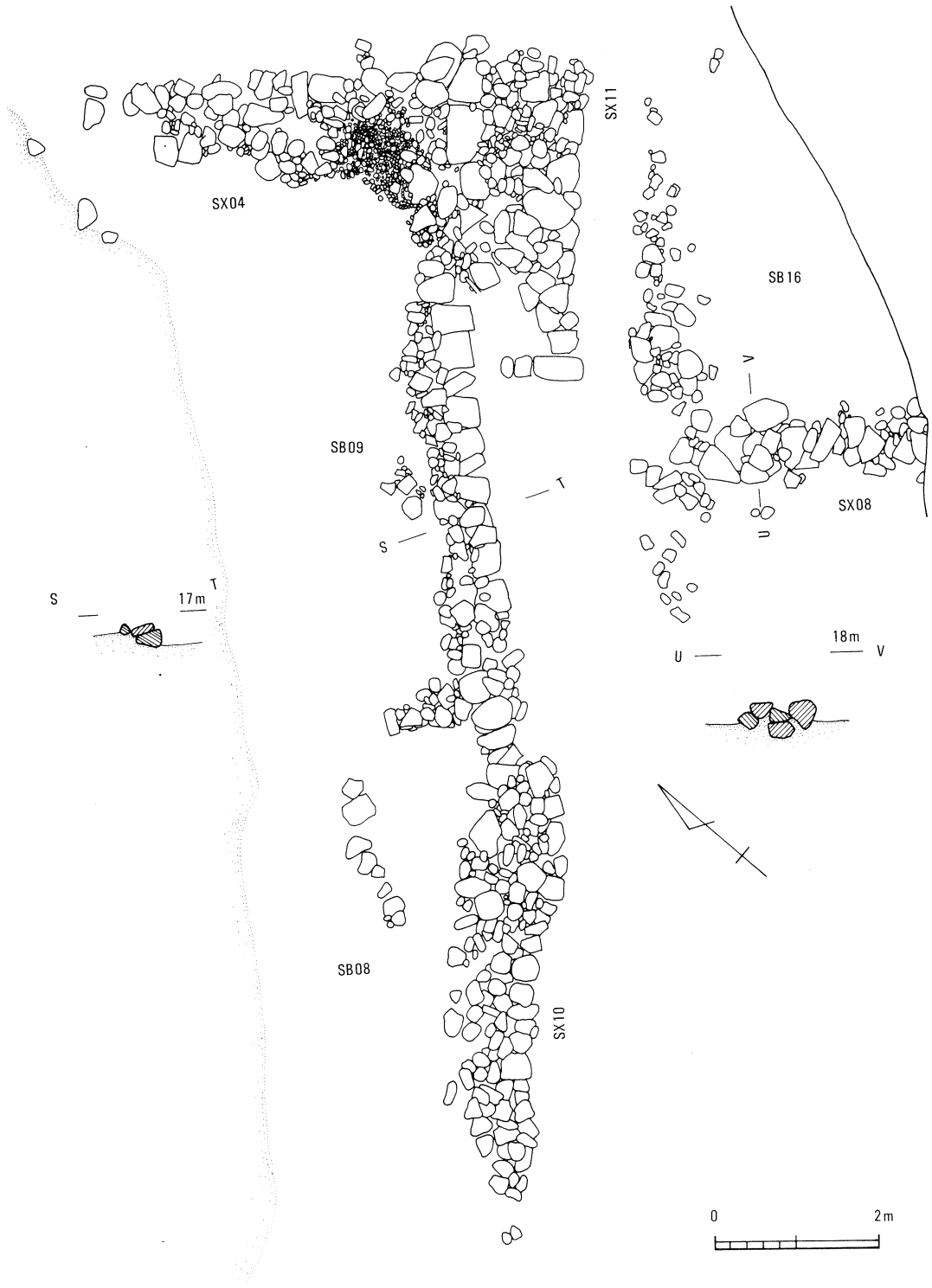
ＳＸ04

ＳＸ04はＳＸ02の直下に検出した石列である。10cm以下の礫を使用している部分もある。ＳＸ04の残存部の長さは２ｍあるが、元来さらに富田川の方向に１ｍほど延び、そこから東に折れ、ＳＢ07、ＳＸ12、ＳＸ09へ続いていたものと思われる。

ＳＸ11

ＳＸ11はＳＸ04の南側に続く石列であるが、その基底部は第１遺構面のＳＤ01と同一の

第 12 図　Ⅱ区第 2 遺構面遺構配置図



第 13 図　Ⅱ区第 2 遺構面実測図

ものである。第１、第２遺構面とも殊にこの付近の石列は残存状態が良好であった。

ＳＢ16、ＳＸ08

ＳＸ11の南に第１遺構面のＳＤ01の底の幅ほどはなれて、ＳＢ16、ＳＸ08の石列を検出した。ＳＢ16の石列は比較的小さな自然石を用いており、残存状態は良好ではない。柱穴や礎石等は検出できなかった。ＳＸ08は幅0.8ｍ長さ1.8ｍあるが、南の未発掘区域にさらに続くと考えられ、ＳＢ16を仕切っていたと思われる。

ＳＢ07、ＳＸ09、ＳＸ12

ＳＸ04に続く石列と考えられる。いずれも現在の富田川の水路付近で残存状態は悪い。石列の方向はＳＢ07がＳＢ09やＳＢ04と整合し、ＳＸ13はやや乱れている。最も東側に検出したＳＸ09は、ＳＢ07を区画するものであろう。

ＳＡ04・05・06

第２遺構面の西側を占める柵列群である。いずれも方向は少しずつ異なっているがほぼ同一レベルで検出した。雑木類を不定の間隔で配列したものである。

（３）第３遺構面（第15図　図版14、18～20）

第２遺構面の下の流砂を取り除くとⅡ区のほぼ全域にわたり遺構面があらわれた。これを第３遺構面とした。石列、柵列の方向は、第１、第２遺構面のそれらとは若干異なるものである。

ＳＢ04、ＳＫ01、ＳＸ03（第16図）

Ⅱ区の下流側に階段状に連なる石列、ＳＢ04・05・06を検出した。ＳＢ04は現存部10×6ｍでＳＢ05とＳＸ03で仕切られている。ＳＢ04の石列に沿ったかたちで、長さ6ｍ、幅2.4ｍ、深さ0.2ｍの土坑状の遺構ＳＫ01を検出した。内部には流砂が入り込んでいた。床に密着して絵唐津鉢（第78図）が出土したが元来遺跡に伴うものか否かは不明である。

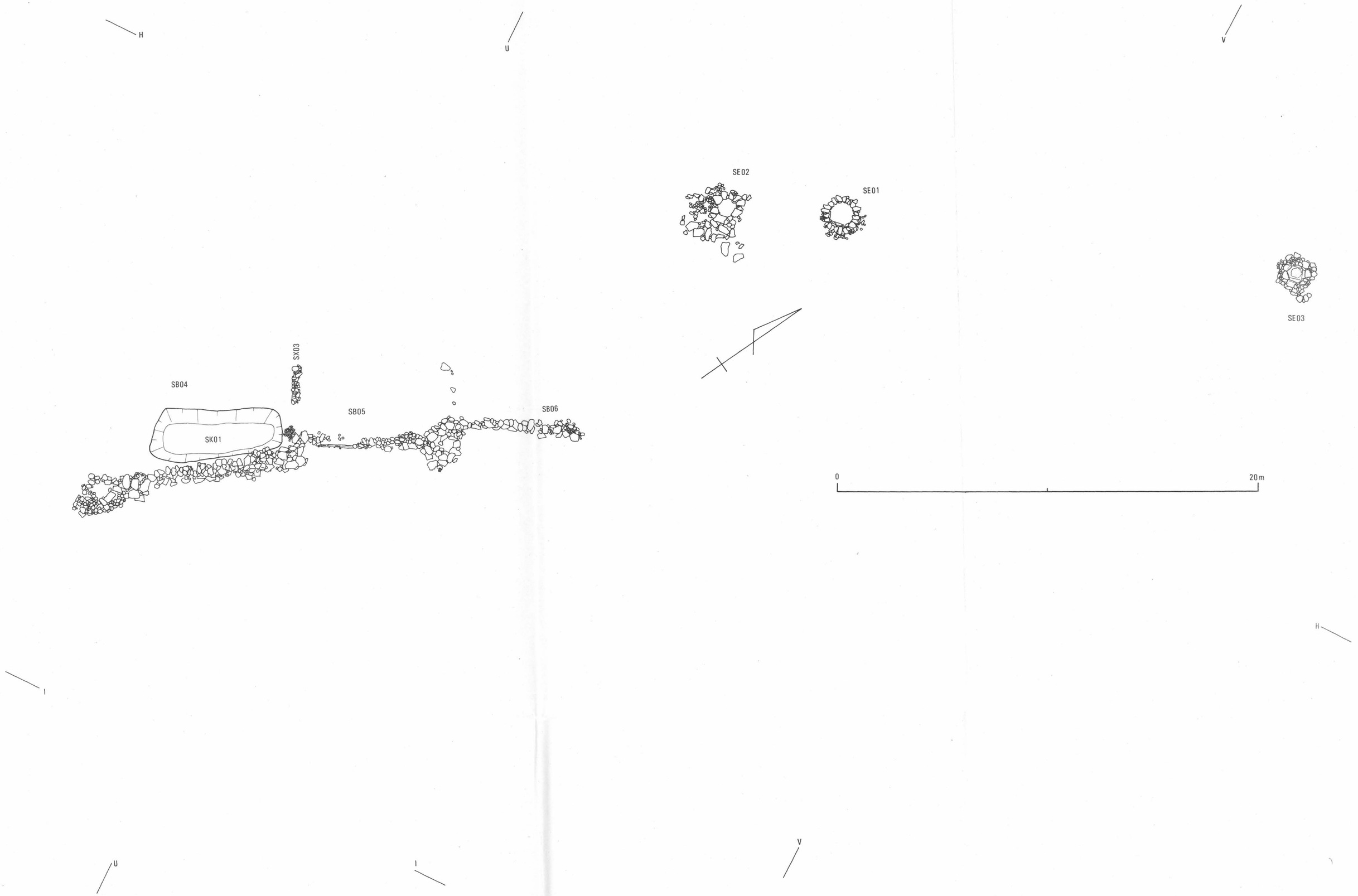
ＳＢ05、06、ＳＸ15（第16図）

ＳＢ05はＳＸ03とＳＸ15で区画された平坦面で現存部は7×4ｍある。石列の下に雑木を入れ杭を打ち込んでとめた施設が２箇所にみられた。石列の残存状態はＳＢ04に比べると良好ではない。ＳＢ06は石列の長さ6ｍで残存状態は良好ではなかった。ＳＢ05とＳＢ06を区画するＳＸ15の石列の残りも良好ではなくほとんど流失したものと考えられる。

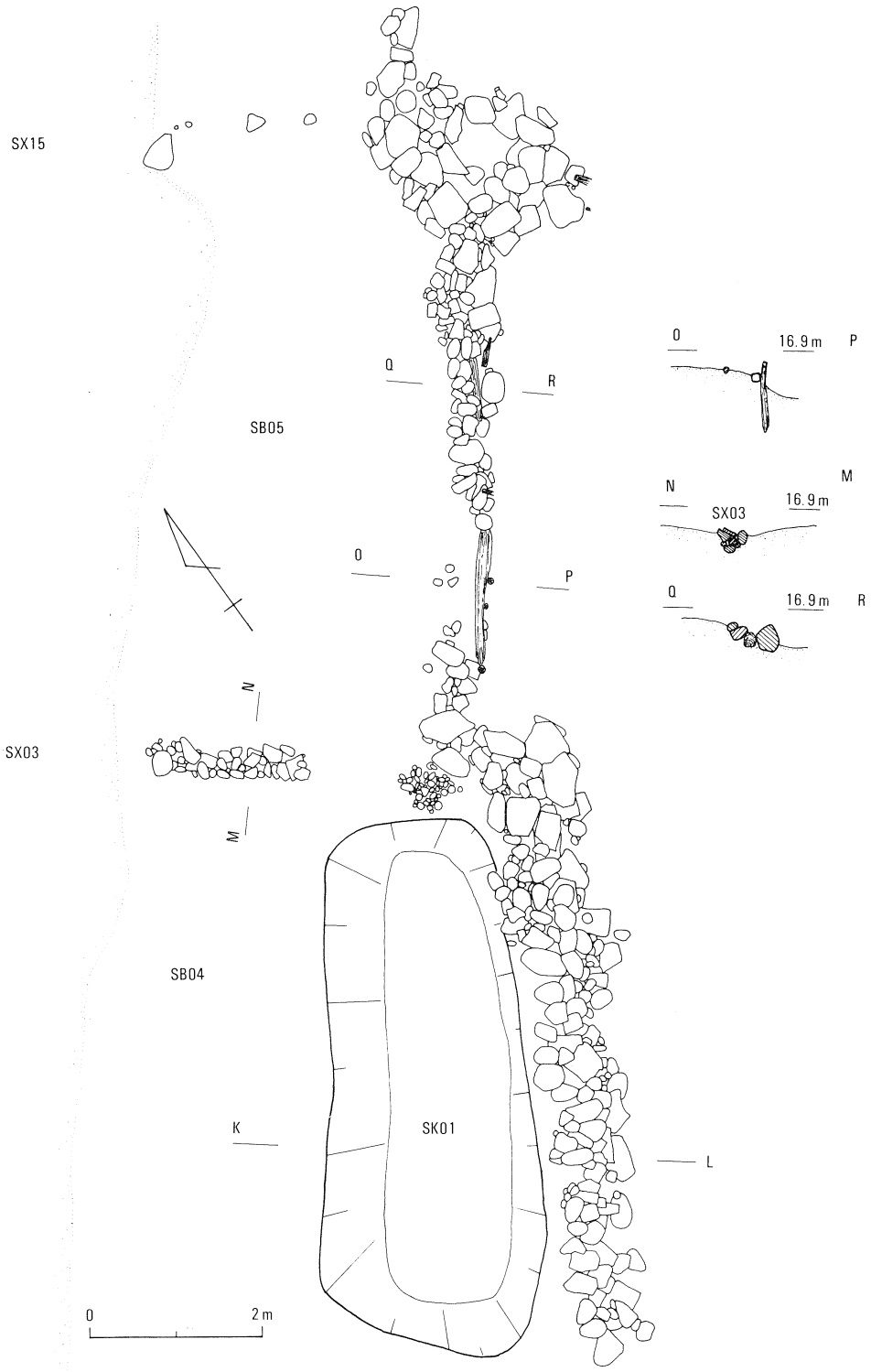
ＳＢ10、ＳＸ14

ＳＢ10はＳＸ14によって区画された平坦面で現存部5×1ｍある。石列の長さは現存部で5ｍある。ＳＸ14はＳＢ10とＳＢ11を区画する石列で、比較的小さな自然石を用いている。長さ約1ｍを残す。

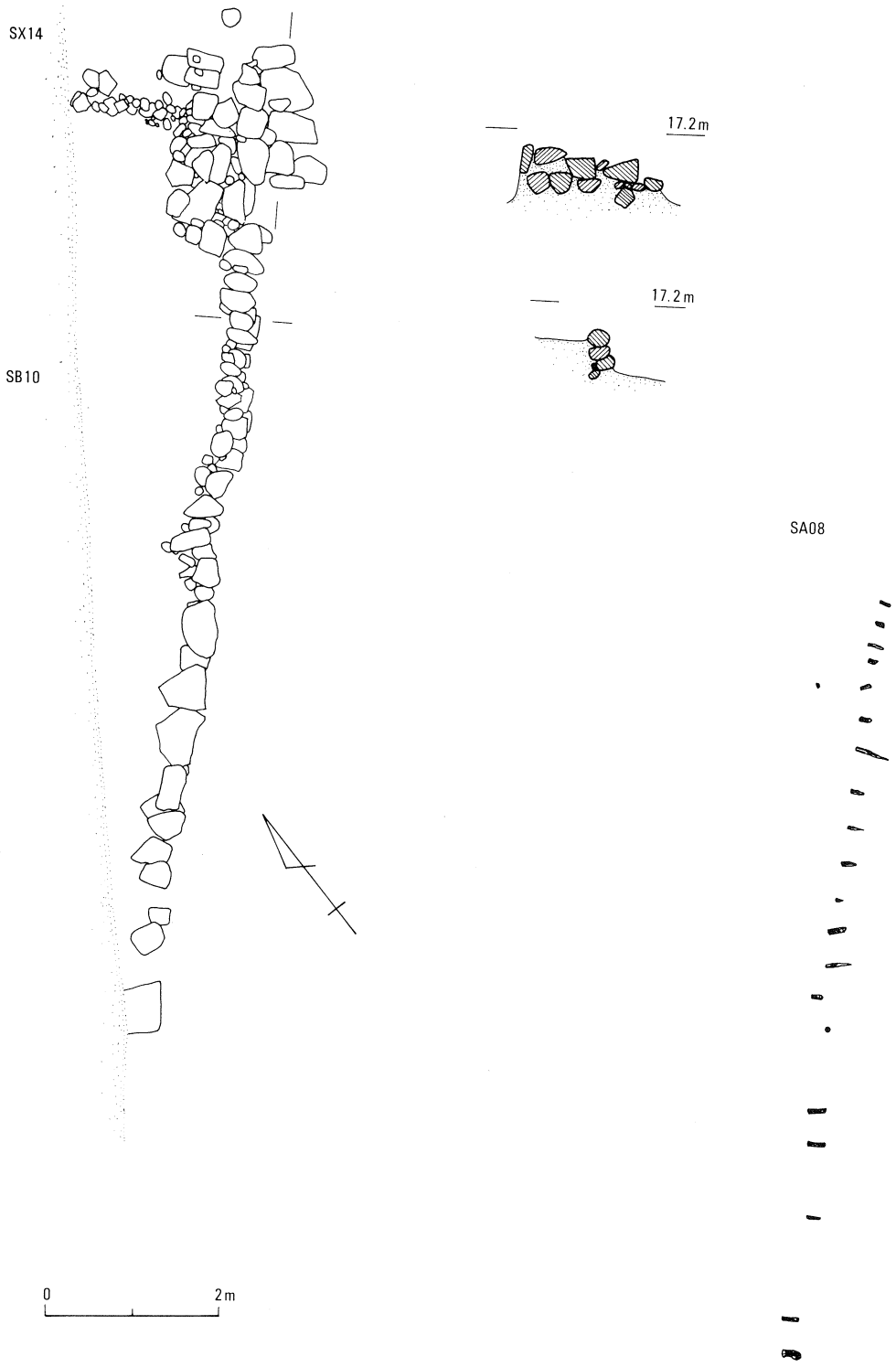
第 14 図　Ⅱ区第３遺構面遺構配置図



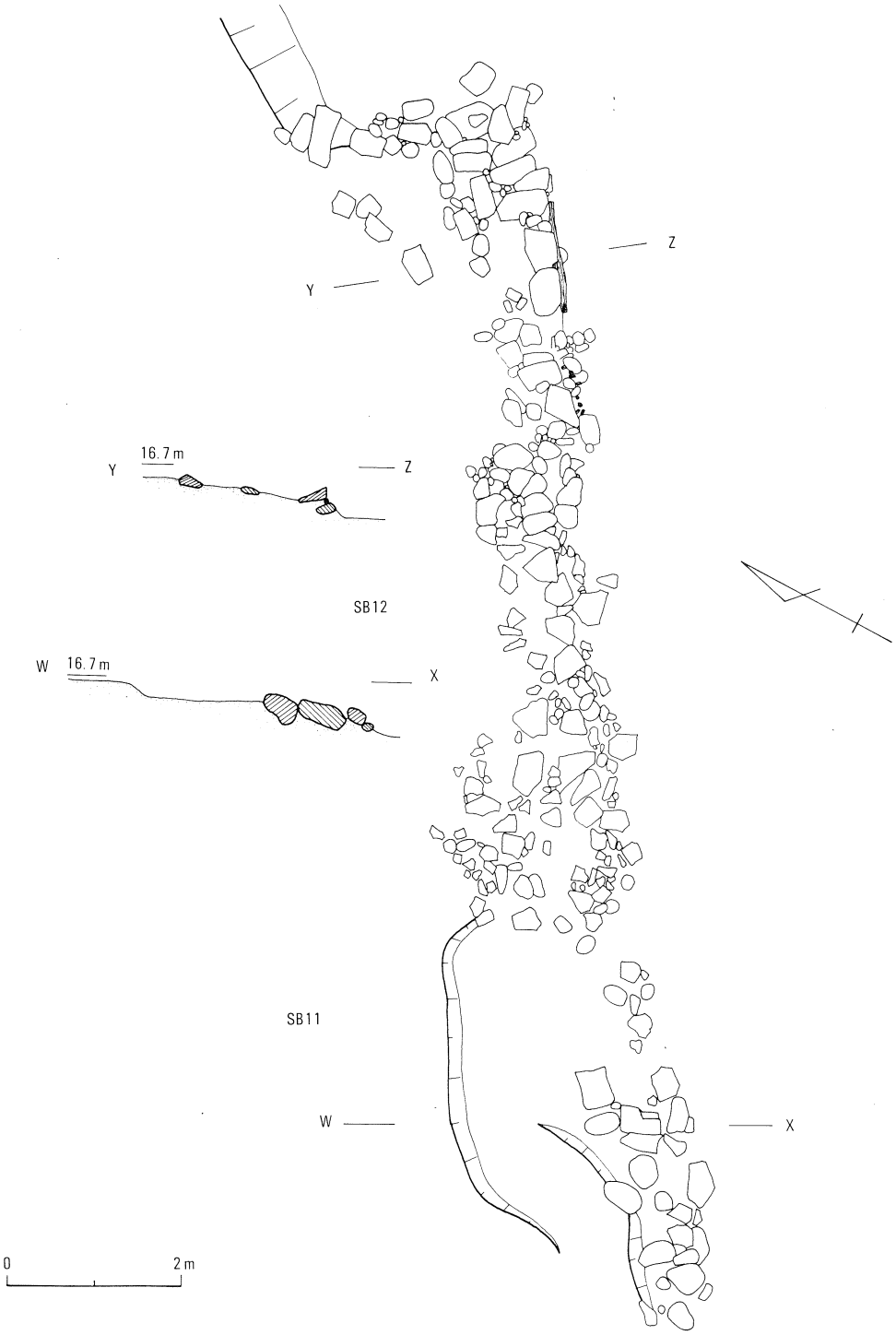
第 15 図　Ⅱ区第３遺構面及びSE01、02、03配置図



第 16 図　Ⅱ区第３遺構面実測図（１）



第 17 図　Ⅱ区第 3 遺構面実測図（2）



第 18 図　Ⅱ区第 3 遺構面実測図（3）

ＳＢ 11（第17図、18図）

ＳＢ10の東側の平坦面である。石列の残りが悪く、範囲ははっきりしないが、現存部はほぼ６×２ｍである。石列の残りの良好なＳＸ14の前面は、70×50㎝の大形の自然石、割石を用いて組んでいる。

ＳＢ 12

ＳＢ11に続く平坦面で現存部は９×８ｍある。石列の東端近くに長さ約1.5ｍの雑木を石列の中に組み入れているのがみられた。また、その施設より西に0.5ｍ離れて、やはり雑木類による杭が石列の前面に長さ0.8ｍにわたり６本打ち込まれていた。

ＳＢ 13

ＳＢ12の東側の平坦面で、石列の残存状態は悪い。ＳＢ13の石列は、ＳＢ12の石列より北に約３ｍほどずれた位置にあり、ＳＢ12でみられたように石列の基部に長さ1.5ｍの雑木を組み込む施設がみられた。

ＳＡ 08

Ⅱ区の西側に長さ21ｍにわたる雑木を使用した杭列ＳＡ08を検出した。いずれの杭も頭部を南に傾け、間隔は一定ではない。

ＳＤ 02

ＳＢ10、ＳＢ11、ＳＢ12に沿った溝状遺構である。上幅約５ｍ、下幅約1.6ｍあり、第３遺構流砂が流れ込んでいた。

（４）第４遺構面（第19図　図版21～23）

ＳＢ04下層、05下層、06下層（第20図、第21図）

第３遺構面のＳＢ04、05、06の直下に検出した遺構である。ＳＢ04下層とＳＢ06下層の石列はそのまま第３遺構面のＳＢ04、ＳＢ06の石列と、連続重複するが、中央のＳＢ05下層の石列は、ＳＢ05の石列とは約0.5ｍ位置が異なりつつＳＢ04下層、ＳＢ06下層のそれに続いているのがみられた。

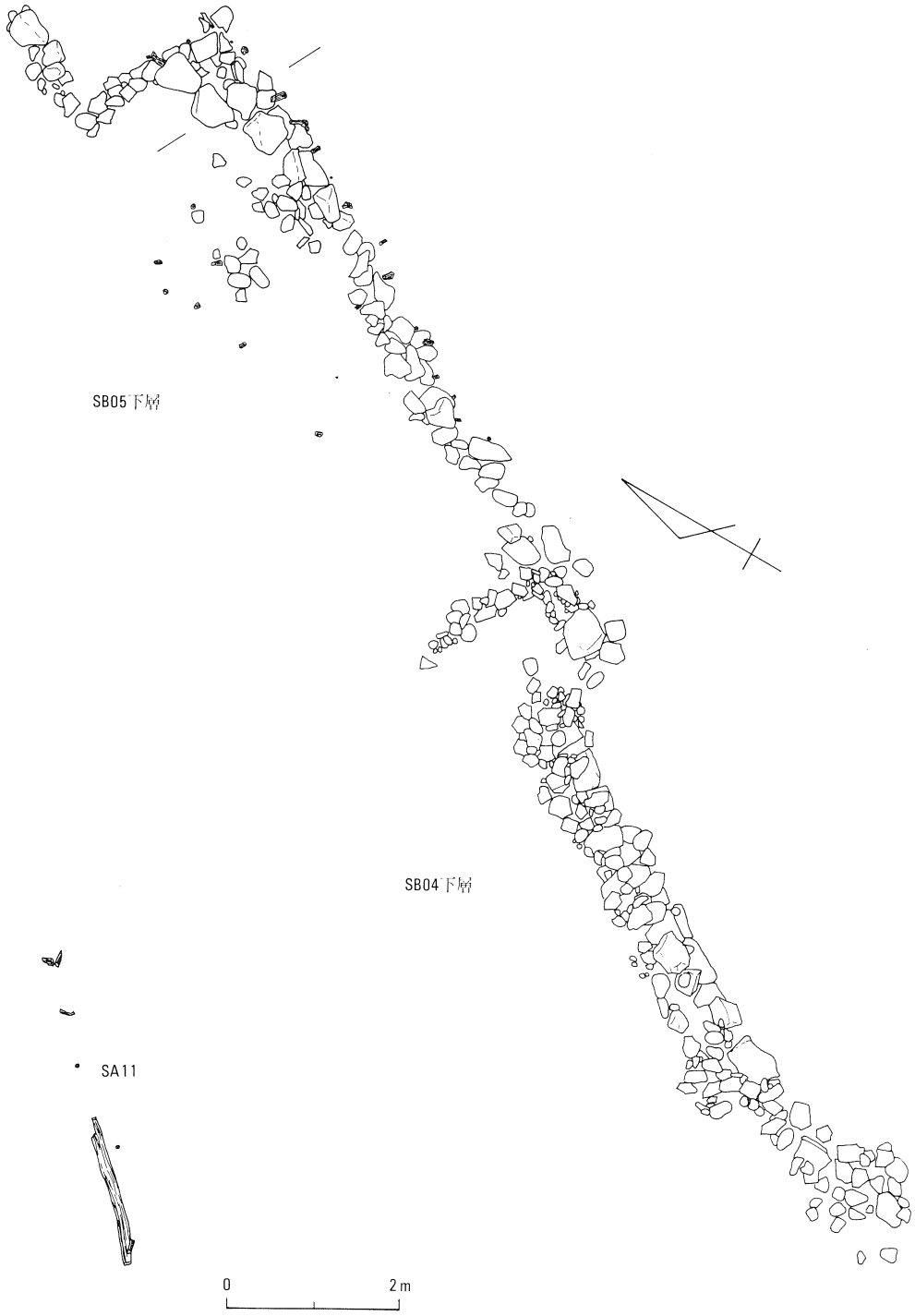
ＳＸ 13

ＳＢ06下層の東側の石列であるが、方向が若干異なり不整合に続き、二列になっている。幅約20㎝の溝状の遺構とも考えられるが石列の流失がはげしく全体をつかむことはできなかった。

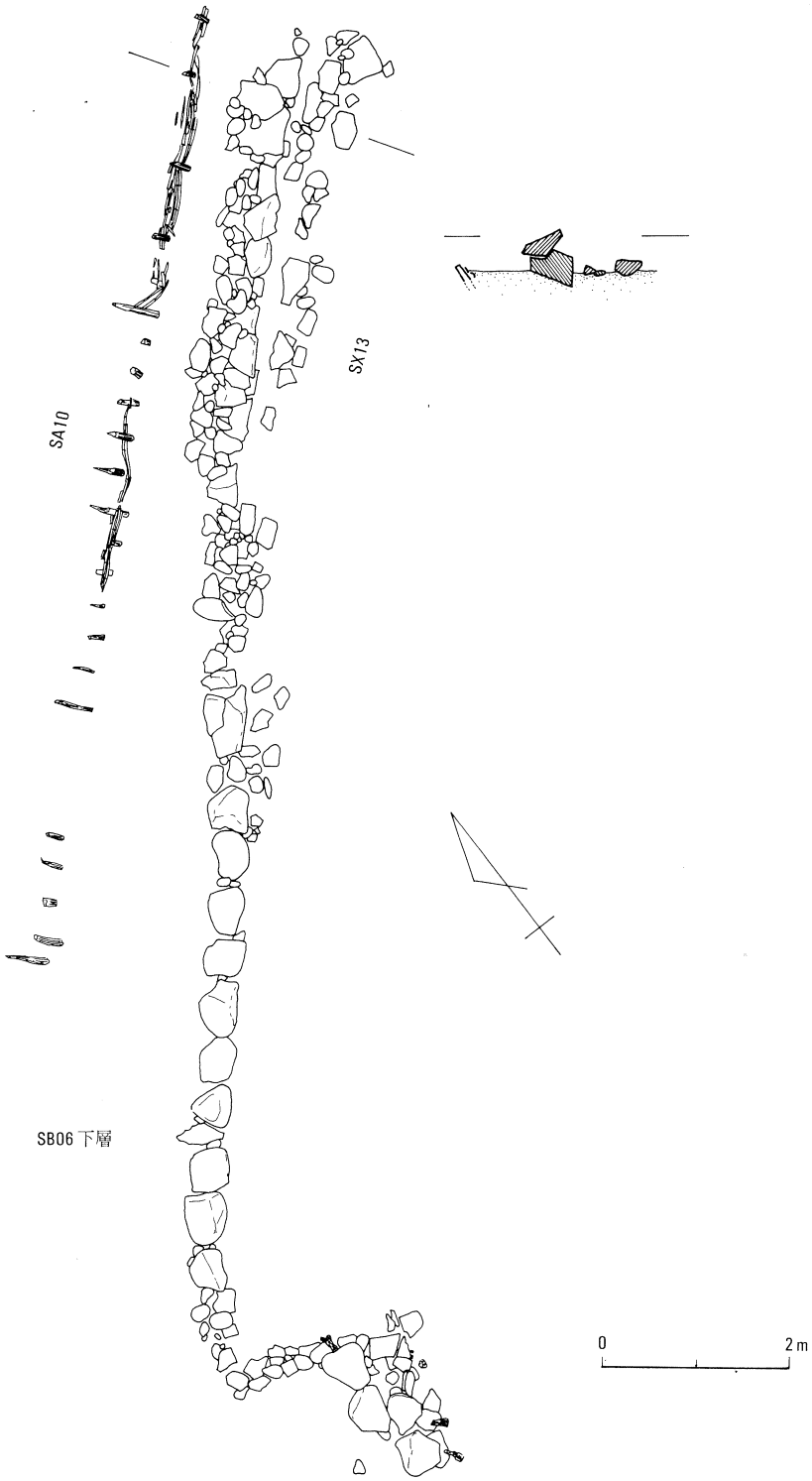
ＳＢ 12 下層（第22図）

第３遺構面のＳＢ12の下層にあらわれた、長さ７ｍと4.5ｍの石列である。南側の石列は比較的大きな石を用い、基部に建築材を転用した長さ約２ｍの角材を敷くものである。

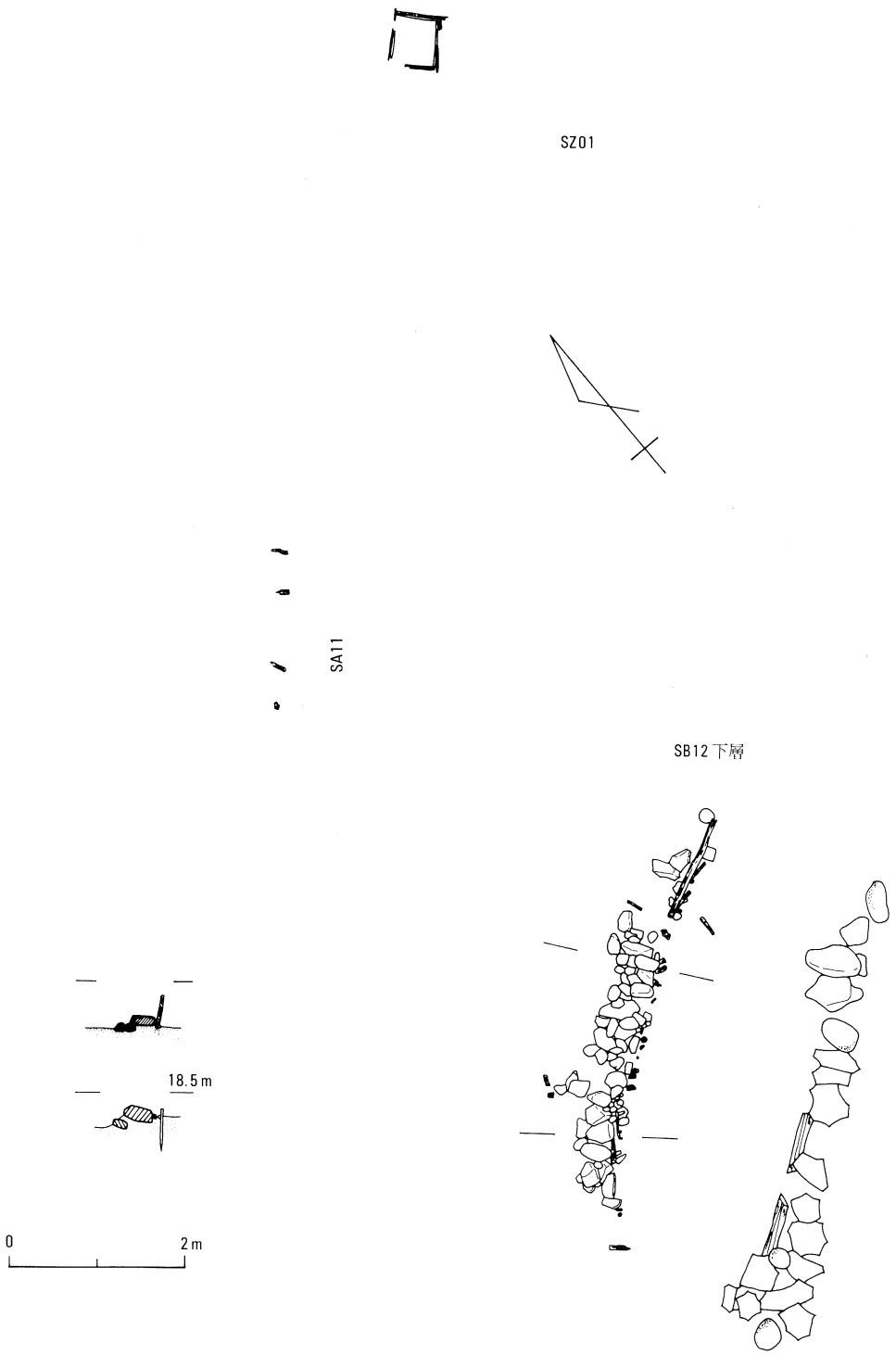
第 19 図　Ⅱ区第 4 遺構面遺構配置図



第 20 図　Ⅱ区第４遺構面実測図（１）

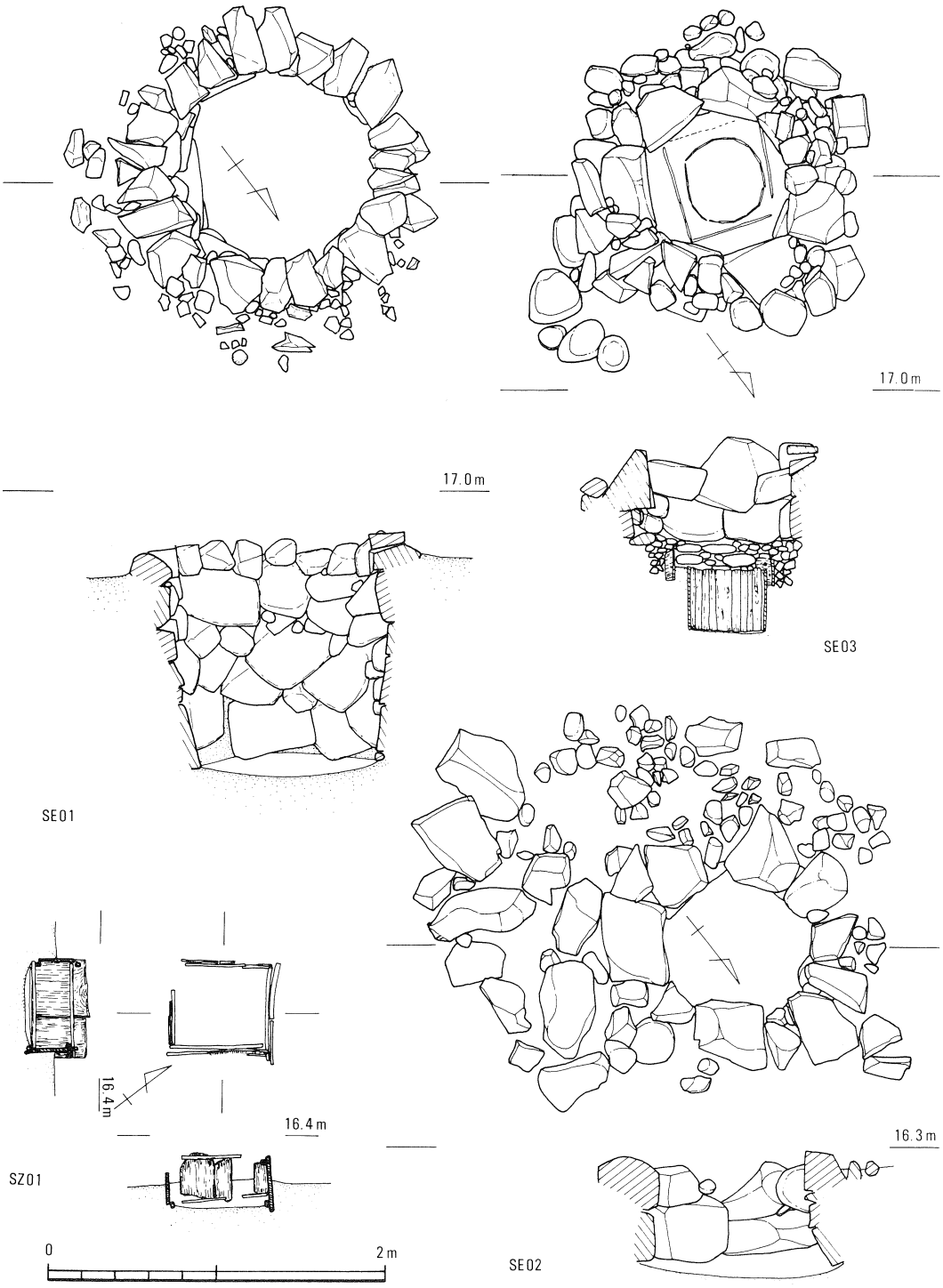


第 21 図　Ⅱ区第 4 遺構面実測図（2）



第 22 図　Ⅱ区第４遺構面実測図（３）

第 23 図　Ⅱ区遺構断面図



第 24 図　Ⅱ区 SE01、02、03、SX01 実測図

その材質はクリである。北側の石列は2 mの位置にあり、南側のそれに比較すると小さな自然石を用いている。雑木を石列の基部に敷き、その前面に雑木による杭を打ち並べた施設がみられた。

ＳＡ10（第21図　図版21）

ＳＸ13やＳＢ06下層石列とは方向の異なる杭列を同じ遺構面で検出した。全長は38 mまで確認できるが保存状態の良好であった下流側約20 mは竹をしがらみ状にからませているのがみられた。また、全体は北に傾いている。ＳＸ13やＳＢ06下層石列との関係は明らかにできなかった。

ＳＡ11（第20図）

ＳＢ12下層石列とＳＢ04下層石列の間に検出した約23 mの杭列である。杭の残存状態は良好ではない。ＳＡ10と方向は一致し、両者は元来、クランク状に続いていた可能性があり第4遺構面には石列とは別の区画があったとも考えられる。

（5）井戸（第15図）

井戸はⅡ区の下流、川岸近くで三基検出した。井戸の検出された付近は遺構が最も著しく流失しているところで、3基の井戸の前後関係や第1～第4遺構面との関係は明らかではない。しかし、第3遺構面と最も近い面でいずれも検出されたので、その関係図を示した（第15図）。

ＳＥ01（第24図　図版24）

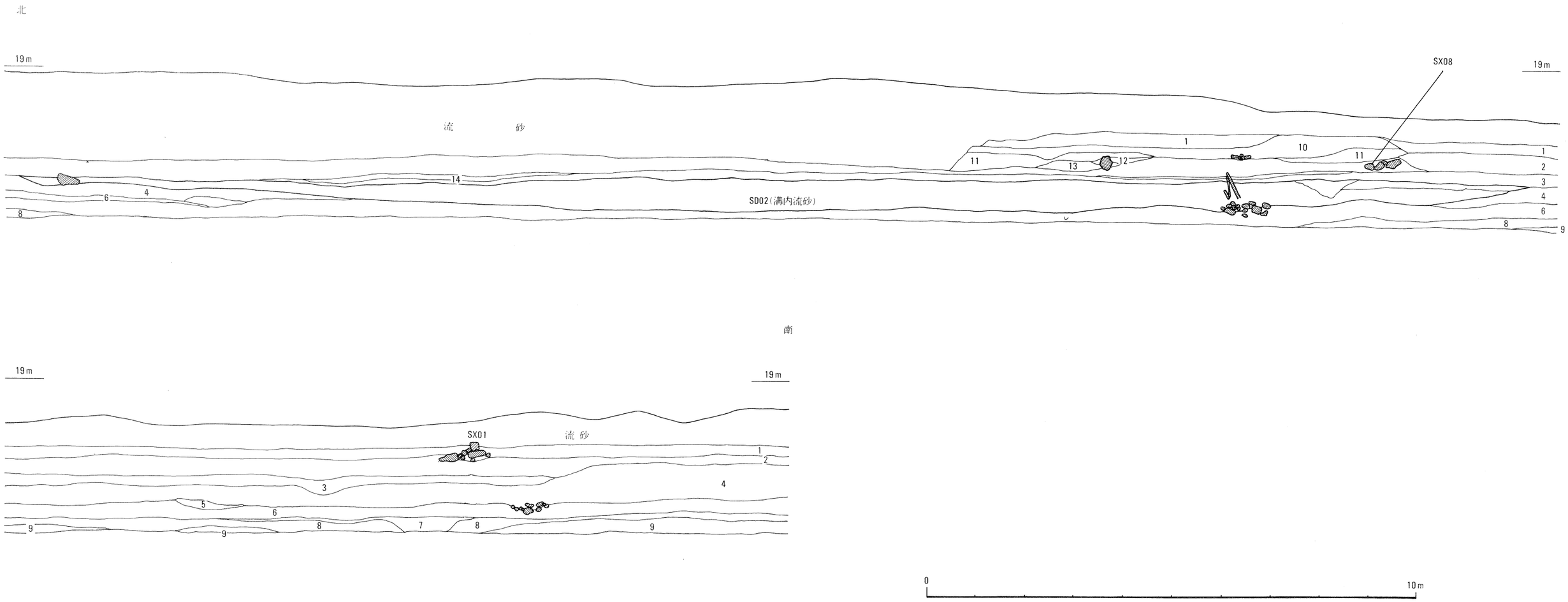
3基のうち中央にある平面が楕円形の井戸で、検出面での径は1.2×1.1 m、深さ1.4 mある。Ⅰ、Ⅱ区あわせた合計5基の井戸のうち最も規模の大きなものである。床に近いほど大きな自然石、割石を用いる構造である。底には何ら施設はなかった。付近から絵唐津壷（第83図 342 ）が出土している。

ＳＥ02（第24図　図版24）

遺構検出面での径は0.85×0.7 m、深さ0.7 mを測る。比較的大きな自然石、割石を用いており、底には何ら施設をもたない構造である。井戸の周囲には、井戸を構築していたと考えられる石材が散乱しているのがみられた。平面プランは円形であろう。

ＳＥ03（第24図　図版24）

最も下流にある井戸である。遺構検出面での径は0.8×0.85m、深さ1.2 mを測る。最下に径0.45×0.5 m深さ0.36mの桶を設置し、その周囲を長さ0.6 m、幅0.2 mの板で四方から囲む施設を施している。石積みは、底に近いところはこぶし大と、長さ20cmの偏平な自然石を高さ30cmほど積み上げ、その上に比較的大きな石を構築するものである。



1．茶褐色土　2．淡茶褐色土　3．第3遺構流砂（赤褐色）　4．青灰色土　5．青灰白色粘質砂層　6．暗青灰色
7．淡黄褐色細砂層　8．青灰色微砂層　9．荒砂層　10．黒色土　11．暗褐色土　12．暗茶褐色土
13．暗茶褐色微砂粘土　14．黄白色微砂粘土

第 25 図　Ⅱ区東南壁断面図

（6）ＳＺ01（第24図　図版22）

第４遺構面で検出した木枠である。平面プラン方形で0.6×0.53ｍ、深さ0.33ｍを測る。杉材を使用。用途不明である。底には何ら施設はなく、蓋も存在しなかった。ＳＡ11の杭列上に位置しているので、これと関係した施設とも考えられる。

3.　Ⅱ区東南壁断面図（第25図）

Ⅱ区の中で比較的遺構の残存状態の良好であった上流側の東南壁の上層断面図を第25図にあらわした（Ⅰ区は９月25日の洪水で崩壊し土層断面図を作成できなかった）。

最上層の流砂は遺構の残りの良好なところで0.5ｍ、深いところでは約1.5ｍの厚さがある。

各遺構面のレベルは、第１遺構面と第２遺構面が標高17～18ｍの間に、第３遺構面と第４遺構面は16～17ｍの間にほぼ収まっている。第２遺構面と第３遺構面との間には厚さ約30㎝の流砂をはさんでいる。この流砂を第３遺構流砂と呼ぶことにした。標高はおよそ17ｍ前後の位置である。上層と各遺構面の関係は、第１遺構面が１層、第２遺構面が２層、第３遺構面が４層、第４遺構面が６層にほぼ相当する。いずれの層も原則として砂粒を多く含んでいることが特徴である。

６層の断面の中には、２ケ所に集石がみられるところがあり、発掘区の南側未発掘区にも石列や杭列が続き、土地区画や建物遺構の存在が予想される。

遺物の残存状態の良好な部分の最上層を、寛文６年（1666年）とすれば、第２遺構面と第３遺構面の間にみられた、第３遺構流砂はそれ以前に数度、城下町をおそったことのある洪水によるものの可能性が強い。それは、これまで述べてきた各遺構面が、第１、第２遺構面と第３、第４遺構面とに、この第３遺構流砂によって二時期に大別されると考えられるからである。

次に以上Ⅰ、Ⅱ区の各遺構面から出土した遺物を概観し、最後に、遺構、遺物の関係をふまえて、発掘調査区内の年代を考察することにしたい。

Ⅵ 遺物の概要

1. 中世以前の遺物（第26図　図版27）

富田川河床遺跡から中世以前の遺物が採集されることは以前より知られていた。この度の調査では、Ⅱ区の第4遺構面の下層は砂礫層となっており、中世の遺物は皆無であることを確認した。この砂礫層からは主として古墳時代から奈良時代にかけての遺物しか出土しなかった。また、最近発掘調査が進められている富田城関連遺跡でも、中世以前の遺構、遺物が発見されている。富田川河床遺跡で出土する中世以前の遺物は周辺のそうした遺跡からの流入品と考えられる。ここでは富田川河床遺跡に直接関係する中世から近世初期にかけての遺物にさきだち、流砂出土資料も含めた10点の中世以前の遺物について紹介しておくことにする。

1、2は須恵器の蓋坏である。いずれも身で、1は復元口径11.5㎝、器高4.5㎝ある。1、2とも外面底部にはヘラ削り痕がみられ、山陰地方の古墳時代須恵器編年のⅢ期に相当するものであろう。

3、4は7～8世紀の須恵器坏である。いずれも外面底部に回転糸切痕が残り未調整である。4は高台がつきその径は9.8㎝である。3は高台のつかない坏である。

5は土製の有孔円盤で径1.8㎝、厚さ0.8㎝を測る。時期ははっきりしないが、1㎜前後の砂粒が含まれ胎土は弥生土器に似ている。

6は土師質の小形手捏土器である。最大径2.7㎝、器高1.8㎝ある。藤原久良氏採集資料の中に同様なものがもう一点ある。付近に祭祀関係遺跡の存在が予想される。

7は甑の把手である。土師質で薄い赤褐色を呈す。

8、10は土師器の甕である。8は口唇部を欠くが頸部の径約25㎝。10は口縁部で口径20.5㎝を測る。いずれも外面はタテ方向にハケ目痕がみられる。

9はカマドの底部である。復元した直径は34㎝を測る。

参考文献

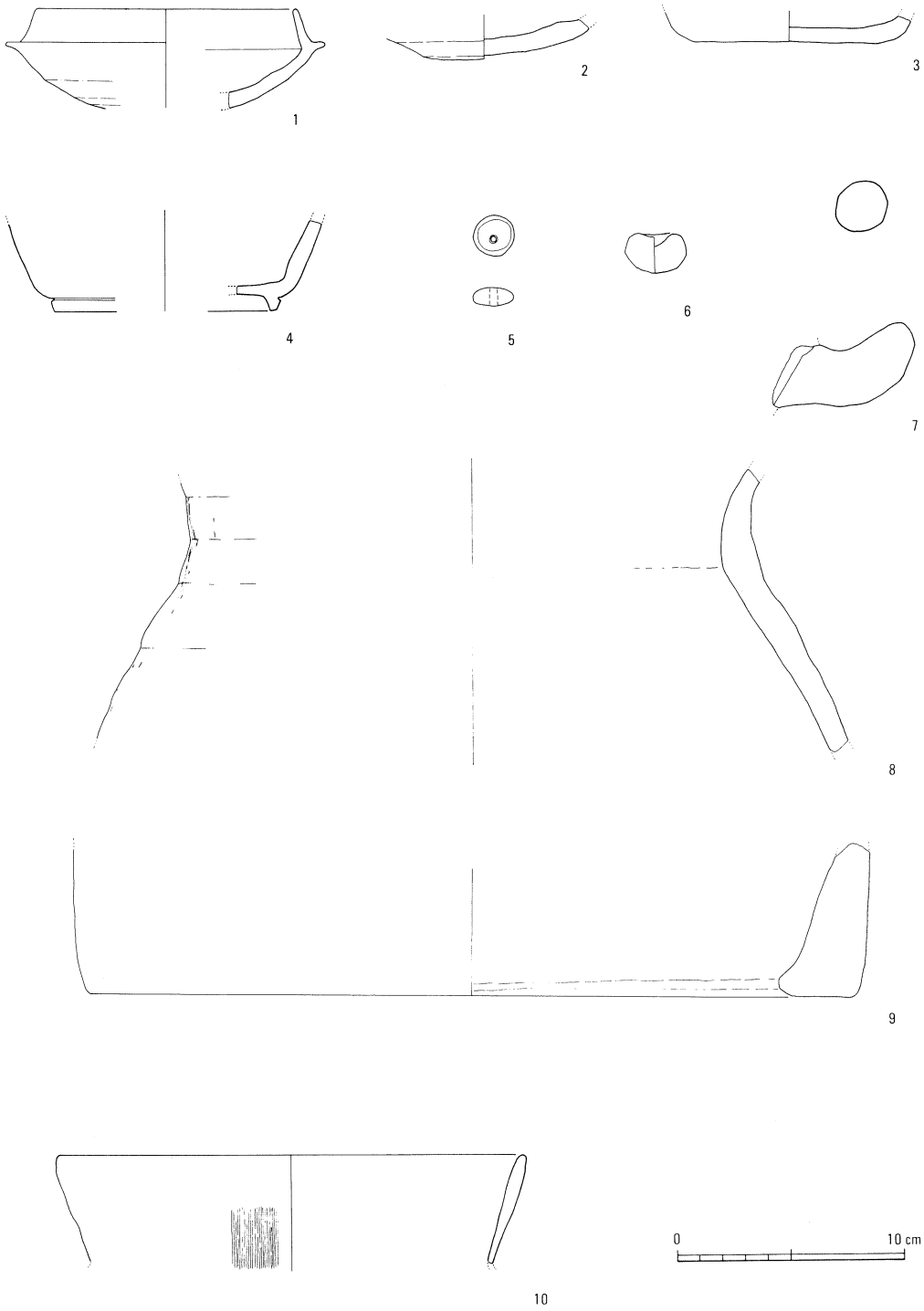
①広瀬町史編纂委員会編『広瀬町史』　昭和45年

②桑原英二『まぼろしの戦国城下町』　昭和49年

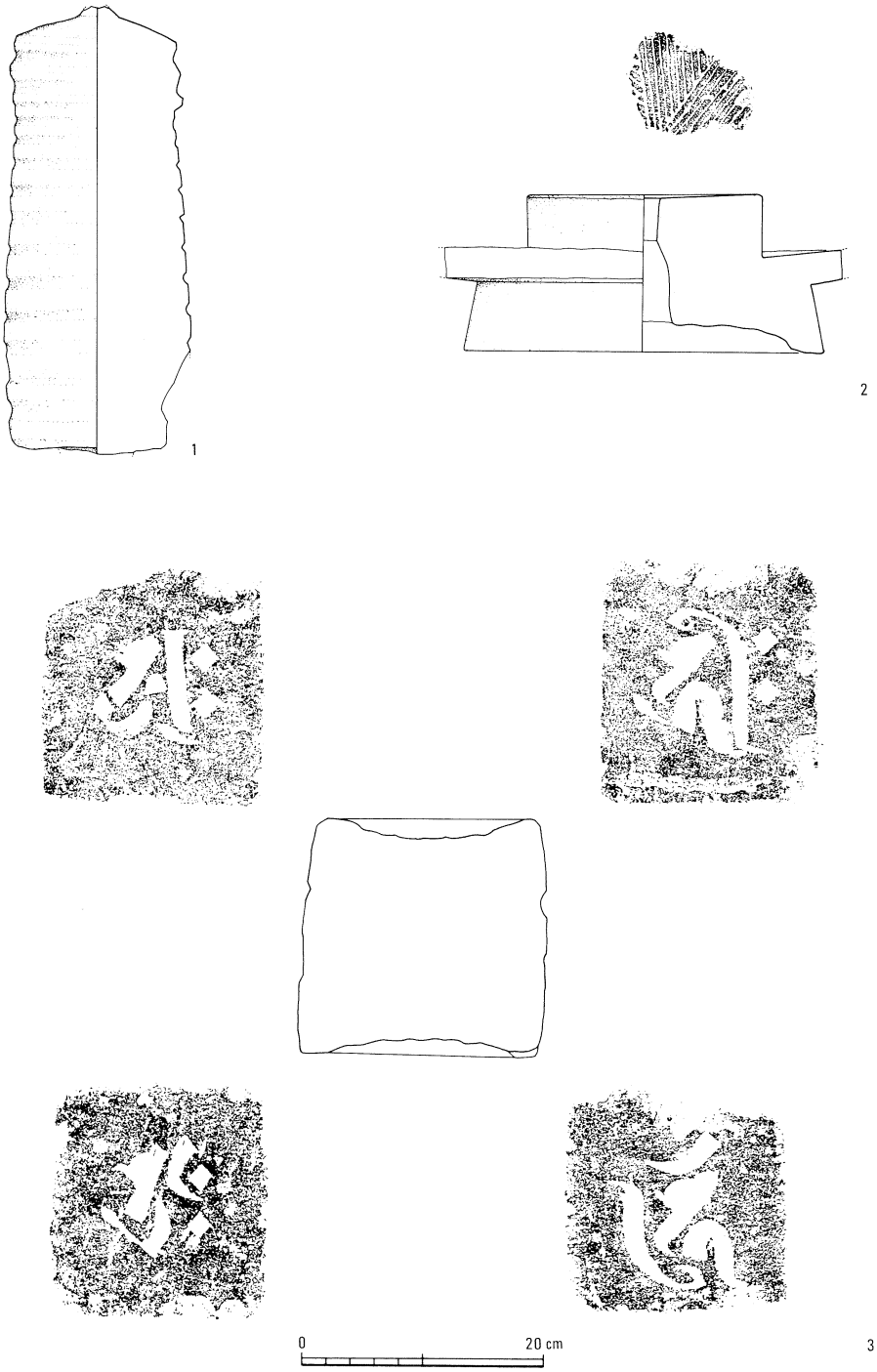
③石井　悠・松尾慶三『塩谷遺跡発掘調査報告書』広瀬町教育委員会　昭和56年

④松尾慶三『新宮谷遺跡発掘調査報告書』広瀬町教育委員会　昭和57年

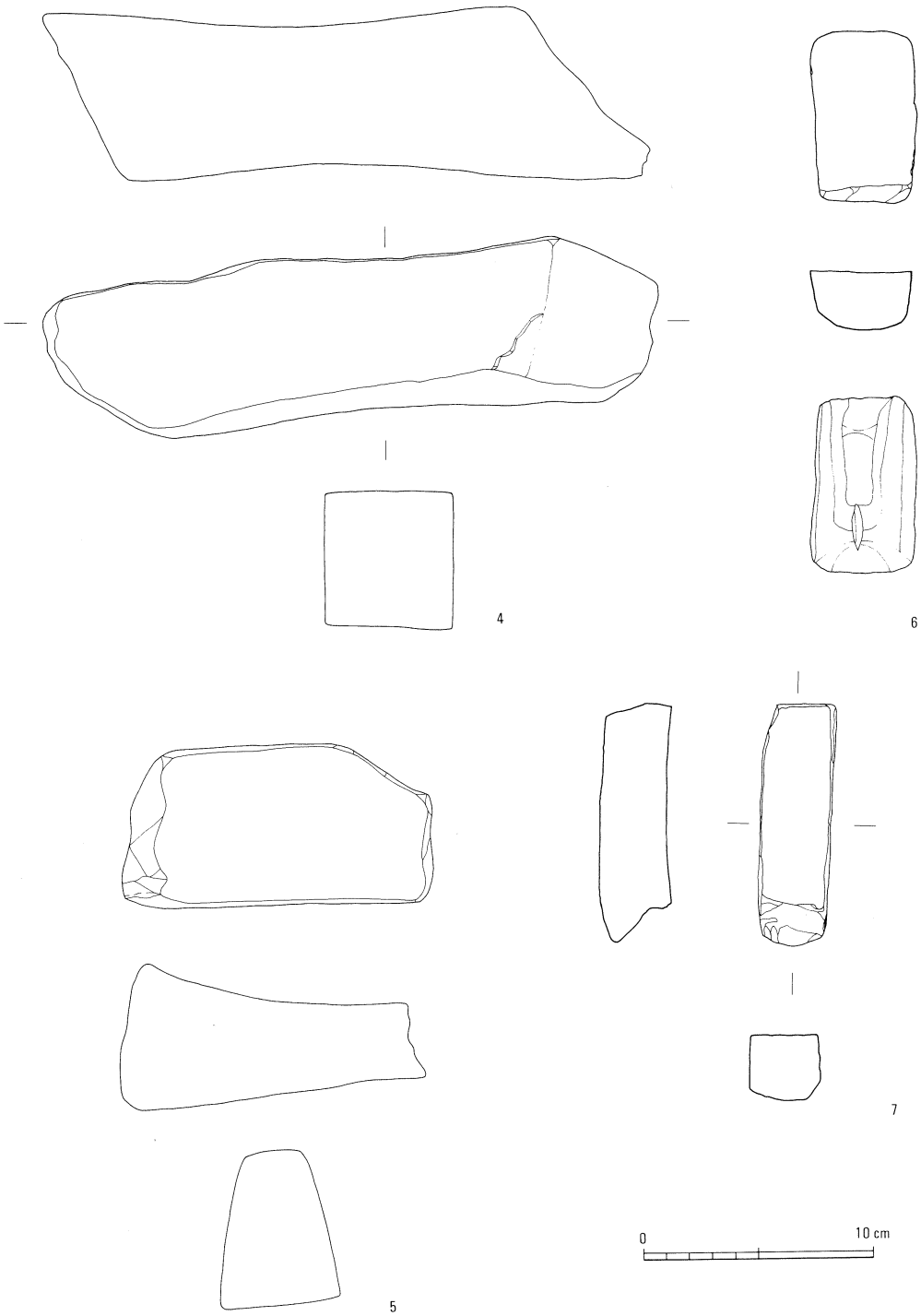
⑤竹中　哲『新宮谷遺跡』第2次発掘調査概要　広瀬町教育委員会　昭和58年



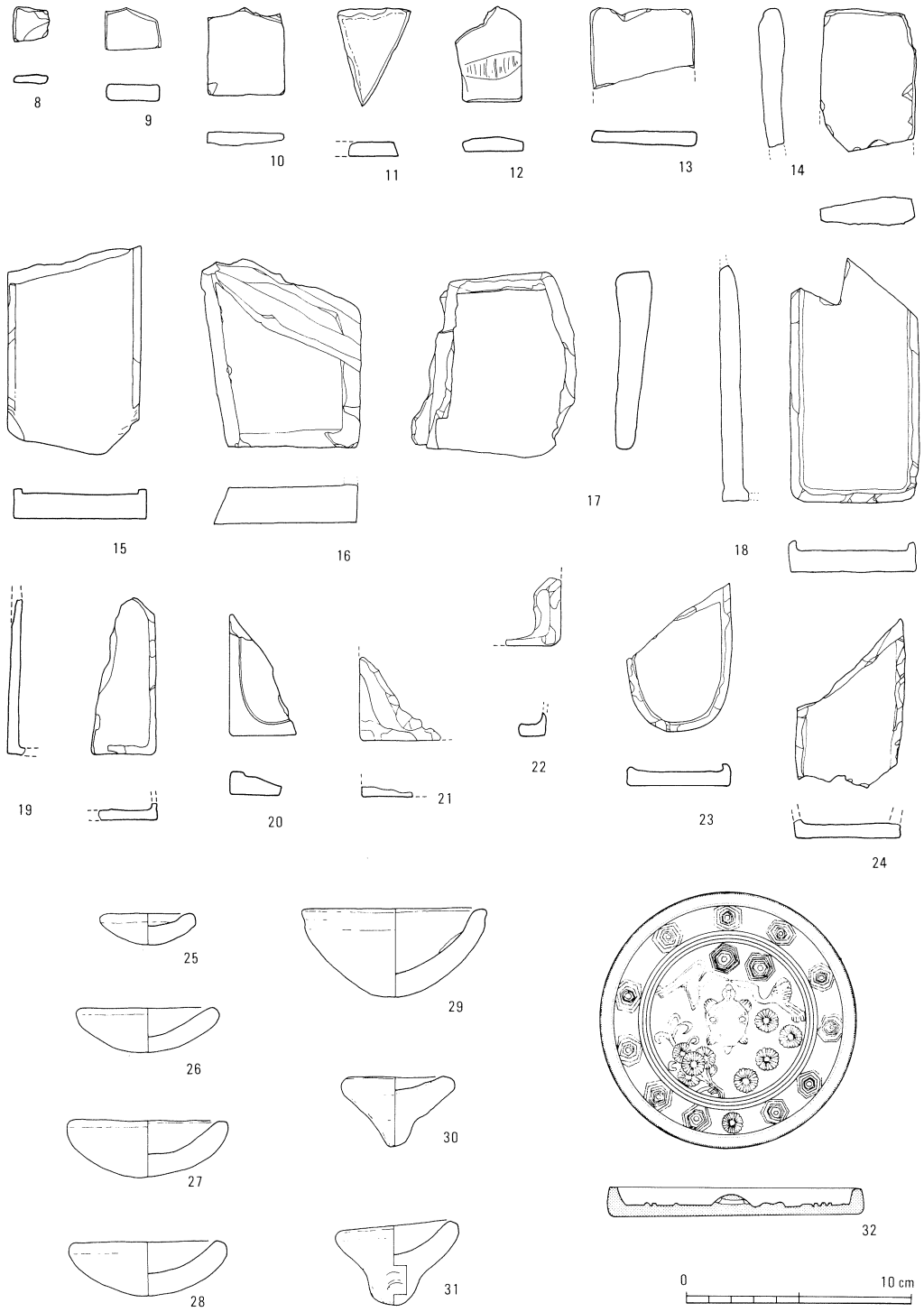
第 26 図　中世以前の遺物



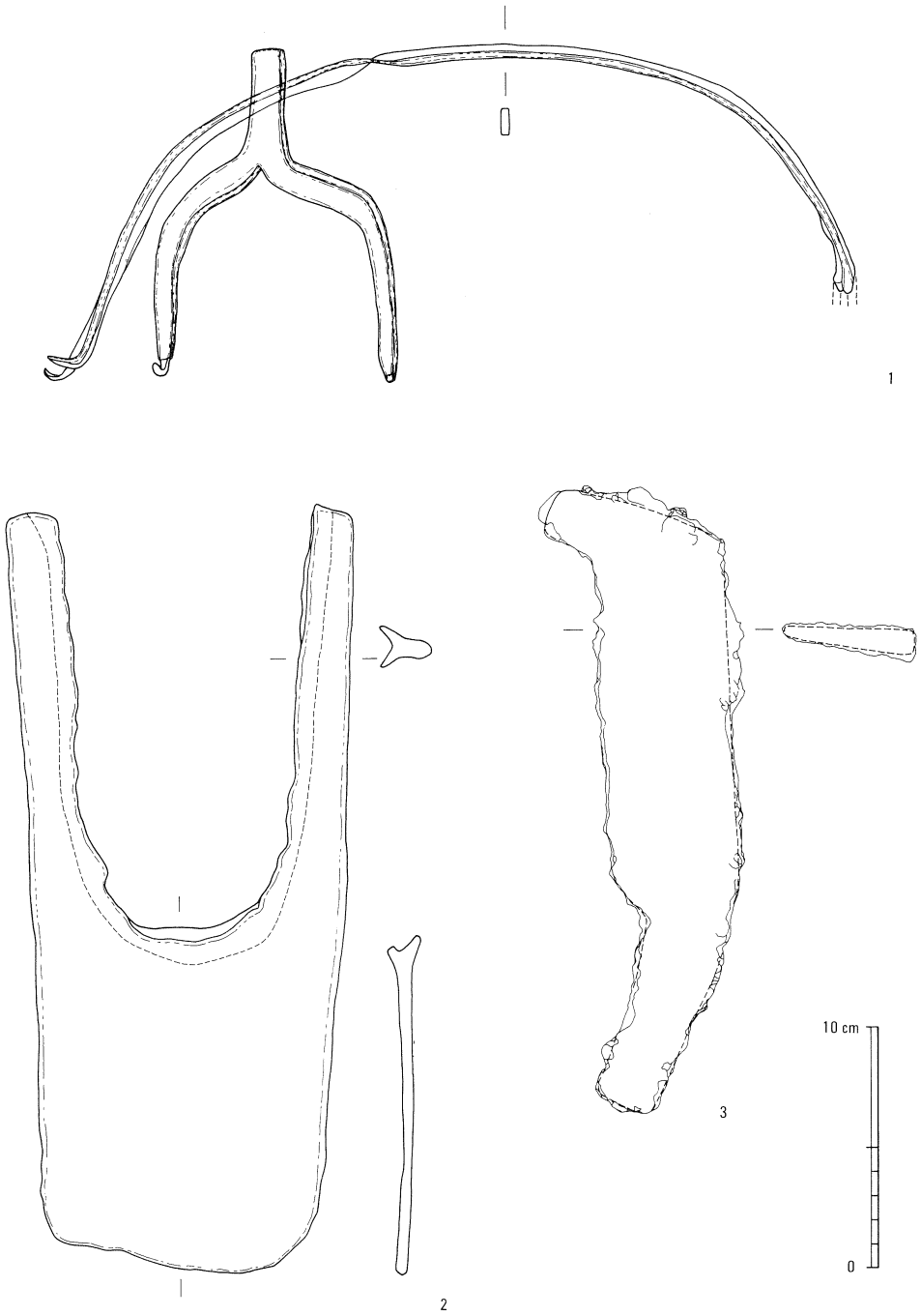
第 27 図　石製品実測図（1）



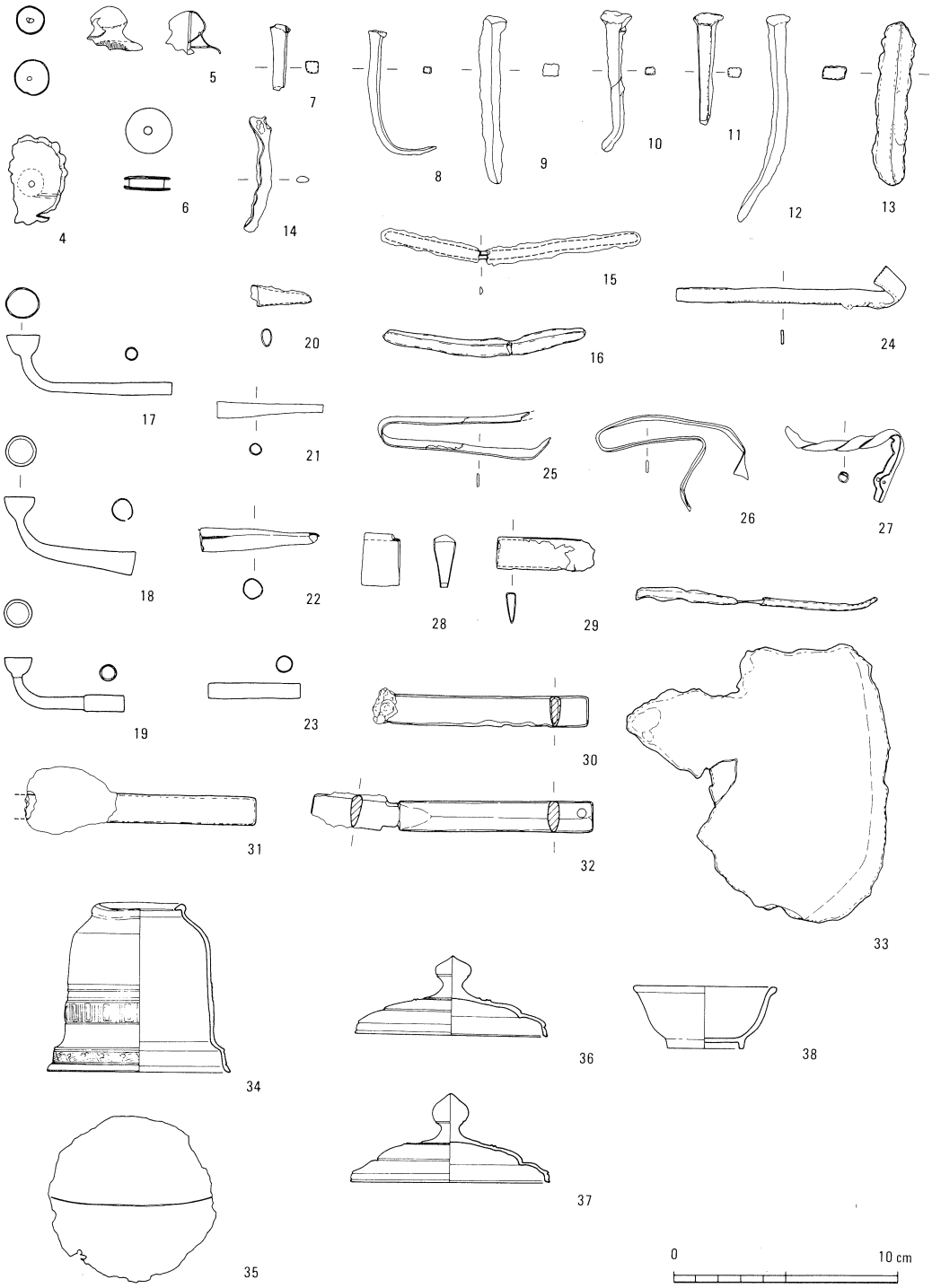
第 28 図　石製品実測図（2）



第 29 図　石製品実測図（3）



第 30 図　金属製品実測図（1）



第 31 図　金属製品実測図（2）

2. 石製品（第27図～29図、図版27）

石製品には石塔類（第27図１、３）石臼（第27図２）、砥石類（第28図４～７、第29図８～14）、硯（第29図16～24）がある。

１は宝篋印塔の九輪の部分である。全長は36.6㎝、最大径15.5㎝を測る。凝灰岩製で比較的柔らかい材質である。全体の作りは九輪の形をしているが、細部をみるとあまり丁寧とはいえない。

２は茶臼の下臼の破片である。砂岩を用いている。上臼に接する面には浅く細い溝を刻み、復元径は19㎝である。中央には孔が貫いている。

３は五輪塔の地輪にあたるものであろう。四面にそれぞれ、「ウン」「キリーク」「タラーク」「アク」を陰刻している。上面と下面は約２㎝凹めてあり、粗い調整痕がみられる。凝灰岩製で、一辺20㎝でやや胴ぶくれのある立方体である。

４～14は砥石類である。いずれも細粒砂岩製である。大別してＡ・Ｂ・Ｃの三種ある。

Ａ類は大形の安定感のある砥石で、４、５がそれにあたる。四面ともよく使用されている。通常は持ち運びしないでそのまま使用されたと考えられるものである。

Ｂ類はＡ類とＣ類の中間的なサイズで、６、７がこれにあたる。一面、または三面が使用され、Ａ類に比較すると持ち運びは可能であるが、木製の台に付けられていた可能性も考えられる。６は裏面に断面Ｖ字状をした長さ２㎝に渡る使用痕があり、小さな刃こぼれを修理したと思われる。７は三面を使用している。

Ｃ類は、Ａ類、Ｂ類に比較すると偏平である点が特徴であり、最も異なるところである。８～14がそれである。いずれも完形品は発見することができなかった。比較的残存状態の良好な、10、13、14によってそれぞれ幅3.3㎝、4.6㎝、4.3㎝を知ることができるが、長さは不明である。主として使用されたのは表裏の二面であるが、側面もきれいに調整してある。Ａ類、Ｂ類に比べると、より軽くハンディであり、持ち運びができたものと考えられる。

15～14は硯である。硯は大別して、Ａ類、Ｂ類の二種ある。いずれも材質は黒色の頁岩を用いている。

Ａ類は全体の形が長方形なもので、15、16、17、18、19、20、21、22がこれにあたる。全体を知ることのできるものはないが、15、16の幅は、それぞれ5.9㎝と5.8㎝ある。長さは11㎝以上あることになる。Ａ類の中には全体の形を長方形にしながら中を長楕円にしていると思われるものもあり（20）、類例が増加すればさらに細分できる可能性がある。

Ｂ類は長楕円形を呈すもので（23、24）、Ａ類に比較するとやや小形で薄い。

3. 金属製品（第30図、31図、図版28）

1は鉄製の鍋の柄である。長さ43㎝、高さ13.5㎝で中央の幅1.1㎝、厚さ0.3㎝を測る。全体は弓状を呈し両端は二又にわかれて、その先端は細くなり外反する。

2は鉄製鍬の先である。長さ約32㎝、刃先の幅11㎝、厚さ0.4㎝を測る。第46図60～64のような木製品とセットになり、木製品が差し込まれるところはV字形を呈している。刃先は使用の為か刃こぼれがみられる。

3は鉄製の鉈である。銹化が著しく細部は不明である。長さ25㎝、幅約5.5㎝。

17、18、19、20、21、22、23は煙管である。皆、真鍮製と考えられる。

武具類には4、5、14、24、25、26、27の冑の飾り金具と考えられるもの、刀の鎺(28)、29、30、31、32の小柄がある。このうち、28は真鍮製である。

34～38は仏具関係の遺物である。34は鈴(りん)で最大径8.2㎝、高さ7.5㎝の青銅製である。胴部には雷文と青海波文をめぐらしている。

35は径約7.5㎝、厚さ0.1㎝の薄い青銅製の円板である。34の鈴と共伴してⅡ区ＳＤ01より出土したが、用途は不明である。無文である。36、37は経筒の蓋又は二器の蓋である。36は最大径8.6㎝、器高3.5㎝、37は最大径8.9㎝、器高40㎝を測る。いずれも、撮まみは擬宝珠状を呈し、体部の中ほどに一条の沈線が入る。38は密教法具又は六器又は二器の一つで小形の金銅製の鋺である。皿台は出土しなかった。口径6.4㎝、器高2.8㎝を測る。

8、9、11、12は角釘である。

他に6、13、15、16、33等が出土したが用途は不明である。

和鏡（第29図、32図版27）直径11.3㎝の円鏡である。表は平面で菊花雙鶴文がある。鈕は亀を真上から見た形で中央に径2㎜の鈕孔がある。鈕の部分での厚さは約1㎝である。内区は下半分に菊花文を、上半分は雙鶴文と亀甲文2個を配している。外区と内区は二条の界圏で区画している。界圏の直径は7.9㎝を測る。外区は11個の亀甲文と1個の菊花文をめぐらす。周縁は幅約0.5㎝、高さ1.2㎝ある。全体的に銹化が進み文様ははっきりしない部分も多いが、作りは粗悪である。室町から江戸時代にかけてのものと思われる。

4. 古銭（第32図、31図、34図、図版29）

古銭は表裏の拓影であらわし、観察は表にしてまとめた。流砂中から出土したものも含めて、Ⅰ・Ⅱ区合計33枚ある。銹化して文字の判読ができないものもあるが中国からの輸入銭が多く、特に北宋銭が17枚あった。北宋銭の中では「元豊通宝」や「元裕通宝」が多い。明の「永楽通宝」も含めて、輸入銭は全て鋳造年代が古く15世紀初頭までである。Ⅱ区の第4遺構から出土した中国陶磁器とは年代的には矛盾する。

5. 木製品（第35図～46図　図版30～36）

河床遺跡のため、木質の保存状態がよく、数多くの木製品が出土した。しかし、洪水等で流されたものが多く、組み合わせて作成した製品は、大半は崩壊しており、旧状が推定復元できるものは少ない。よって、図化が可能なものは、その全体の量からすれば、わずかである。

下駄　　様々な形態の下駄が相当量出土している。これらは歯の作り方から大きく二種に分けることができる。

I. 歯を削り出したもの　（第35図１～第39図20）　この形式の下駄は、その形態から、だ円形のもの（１～６）、長方形のもの（７～16、19、20）、多角形のもの（17）に細分できる。そのうち19、20は非常に小形で、子供用と考えられる。歯のつけねに溝が残るものも多い。（２・８・９・10・12・13・15・18・19など）歯を作り出す際の鋸痕であろう。また特殊なものとして、鼻緒の穴のないもの（18）がある。

Ⅱ、歯を差し込んだもの　（第39～41図21～31）身の裏側に溝を削り、歯を差し込んだもので、形態からだ円形のもの（21～27）、長方形のもの（28～31）の二種に、また歯の取りつけ方から、ほぞ穴が一ケ所のもの（21・25～30）、二ケ所のもの（22～24）に細分できる。なお、ほぞ穴の差し込み部分には、くさびをうって補強した例もある。歯をつける角度は、ほぼ直角であるが、21は急角度に取りつけてあり、特殊な例である。

この二型式を比較すると、さし歯のものが概して厚みに作られている。一方鼻緒の穴は、裏側に鼻緒の結目止と考えられる段を作り出しているもの（７・23・24・25・30）と、単に穴を貫通させただけのものがあり、中には、まわりが焦げており、焼け火箸で貫通させたと考えられるものもある。

これらは、概してよく使い込まれたことがうかがえる。すなわち、表面には指や足裏痕の凹みがよく残り、中には、かなり深く凹んでいるものもある。また、歯はかなり磨り減っており、特に歯を削り出した型のものが著しく減っている。歯は片減りが著しく、左右を決めて使用していたらしい。一方、破損しても修復して使ったとみられる補修孔のあるもの（２・６・８・22）や、折れた歯を釘で打ちつけたもの（31）もあり、非常に大切に使われていたことがうかがえる。

さや　（第42図　32～34）　小刀のさやである。32、33は二枚合わせたものの可能性があるが、34は刳り抜いて作ったものである。表面の削り方は、概して荒い。さやから推定して、刃部の長さは11㎝～16㎝のものである。

羽子板　（第43図　41・42）　41は長さ約31㎝、幅は推定９㎝程の大きさで、42は柄が

破損してるがそれよりやや大形のものである。ともに、本体から柄にかけて、波状に加工している。ともに、表面に羽根をついた痕と考えられる小凹が多くみられる。羽根つきの風が、少なくとも江戸初期には広がっていたことを示す好例である。

桶の部分品　（第44図　47～50　第42図　37）　47～49は、桶の底と考えられる。いずれも数枚の板を木釘によって継いでいる。50は、桶の蓋であろう。目釘痕が残っており、もとは把手がついていたと考えられる。37は桶の持ち手の部分であろう。

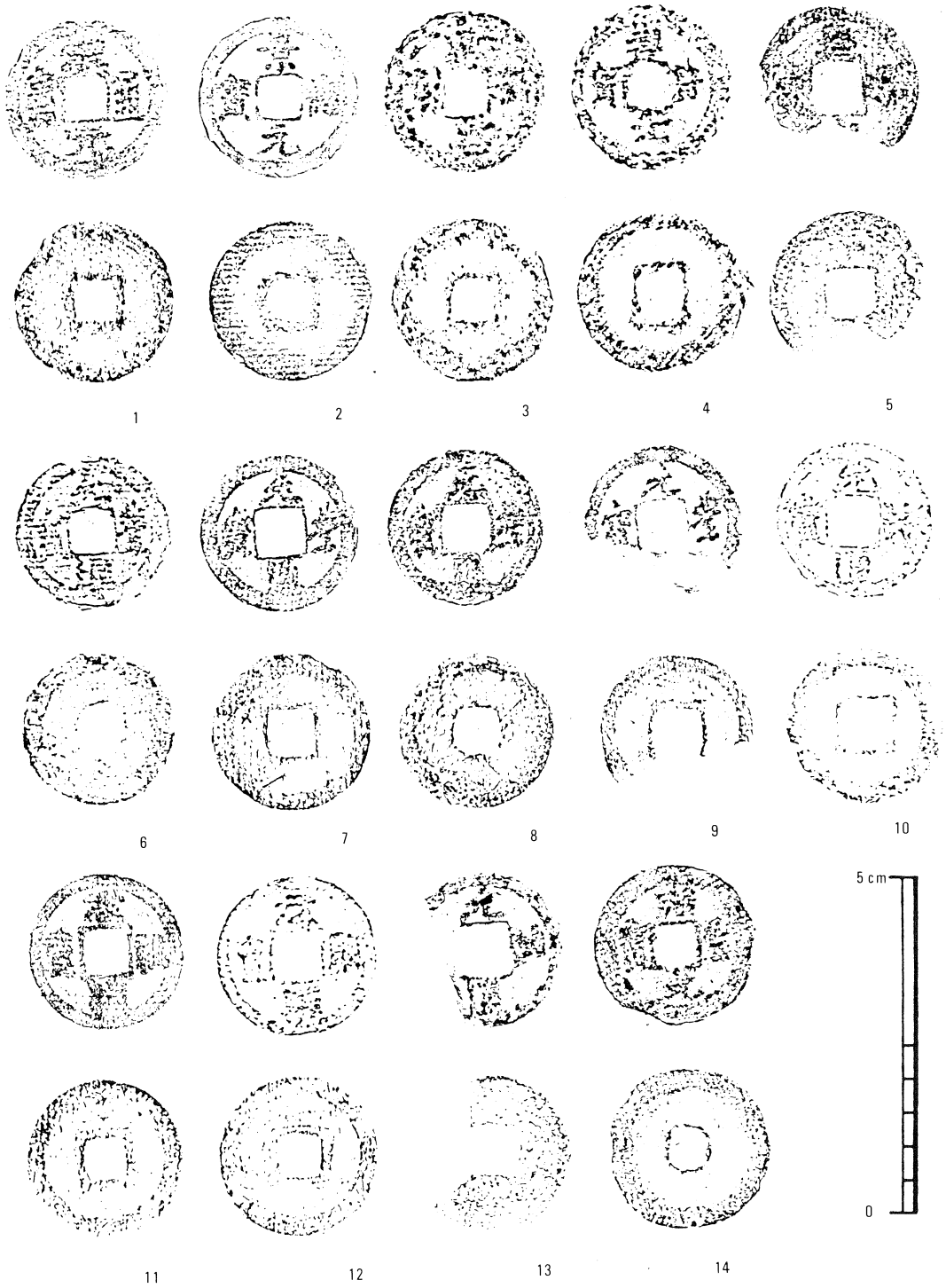
漆器　（第47図　65～79）　盃（65）、皿（66）、椀がある。盃は、薄手で全面赤色に塗られている。日常一般に使用したものではなく儀礼用である可能性が強い。椀はロクロによる成形で、浅く口縁が開き気味のもの（67～69、72、75）と、深く口縁が開かないもの（73・74・76・78・79）の二種がある。また後者は高台が厚く作られているものが多い。飯椀　汁椀等の用途のちがいが反映した形態の差異と考えられよう。漆は大部分が内赤、外黒に塗られている。絵付は、多くは赤色で施されているが、黄色で施されているものもある。文様は扇などの他、抽象的で紋的な色あいの濃いものも多い。底部に陰刻を施したもの（67）、文字を書いたもの（76）もある。

曲物　（第45図　53・54）　53は三重に、54は二重に巻いて、それぞれ桜の皮でとじている。54は底はないが柄をさしこむ孔があり、柄杓であろう。目釘の痕跡はなく、底とは接着剤等でとめていたと考えられる。53は、やや大形で底板には木釘を打って止めている。55は、柄杓の底であろう。

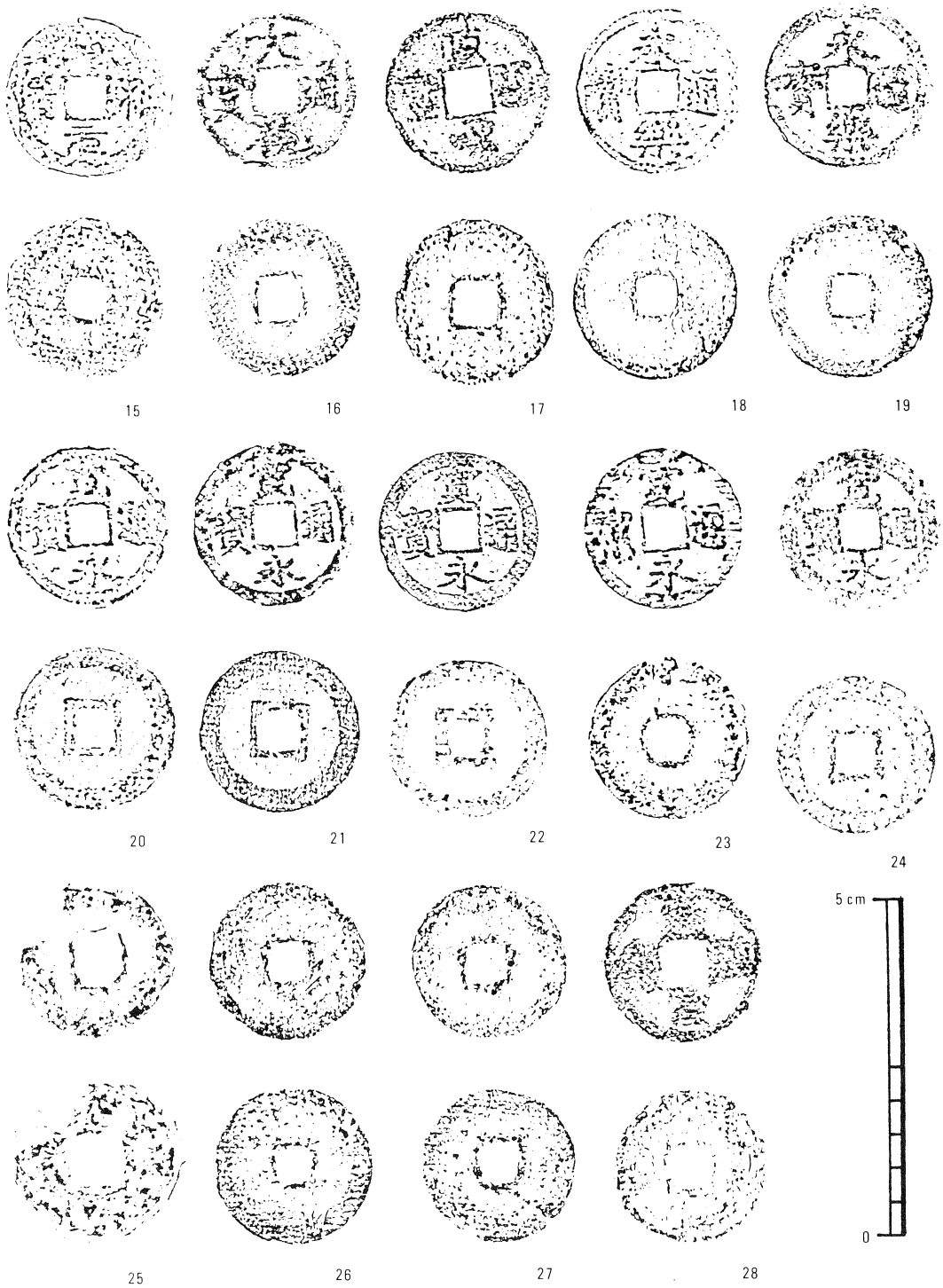
鍬　（第46図　60～64）　長さがおよそ20～23㎝、幅11～13㎝、厚さ2.5～4.3㎝をはかる。先端部から側縁部全体にわたり装着痕がみられ、U字形鍬先を着装したものと考えられる。柄孔は角度をもって穿たれており、着柄角度はおよそ70～80°であったと考えられる。材質はカシである。

その他　木札（43）箸（44・45）紡錘車（46）重箱様製品の底（51）などがある。木札は厚さ5㎜弱の薄いもので、文字等は見あたらない。箸は断面方形のもの（44）と断面円形のもの（45）があり、作り方はさほど丁寧ではない。紡錘車は、板を簡単にだ円形に加工し、中央に孔をあけたもので、何らかの製品の再利用の可能性もある。51は周縁部が変色し、目釘の孔がみられることから、そこに側板が接着していたと考えられる。重箱等の底であろう。

用途不明品　（第42図　35・36・38～40・第44図　52、第45図　56～59）　いずれも目釘痕や孔、加工痕等がみられ、何らかの製品の一部と考えられるが、用途等は不明である。58は桜の皮により、とじた痕がある。



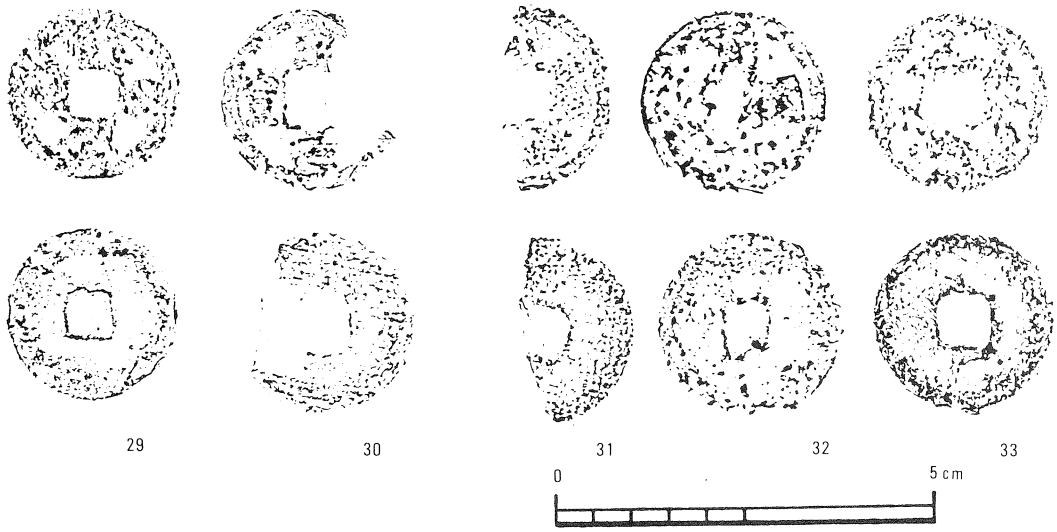
第 32 図　古銭拓影（1）



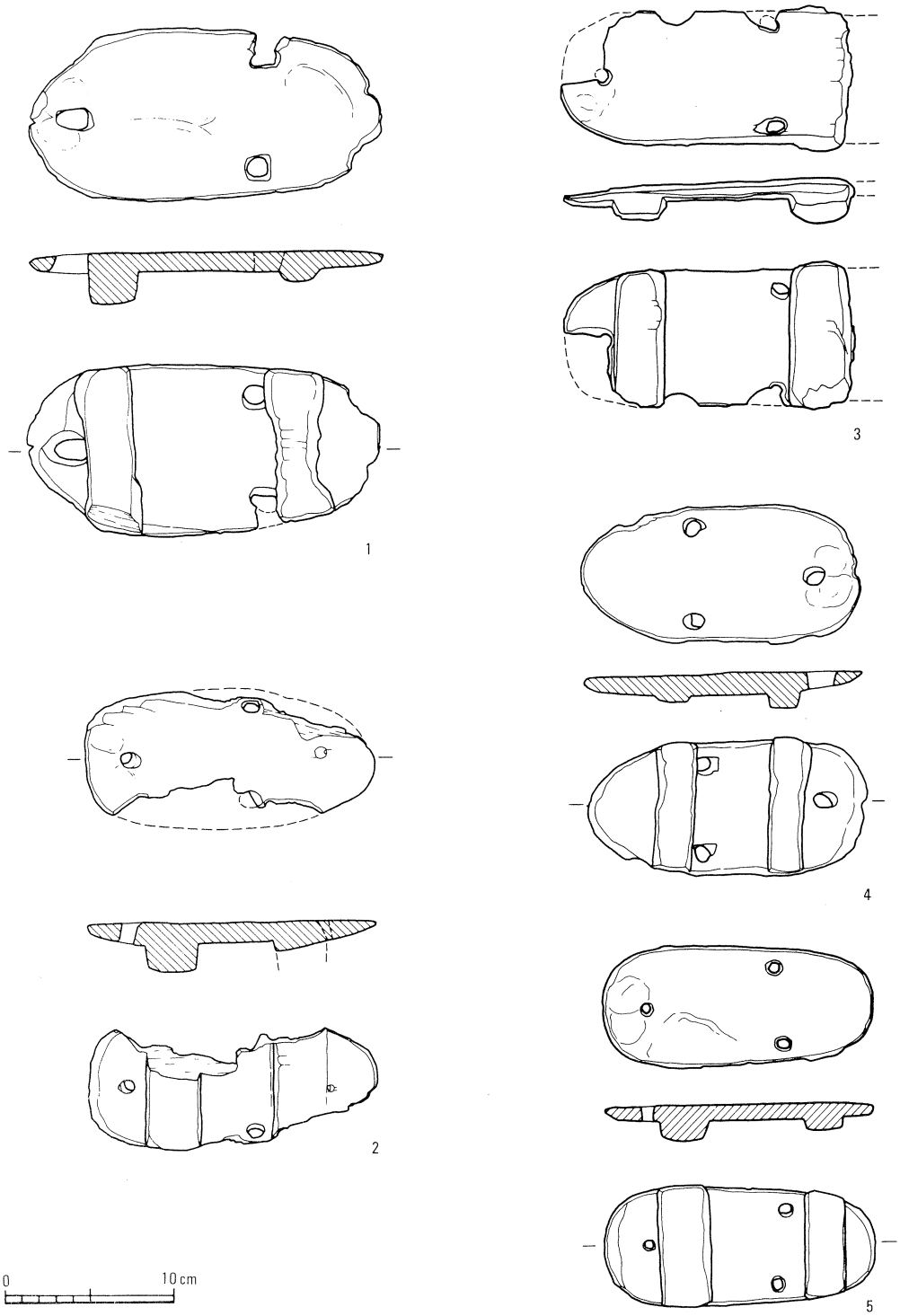
第 33 図　古銭拓影（2）

1	宗通元宝	(960)	北宋	2.4 cm	Ⅱ区ＳＢ10
2	景徳元宝	(1004)	北宋	2.4 cm	Ⅱ区ＳＡ08
3	祥符通宝	(1008)	北宋	2.5 cm	Ⅱ区第３遺構
4	祥符元宝	(1008)	北宋	2.5 cm	Ⅰ区流砂
5	皇宋通宝	(1039)	北宋		Ⅱ区第３遺構
6	元豊通宝	(1078)	北宋	2.3 cm	Ⅱ区ＳＸ05
7	元豊通宝	(1078)	北宋	2.4 cm	Ⅱ区流砂
8	元豊通宝	(1078)	北宋	2.3 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
9	元豊頃宝	(1078)	北宋		Ⅰ区流砂
10	元祐通宝	(1086)	北宋	2.4 cm	Ⅱ区流砂
11	元祐通宝	(1086)	北宋	2.3 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
12	元祐通宝	(1086)	北宋	2.4 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
13	元祐通宝	(1086)	北宋	2.3 cm	Ⅰ区第１遺構
14	紹聖元宝	(1094)	北宋	2.4 cm	Ⅱ区流砂
15	聖宋通宝	(1101)	北宋	2.4 cm	Ⅰ区第２遺構覆土
16	大観通宝	(1107)	北宋	2.3 cm	Ⅱ区流砂
17	政和通宝	(1111)	北宋	2.4 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
18	永楽通宝	(1408)	明	2.5 cm	Ⅱ区ＳＸ04
19	永楽通宝	(1408)	明	2.5 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
20	寛永通宝	(1624)	日本	2.4 cm	Ⅰ区流砂
21	寛永通宝	(1624)	日本	2.4 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
22	寛永通宝	(1624)	日本	2.4 cm	Ⅰ区流砂
23	寛永通宝	(1624)	日本	2.4 cm	Ⅰ区流砂
24	寛永通宝	(1624)	日本	2.4 cm	Ⅰ区第２遺構覆土
25	不　明			2.4 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
26	不　明			2.4 cm	Ⅰ区第３遺構覆土
27	不　明			2.4 cm	Ⅱ区流砂
28	不　明			2.3 cm	Ⅰ区No.12
29	不　明			2.3 cm	Ⅱ区流砂
30	□□□宝			2.4 cm	Ⅱ区ＳＸ05
31	□□元宝				Ⅰ区流砂
32	不　明			2.4 cm	Ⅱ区流砂
33	寛永通宝	(1624)	日本	2.4 cm	Ⅱ区流砂

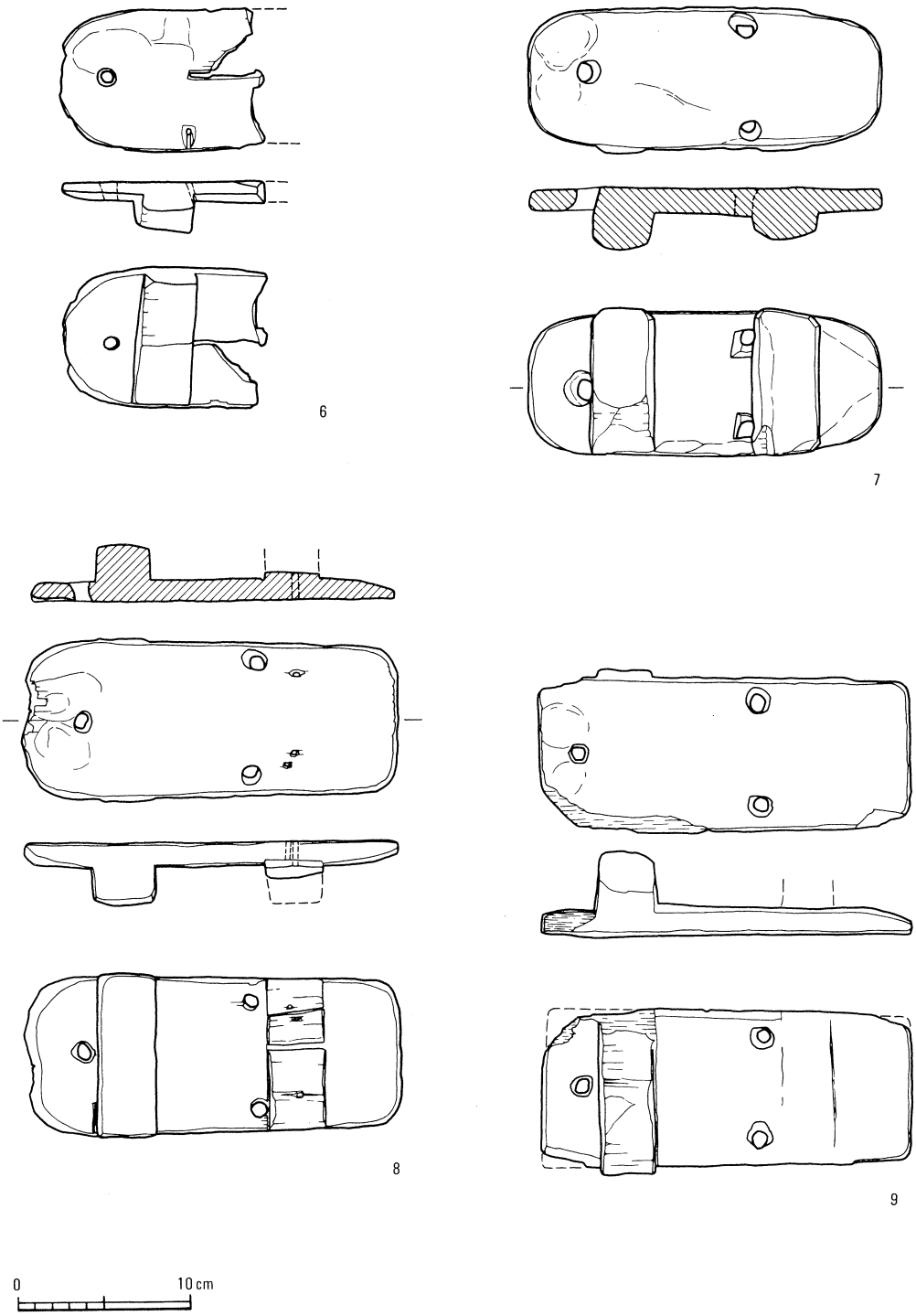
（竹内信枝）



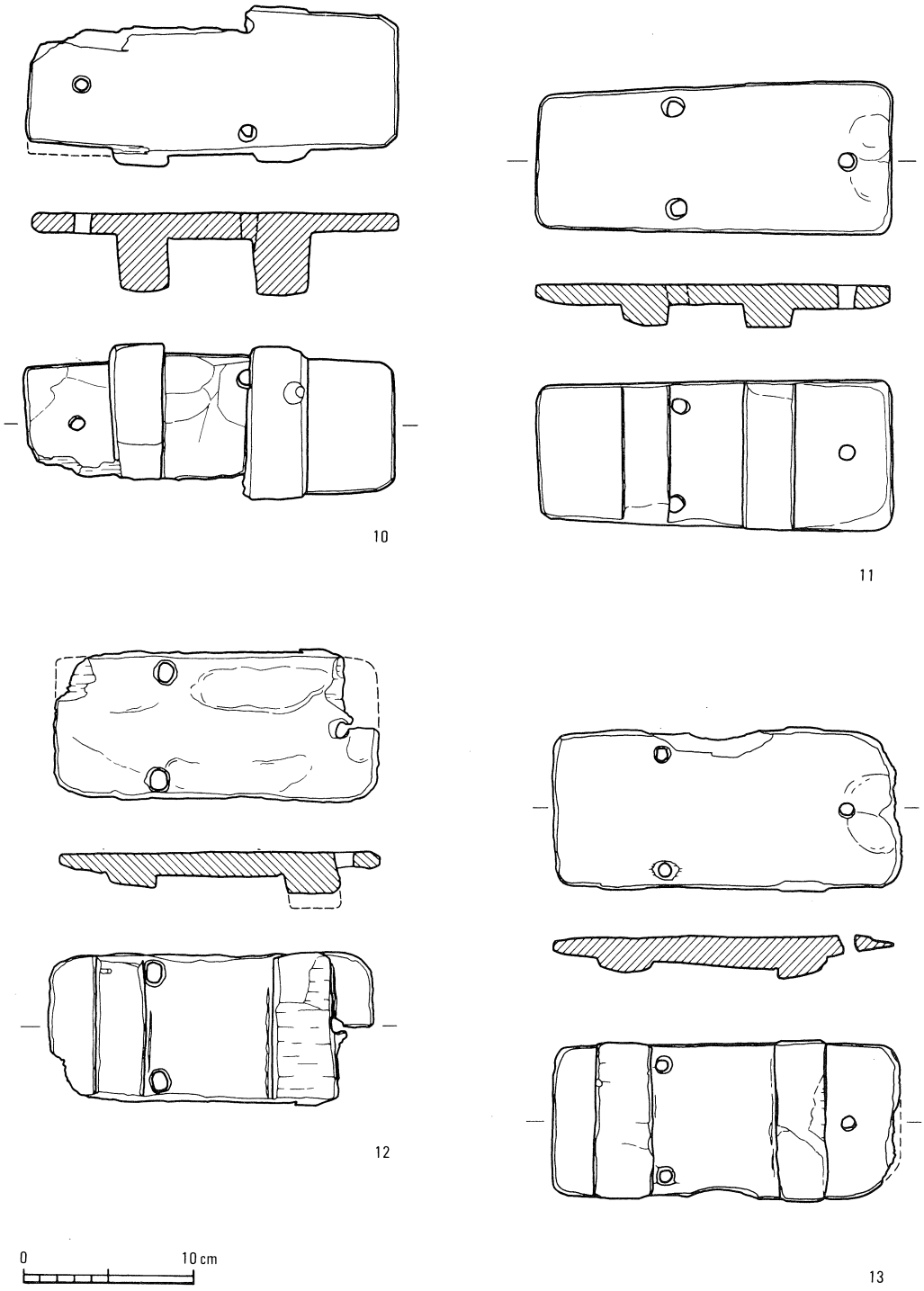
第 34 図　古銭拓影（３）



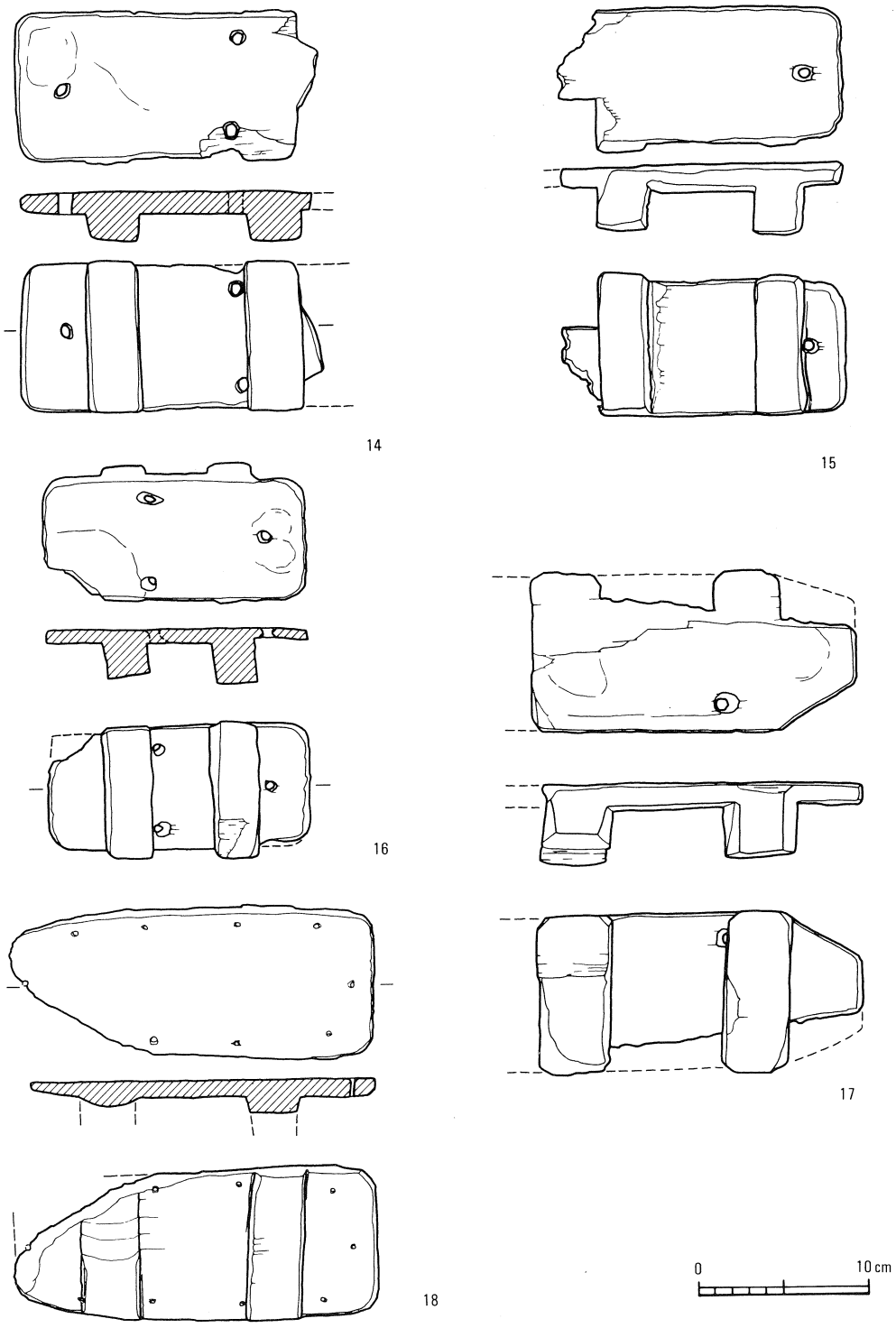
第 35 図　木製品実測図（1）



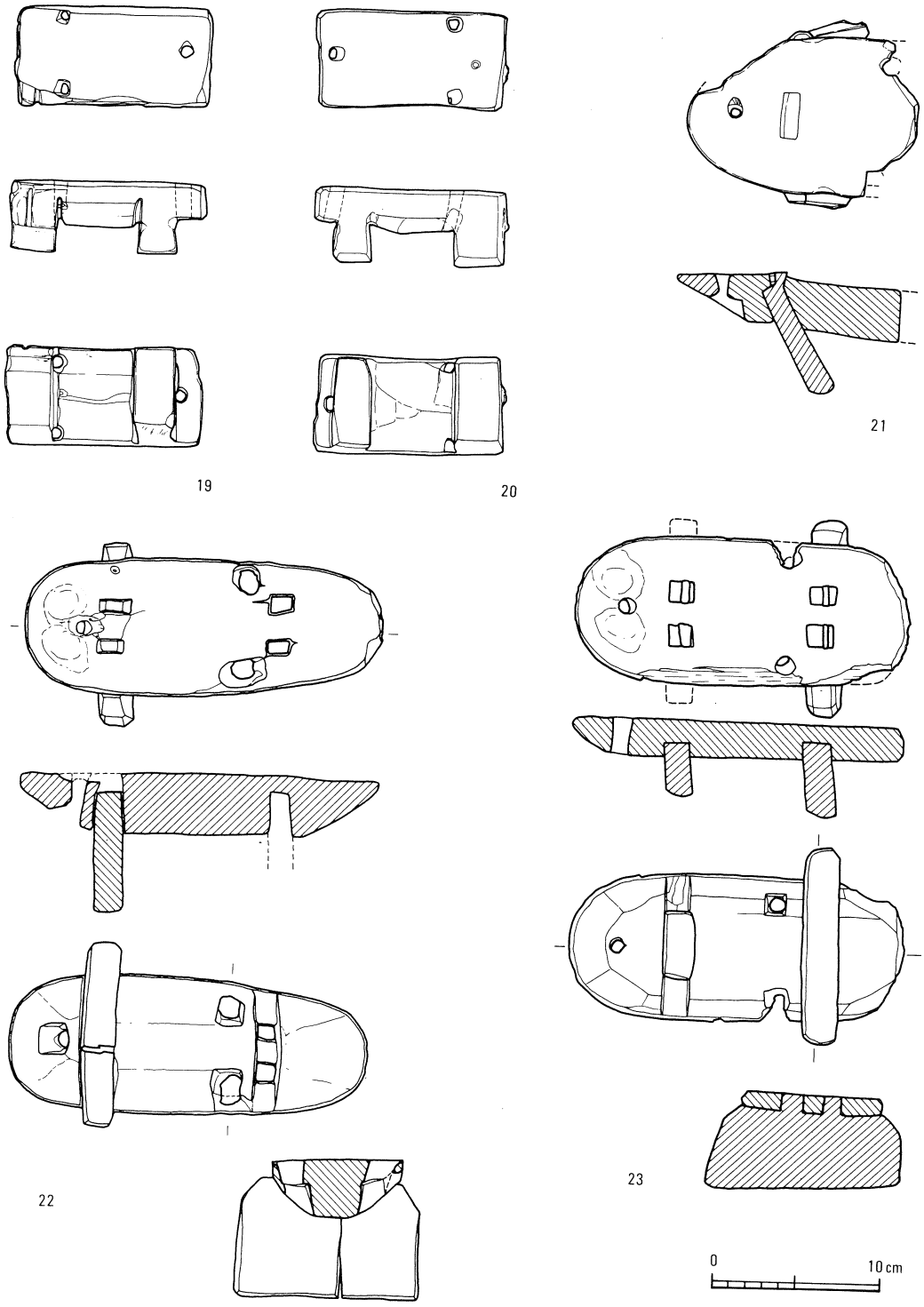
第 36 図　木製品実測図（2）



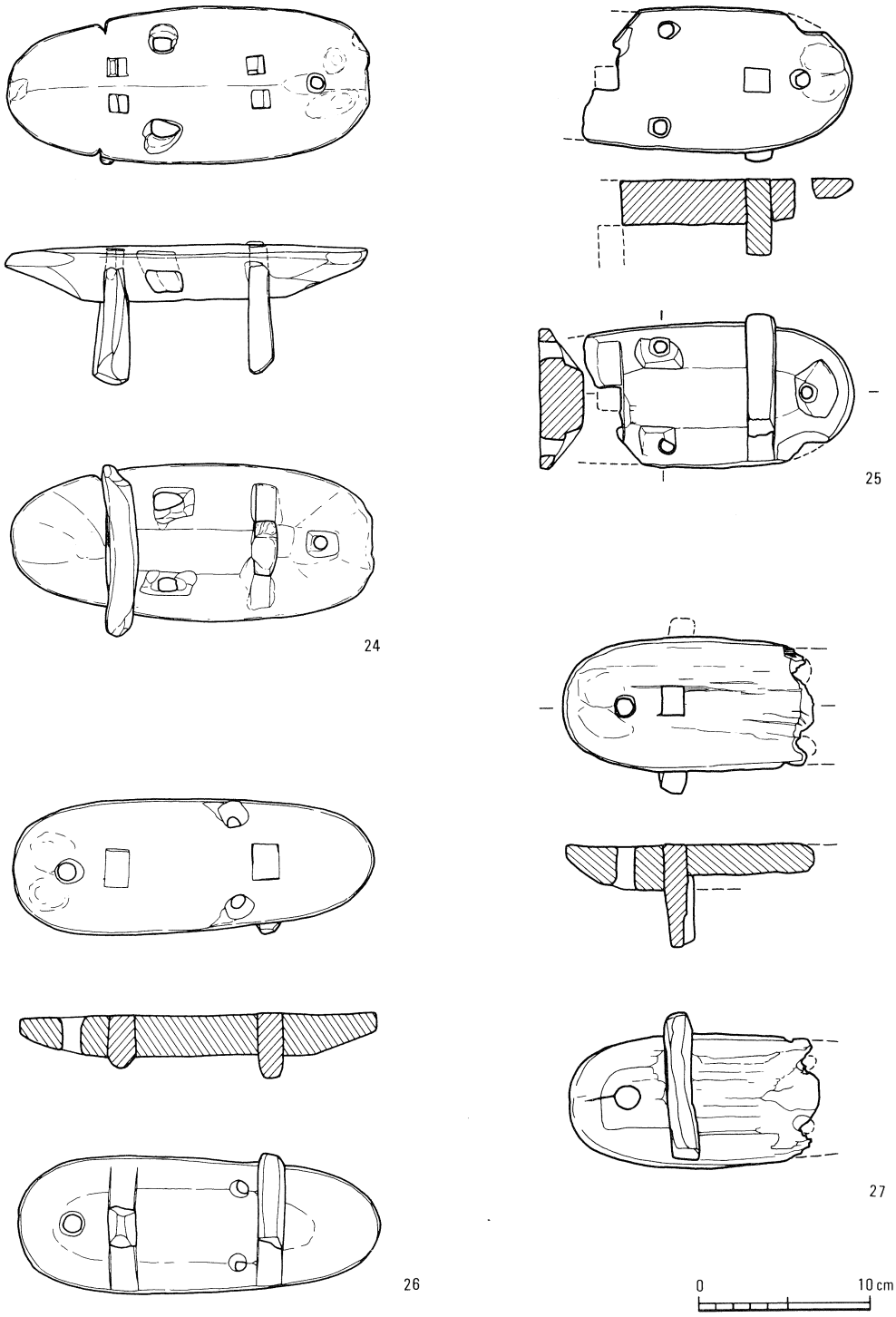
第 37 図　木製品実測図（3）



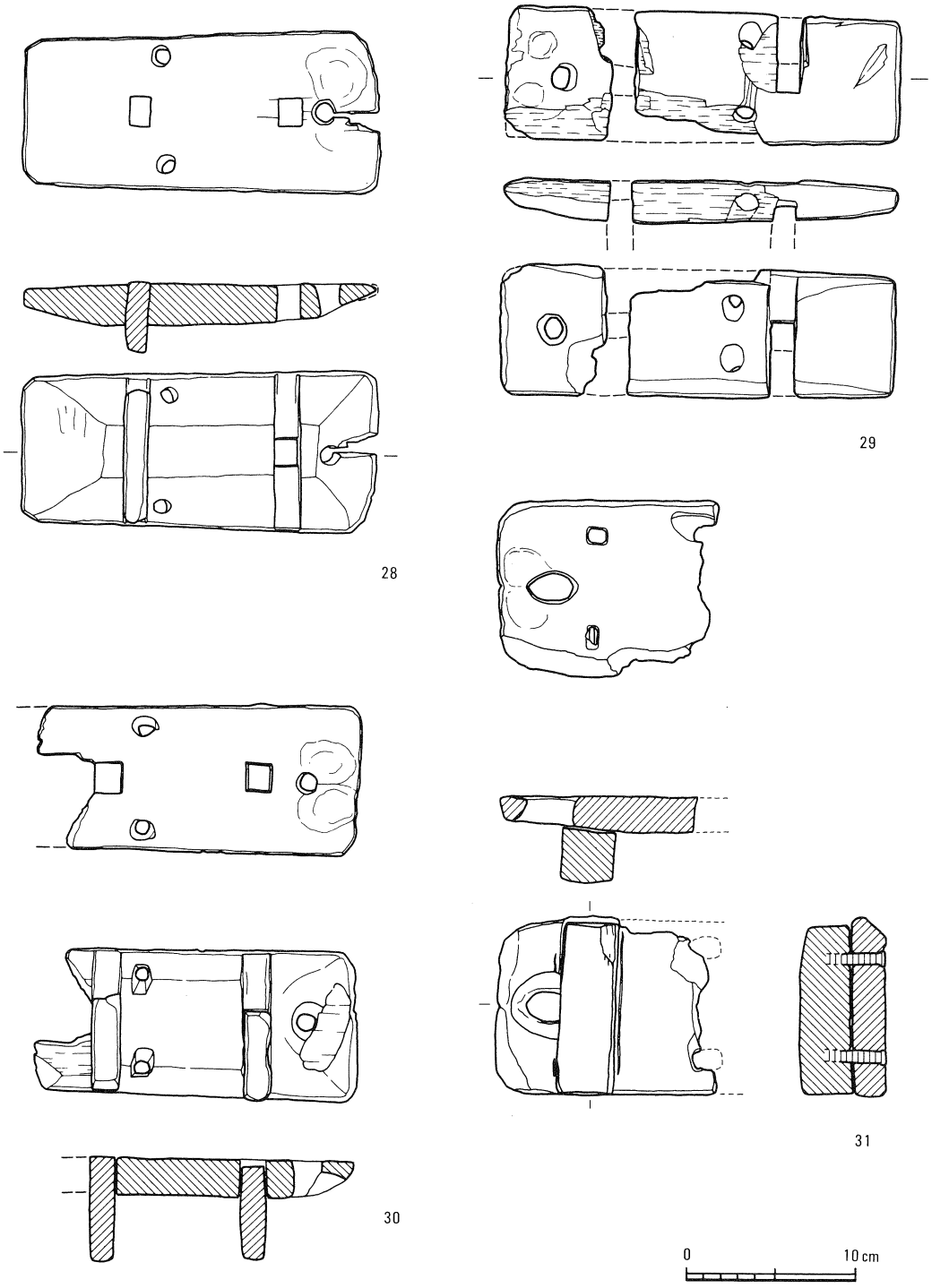
第 38 図　木製品実測図（4）



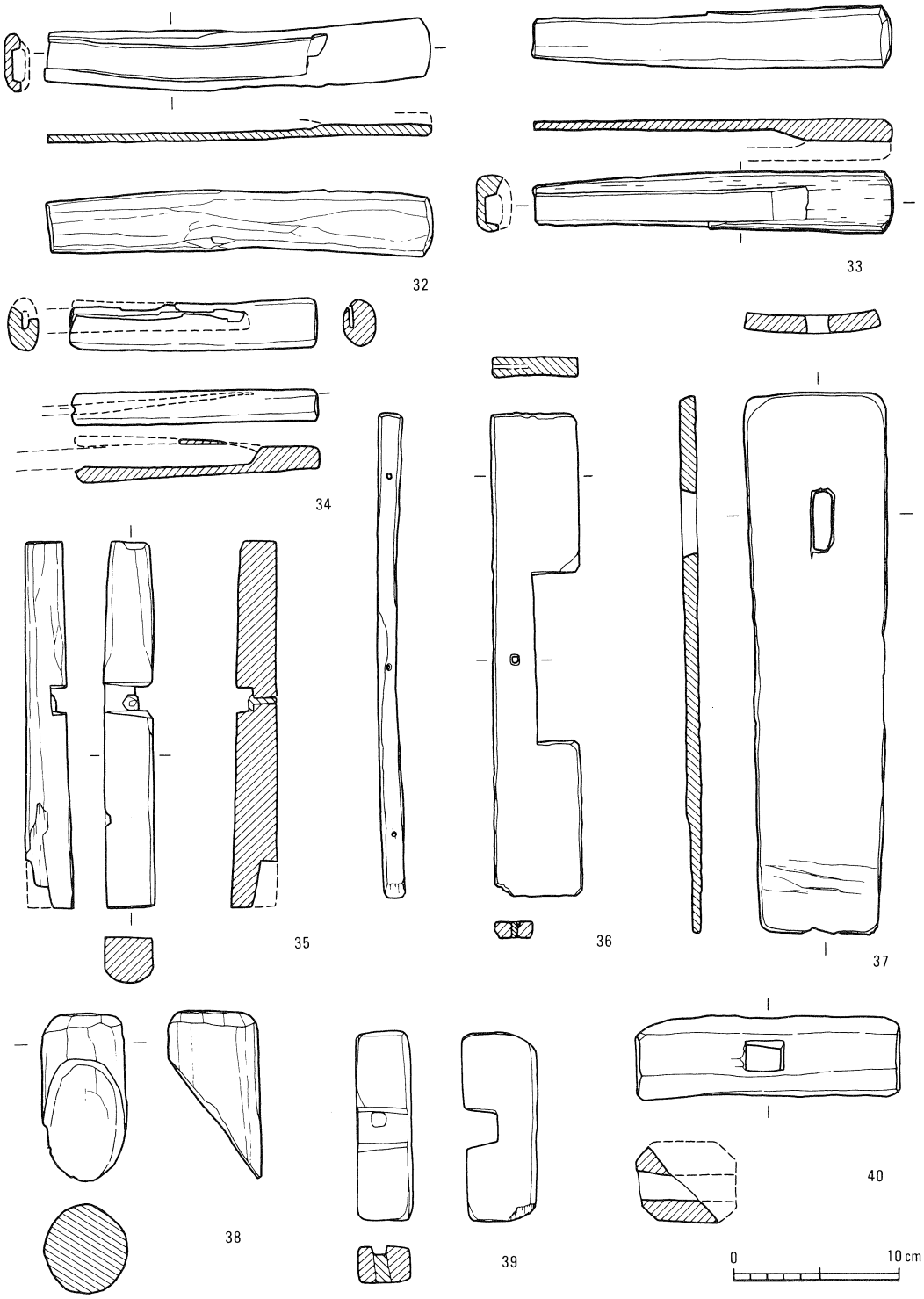
第 39 図　木製品実測図（5）



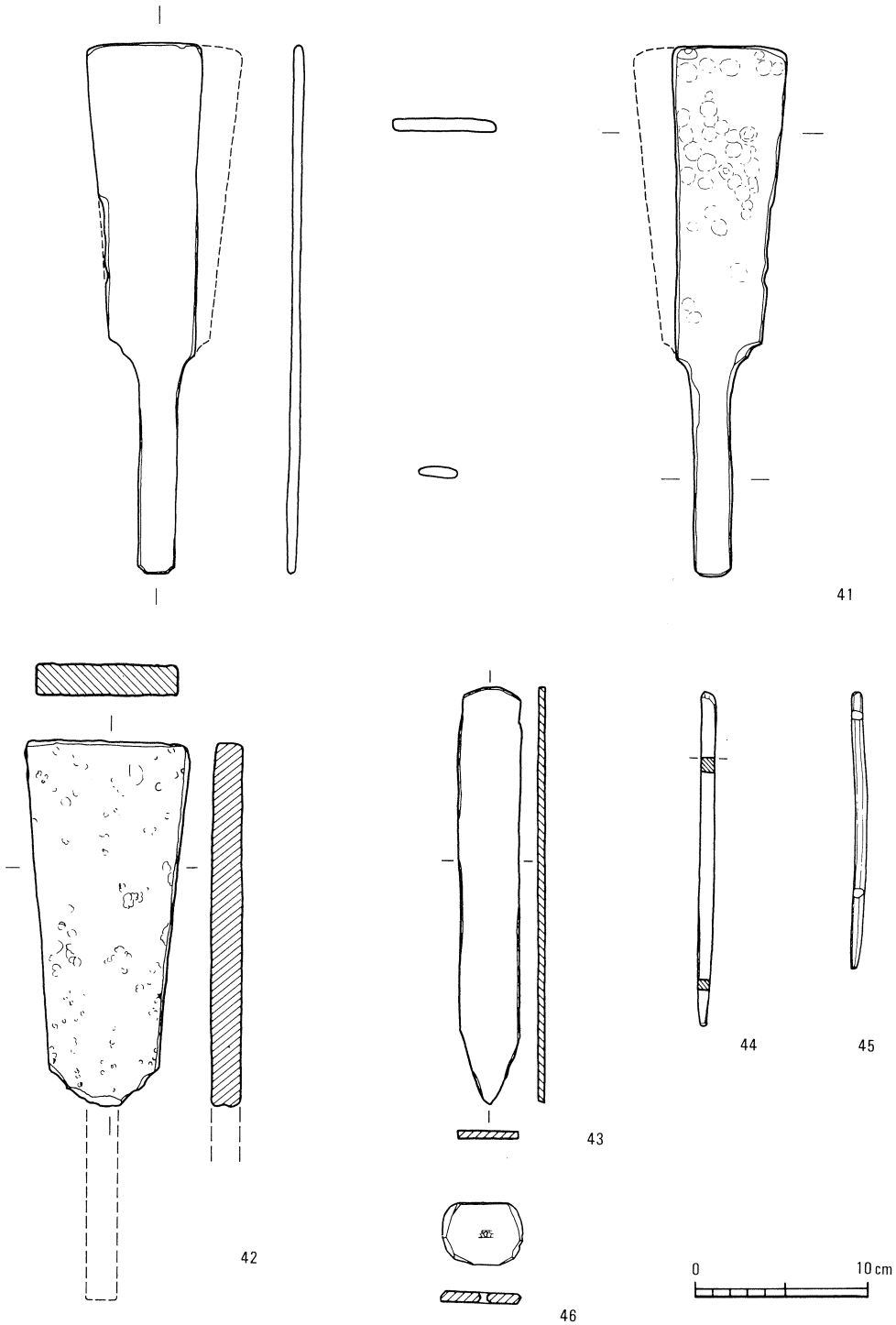
第 40 図　木製品実測図（6）



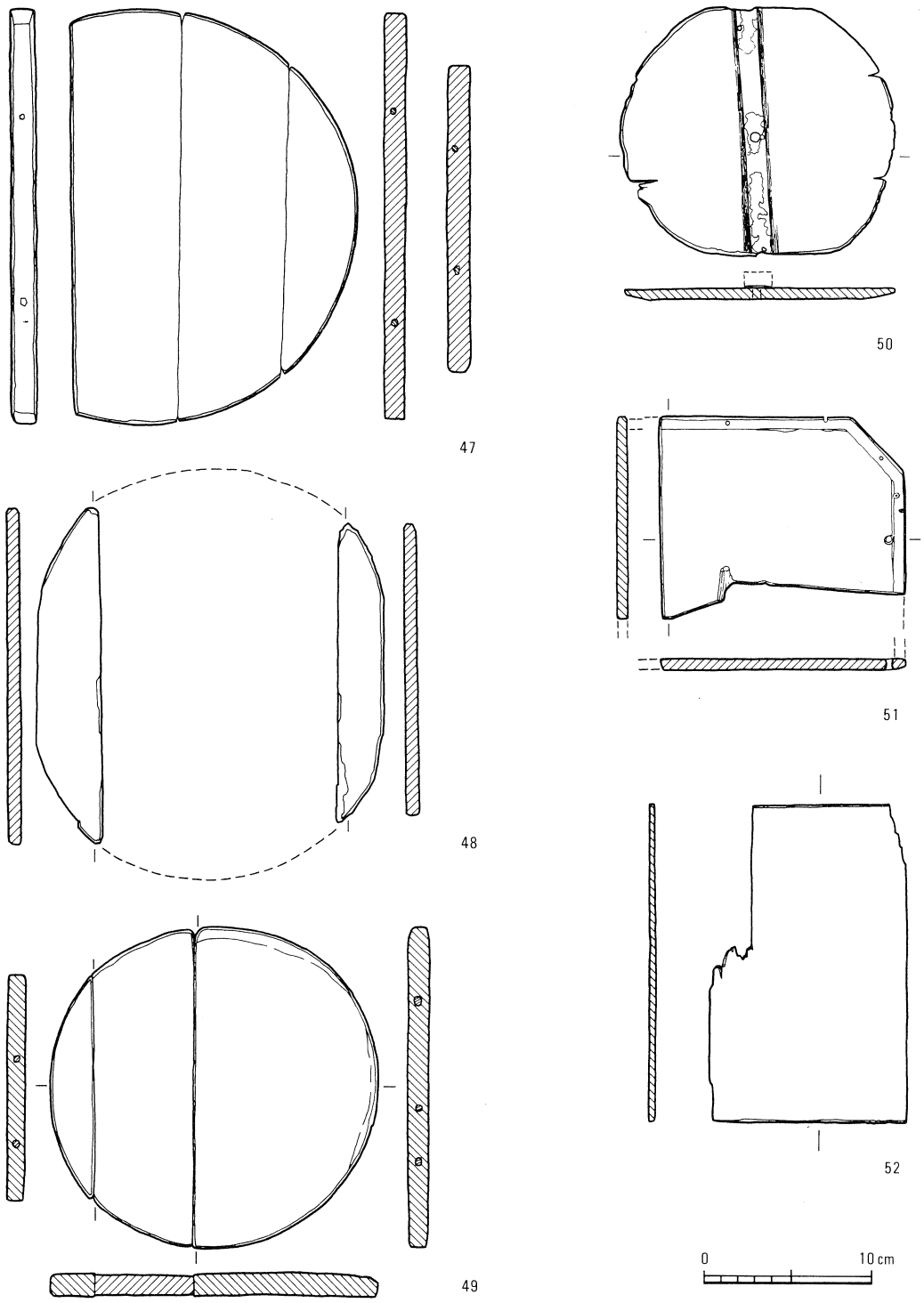
第 41 図　木製品実測図（7）



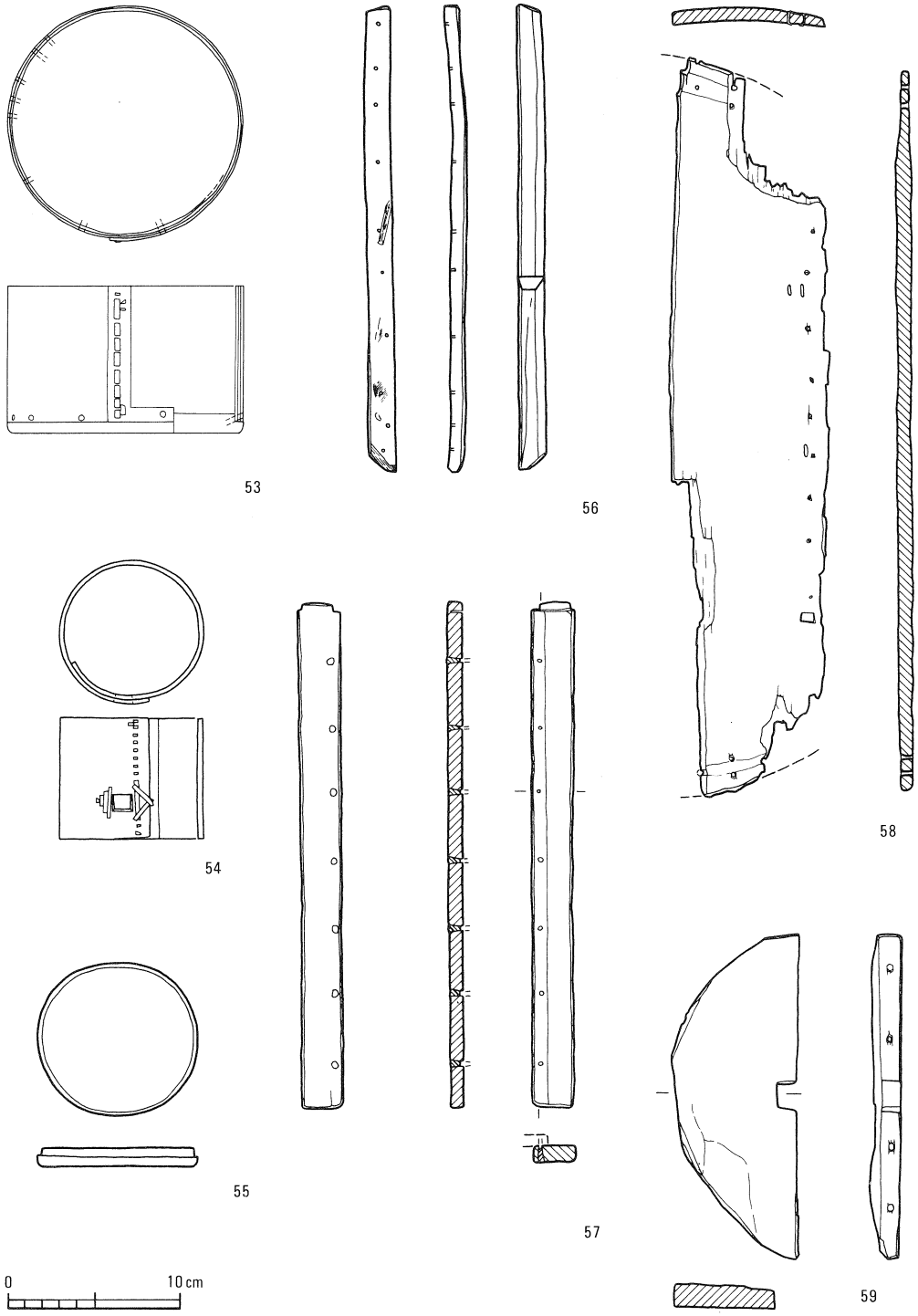
第 42 図　木製品実測図（8）



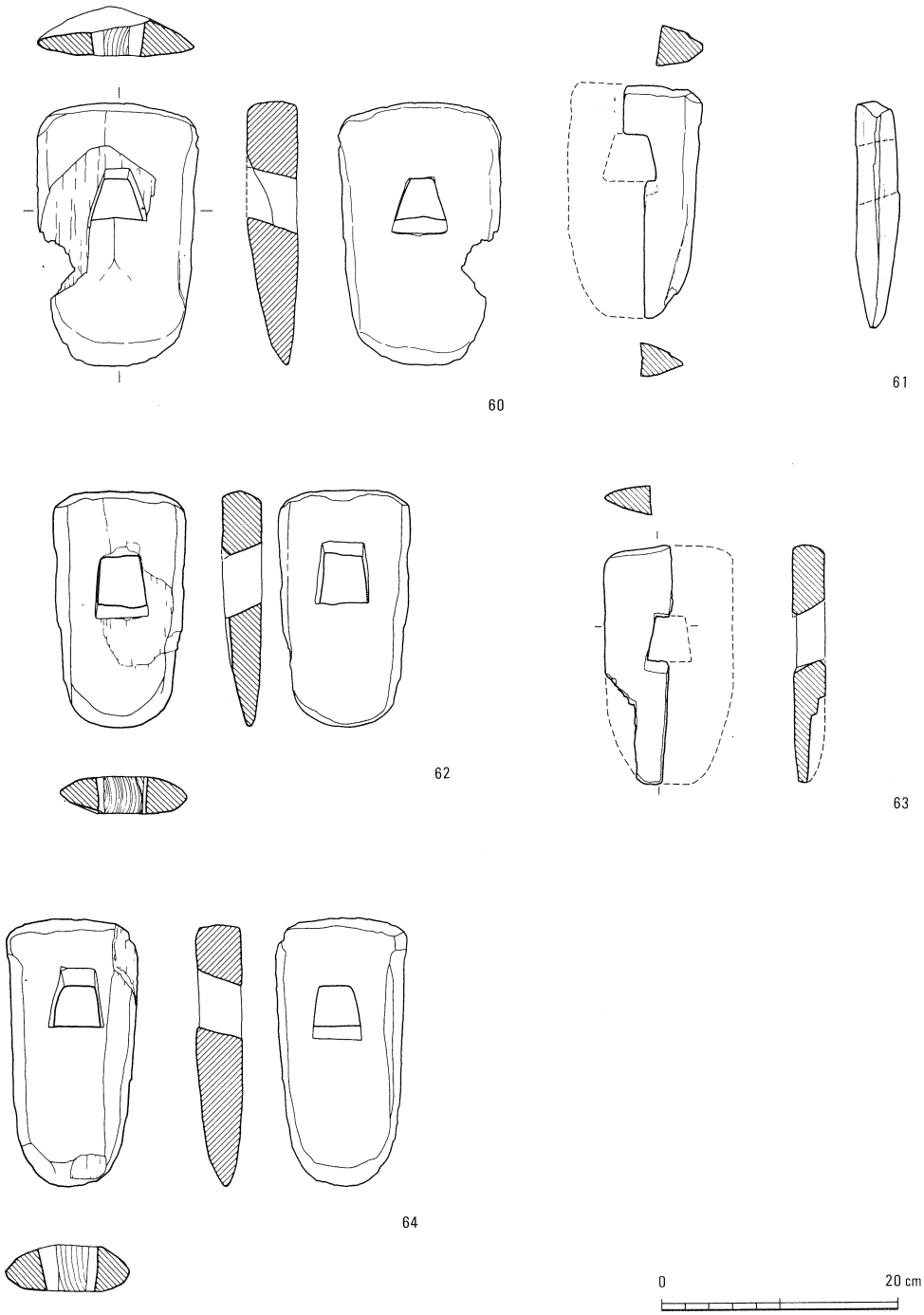
第 43 図　木製品実測図（9）



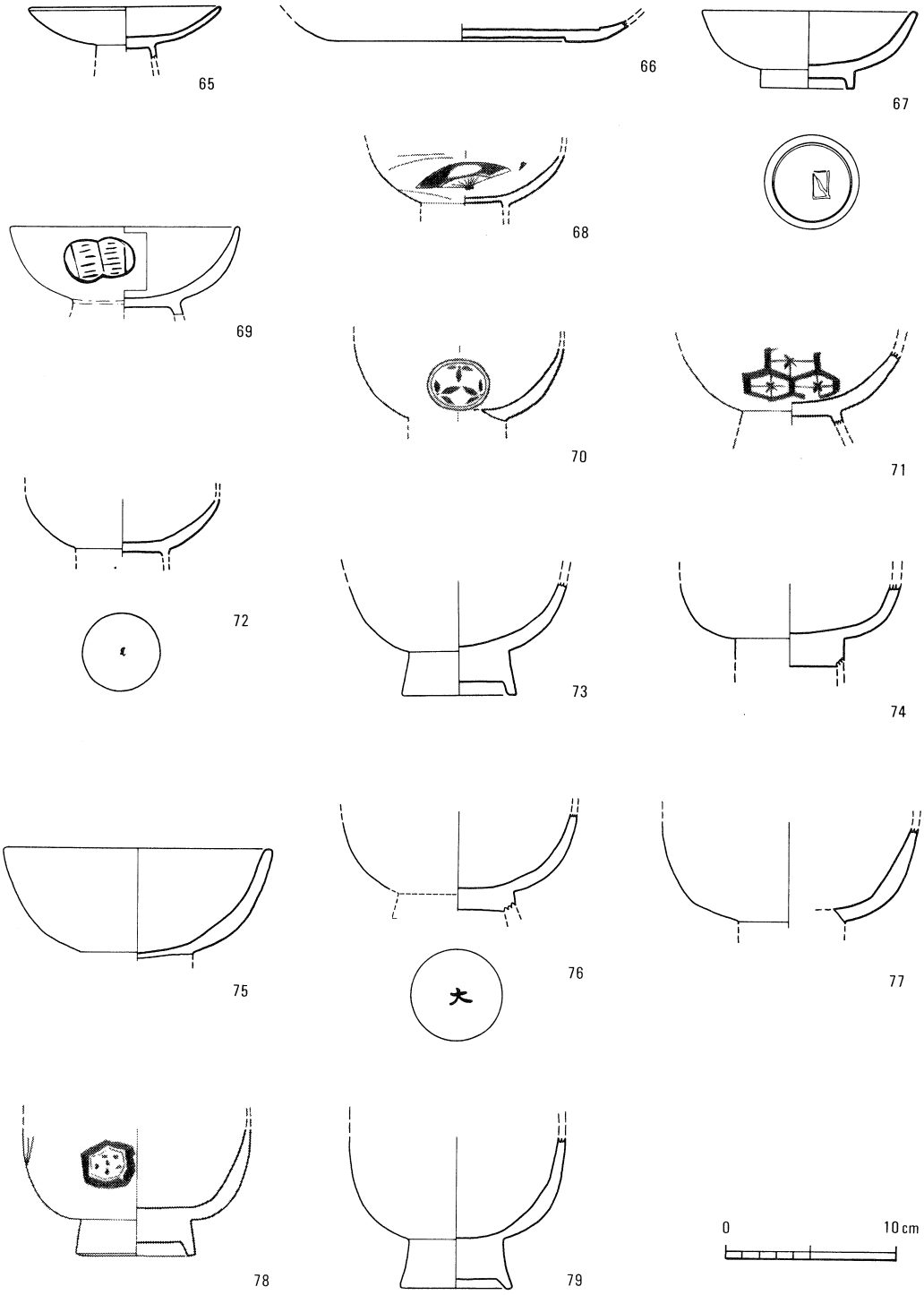
第 44 図　木製品実測図（10）



第 45 図　木製品実測図（11）



第 46 図　木製品実測図（12）



第 47 図　木製品実測図（13）

6. 中国陶磁器（第48図～51図　図版37～38）

中国陶磁器には、染付、白磁、青磁、三彩、褐釉陶器がある。

染付　碗と皿がある。碗は口径によってA、B、Cの三種に分類できる。A類は口径が11㎝以上のもの、B類は口径が7～10㎝前後のもの、C類はB類よりさらに小形のものである。A類（1～10）は口唇をみると特徴のないもの（1、2、7、6）、外反するもの（3、4）があり、高台付近からみると、ほぼ平坦なもの（2、3）、肥厚するもの（5、6、8、10）がある。文様は草花文を配すもの（2、3、7、8、9、10）、玉取獅子をあらわすもの（1、5）がある。6は二次焼成をうけている為、文様は鮮明ではないが、全体に灰色釉がかかりその上にコバルトで口縁部に車輪を半裁したような文様を描いていると思われる。16はB類で、口径8.5㎝、器高5.1㎝ある。口唇内面に雷文、底部に野菜籠を描いている。器壁は薄く、文様は繊細である。14、15はC類で小杯である。いずれも口縁から胴部を欠く、14は外面底部にコバルトで「福」、15は墨書で「七」または「十一」と読める。皿（18～29、31、32）は口唇の形が単純なもの（23、27、29、32）と外反するもの（18～22、24、28、31）がある。高台をみると畳付の広いもの（18～21）、狭いもの（22～25、27～29、32）、箸笥底のもの（26）がある。このうち、18～21は内面に野菜文を描き、高台が広く、高台の内側まで無釉であるのが特徴である。22は形打ちされた波形縁皿で、内面に牡丹文を打出し、底部は楼閣山水図文である。

白磁　白磁の多くは口径13㎝前後の皿の破片が多かった。全体に白磁釉のかかるもの(34)と内面底部が無釉のもの（30）がある。無釉部分は使用の為か磨滅している。

青磁　青磁は皿と碗がある。12は口径12.2㎝、器高6.5㎝、全体に青磁釉がかかるが高台内側は無釉である。13もほぼ同様な底部である。11は12、13に比較するとやや大形の碗で、器壁や青磁釉も厚い。見込には花文スタンプがみられる。

褐釉陶器　35は褐釉陶器で壷形の底部である。径は9.2㎝で底部は内側に凹む。黒茶褐色の釉が全体にかかる。33は輪花縁の皿である。

三彩水注　17は三彩水注の胴部片である。磁器化した胎土に水鳥の羽をあらわしている。内面はヨコナデ痕が残り白釉の部分と無釉の部分がみられる。外面に緑色、黄色がかすかに認められる。第49図17は、熊本県上益城郡矢部町の阿蘇大宮司居館跡の推定地である濱の館溝出土の三彩鳥型水注を参考に推定復元したものである。現存部は5.5×4.0㎝、厚さ0.7㎝の小破片である。

参考文献

桑原憲彰他『濱乃館』熊本県文化財調査報告第21号、熊本県教育委員会　昭和52年

7. 李朝系陶磁器（第52図　図版39）

第52図は李朝系陶磁器として分類を試みたものである。碗形のものと皿形のものがある。

1は口径12.3㎝、器高6.8㎝を測る。胎土は磁器化している。薄い黄緑色の釉が畳付の部分以外は全面にかかり細かな貫入がみられる。高台部は磨滅しているが、一部に砂目当が付着している。胴部は逆ハノ字形に立ち上がり口唇部が僅かに外反する。

2は碗の高台部である。胎土は乳白色で磁器質に近い。畳付部分をのぞき黄緑色の釉が全面にかかり細かい貫入がみられる。内面の底部と高台部にそれぞれ4ケ所に砂目当がみられる。

3.は口径14㎝、器高7㎝の碗。胎土は乳白色でガサガサの感がある。2に比較して、内面底部が半球状に凹む。体部は中ほどからくの字形に立ち上がりがきつくなり、口唇は僅に外反する。淡い黄緑色の釉が全面にかかり、細かい貫入がみられる。内面底部と高台部分の4ケ所に砂目当が付着している。さらに内面底部には他の製品の高台部が付着している。

4.は口径19㎝、器高12㎝の大形の白磁碗で器壁は薄い。胎土はやや灰色がかり緻密である。僅かに青味がかった白磁釉が全体にかかる。内面底部は凹み稜ができる。体部はゆるやかなカーブを描きながら立ち上がり、口唇は僅かに外反する。高台部には砂が付着している。恐らく窯の床もしくは、窯道具の上に敷かれていたものであろう。同じ器形の白磁碗が、東京国立博物館にある。

5、6、8は皿の底部である。5、6は内外面とも全面にくすんだ深緑色の釉が、8は白釉がかかる。内面底部、高台の4ケ所に砂目当痕がみられる。胎土は陶質である。

7は碗の底部である。内外面は全体に淡い黄緑の釉がかかる。胎土は磁器質に近い。

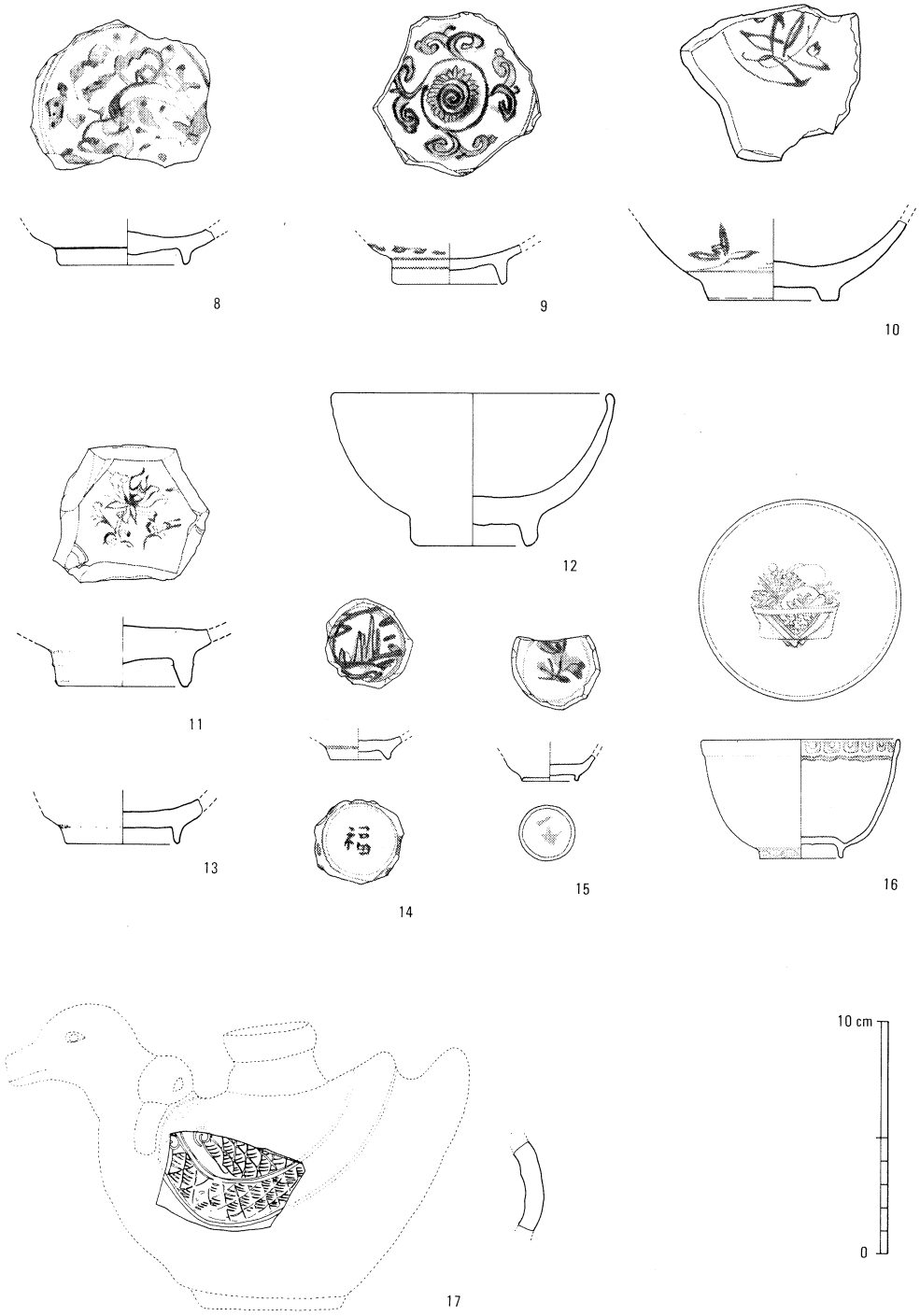
10は大形の碗。もしくは壷の底部と考えられる。薄い青味がかった白磁で、高台径は7.8㎝ある。高台部に窯床、あるいは窯道具に敷かれていたと考えられる砂が付着しているのがみられる。

12は皿で2、3の碗と胎土、焼成、色調やその他の特徴が同じである。高台部畳付以外は全面に釉がかかる。口径は18～19㎝ほどと推定される。

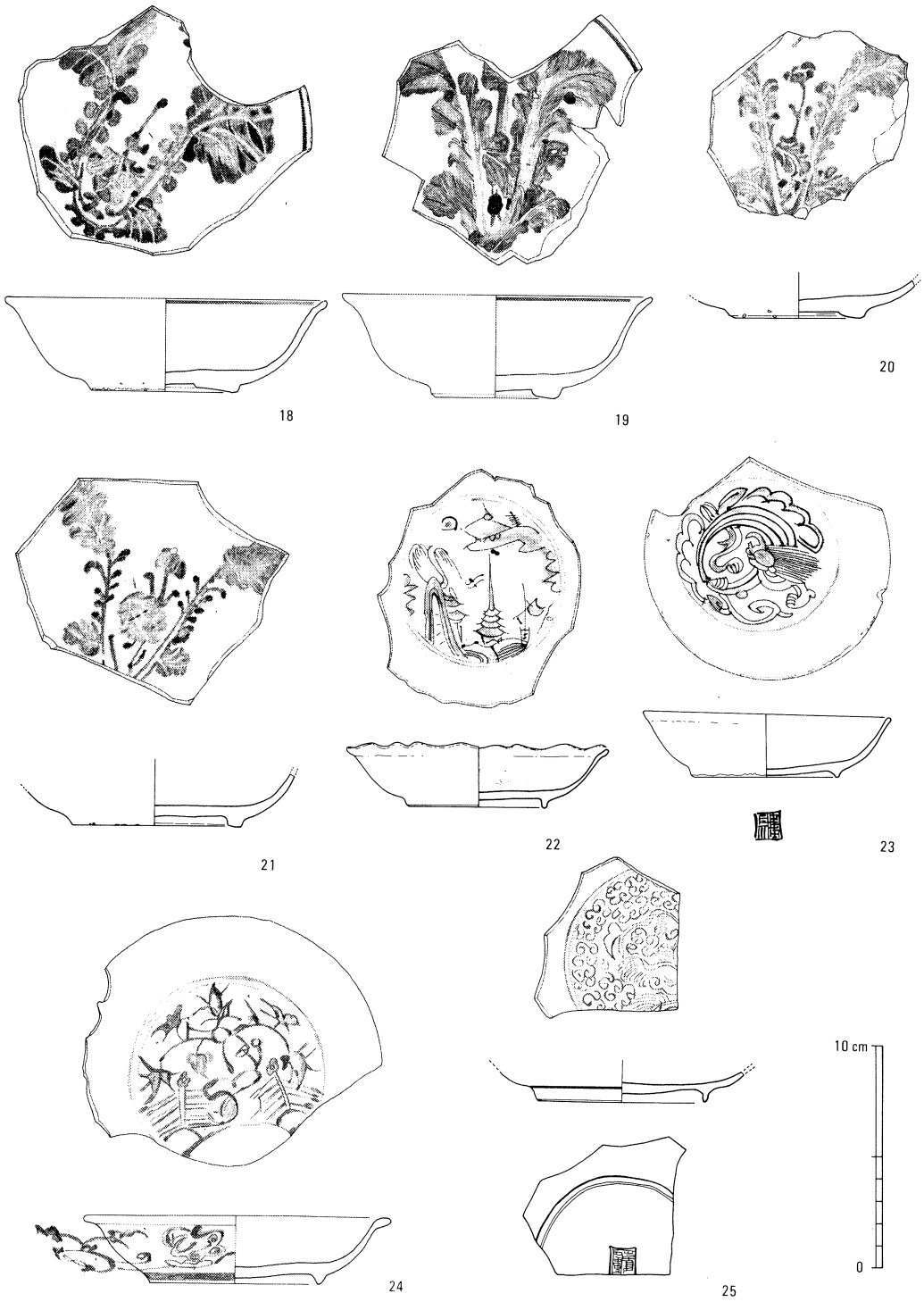
11は碗形皿の残片である。胎土は陶質で透明釉をかけただけのものである。推定口径約15㎝。

9は三島手の碗形皿である。口径14.5㎝、器高約5㎝を測る。象眼部分は白土、他は全体に深緑の釉がかかる。内面底部に径1㎝以下の砂目当が残るが、その数は全部で約8～9個と考えられる。高台部にも砂目当痕が残る。割れ口を漆で接合した痕が残っている。

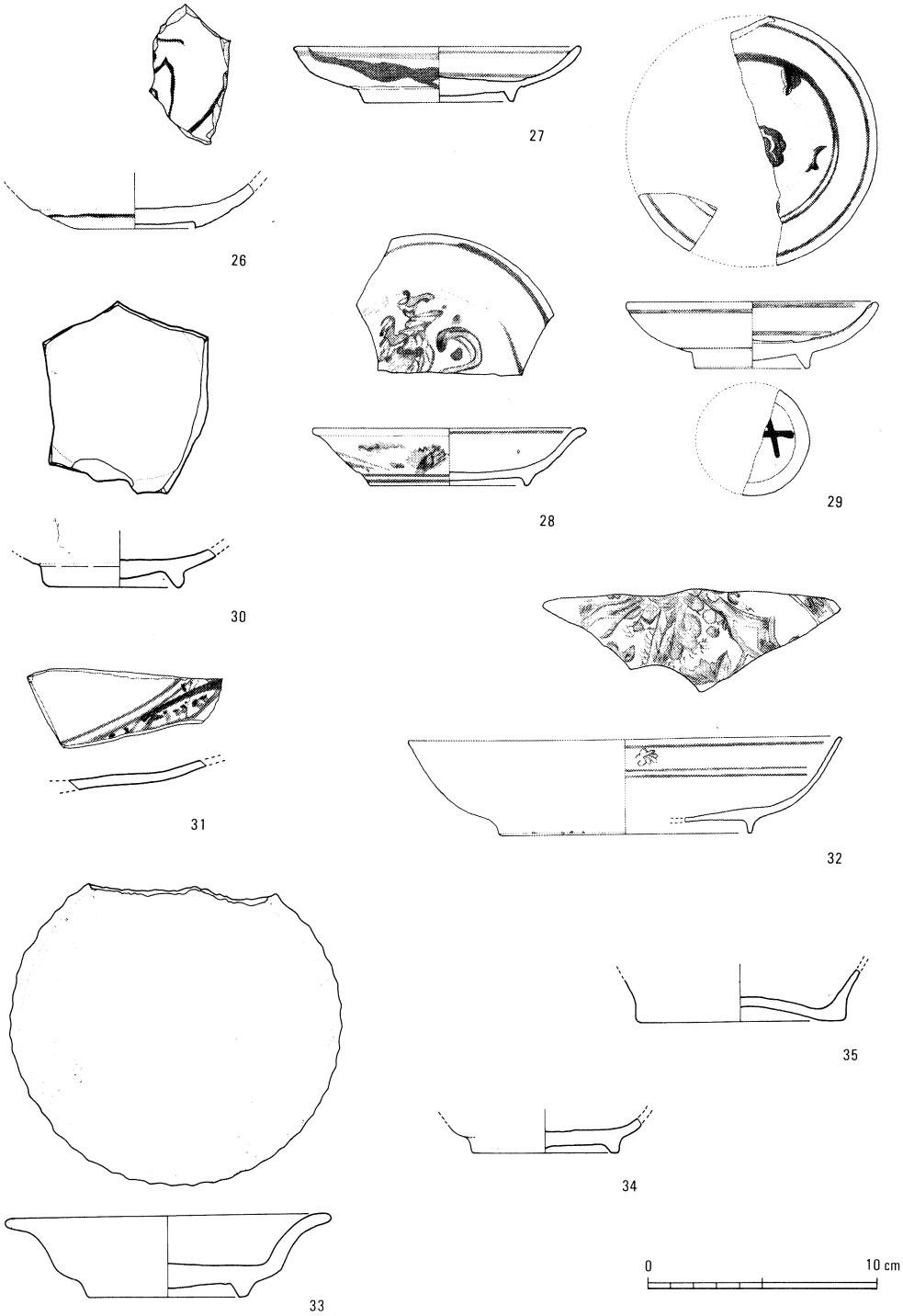
第 48 図　中国陶磁実測図（1）



第 49 図　中国陶磁実測図（2）



第 50 図　中国陶磁実測図（3）



第 51 図　中国陶磁実測図（4）

第 52 図　李朝陶磁器実測図

8. 唐津系陶器（第53図～85図　図版40～50）

本年度調査出土遺物の中で、最も出土量の多かったのは唐津系陶器である。それには、碗、皿、鉢、壷、甕、擂鉢、片口、徳利等の各種がある。

（1）　碗（第53図～第57図）　碗は小形のものをⅠ類、それ以外のものをⅡ類に大別した。Ⅱ類はさらにA～Eの6種に分類を試みた。

Ⅰ類（78～85）　ぐい呑み様の小形の碗である。高台を意識しているもの（78～83）と高台のないもの（84・85）があり、85は回転糸切痕が未調整である。

ⅡA類（15～18、31～36、37～43、58～61、63～67、70、74、86）　体部から口縁にかけてゆるやかに内湾し、口唇は丸い。15、17は唐草文をめぐらしている。86は上野・高取系と考えられるもので、口唇を縁どりしている。

ⅡB類（4、7～14）　体部から口縁にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上るのはA類と同じであるが、口唇部が「く」の字形にわずかにくびれ外反するもの。無文のもの（7、8、12）と絵唐津（9、10、11、13）がある。4は片口状となるものである。

ⅡC類（19～30）　全体の器形が逆「ハ」の字形で、口縁がわずかに外反するもの。このうち19、20、21、22はソーメン手のものである。

ⅡD類（1～3、6、94）　体部から口縁部にかけて、ほぼ垂直、または内傾しながら直線的に立ち上るもの。絵唐津（1、2、3）や、上野・高取系（94）に多い。

ⅡE類（95、71）　いわゆる、口縁が「く」の字形にくびれる天目茶碗状を呈すものである。

以上の中で、例えば第54図29、第56図69、73、76等についてはほぼ全体に釉がかかり、高台には砂目当がみられ、体部あたりの器壁も他の碗と比較して薄く胎土は半磁器化しているという特徴をもつ。これらは、磁器をねらって焼成したと考えられる資料である。

（2）　絵唐津皿（第58図～第63図）　絵唐津の皿はその最大の特徴である文様を中心にして、無文の皿と区別し、Ⅰ～Ⅴの5種に大別を試み、さらにそれぞれを細分した。大別は、Ⅰ類は内面に草花と思われるものを極端に抽象化した鼻髭状の文様、Ⅱ類は抽象化した草花、Ⅲ類は露草文様、Ⅳ類はその他の文様、Ⅴ類は染付を模倣したと考えられるものの5種である。

ⅠA類（96～105）　内面の口縁近くに極端に抽象化した鼻髭状の草花文が2箇所みられるもの。体部から口縁部にかけてわずかに内湾し、高台は低く箬笥底様のものもある。胎土目当が4箇所のものと、みられないものがある。

ⅠB類（106～111）　鼻髭状文様が口縁近くに3箇所あるのを原則としながら、それ

のやや簡略したものや（106、107、108）、2箇所にあるもの（109、110）、これに草花を加えたもの（109、111）がある。器形は、ＩＡ類の内面に稜がつき、胎土目当は4箇所である。

ＩＣ類（139～141）　文様は鼻髭状文を原則とするが簡略化がみられる。口が大きく開き、口唇は外反する。胎土目当は4箇所あるものとみられないものがある。

ⅡＡ類（121～124）　見込に抽象化した一本の草花をあらわすが花弁の表現がなく、口唇を縁どるもの。器形はＩＡ類に近いが波縁である。波縁を鉄釉で縁どるのは花弁をあらわすものと考えられる。目当はみられない。

ⅡＢ類（127～129）　文様は口唇を縁どりするのみで見込は無文である。器形は、波縁で内面に稜がありＩＢ類のそれに近い。胎土目当のもの（125）、砂目当のもの（126）、目当のみられないもの（124）がある。

ⅡＣ類（112～119）　見込に抽象化した一本のみの草花文を描き、花弁の表現がある。器形はＩＣ類と同じで、口径が広がり、口唇は外反する。胎土目当は3箇所のもの（119）、4箇所のもの（115、116）、目当のみられないものがある。

ⅡＤ類（130～132）　文様は、内面に一本～三本の抽象化した草花文と、口縁付近に四方から三本ずつ、見込の草花文を囲むように線を描いている。器形はⅡＡ類を全体に方形にしたもので、132によれば口縁の四角は凹んでいる。目当はみられない。

ⅡＥ類（133、134、120）　文様は、見込に抽象化した草花を一本、または数本あらわすが、茎が長く、花弁の表現がない。器形はⅡＤ類の四角をさらに特徴づけたように思えるもので、全体には八角形を呈し、口縁は波縁状となる。目当はみられない。

ⅡＦ類（126、135～138）　見込の草花文は極めて簡略化され、葉のみで、茎の表現がない。全体の形が知られるのは126のみである。器形は126のように内面に稜のつくものと、つかないものがある可能性がある。また、胎土目当のもの（137）と砂目当のもの（126、138）がある。

ⅢＡ類（142）　見込に抽象化した露草をあらわすが、茎に比べて葉が広く先端は二枚にわれている。口縁は外反するが、口唇はわずかに立ち上る。この葉の表現には第53図10の碗のそれに共通するところがある。

ⅢＢ類（143）　142に比較すると、やや写実的な露草で、茎は細く葉が多く全体に丸みを帯びている。この葉の表現には第53図13の碗や第73図291の大皿に共通するところがある。

ⅢＣ類（144）　142に比較すると、やや写実的な露草で、茎は細く葉の数が多く先端

はとがる。大皿に分類した第77図 307 の文様に似ている。

Ⅳ類（145） 145 の見込に描かれた文様は、草花文を抽象化したもののようでもあり、また、松のような樹木にもみえる。

Ⅴ類（146） 内面の口縁近くと、底に近いところに一条の線を描くものである。器壁は薄い。染付の皿を模倣した器形と考えられる。

（3） 無文の皿（第64図～第72図） 無文の皿はⅠ、Ⅱの2種に大別し、それぞれをさらに細分した。Ⅰ類は体部から口縁部にかけて、ゆるやかに内湾し、内面に段、または稜がつかず、胎土目当と砂目当のものがある。Ⅱ類は口が外に大きく開き、内面に明瞭な段、または稜がつき、胎土目当のものと砂目当のものがある。

ⅠＡａ類（147 ～ 162 、 183 ～ 205） 体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上るもの。この器形は胎土目当のみにしかなく、3箇所あるものと、4箇所みられるものがある。

ⅠＡｂ類（182） 器形はⅠＡａ類と変らないが、波縁皿である。

ⅠＢａ類（163 、 164 、 166 ～ 175） 体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上るが、全体に外に口が広がる器形である。胎土目当が3箇所にみられる。

ⅠＢｂ類（165） 器形はⅠＢａ類に似るが、口縁部が外反するもの。明確に目当はみられない。このうち、181 は磁器をねらって焼成したと考えられるものである。

ⅠＢｄ類（176） 器形、その他はⅠＢｃ類と同じであるが、波縁皿である。

その他、第68図 220 ～ 242 もⅠ類に入るものと考えられるが、全体を知ることはできなく細分は不明である。

ⅡＡａ類（209 ～ 219） 器形は、内面に段、または稜がつき、その稜より口縁部にかけて、わずかに内湾しながら立ち上るものである。胎土目当が3箇所と4箇所のものがある。

ⅡＡｂ類（234 ～ 255） 器形はⅡＡａ類と同じであるが、砂目当である。

ⅡＡｃ類（208） 内面の段より口唇にかけて外反するもの。胎土目当のものである。

第67図 206 と 207 もこのⅡＡ類に分類できると思われるが全体を知ることができず細分は不明である。

ⅡＢａ類（256 ～ 268 、 270 ～ 279 、 281 ～ 290） 内面に段、または稜がつくのはⅡＡ類と同じであるが、口がさらに広がり、口縁部が外反し、溝状となる（縁溝皿）。この種のものには胎土目当は全くみられず、砂目当のみである。その砂目当には、3箇所のもの、4箇所のもの、また、これらがつながって環状となったもの等がある。258 と 262 は

高台内部は凹めておらず、回転糸切痕は未調整である。273は高台のみに回転糸切痕が残っている。

ⅡＢｂ類（269）　器形、窯積み法はⅡＢａ類と何ら変らないが、口径22.3㎝器高5.4㎝と大形のものである。

ⅡＢｃ類（280）　口縁部を欠いているが、器形が比較的大きく、体部は鎬状となっている。全体に釉がかかり、磁器をねらって焼成したもの（磁器ねらい）と考えられる。内部には4箇所の砂目当がみられる。

（4）　大皿（第73図～第79図）　唐津系陶器の皿のうち、前述の小形の絵唐津皿と無文の皿以外のものを大皿と呼ぶことにした。まず、これらの大皿の寸法からみると、特に大形の291、301、304、311～315があり、292、300、306～310、316のように、やや小形のものがある。前者は口径が30㎝以上を測る。器形はいずれも内面に段、または稜がつく。口縁は外反するもの（300、301、303、304、306、308、309、310、313～315）と口唇が尖り、その外面が浅い溝状となるもの（311、312）がある。前者は絵唐津で最大の口径46.5㎝を誇る。後者のものは、肥前有田の川古窯の谷出土の元和4年銘大皿と類似する。文様をみると、文様のあるもの（291～295、299、300、302～304、306、307、312～315）と、ないもの（296～298、305、308～311、316）がある。図柄は露草文（291、293、295、299、302、303、306、307）、松（312）その他の草をあらわしたもの（292、294、304、314、315）がある。このうち、291の文様は第63図144の絵唐津皿と共通し、306のそれは第83図342、343と同文であろう。次に窯積み法をみると3種ある。胎土目当を使用したもの（296、297、302）、砂目当のもの（311）約5㎝四方のタイル状のものを使用したと考えられるもの（312）があり、その他のものは目当は残っていない。

（5）　鉢（第79図、第84図）　鉢は口縁部が立ち上る深鉢形のもの（317、318）と、口縁部が玉縁状になる平鉢形のもの（350～353）とがある。318は鉄絵である。350～353は重量が軽い。

（6）　壷（第82図、第83図、第84図）　壷には有頸のもの（354、355）と無頸のものがある。有頸のものは、肩が張るもの（339）と丸くなったもの（342～344）があり、342、343の文様は、第77図306のそれと同文のものである。無頸の354、355は胎土、色調、重量感がないところの諸特徴は、第84図350～353の平鉢と同様である。

（7）　甕（第85図）　甕には器高の底いもの（356～358）と胴部が長いもの（359、360）がある。後者は内外面に格子状の叩き痕をナデ消した痕と、胴部に突帯がみられる。

（8）　擂鉢（第80図、第81図）　擂鉢には大別して、Ⅰ、Ⅱ種ある。Ⅰ類は底部を箸司底様に削り出したもので、絵唐津皿ⅠA類や無文の皿ⅠA類の中にある器形を大形化したと思わせるものである。Ⅱ類は、Ⅰ類に比較すると焼成の良好なものである。口縁部の形には、単純なもの（327）、内側に折りかえしたようなもの（324）、外面が突帯状となるもの（325、326）がある。このうち、324と326は底部全面に回転糸切痕を残し未調整である。

（9）　徳利（第82図）　徳利には最大径が胴部中央よりやや下方にあるもの（330～333）とあまり胴部の張らないもの（334、335）がある。330は小形で、底部に焼成後の小孔がある。

(10)　その他の唐津系陶器（第82図、第83図）　以上の各唐津系陶器他に次のようなものがある。片口には施釉のもの（346、347）と無釉のもの（348）がある。336と、349は香炉形で内面は無釉。340は茶入れ、338は向付であろう。337は蓋、341は高坏形のものである。また、345は把手のついた深鉢形の絵唐津である。

参考文献

大橋康二「17世紀における伊万里の窯跡とその製品」――発掘資料を中心として――『17世紀の景徳鎮と伊万里』　佐賀県立九州陶磁文化館　昭和57年10月

大橋康二「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について」――窯詰技法よりみた――『中国史・陶磁史論集』　佐久間重男教授退休記念　昭和58年3月

永竹　威他『日本やきもの集成』11（九州Ⅰ）　昭和55年12月

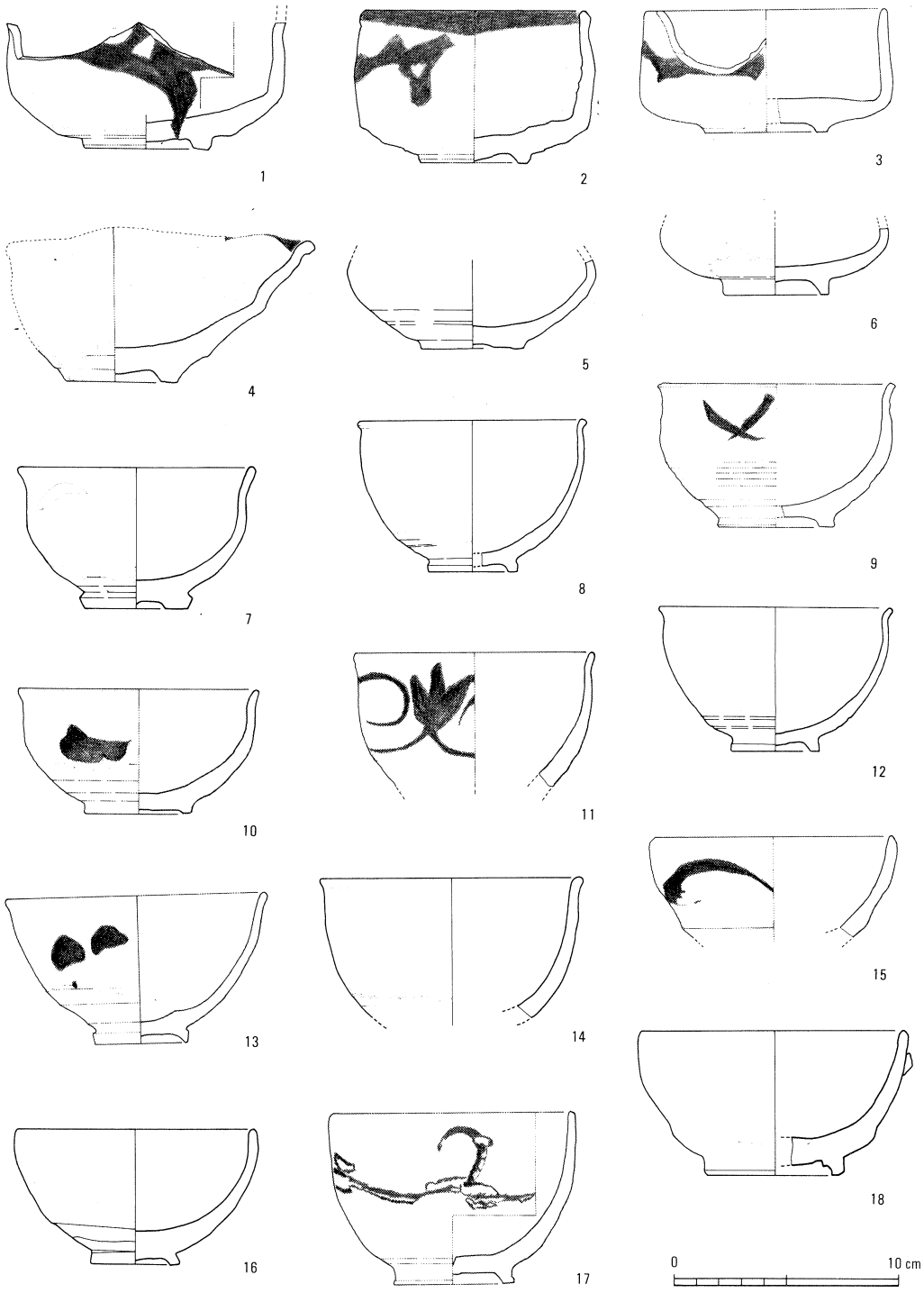
副島邦弘『古高取　永満寺宅間窯跡』　直方市教育委員会　昭和58年3月

佐藤雅彦他「唐津」『日本陶磁全集』　昭和51年3月

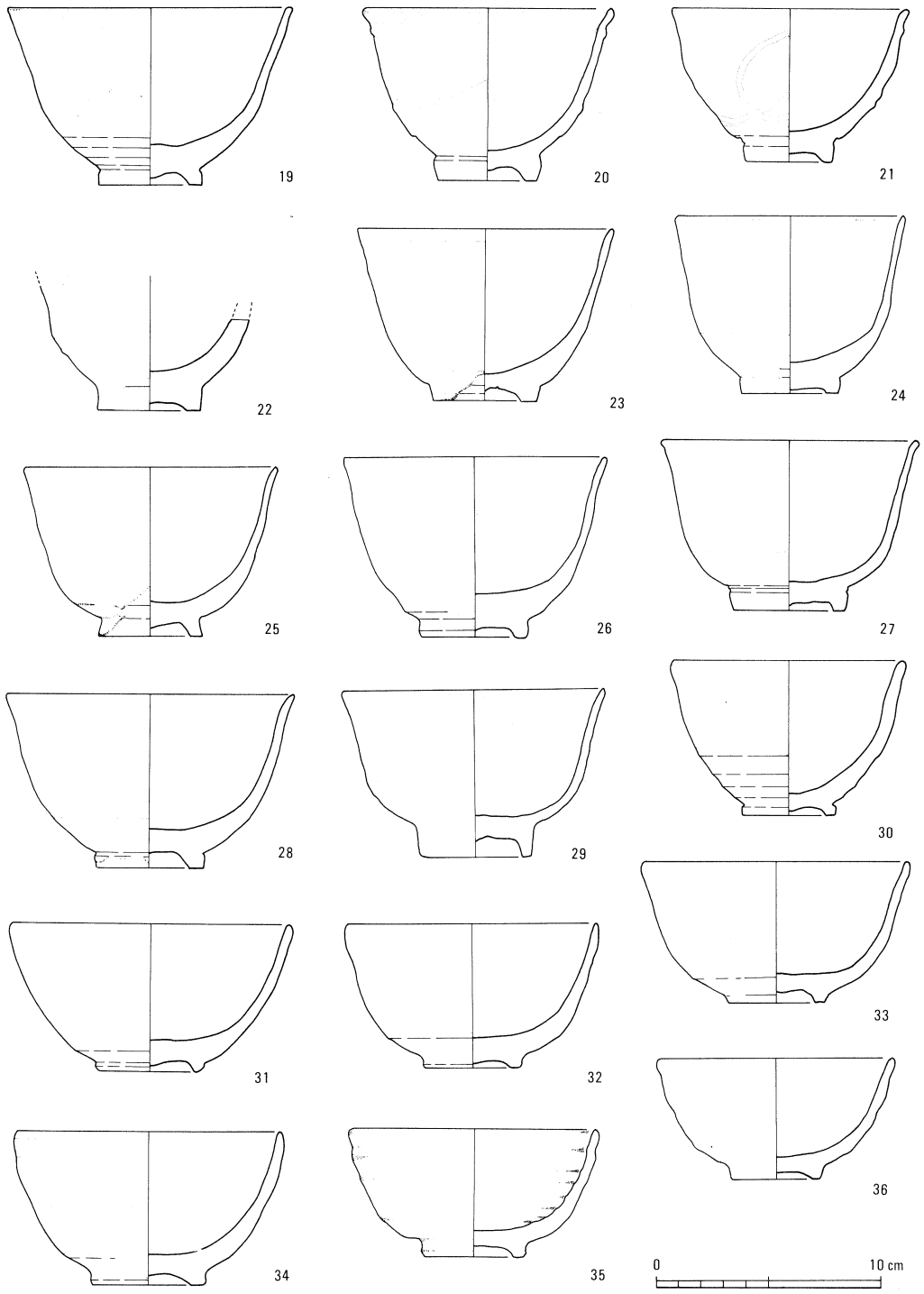
村上　勇、山本　清他『富田川河床遺跡発掘調査報告』　広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団　昭和52年3月

9.　信楽系陶器（第85図、図版50）

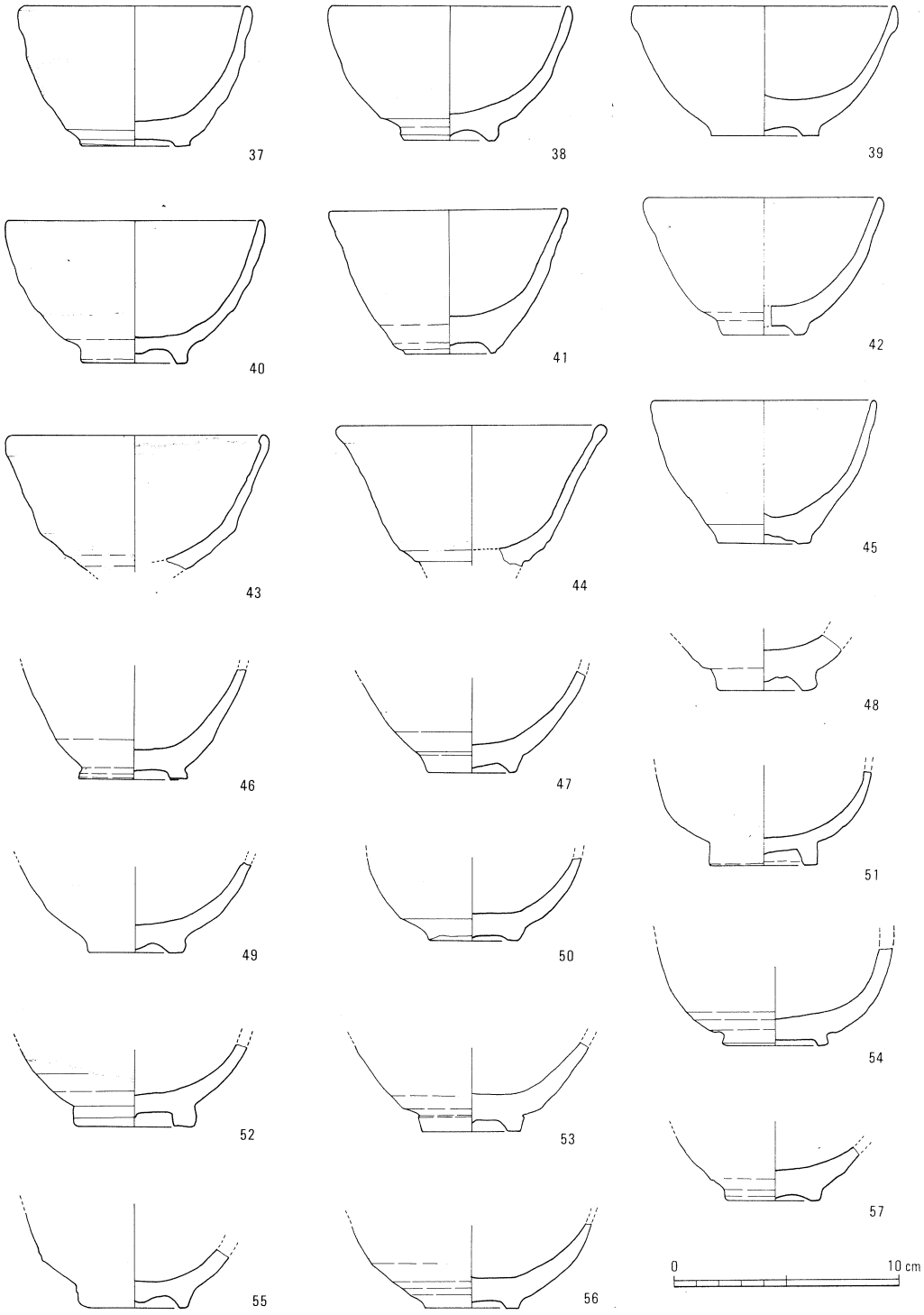
第85図361と362は信楽系陶器と考えられるものである。361、362とも擂鉢である。胎土にはやや粗い砂粒を含み、もろい感じがある。361は口径25.5㎝、器高10.5㎝底部径7.3㎝で口縁は平坦である。362は361に比較すると底部のやや広いものである。これらの資料の他、流砂の中より信楽系陶器の壷と考えられる小片が数個採集されている。富田川河床遺跡出土陶磁のうち信楽系陶器の占める割合は極めて少ない。



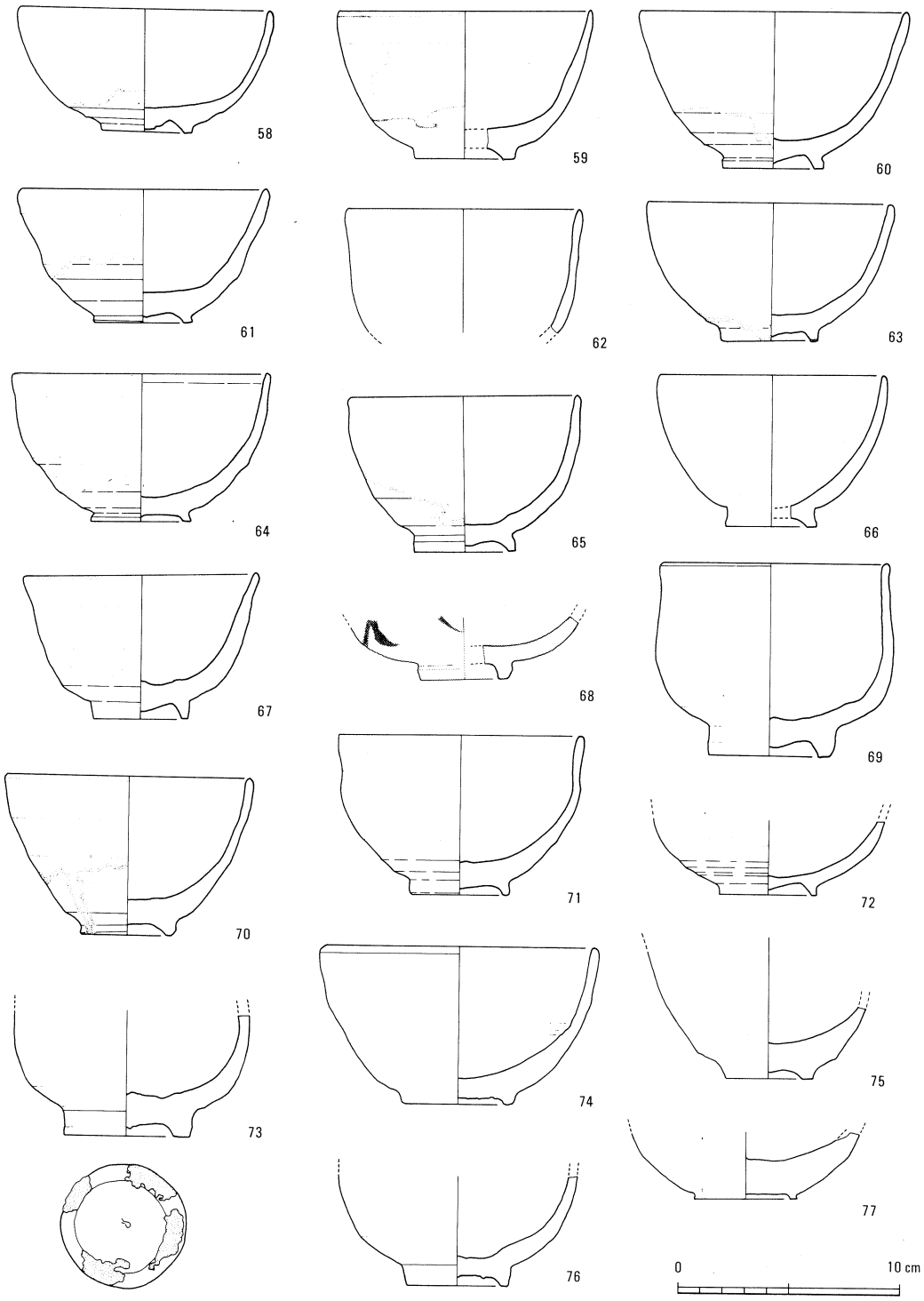
第 53 図　唐津系陶器実測図（1）



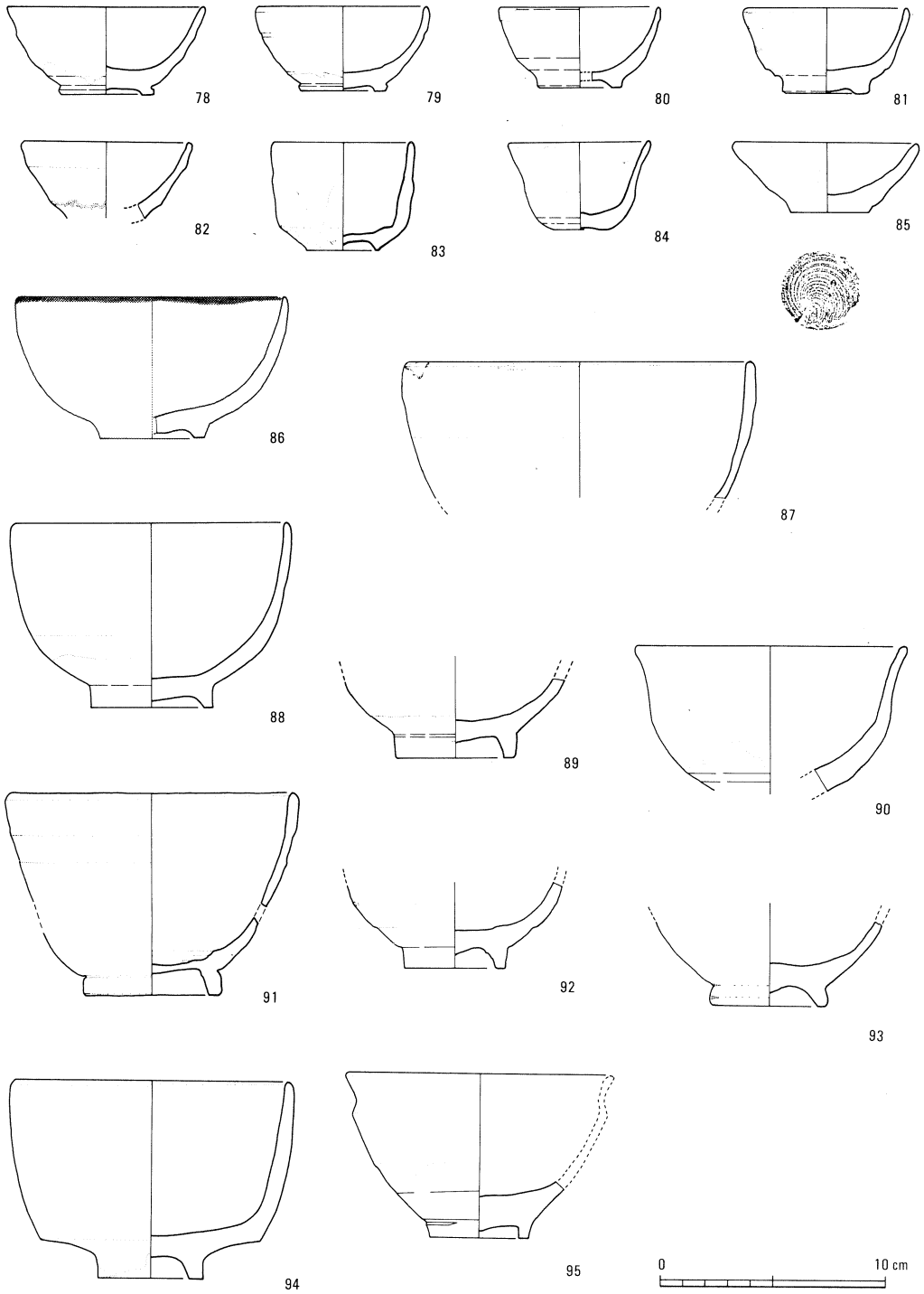
第 54 図　唐津系陶器実測図（2）



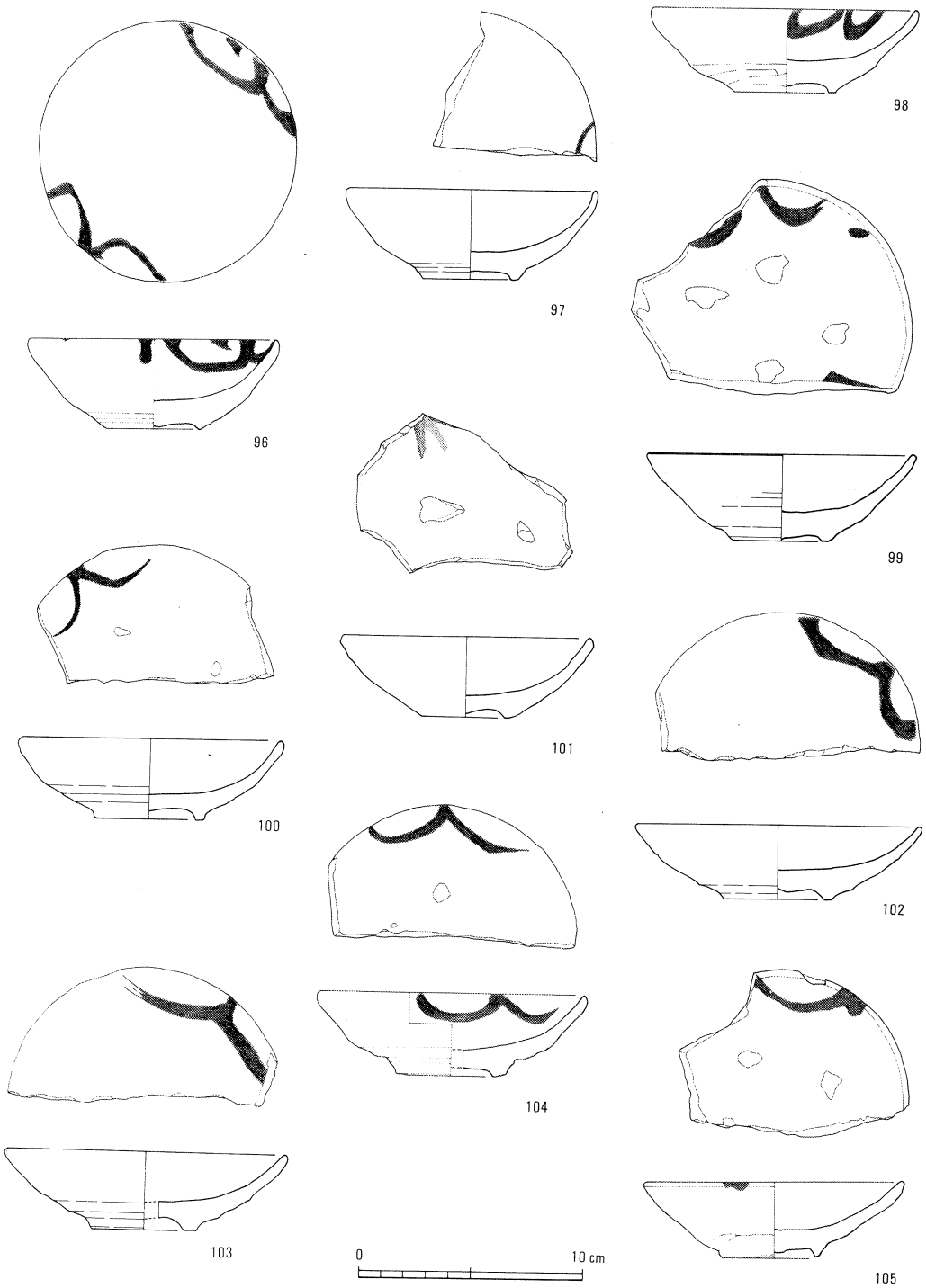
第 55 図　唐津系陶器実測図（3）



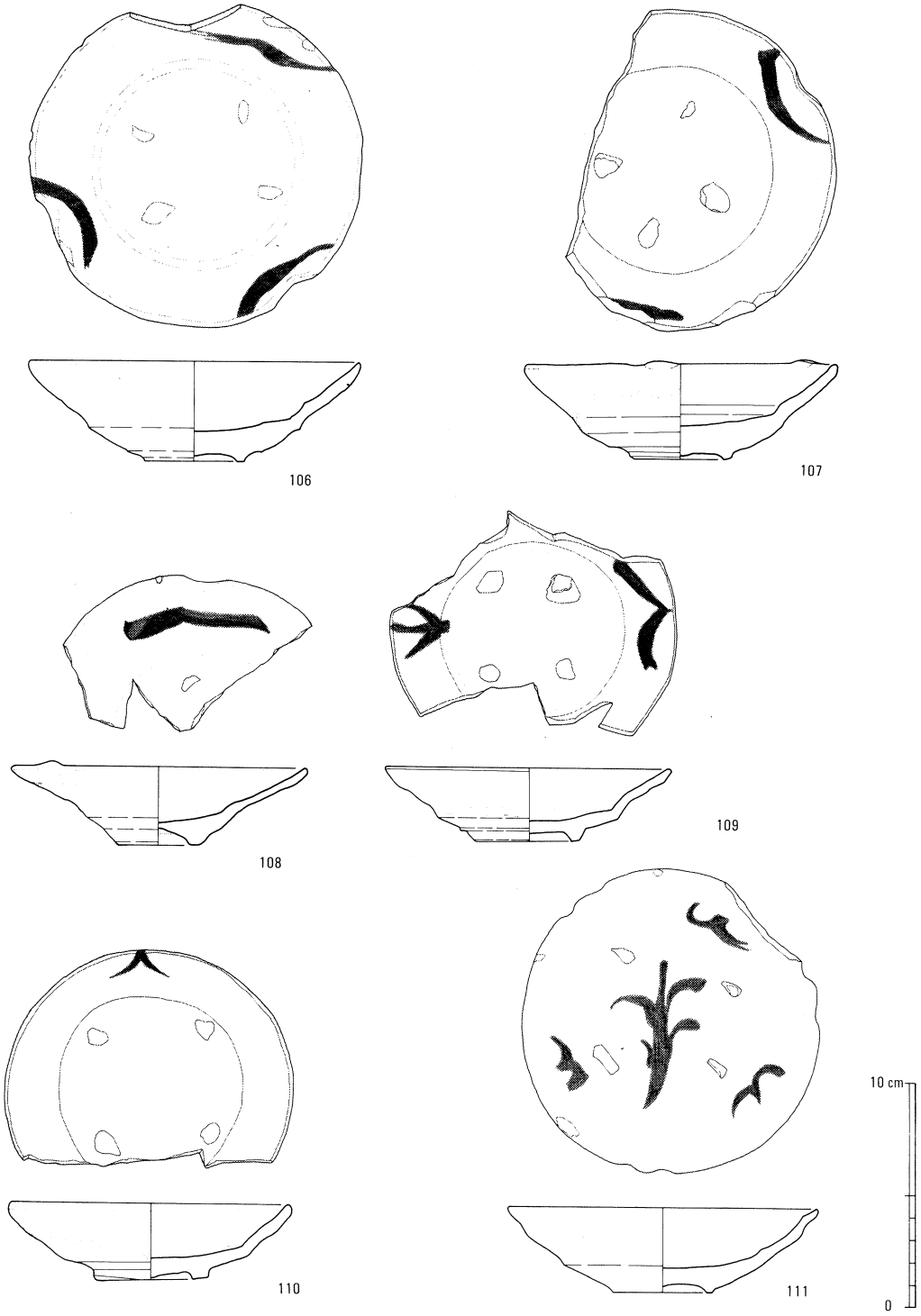
第 56 図　唐津系陶器実測図（4）



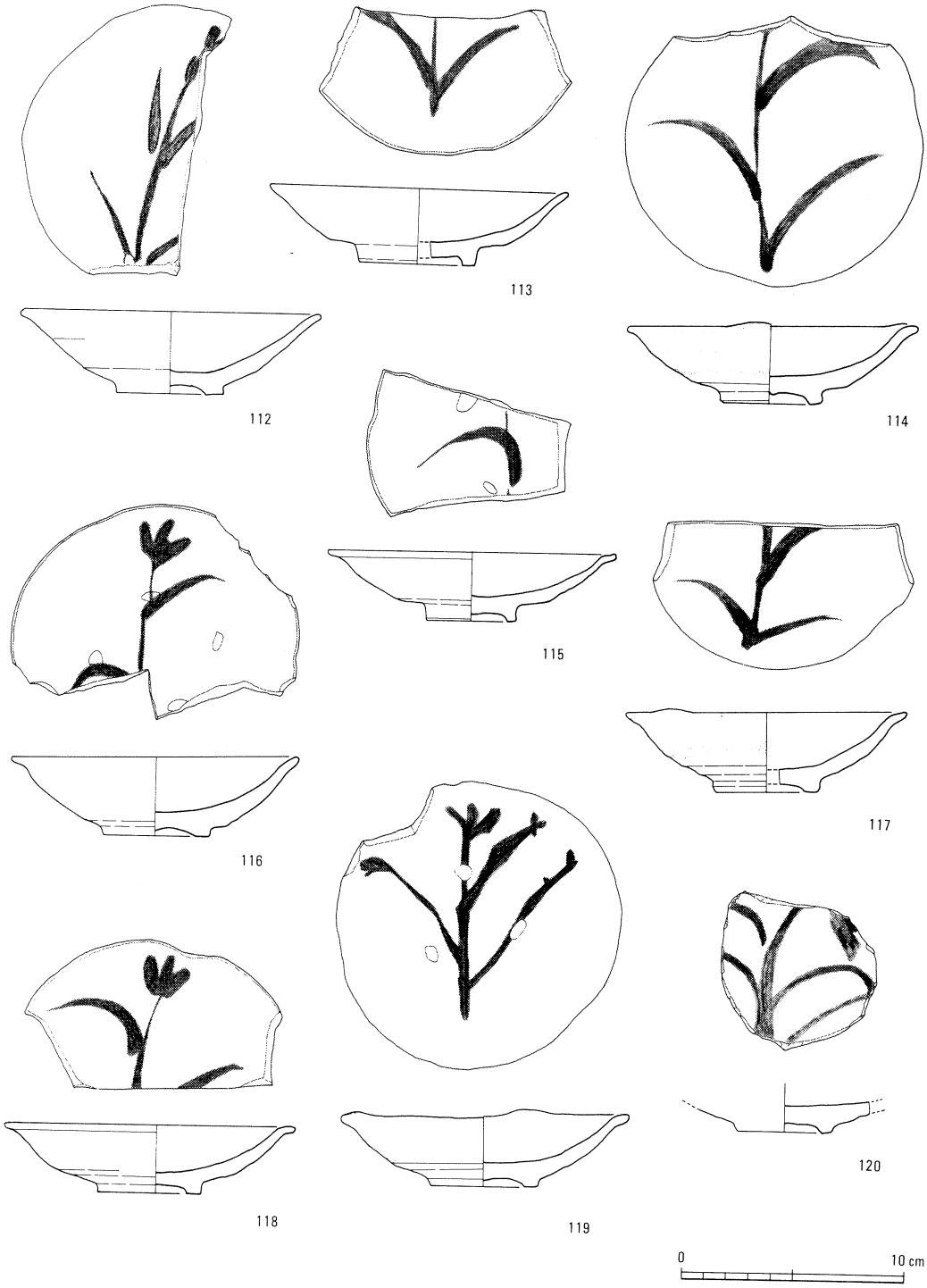
第 57 図　唐津系陶器実測図（5）



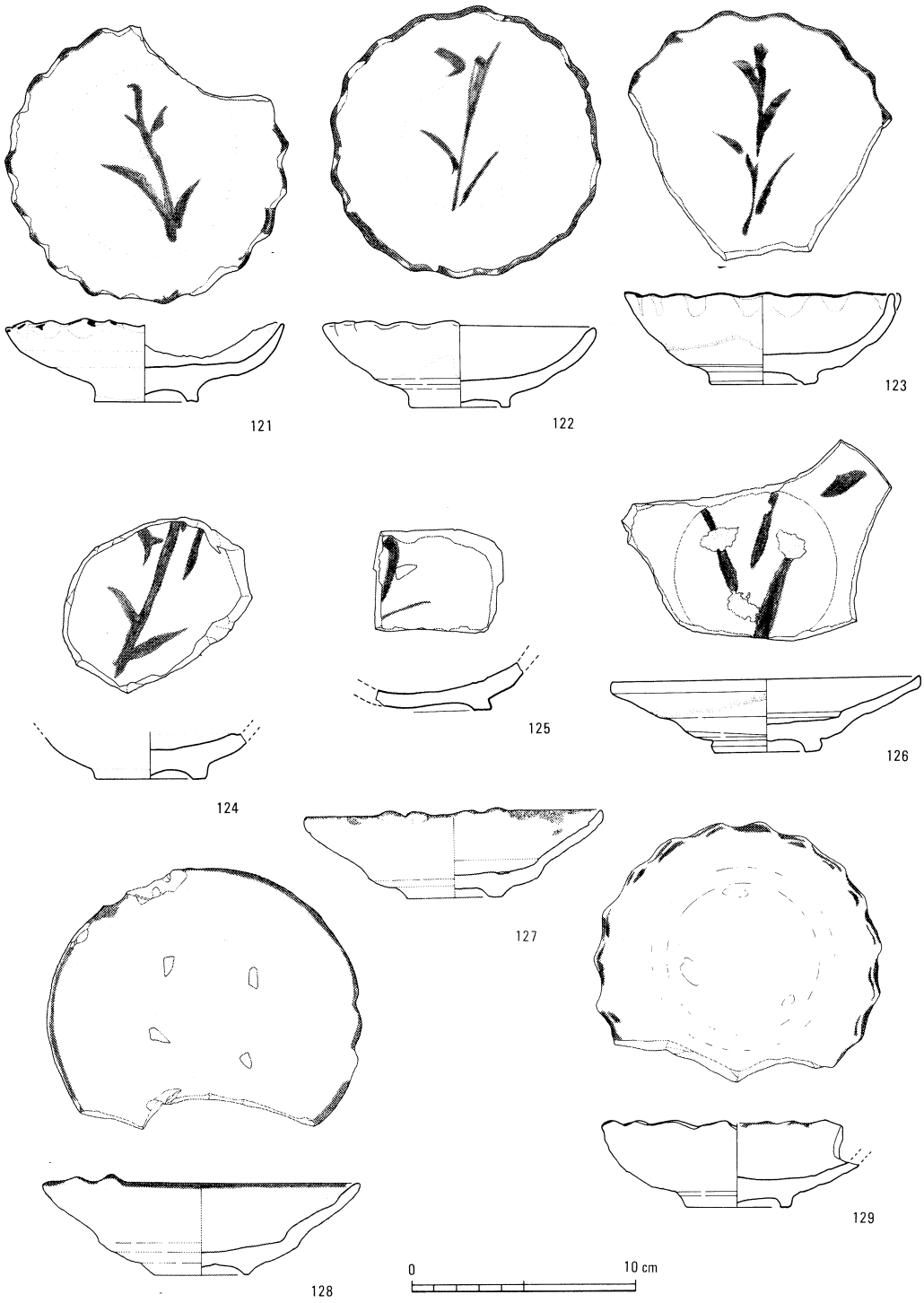
第 58 図　唐津系陶器実測図（6）



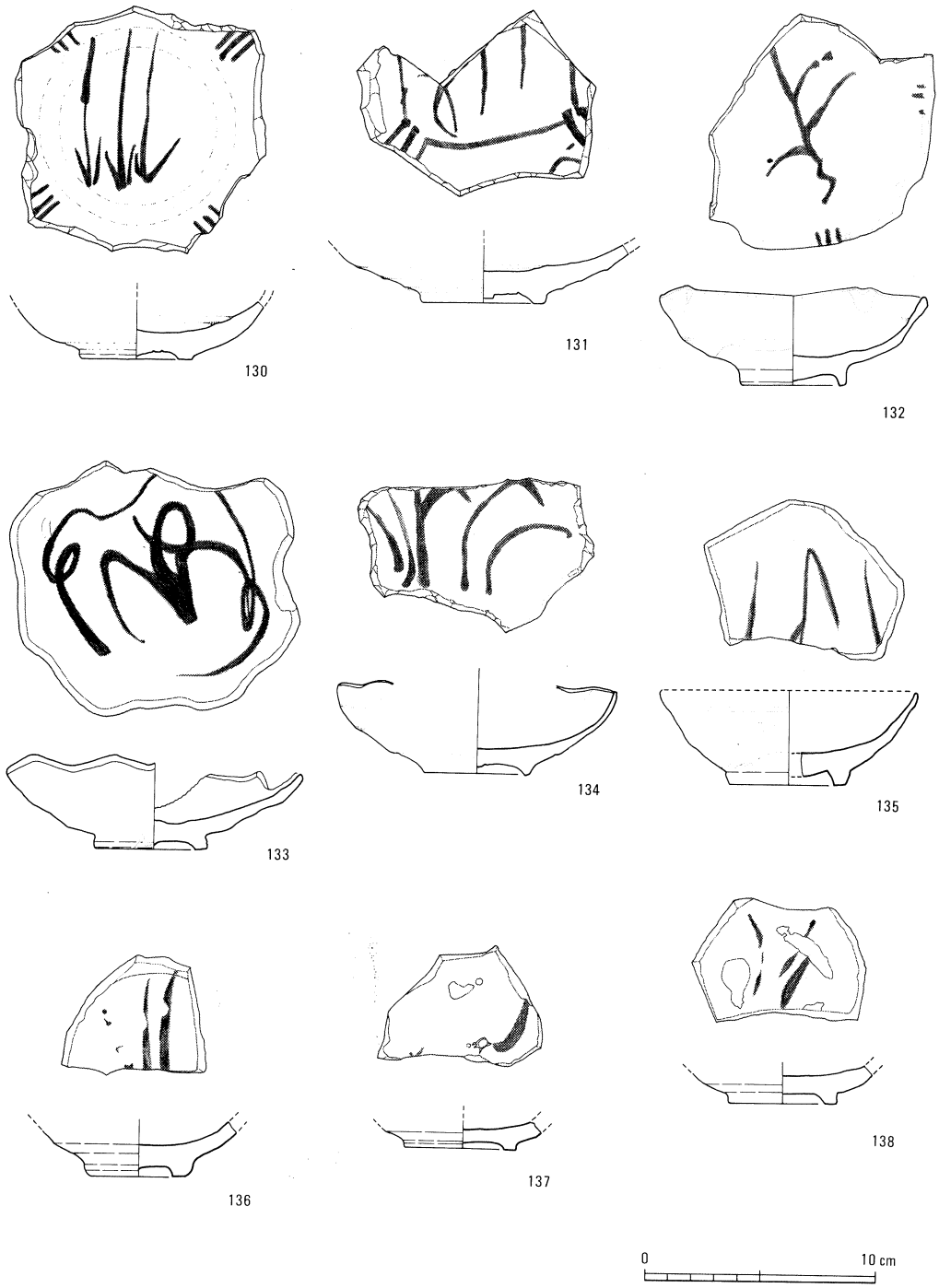
第 59 図　唐津系陶器実測図（7）



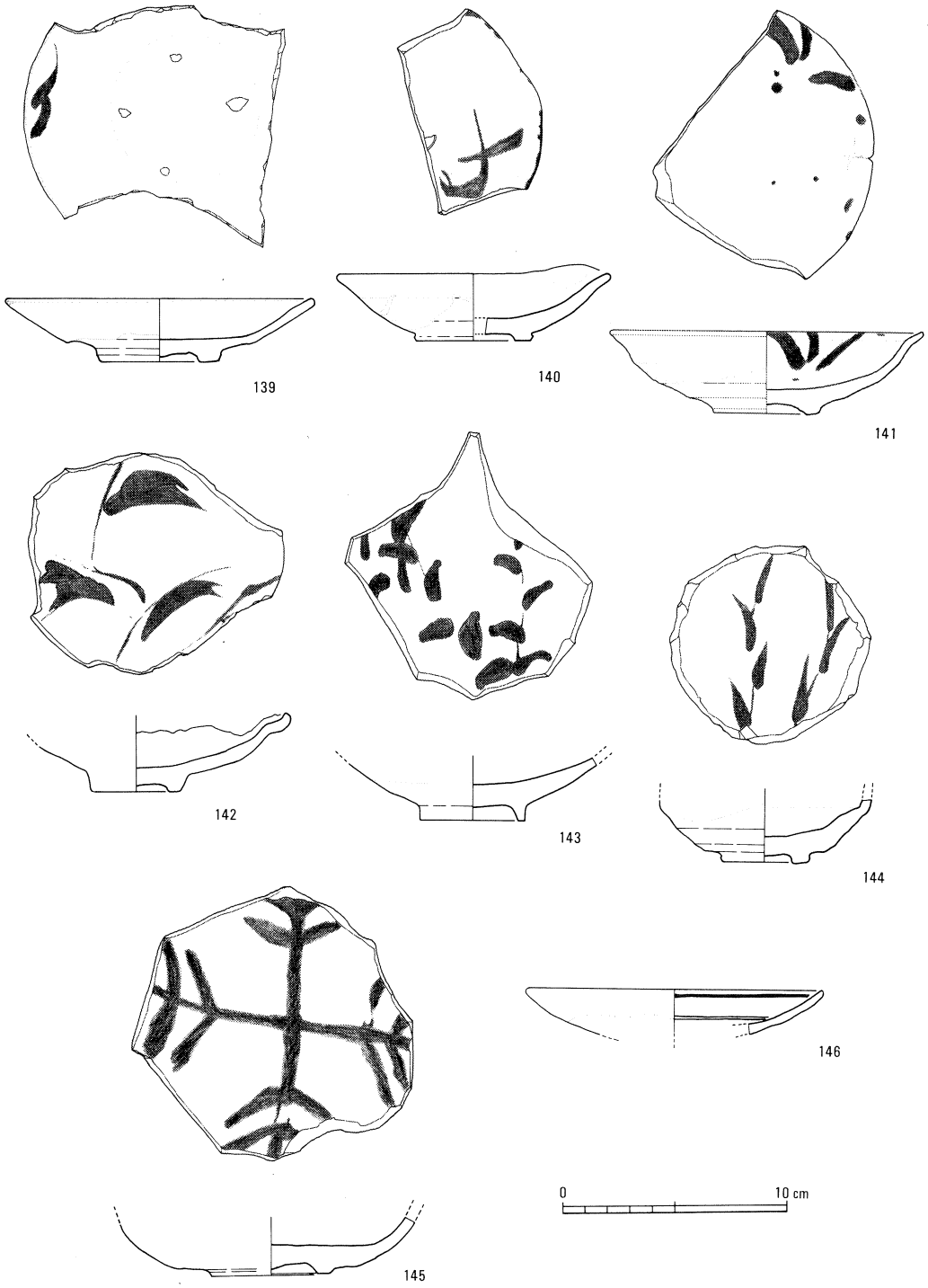
第 60 図　唐津系陶器実測図（8）



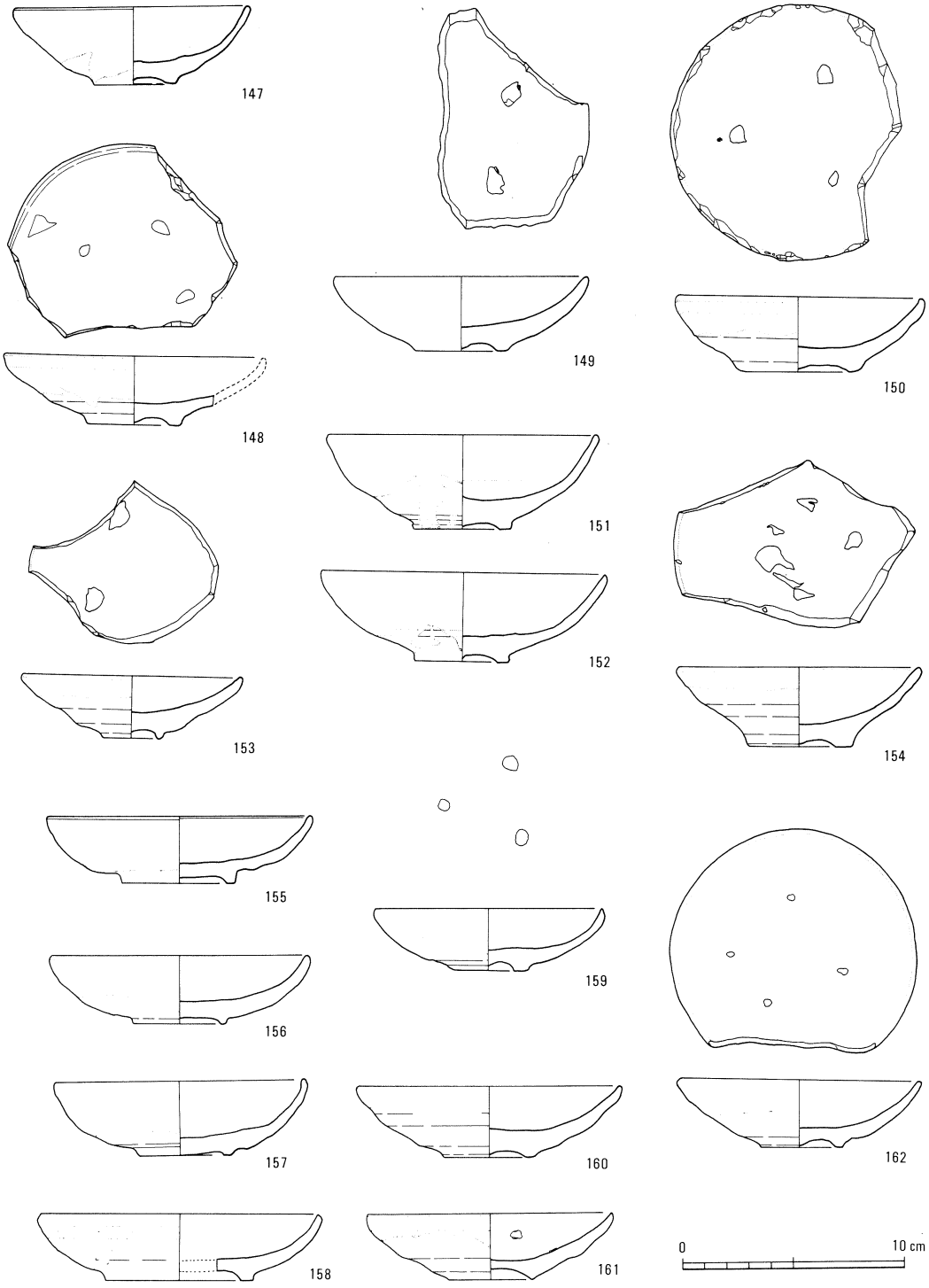
第 61 図　唐津系陶器実測図（9）



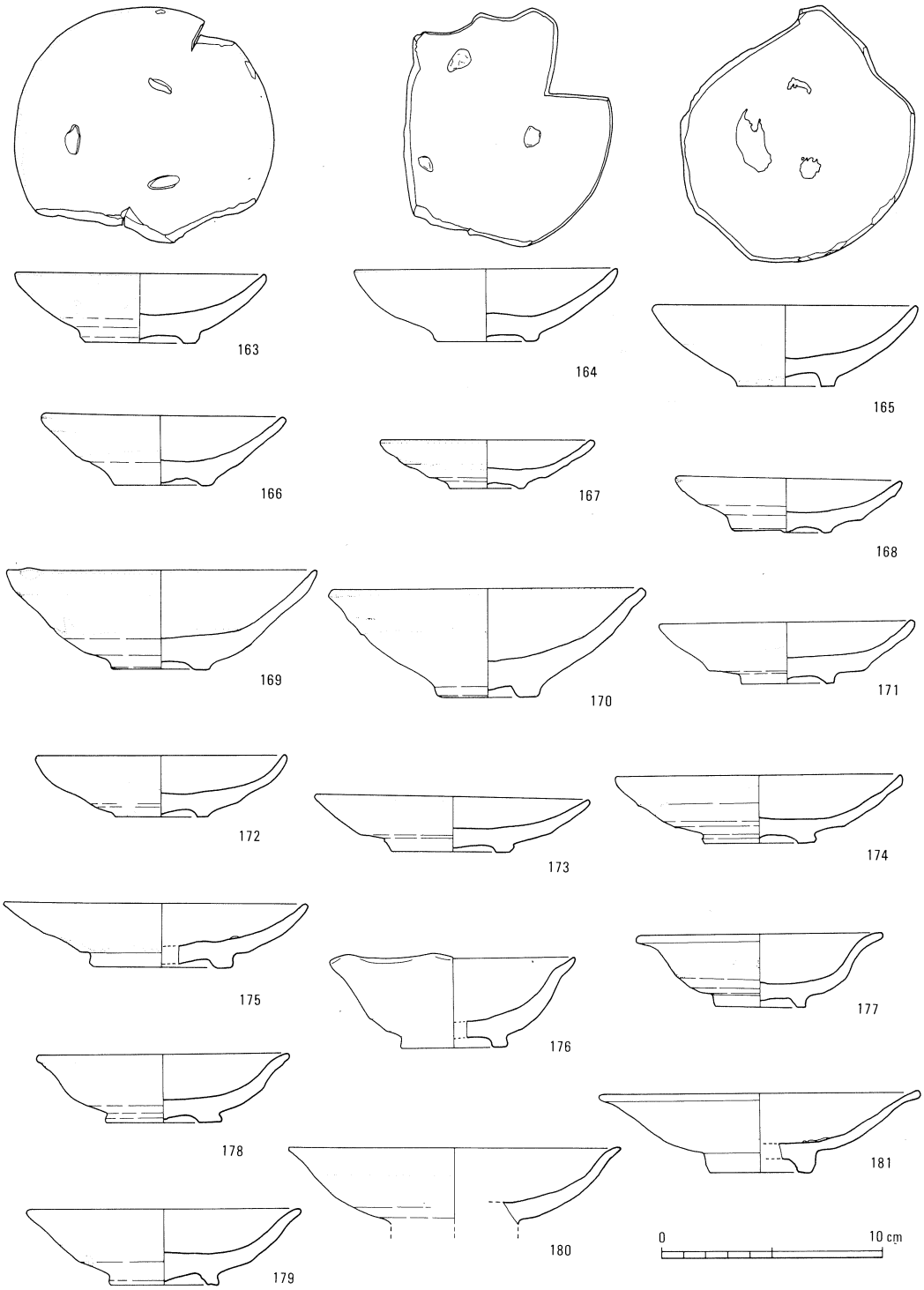
第 62 図　唐津系陶器実測図 (10)



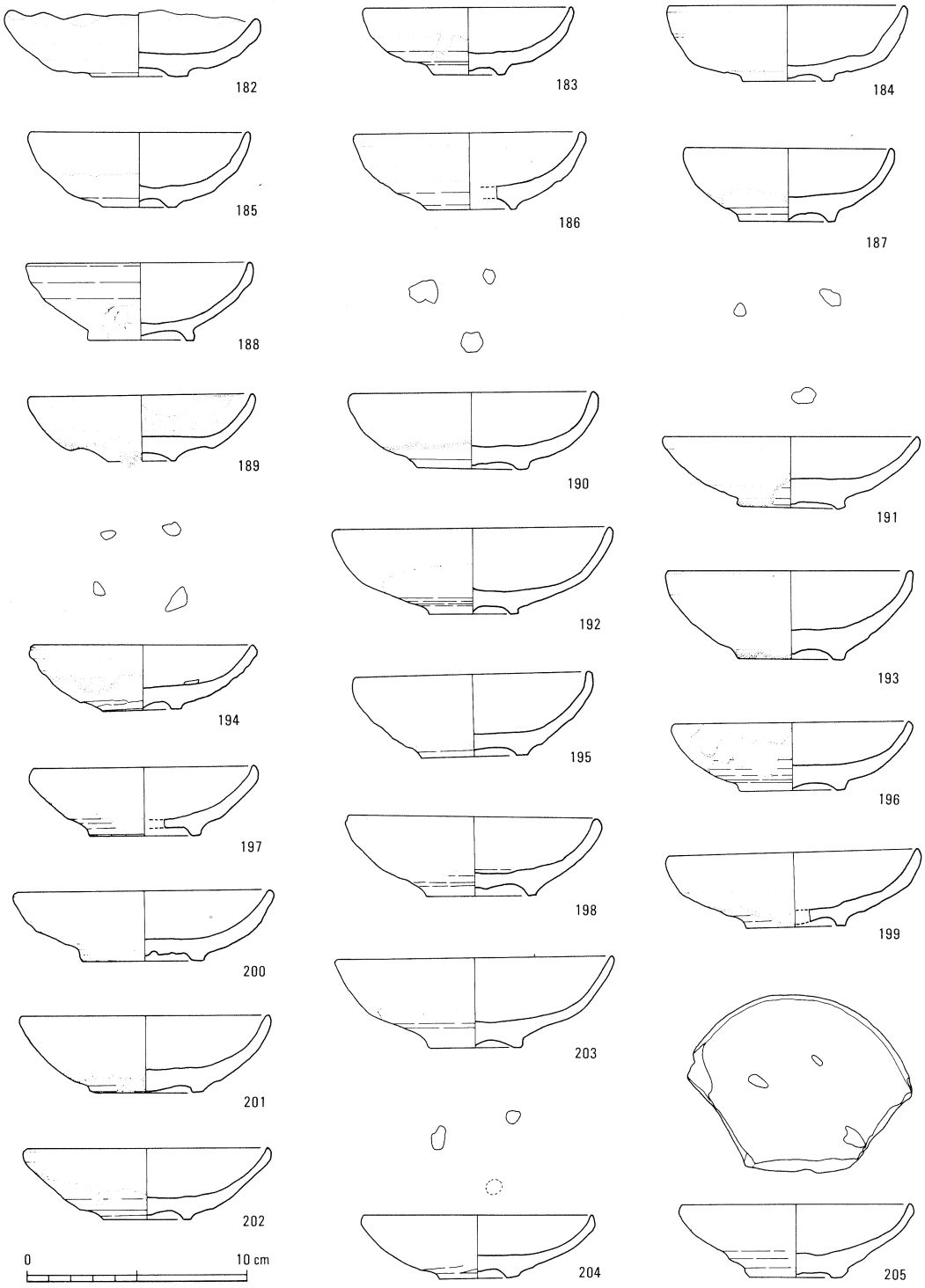
第 63 図　唐津系陶器実測図（11）



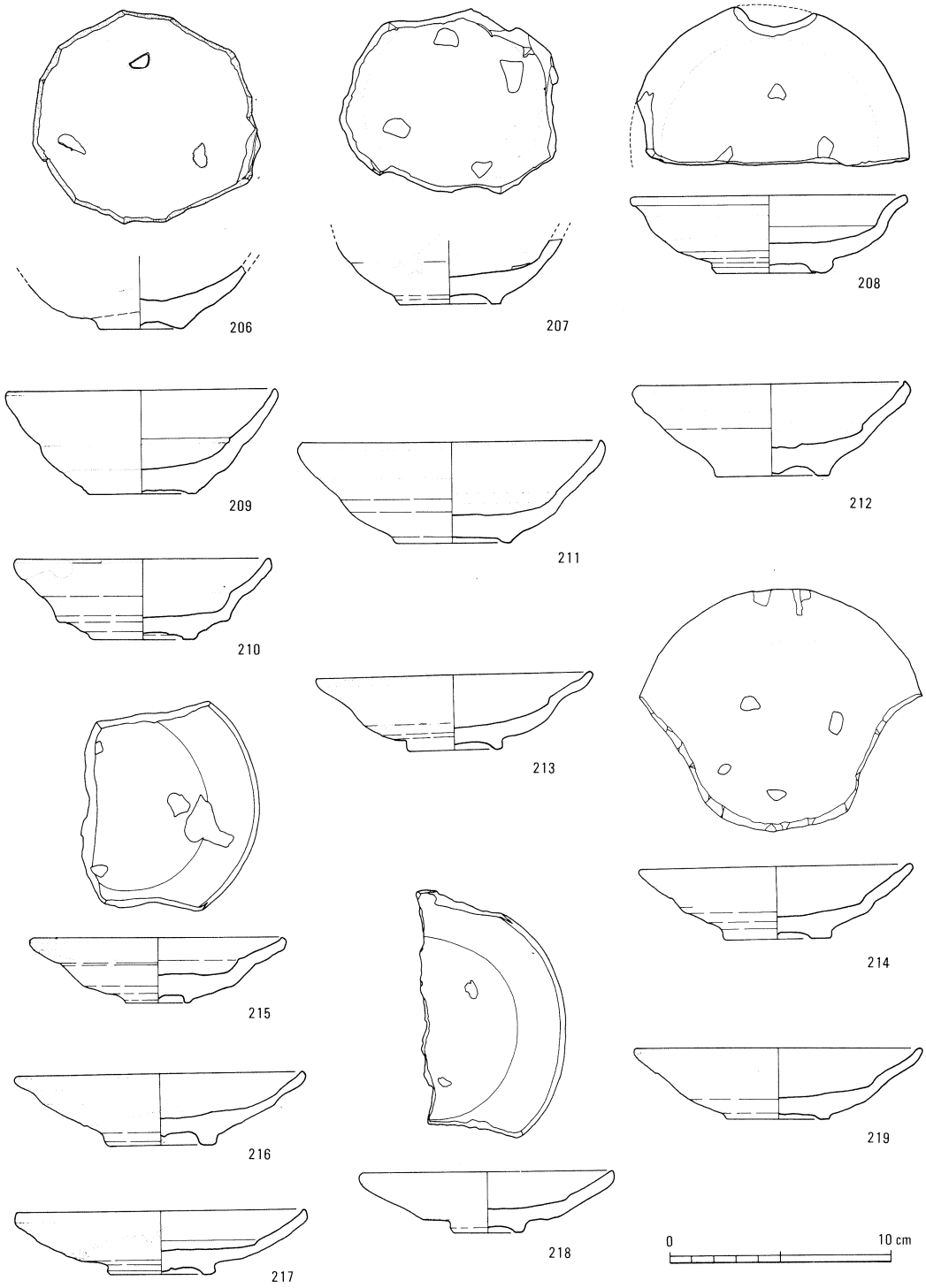
第 64 図　唐津系陶器実測図（12）



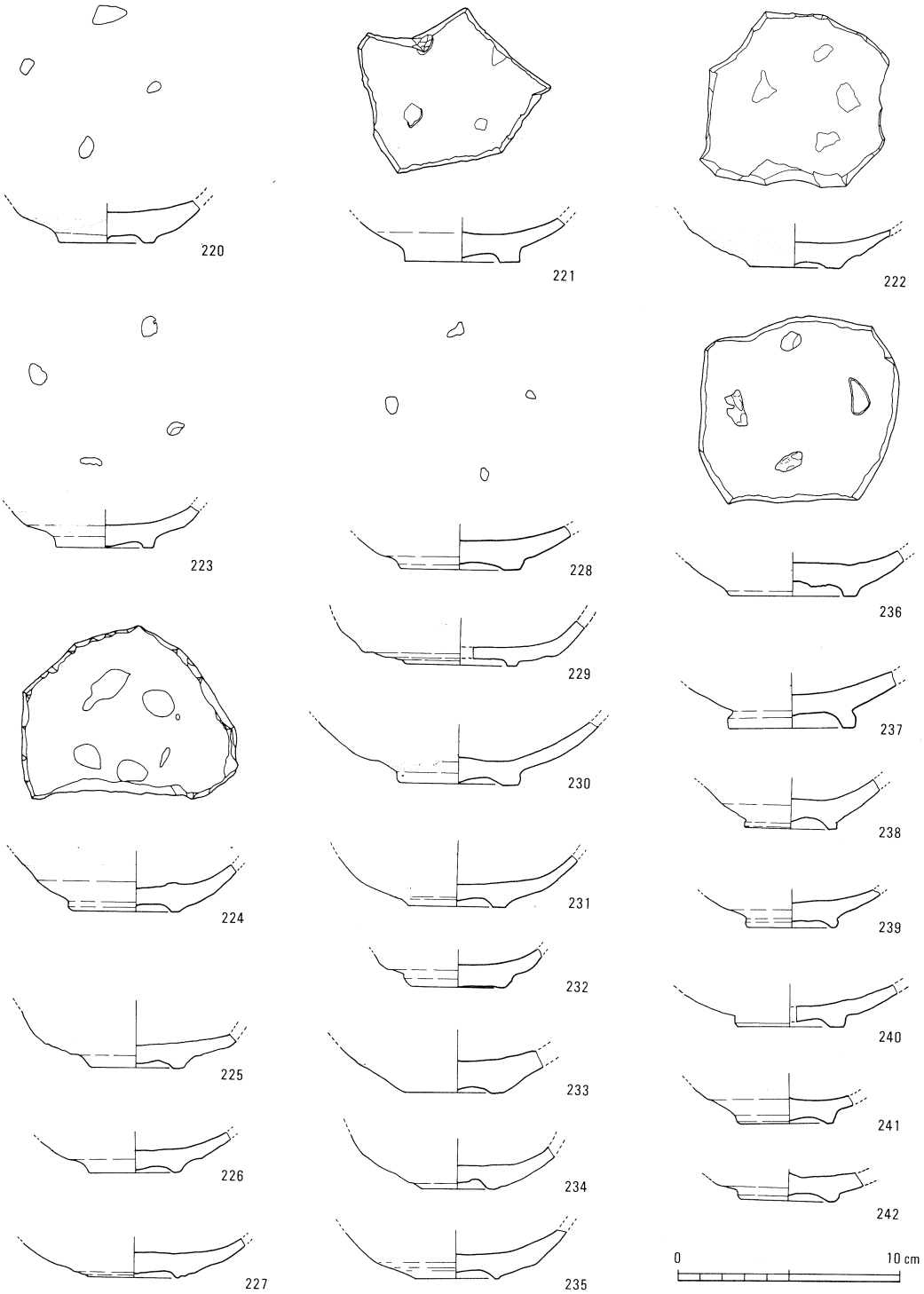
第 65 図　唐津系陶器実測図（13）



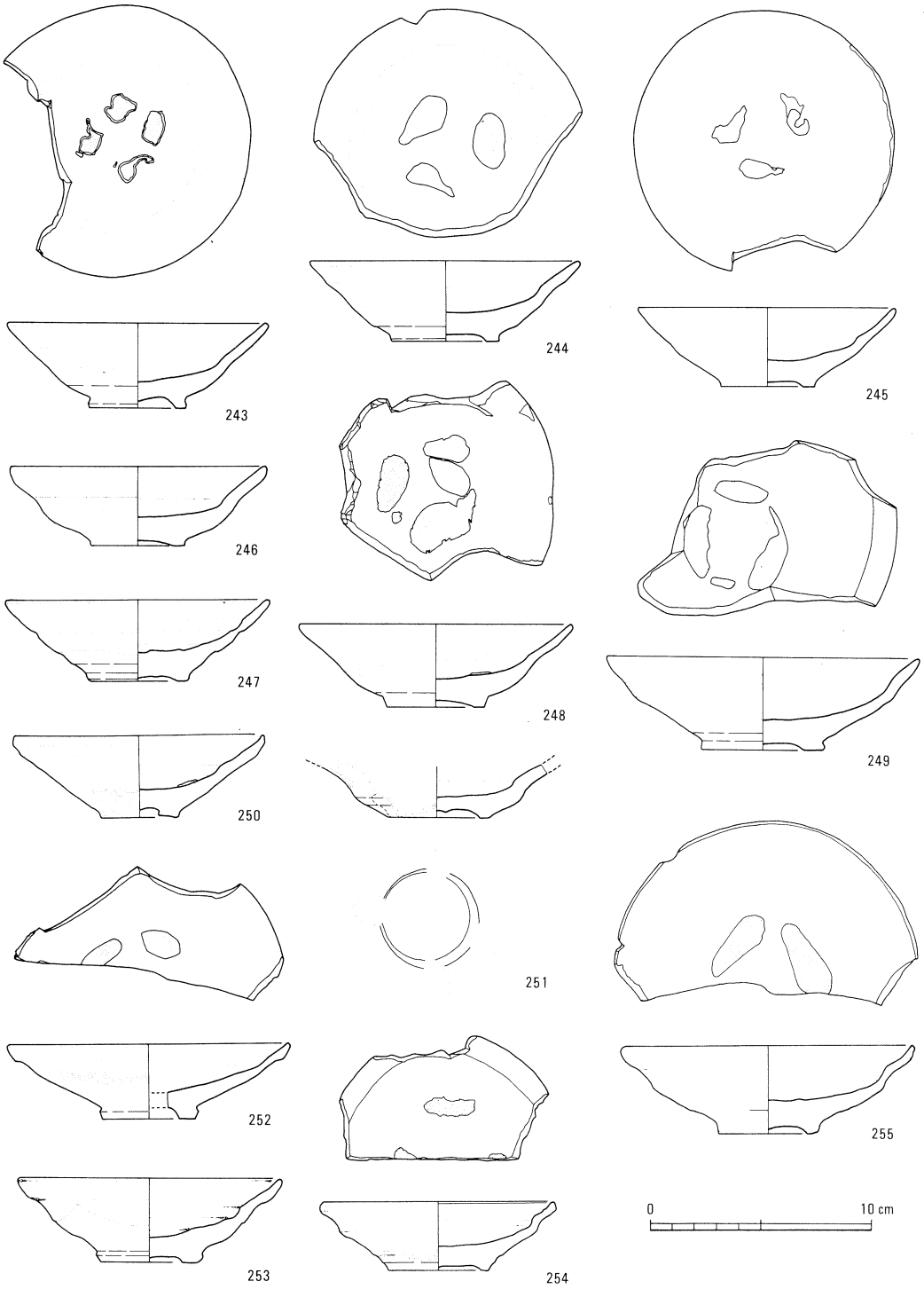
第 66 図　唐津系陶器実測図（14）



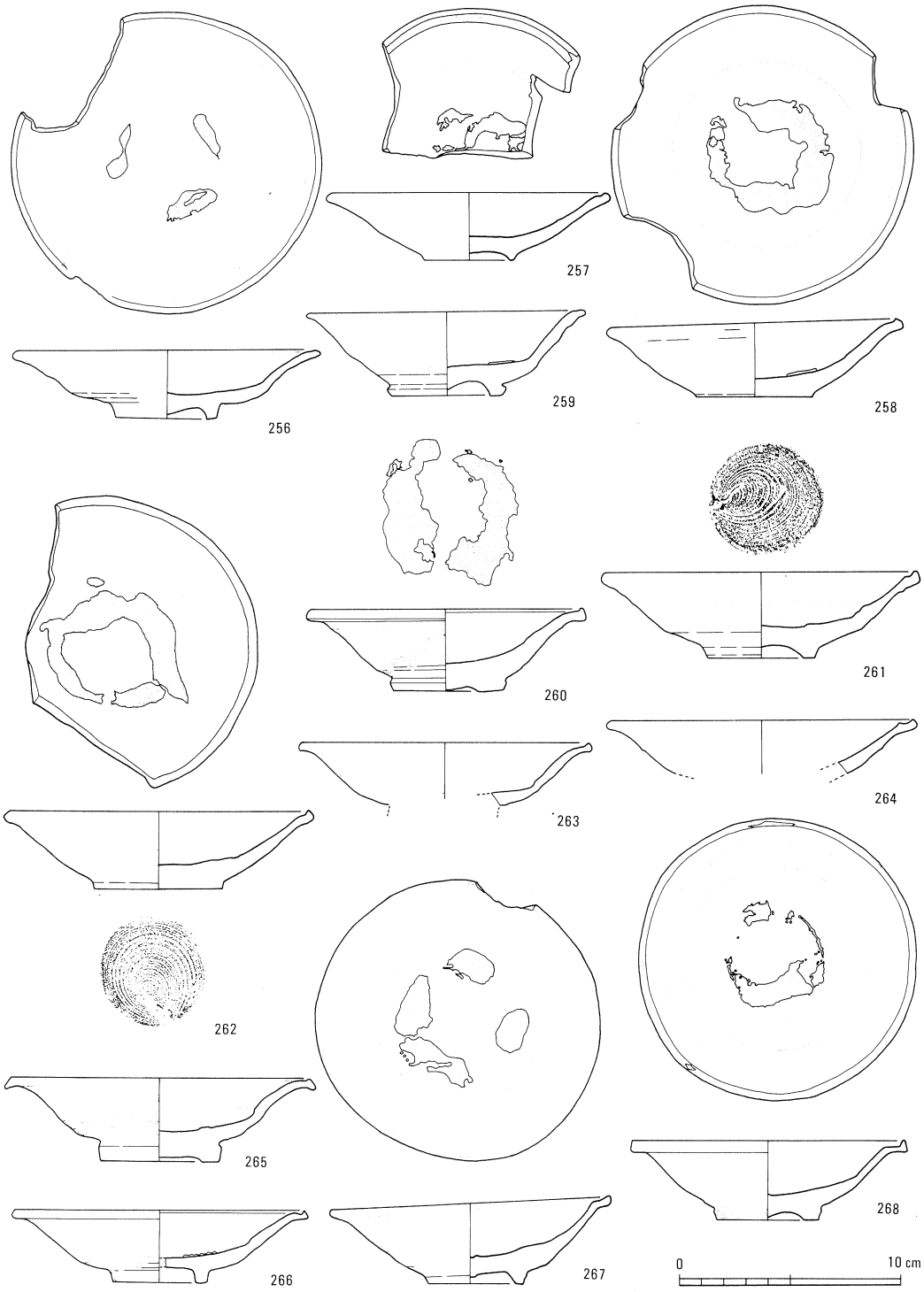
第 67 図　唐津系陶器実測図（15）



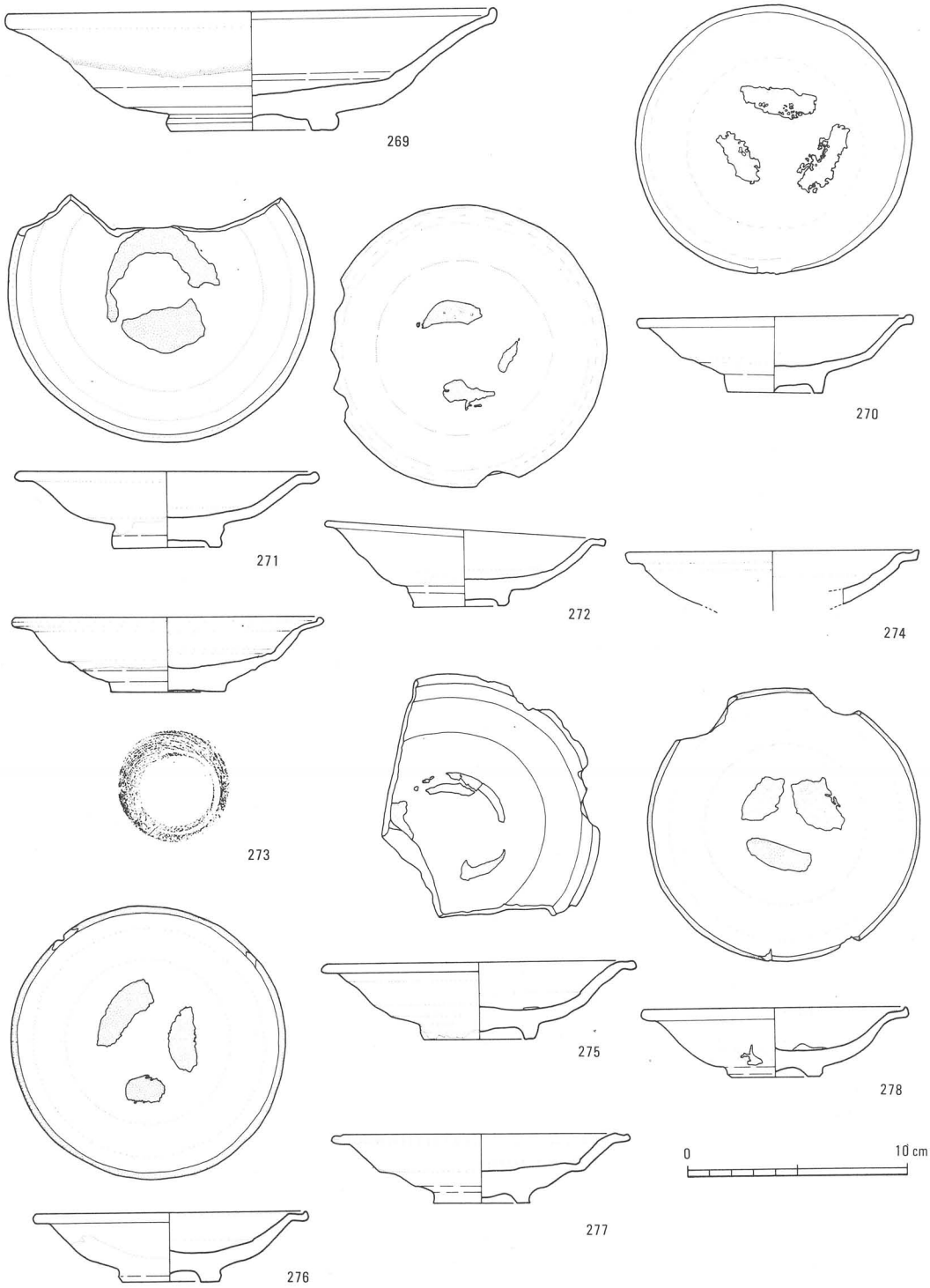
第 68 図　唐津系陶器実測図（16）



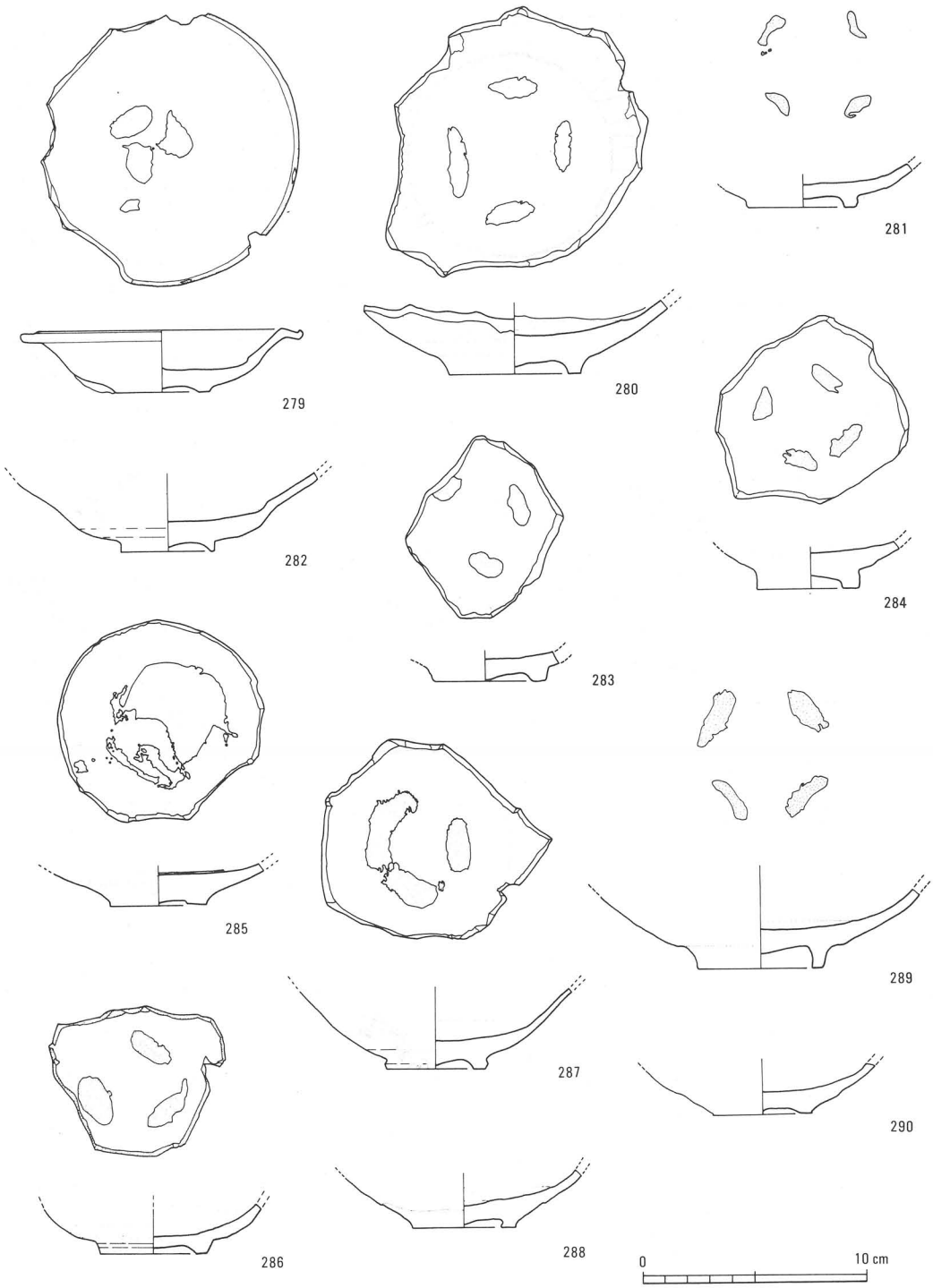
第 69 図　唐津系陶器実測図（17）



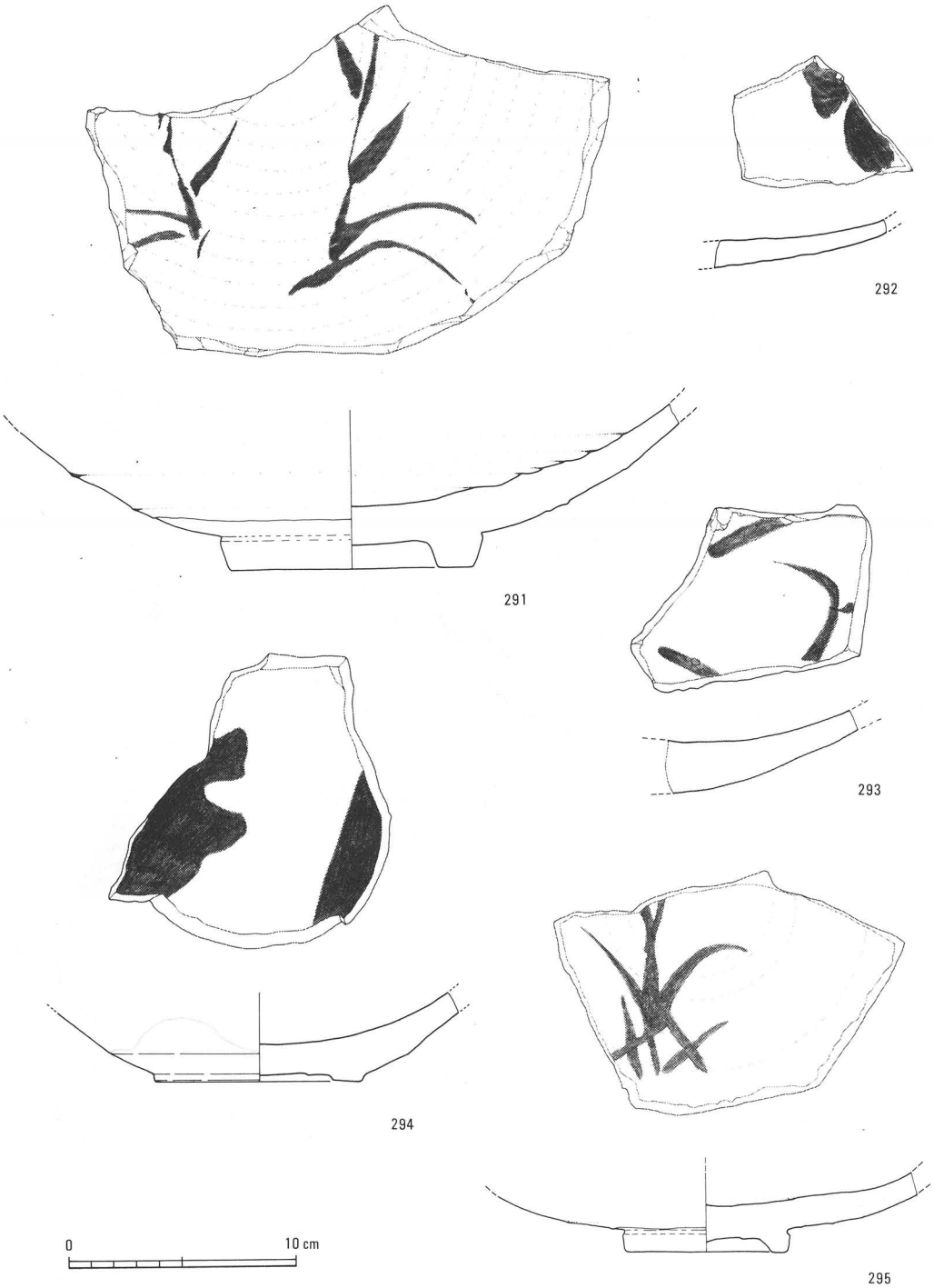
第 70 図　唐津系陶器実測図（18）



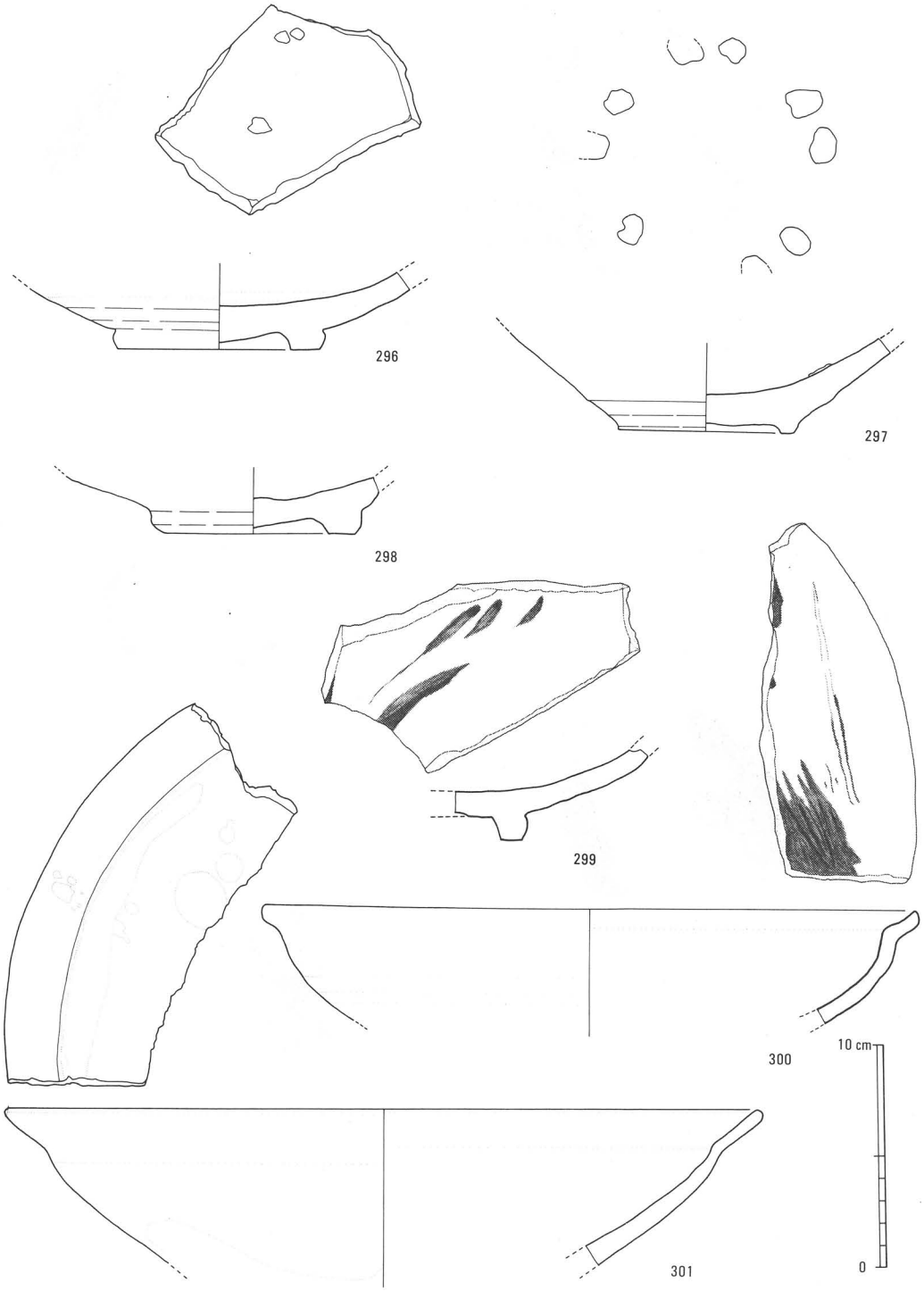
第 71 図　唐津系陶器実測図（19）



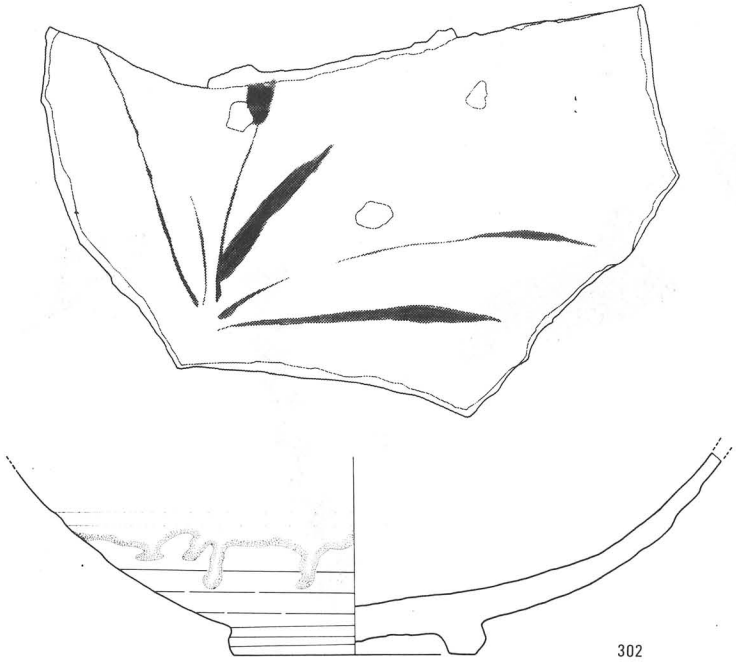
第 72 図　唐津系陶器実測図（20）

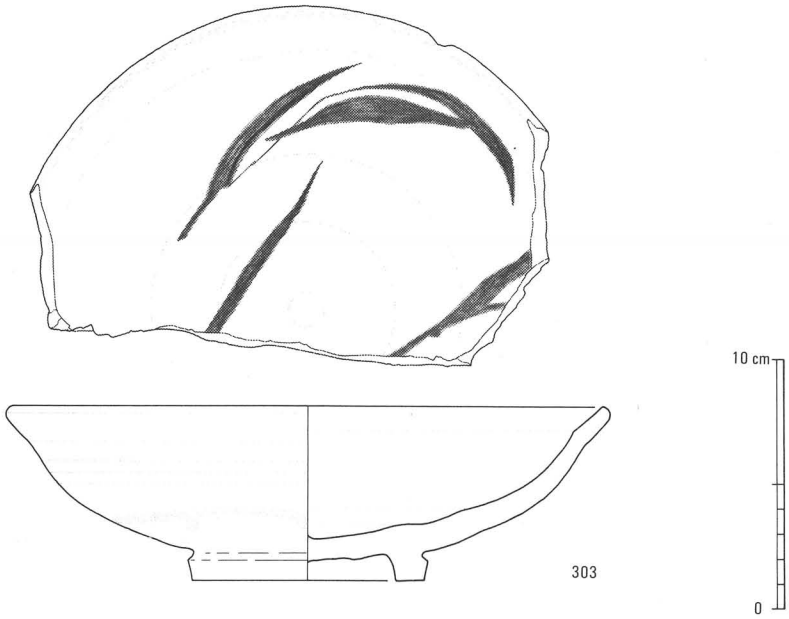


第 73 図　唐津系陶器実測図（21）



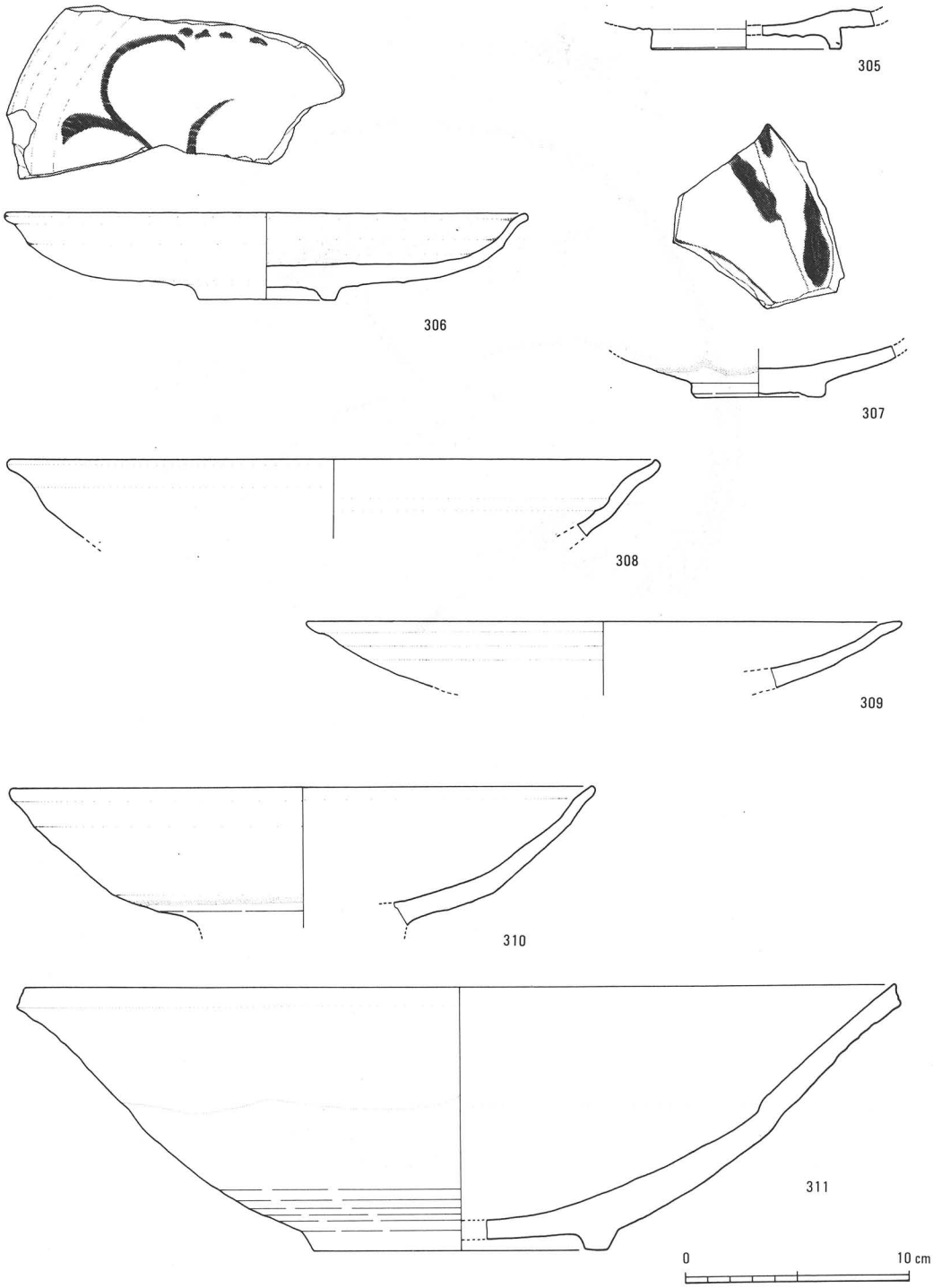
第 74 図　唐津系陶器実測図（22）



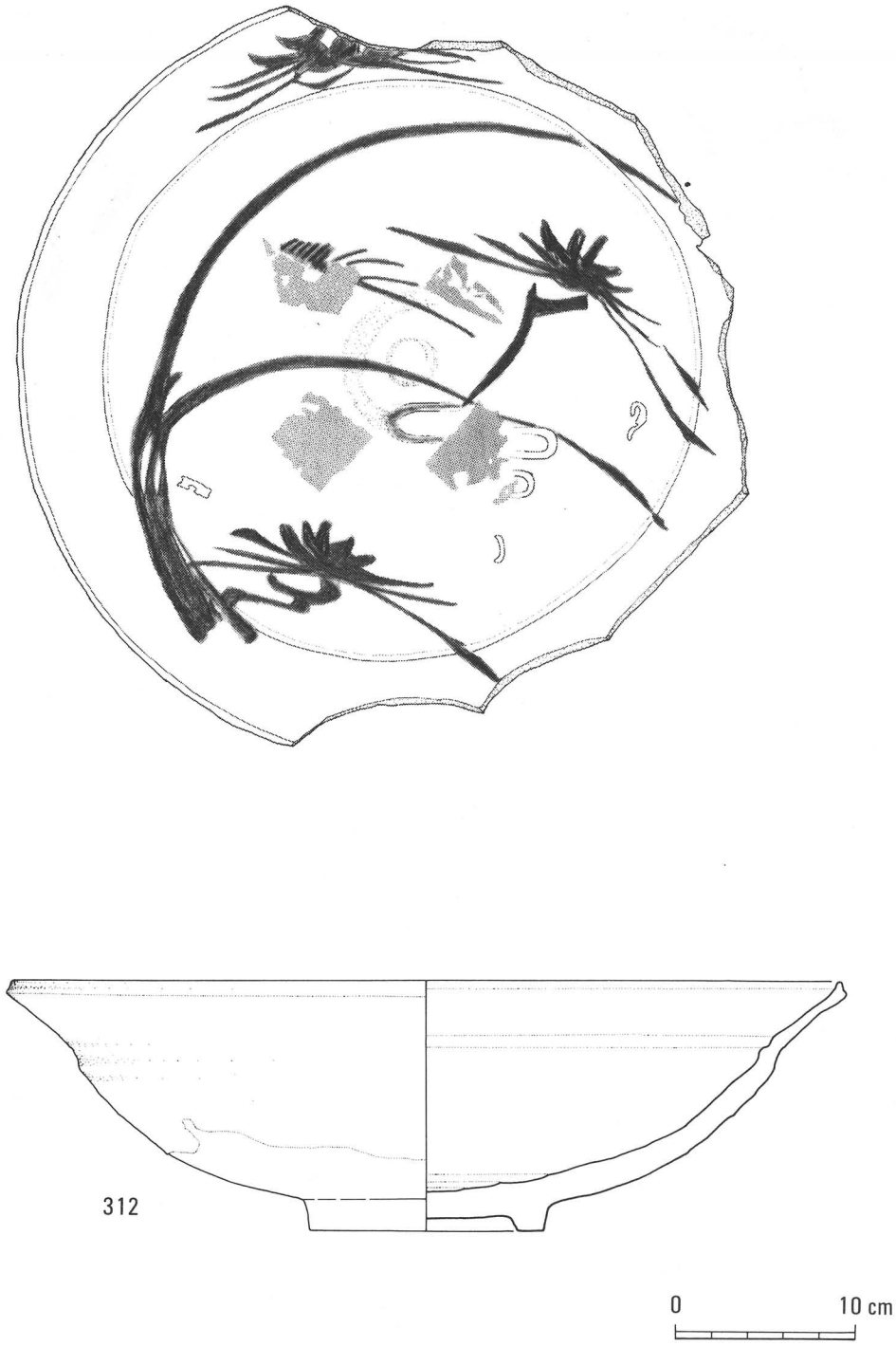


第 75 図　唐津系陶器実測図（23）

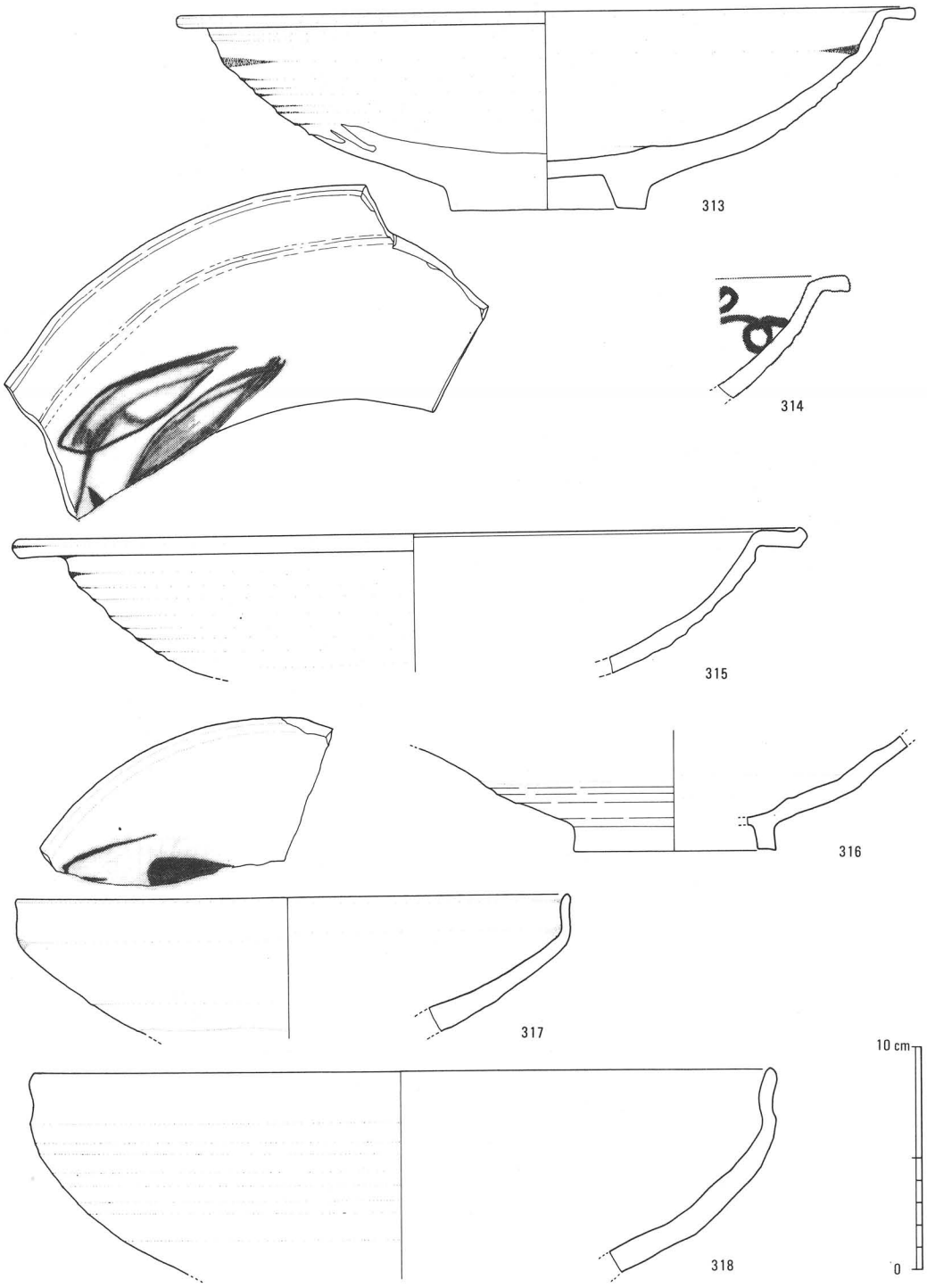
第 76 図　唐津系陶器実測図（24）



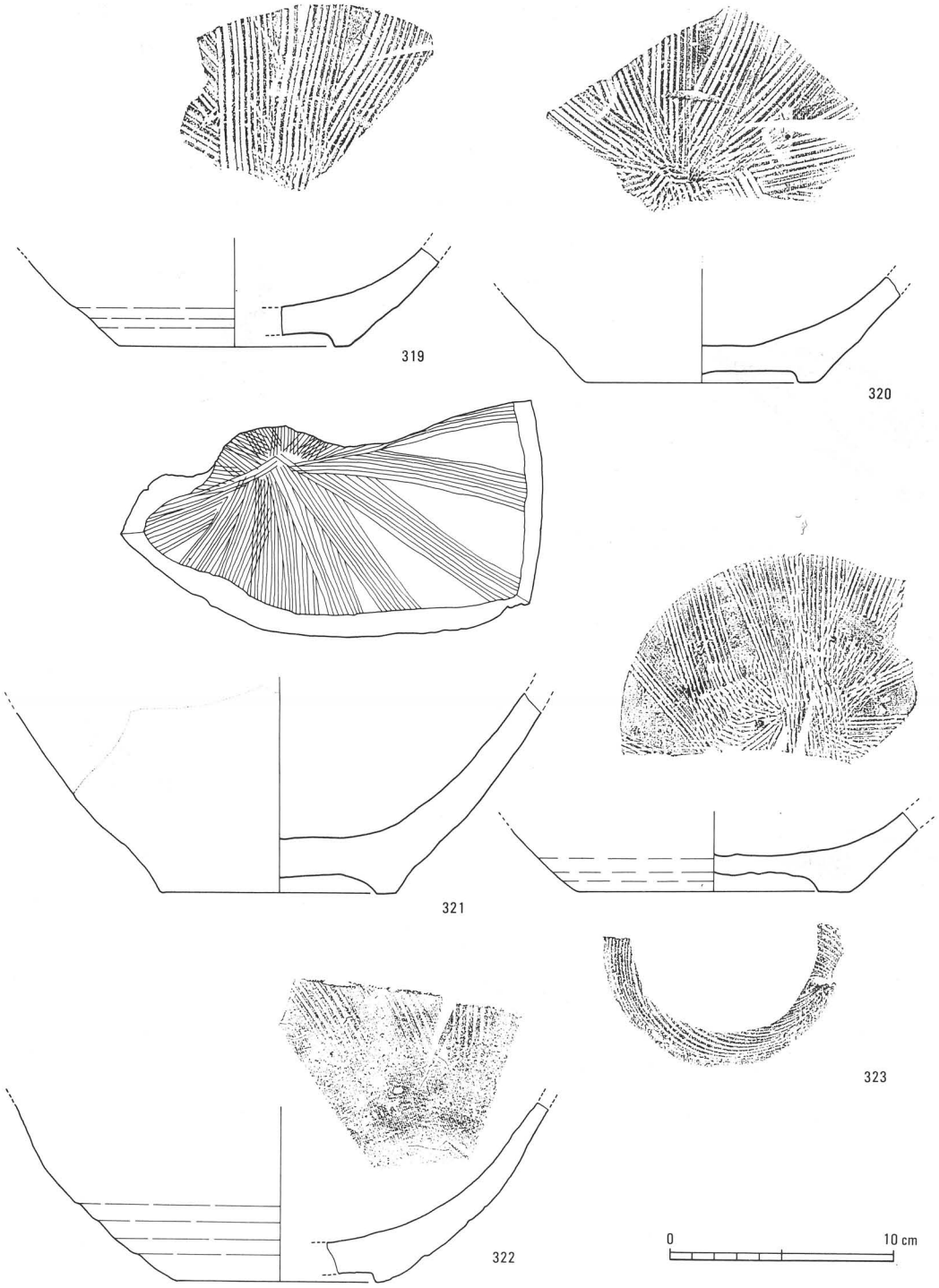
第 77 図　唐津系陶器実測図（25）



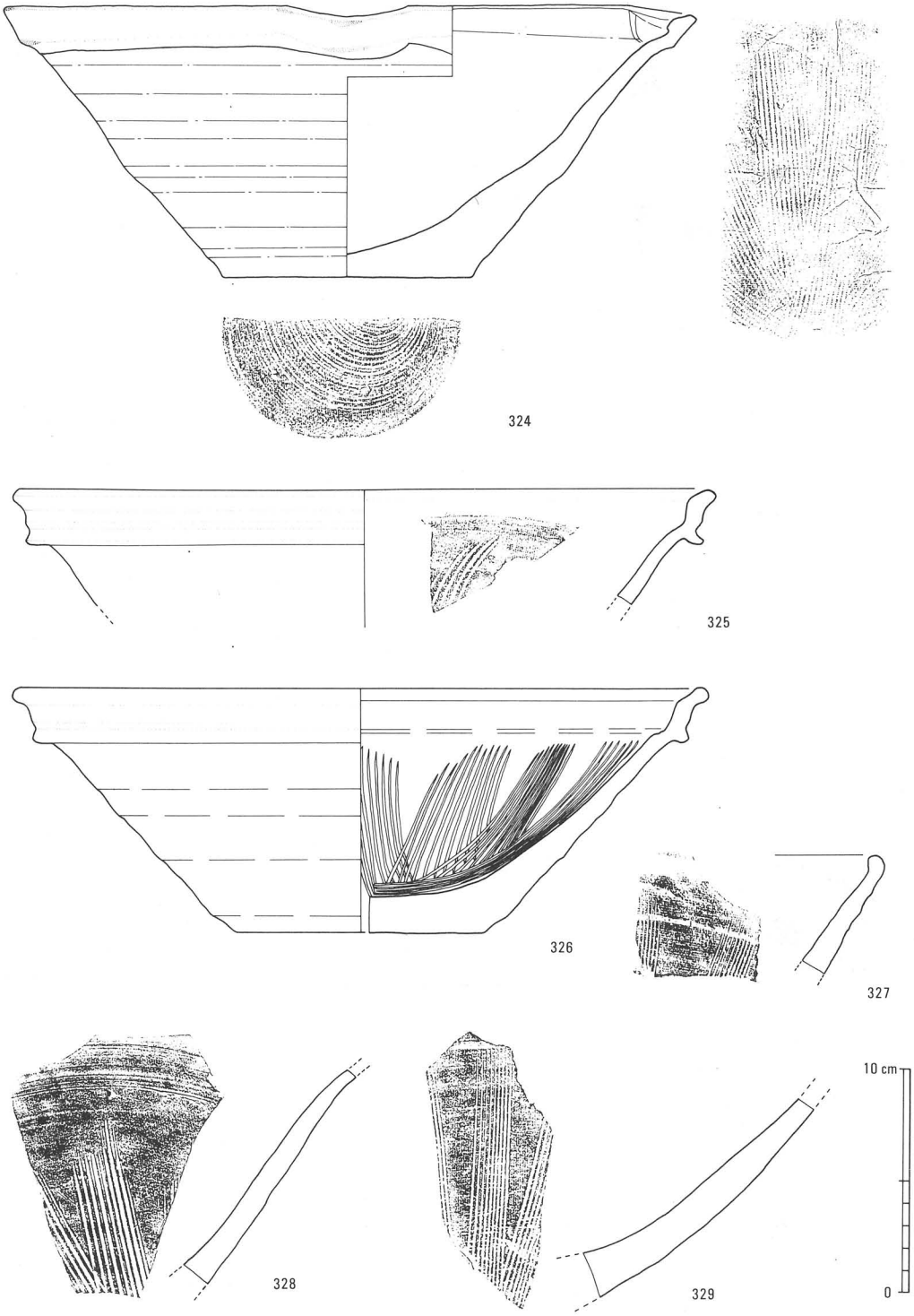
第 78 図　唐津系陶器実測図（26）



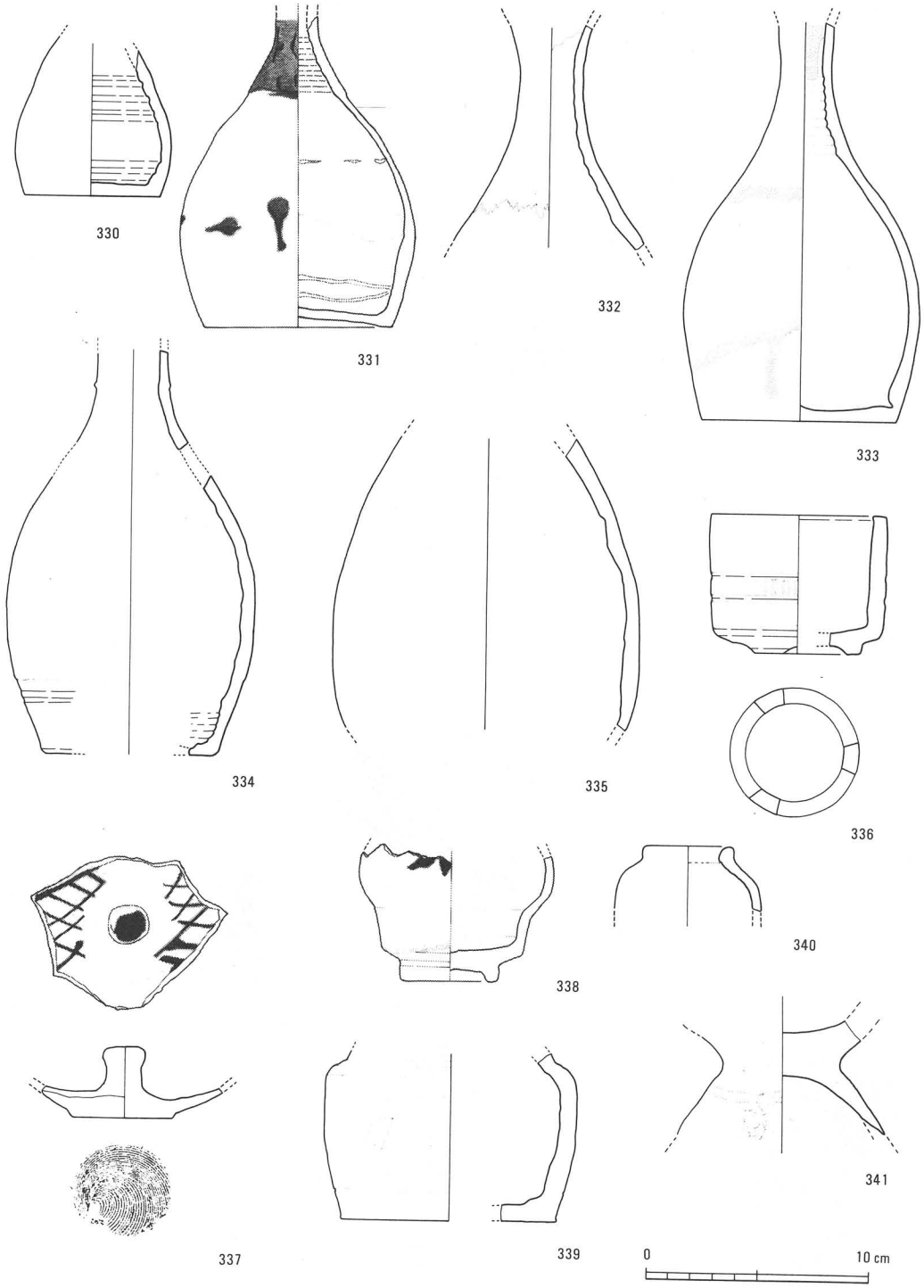
第 79 図　唐津系陶器実測図（27）



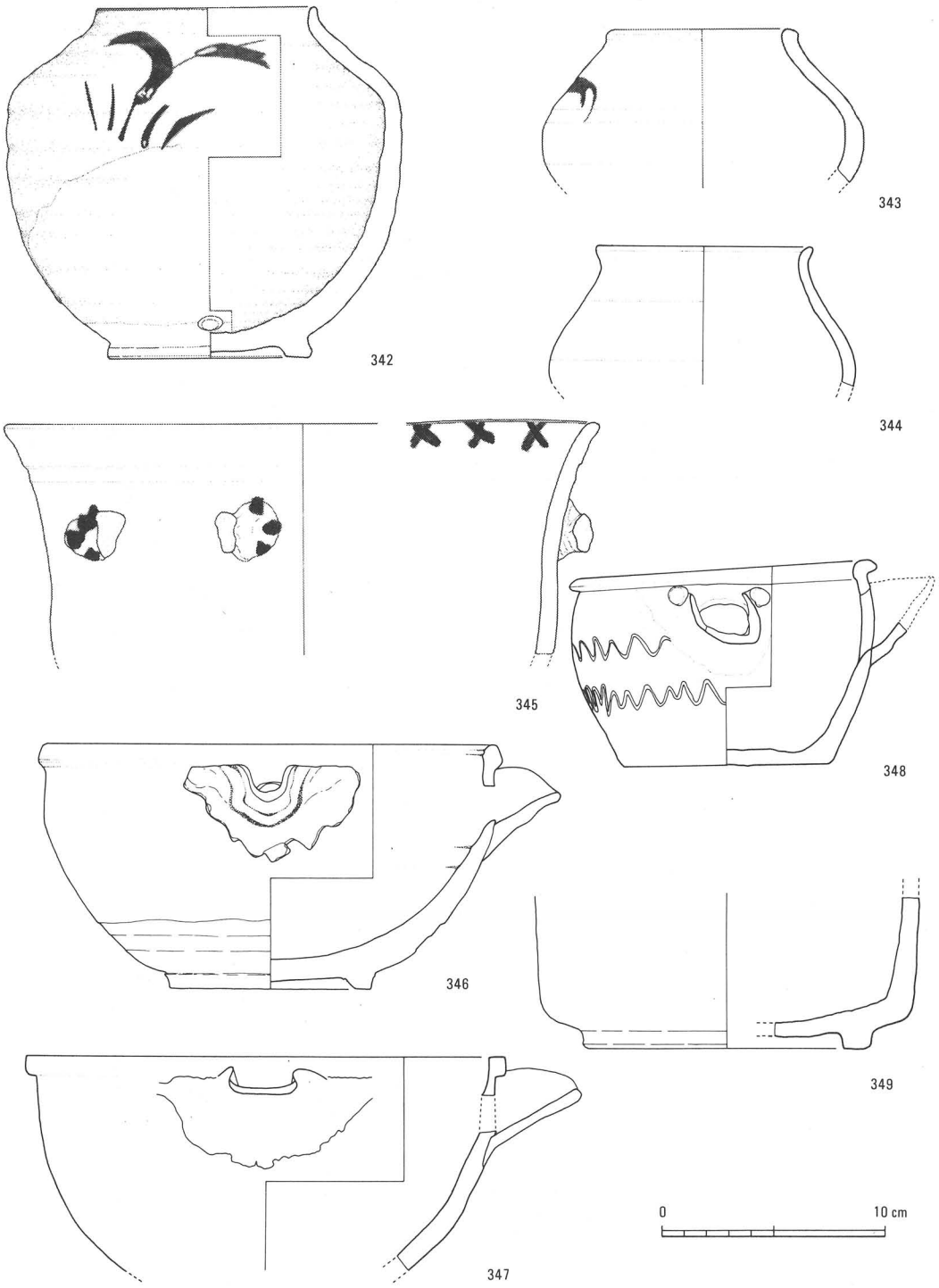
第 80 図　唐津系陶器実測図（28）



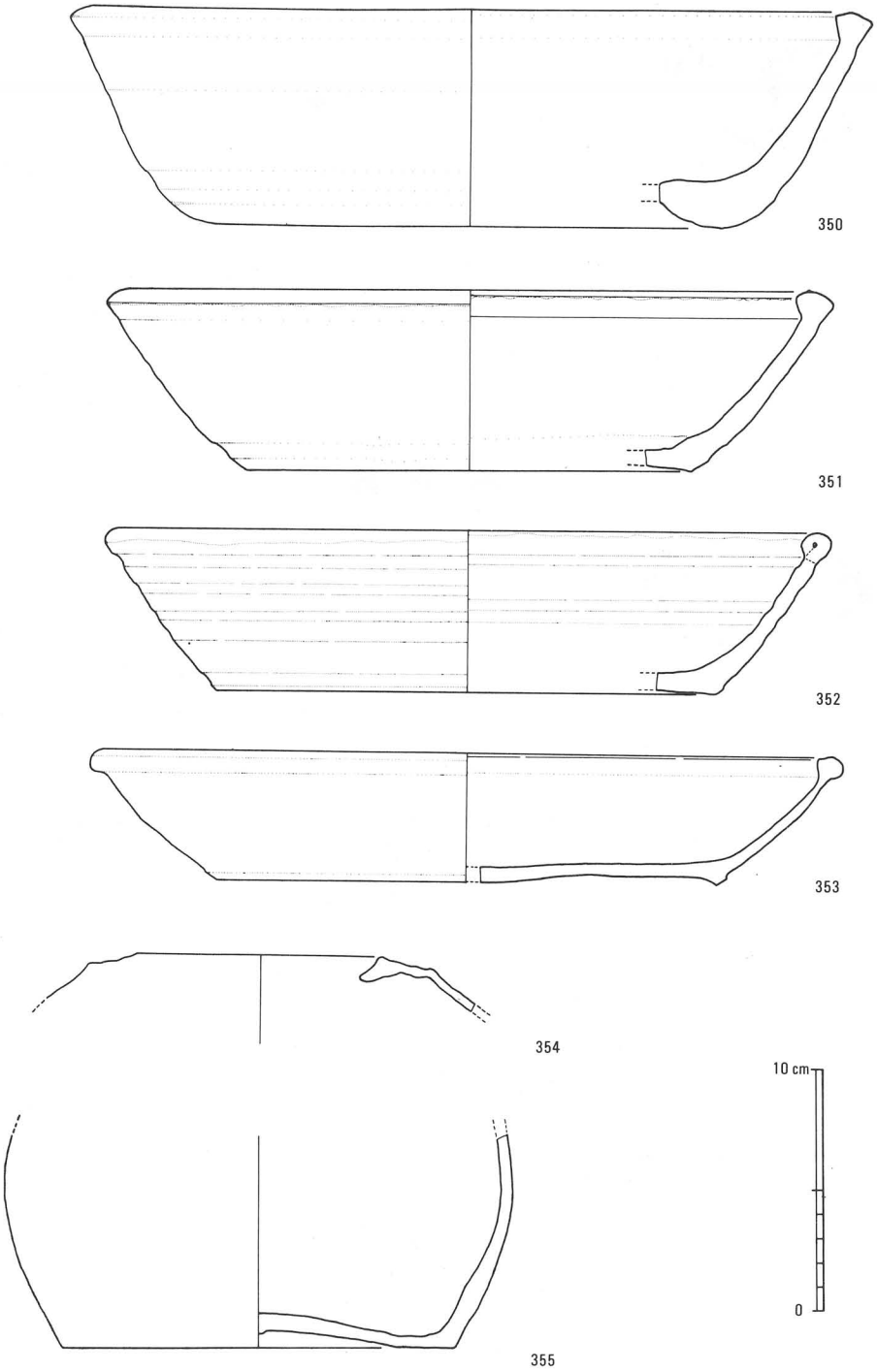
第 81 図　唐津系陶器実測図（29）



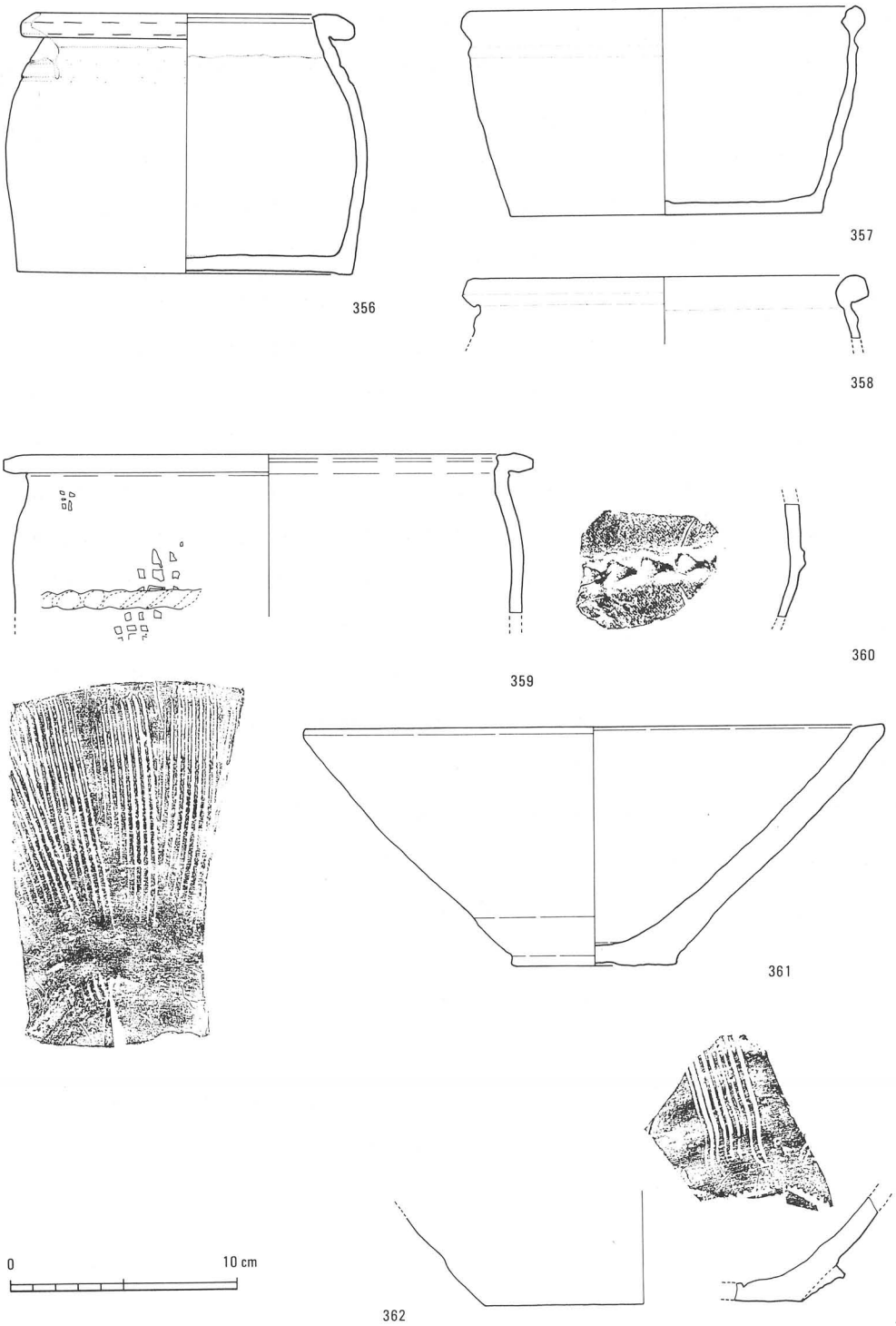
第 82 図　唐津系陶器実測図（30）



第 83 図　唐津系陶器実測図（31）



第 84 図　唐津系陶器実測図 (32)



第 85 図　唐津系陶器実測図（33）

10. 伊万里系磁器（第86図、87図、88図　図版51～52）

伊万里系磁器は主として第1遺構面、第2遺構面に関係する土層から出土した。瓶形、香炉形、碗形、皿形の各器種がある。染付が多い。

瓶形　瓶形には大形のもの（1、2）と小形のもの（5～7）の2種ある。1は染付で唐草文をあらわす。内面は無釉である。2は1の器種の底部であろう。5、6、7は箸筒底様の底部のみで小形のものである。いずれも内面は無釉である。

香炉形　3は染付で松が描かれている。3、4とも内面は無釉である。

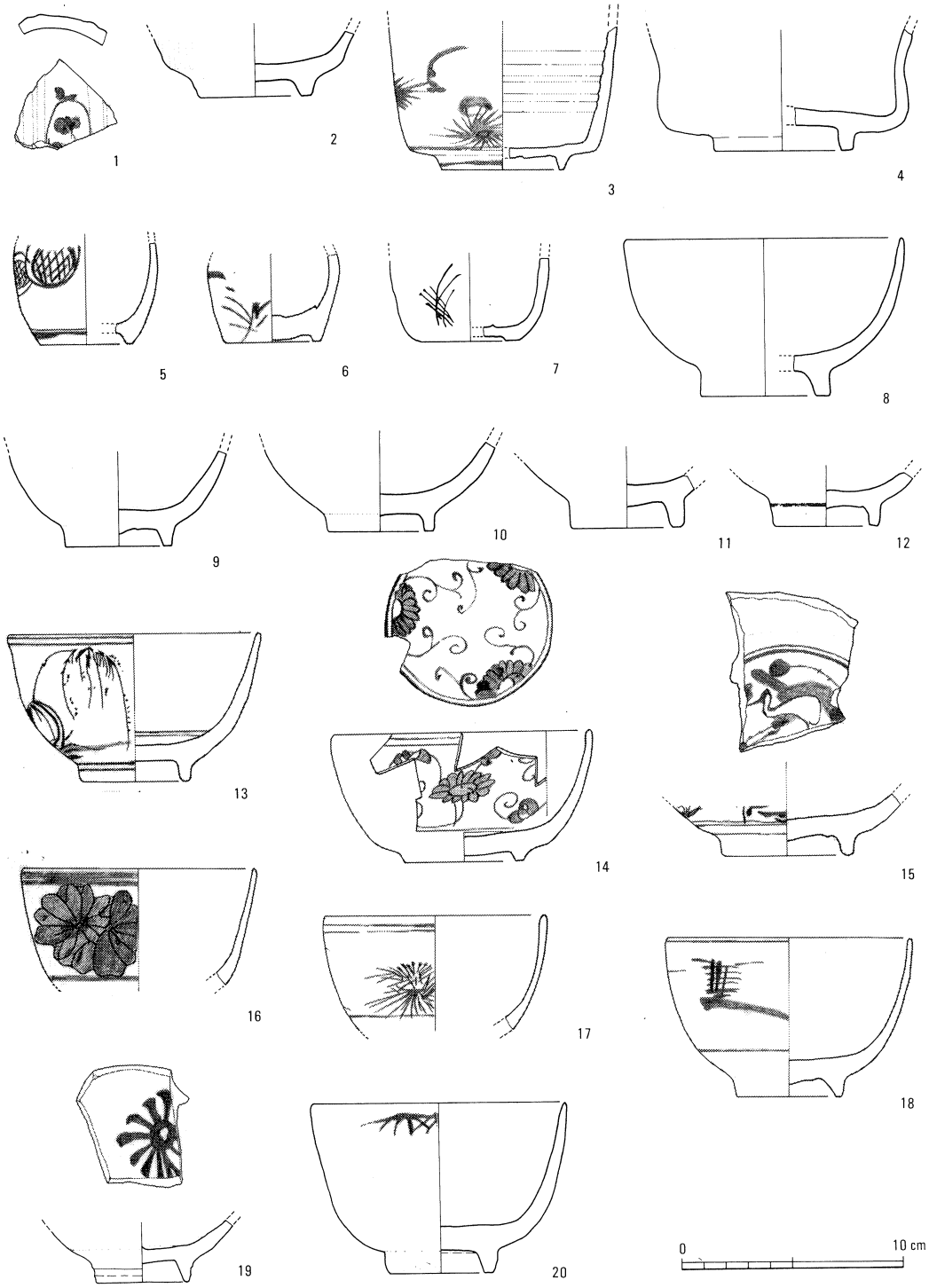
碗形　碗形には染付、青磁がある。8、9は青磁片で、他は染付である。染付は白鷺を見込に描いたもの（15）、菊花文（14、19口径11.8㎝、器高5.8㎝）、柳文（13口径11.4㎝、器高6.6㎝）、牡丹文（16口径10.6㎝）、松（17口径10.1㎝、18口径11.1㎝、器高7.1㎝）、竹（20口径11.6㎝、器高7.7㎝）、網目文（21口径11.1㎝、器高7.0㎝、22口径10.3㎝、23口径10.1㎝、24）の多種にわたる文様がみられる。12は高台部に一条の線が入る。11は底部のみであるが、染付と考えられるものである。碗形のものは器形が一様であまり変化はない。

皿形　皿形のものは口唇が外反するもの（37、40、41）と外反しないもの（25、26、27、28、29、30、31、32、33、36、39）がある。また、口縁部を欠く、34、35、38も後者に属するであろう。前者の中には、37のように波縁皿もある。さらに、36、38、39は形打され、口唇は波状を呈している。文様をみると、見込に螺子花文をあらわしたもの（25、26、27、28、29、30、31）、草花文のもの（32、33、34、35、37、39、40、41）、柳文のもの（38）、内面青磁釉のもの（36）に大別できる。螺子花文のものは口径13㎝前後、器高3～3.5㎝で花弁を多く表現したもの（25、26、27、28、29）と花弁の外水草状の文様を描いたもの（30、31）がある。草花文は菊をあらわしたもの（32、37、41）と半菊文のもの(35、40)がある。40は半菊唐草文である。

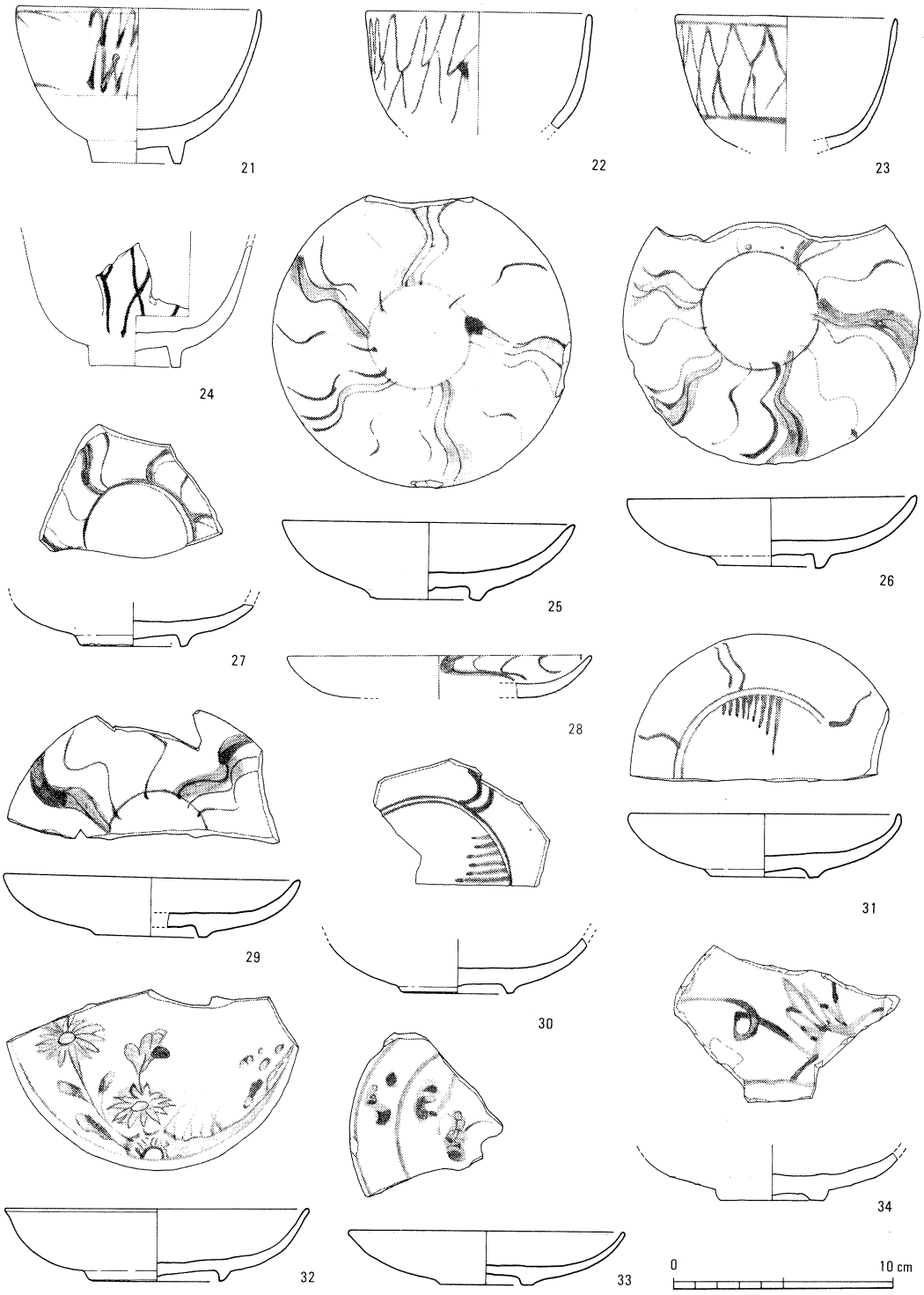
文様からみた碗と皿の関係は、柳文の碗13と皿38、半菊唐草文の碗14と皿40がセットになると考えられる。41の菊花文の皿は昭和55年度の調査出土資料に同文のものがあるが、文様は裏がえしになっている。

34は見込部に砂目当がみられ、文様の唐津に似たものである。（例えば第62図133の絵唐津皿など）。

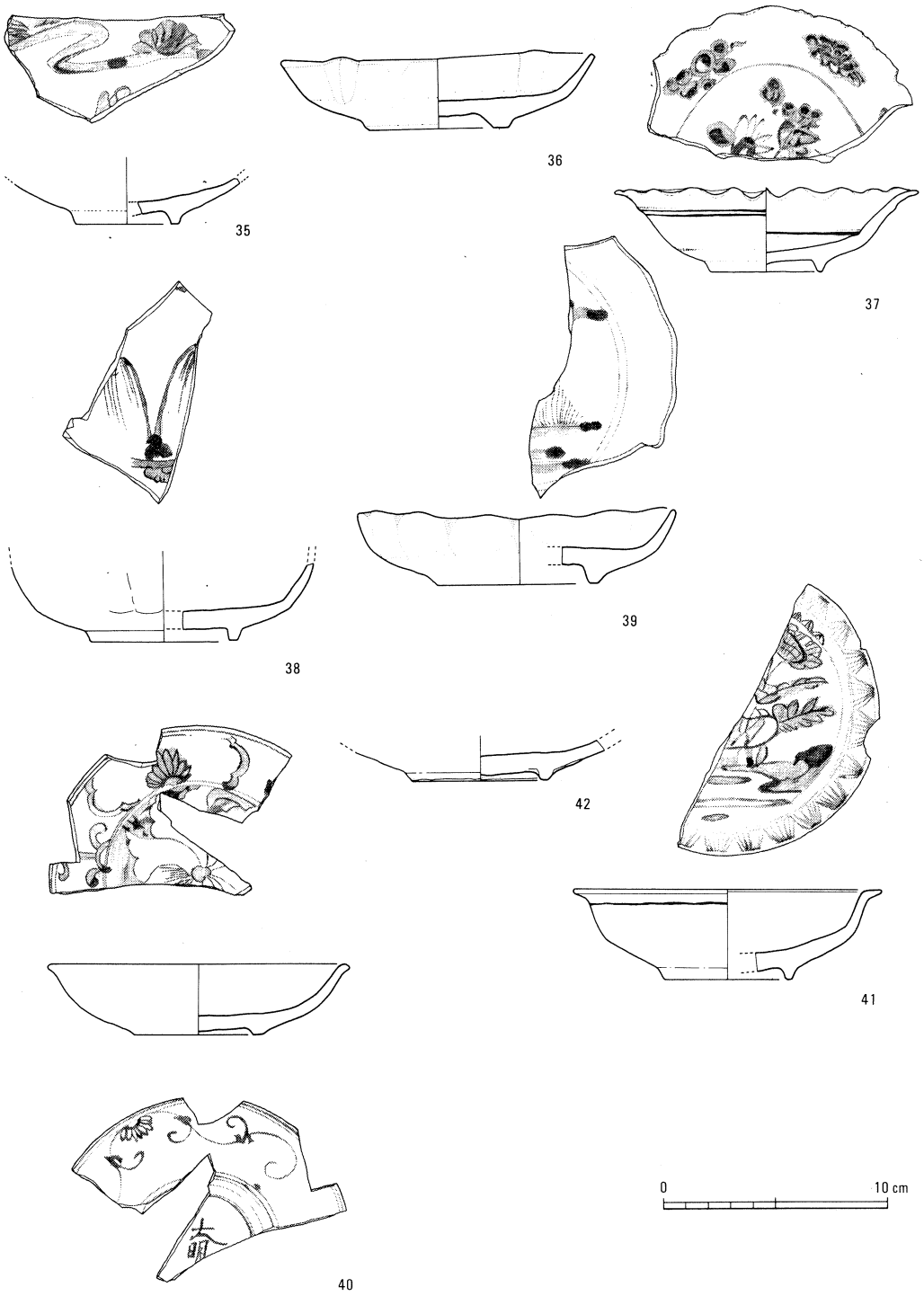
伊万里系磁器はⅡ区においては興味深い出土を示した。すなわち、Ⅱ区第3遺構面、第4遺構面からの出土は皆無ということである。このことは、Ⅱ区の遺構の年代を考えるうえに極めて重要なことと思われる。



第 86 図　伊万里系磁器実測図（1）



第 87 図　伊万里系磁器実測図（2）



第 88 図　伊万里系磁器実測図（3）

11. 備前系陶器（第89図～101図　図版52～54）

徳利　（第89図　1～3）　3点図示できた。いずれも、さほど大形でなく、おそらく三合程度の徳利であったと考えられる。

花器　（第89図　4～7）　4は口縁が開き気味のコップの形で、底部を欠いているが低脚がついていた可能性もある。5は柱掛の花生けである。胴部には竹を模して節を形どった突帯を二ケ所削り出し、上部に柱掛するために孔を穿っている。6はやや外反する口縁を持ち、その外面にスタンプを二個一単位として二ケ所以上に施している。7は6の底部となる可能性が強い。胴部には、一段低く削り出した部分に文様を陰刻している。

鉢　（第89図　9～13　第93図　81～83）　8は玉縁状の口縁をもつ、やや小形の浅鉢である。9、10は、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもので、9はやや外開きである。12は、ボール状の鉢で、13はかなり大形のものがある。81、82は口縁端を折り返して縁帯状にしたボール状の鉢で、83はその底部であろう。

壷　（第89図　14～25、29、30、第90図　31～36）　14～24は口縁部である。その形から、無頸のもの（18、19）、短頸で口縁端が玉縁状のもの（15～17、20、23）、短頸で玉縁をもたないもの（14、21、22、24）に分類できる。19～36は底部である。回転糸切り痕の残るもの（31）、ヘラ記号のみられるもの（33、34、36）もある。

甕　（第91図　37～第93図　80、第94図、第95図）　37～38は口縁部である。口縁は折り返して突帯状にしており、その部分に回転ナデにより凹線を施しているものと、それがほとんどみられないものがある。95図は、胴部に記号や文字のみられる破片である。92、93は「二石入」と読める。甕の容量を表わしたものだろう。90は「三」が読める。95は、何らかの記号と「十」及び平仮名らしきものが認められる。97、98は記号であろう。

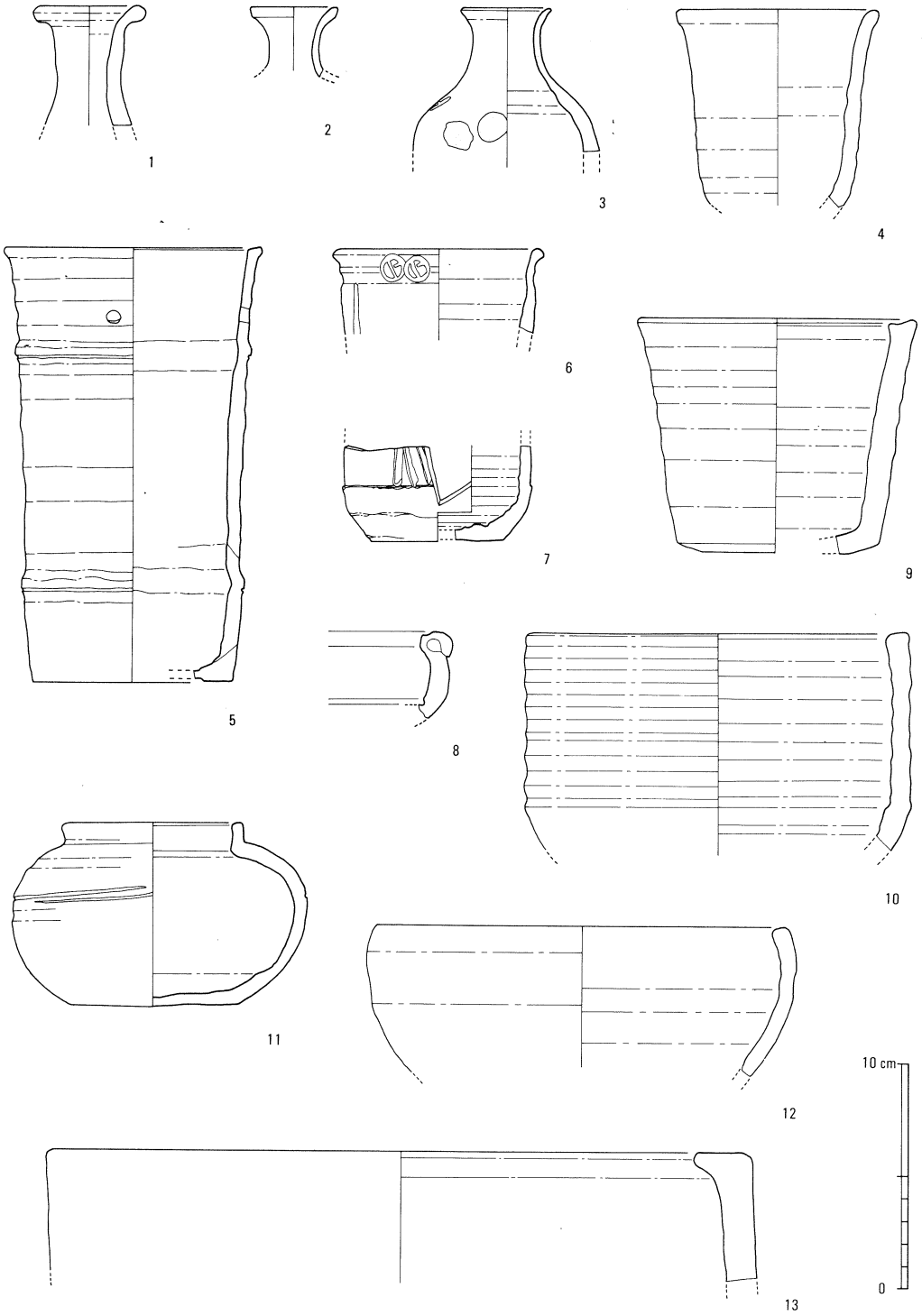
擂鉢　（第96図　99～第100図　144）　直立かやや内傾気味に上方に拡張された口縁部をもち、大部分が片口をもつと考えられる。口縁部外面には、凹線を廻らすものとそうでないものがある。内面は強い回転ナデの後、6～10本単位の条線を施している。

平鉢　（第101図　145～152）　口径はかなり大形であるが、非常に浅い鉢である。口縁は端部をやや内側につまみ上げるようにして形作っている。146は底部に竹管文がみられる。

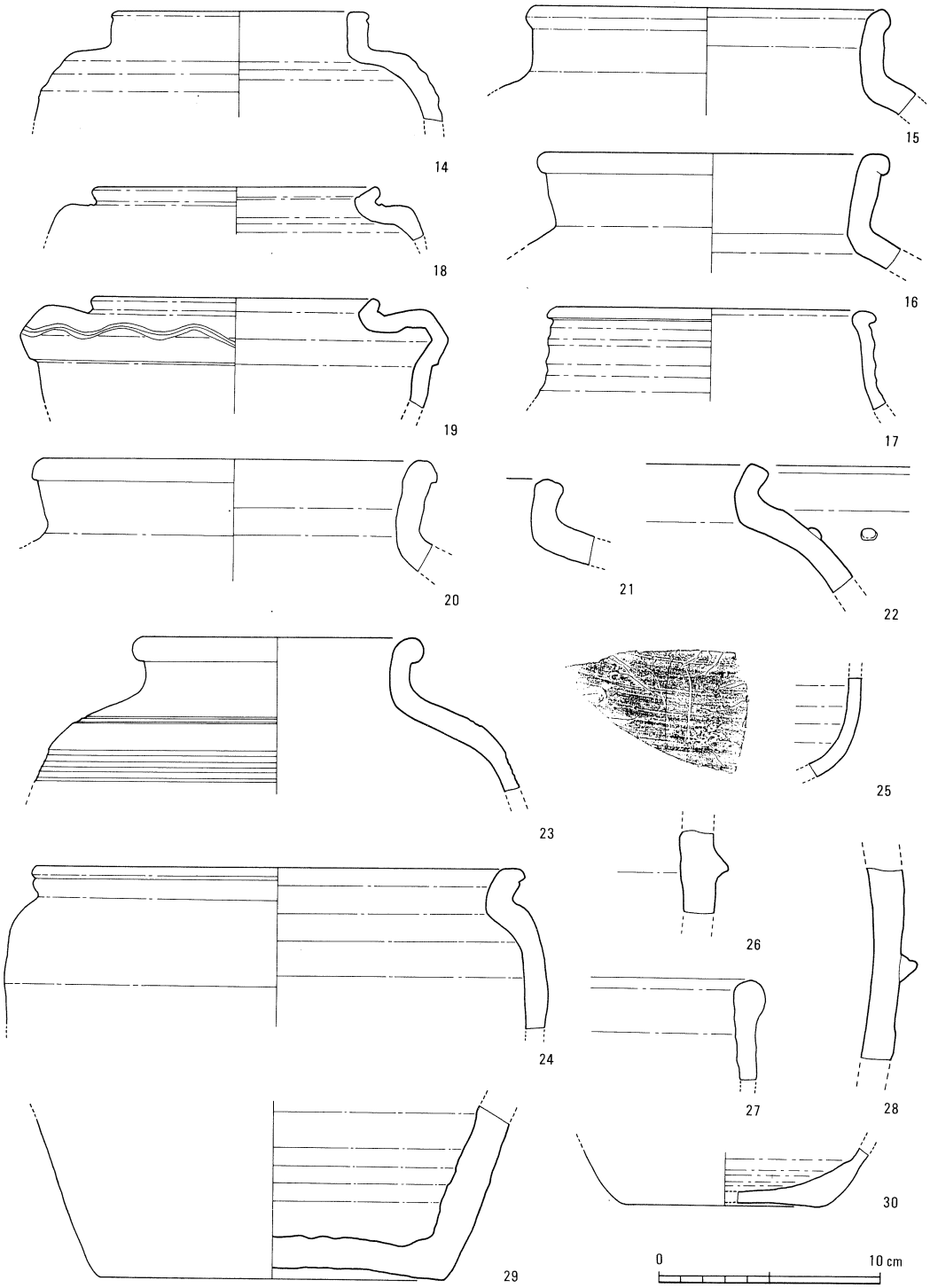
これらの備前系の陶器は大部分がごく日常一般に用いられた製品であるが、花器や一部の鉢、壷（8、9、13、17、18、19等）には、日常使用されたと考えにくいものもある。これらは、当時広がりつつあった茶の湯の風習などとも関係すると思われ、興味深い。

参考文献

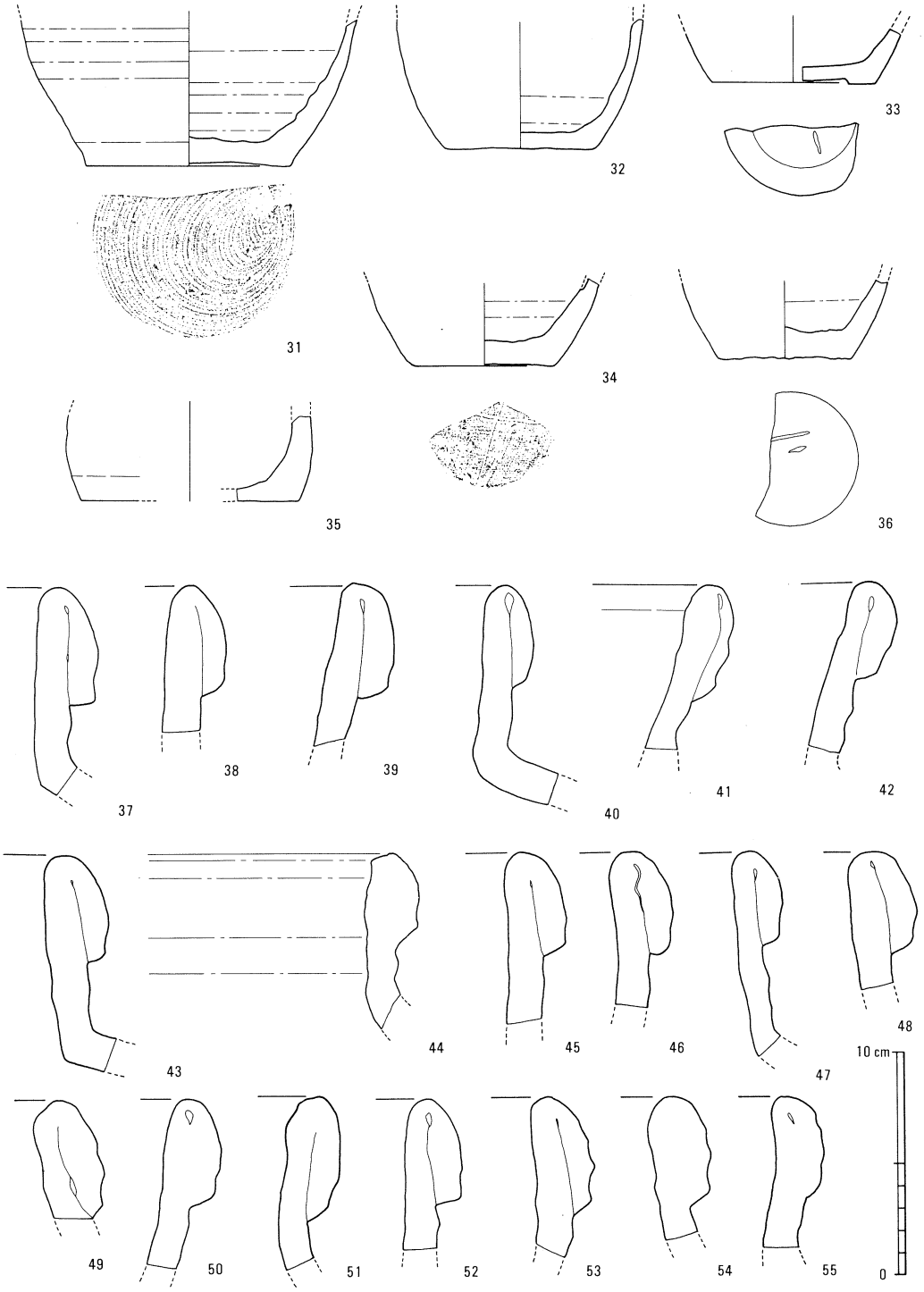
『日本やきもの集成』9、（山陽）　昭和56年



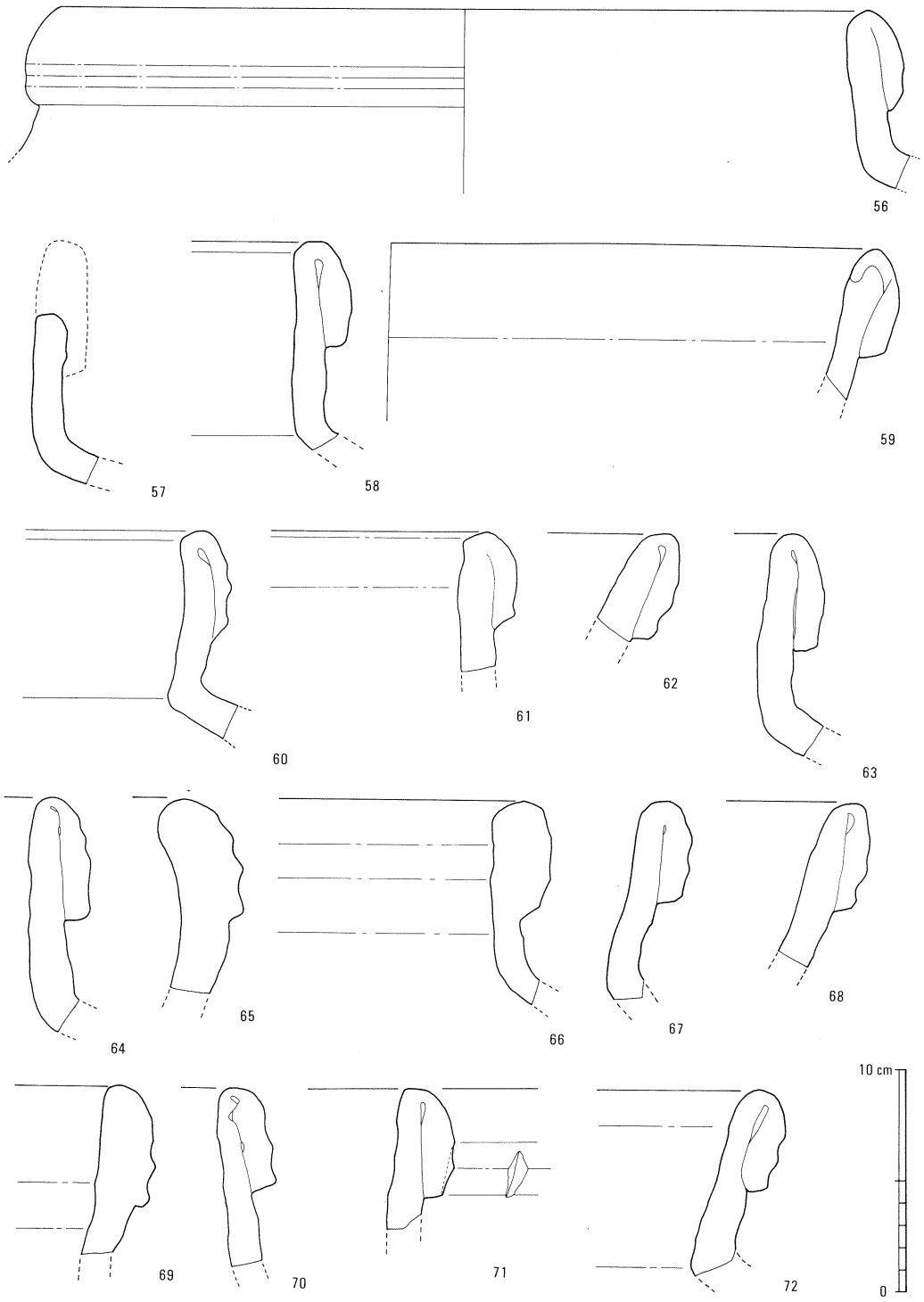
第 89 図　備前系陶器実測図（1）



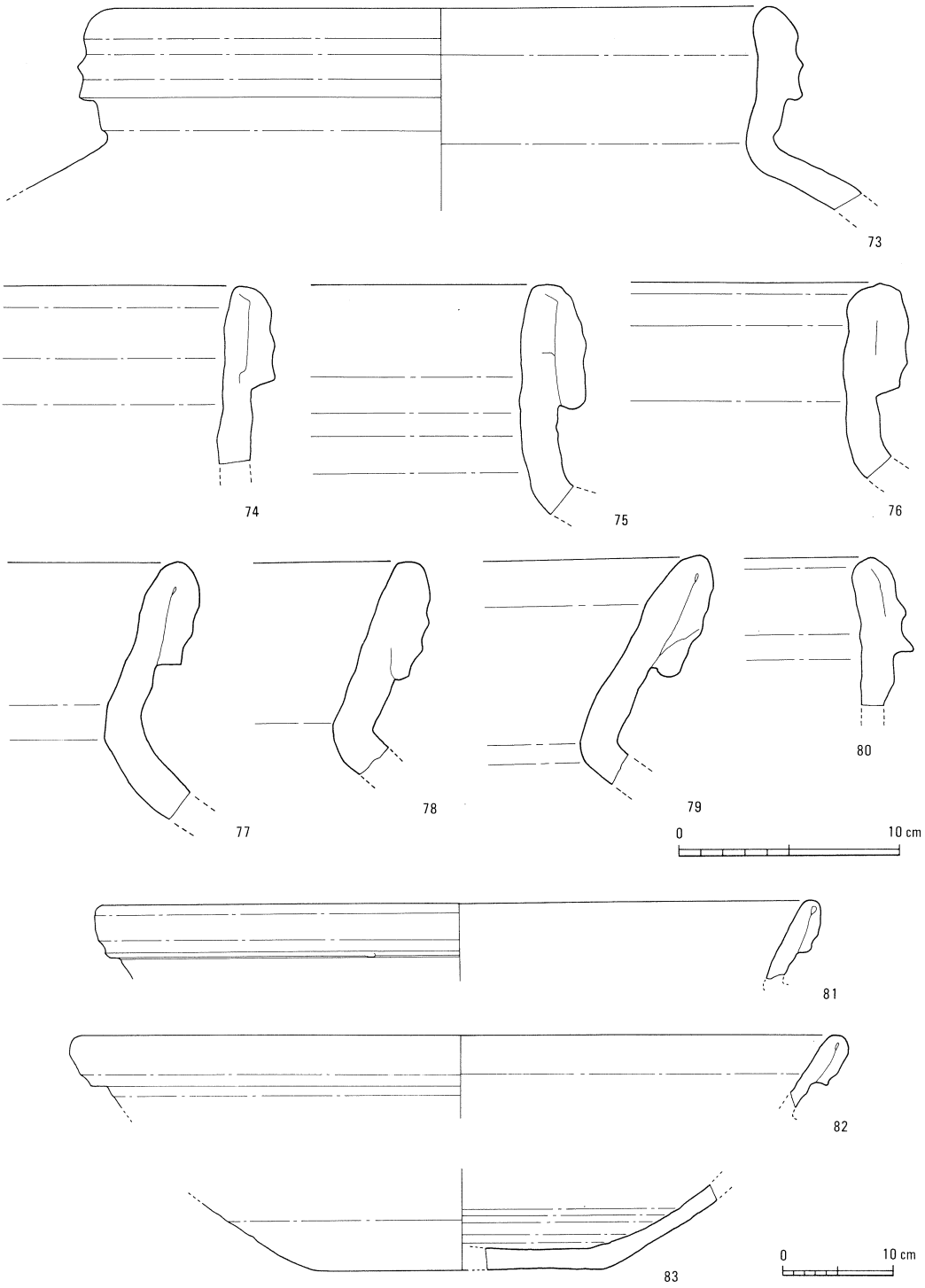
第 90 図　備前系陶器実測図（2）



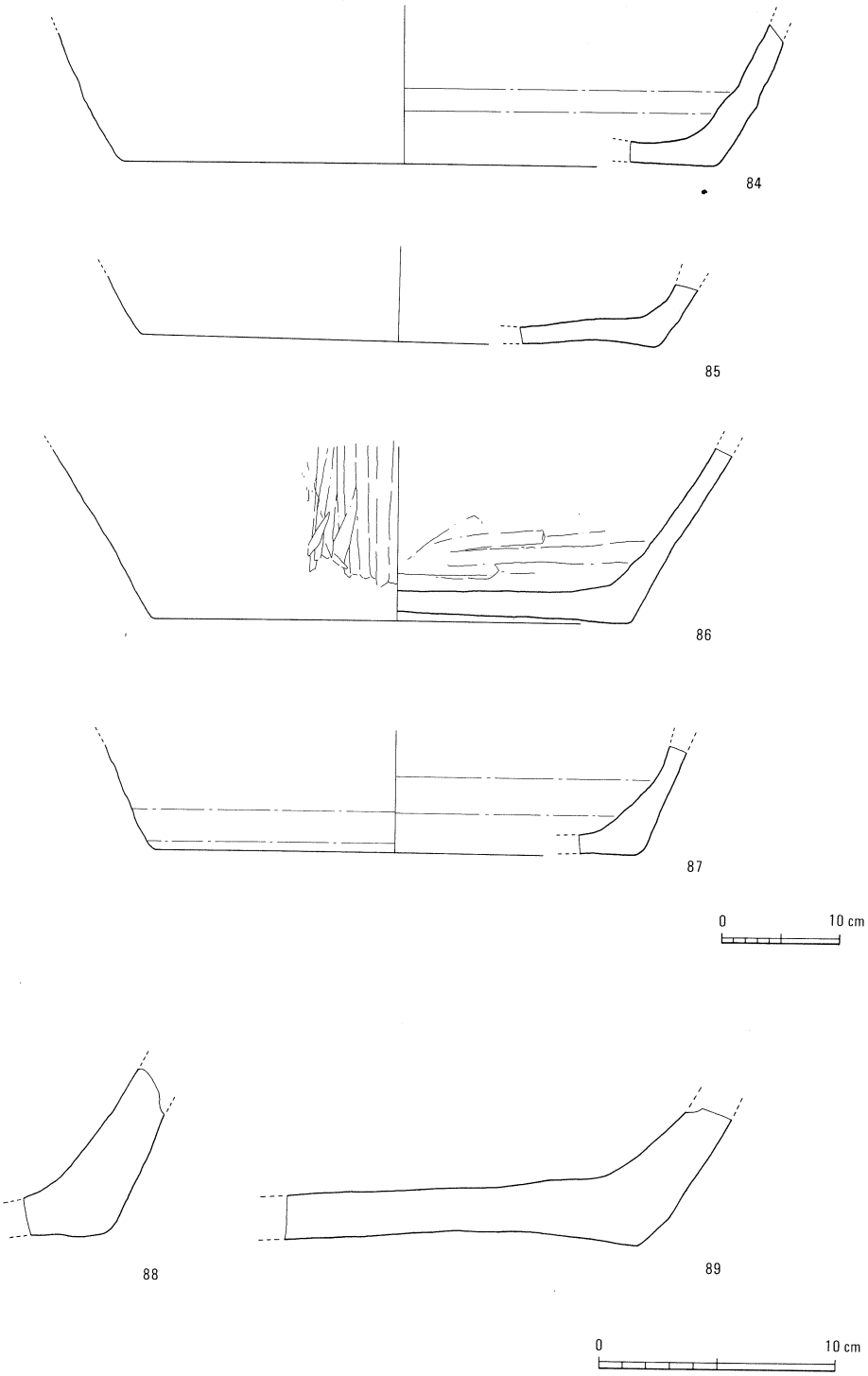
第 91 図　備前系陶器実測図（3）



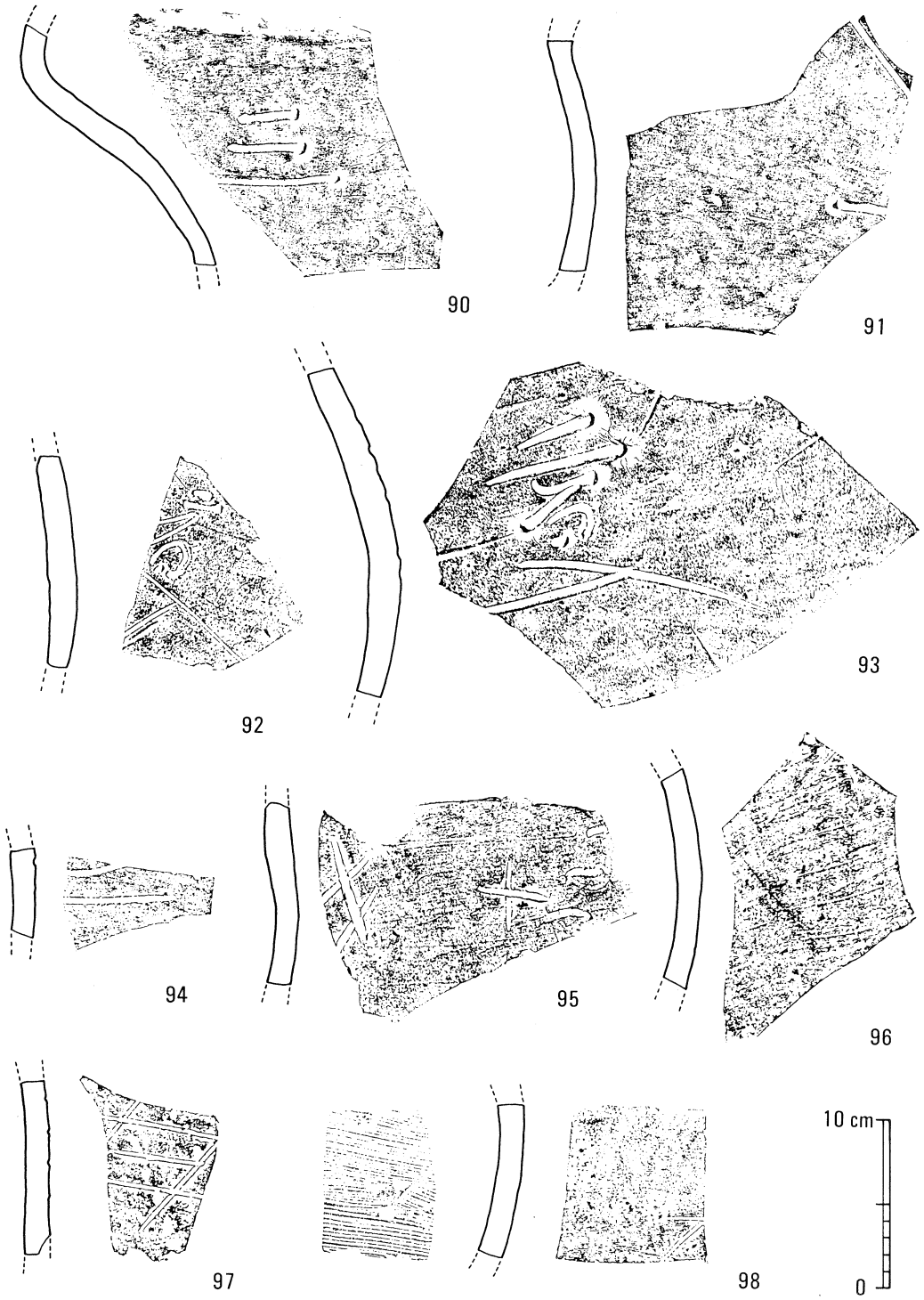
第 92 図　備前系陶器実測図（4）



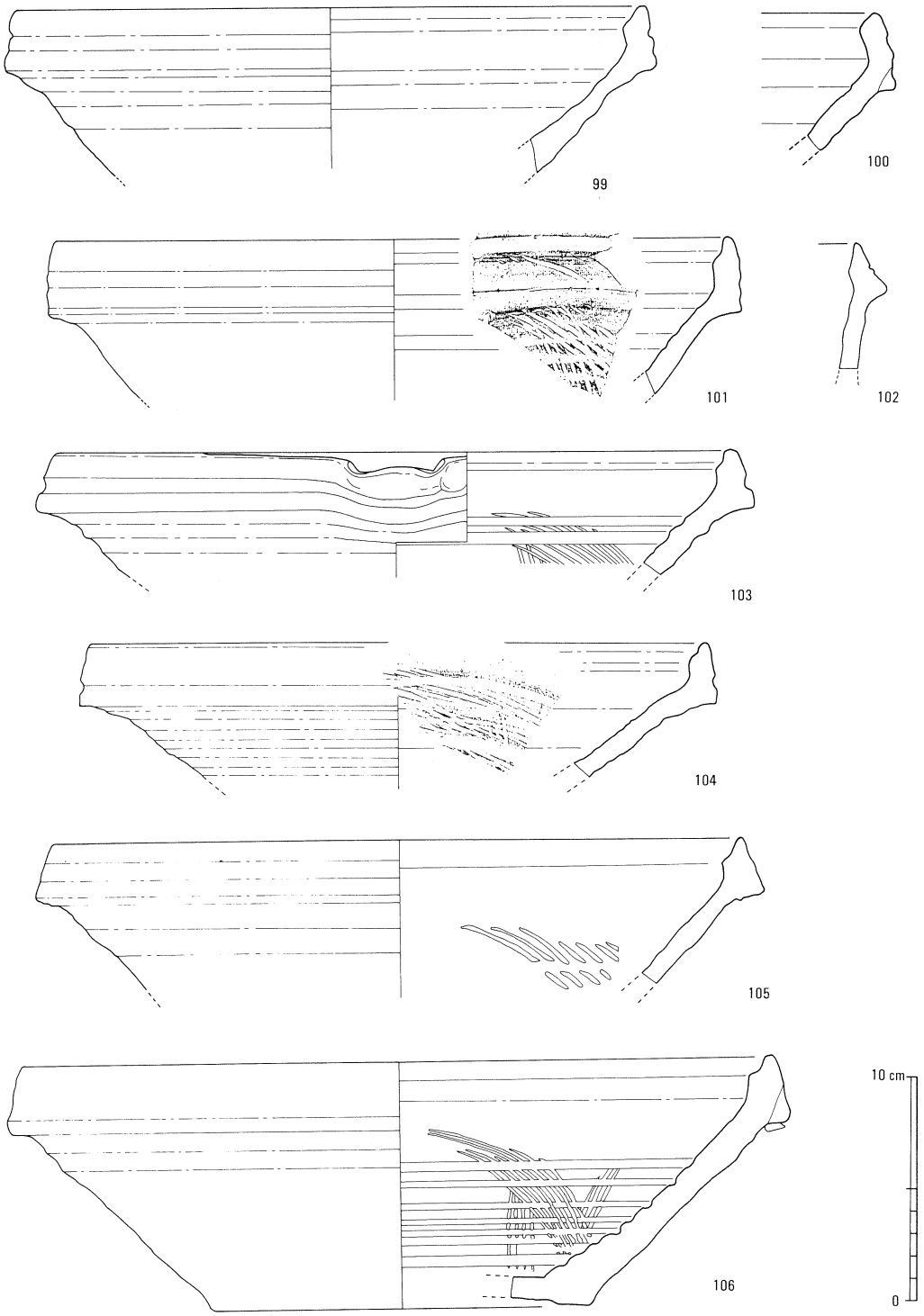
第 93 図　備前系陶器実測図（5）



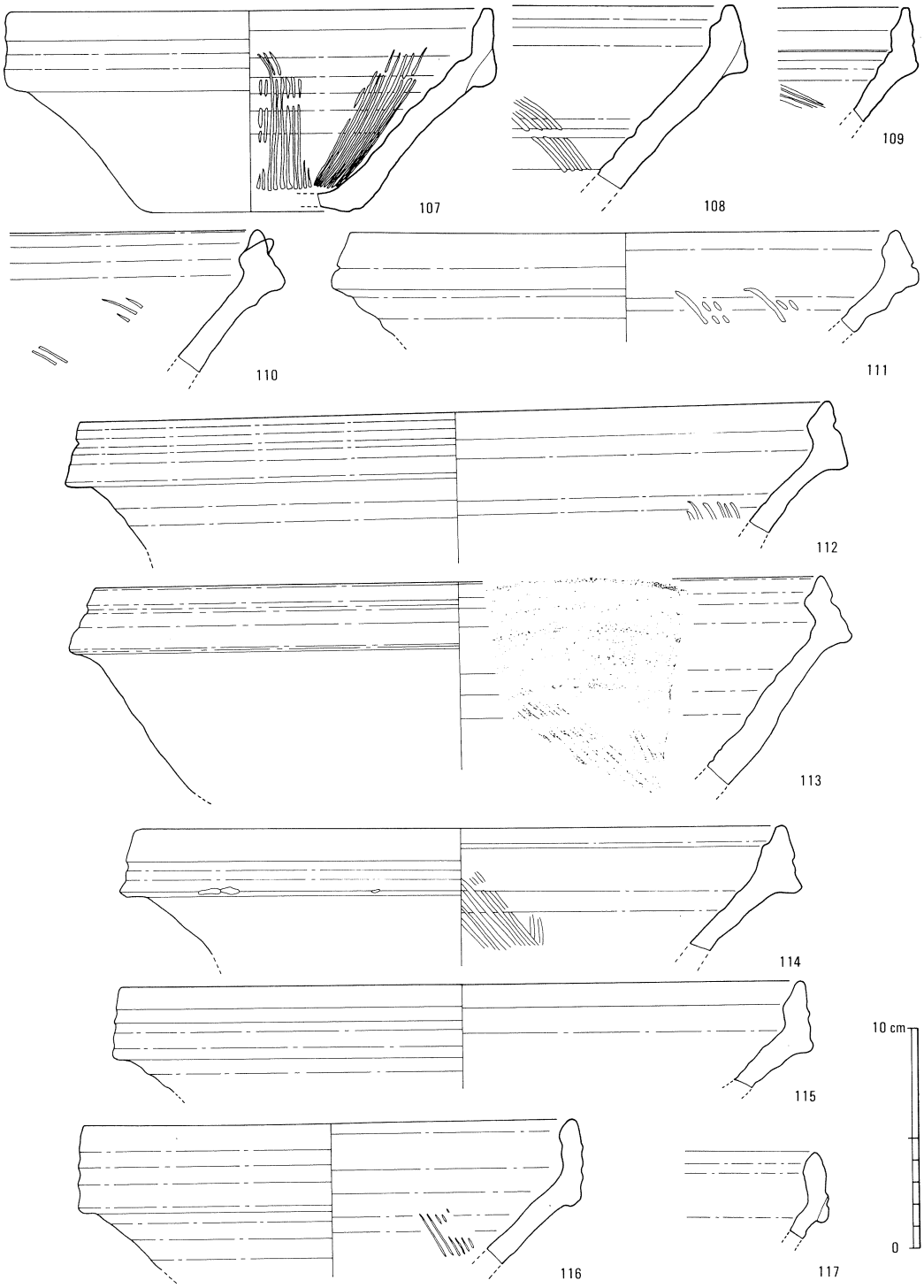
第 94 図　備前系陶器実測図（6）



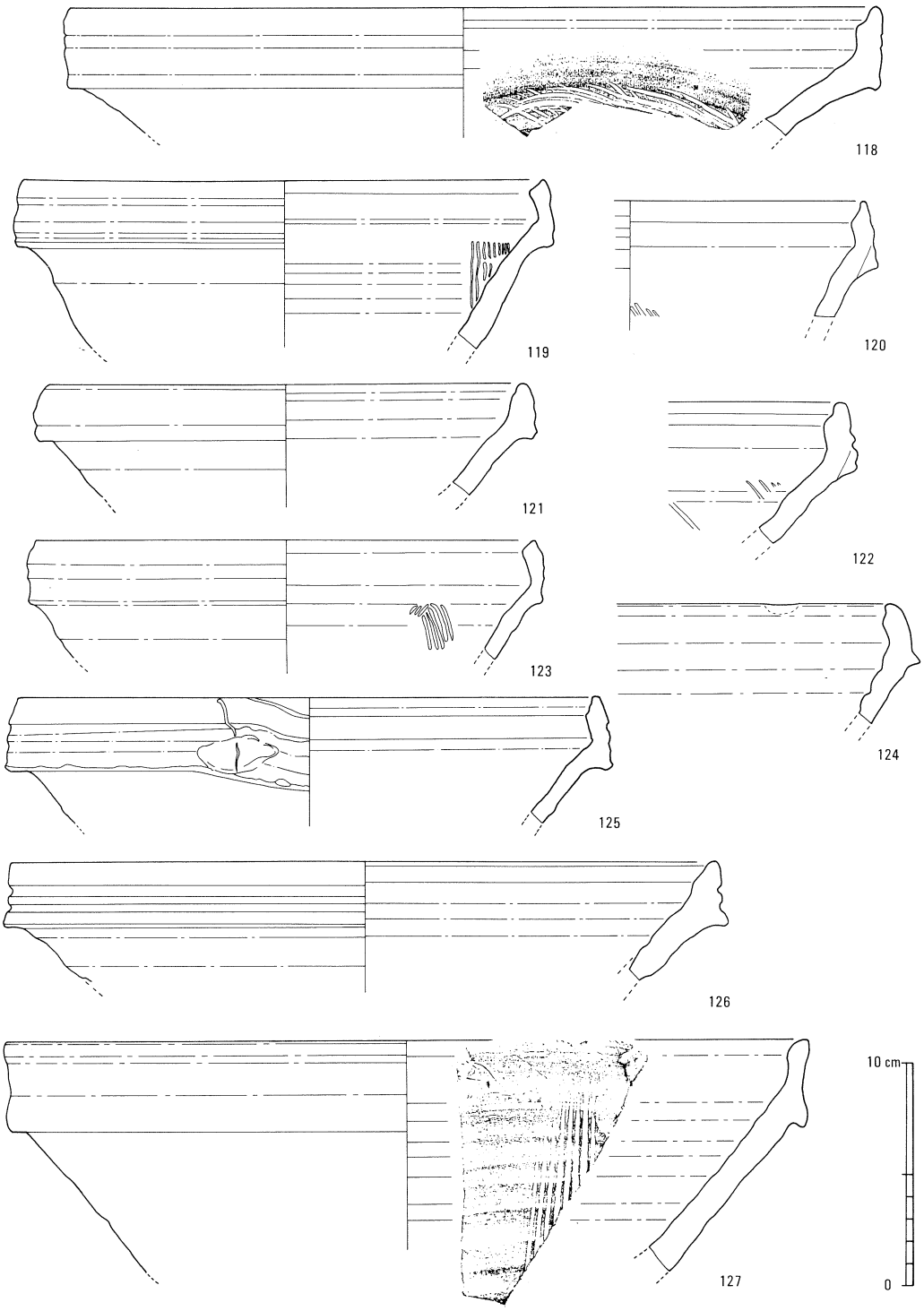
第 95 図　備前系陶器実測図（7）



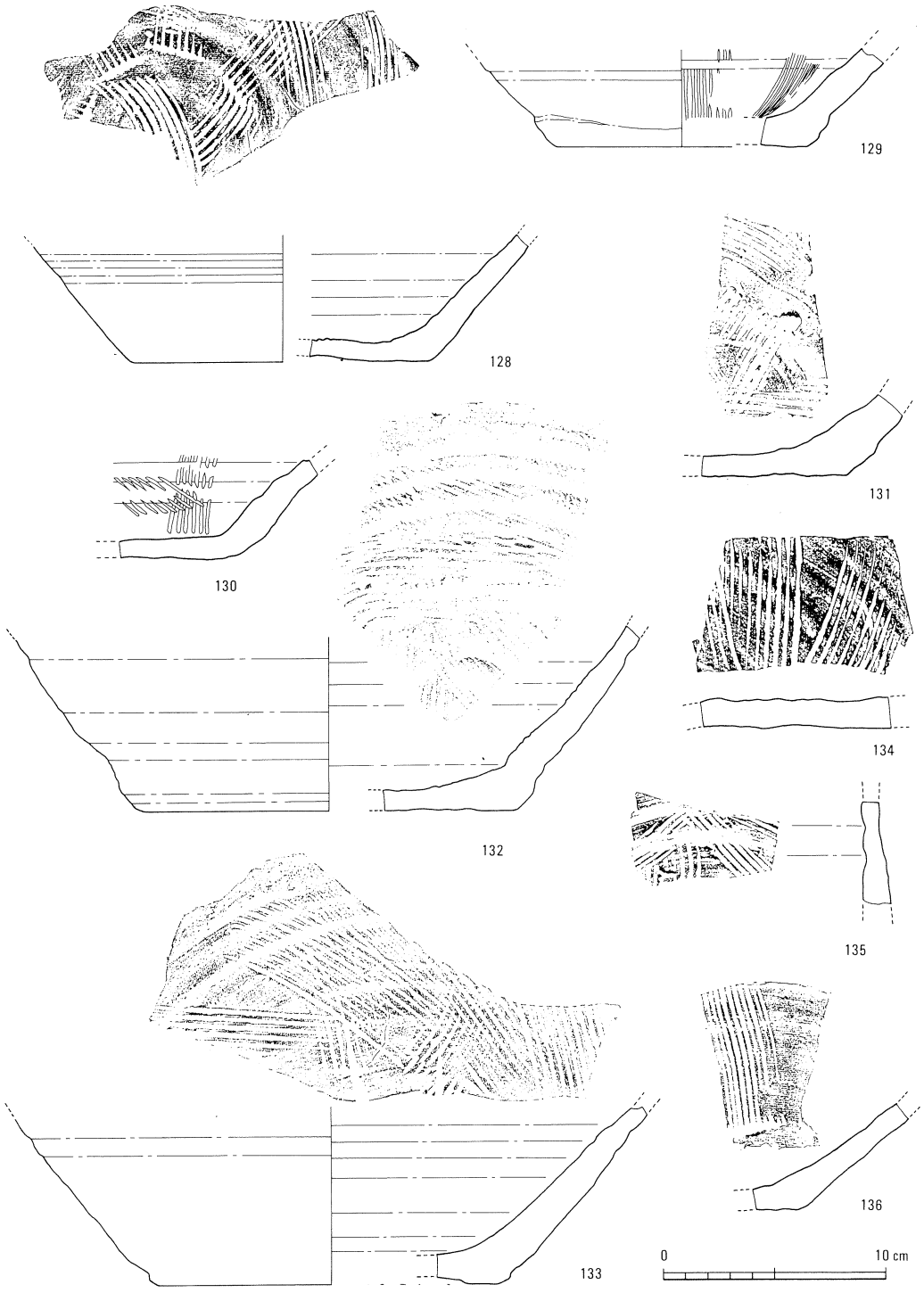
第 96 図　備前系陶器実測図（8）



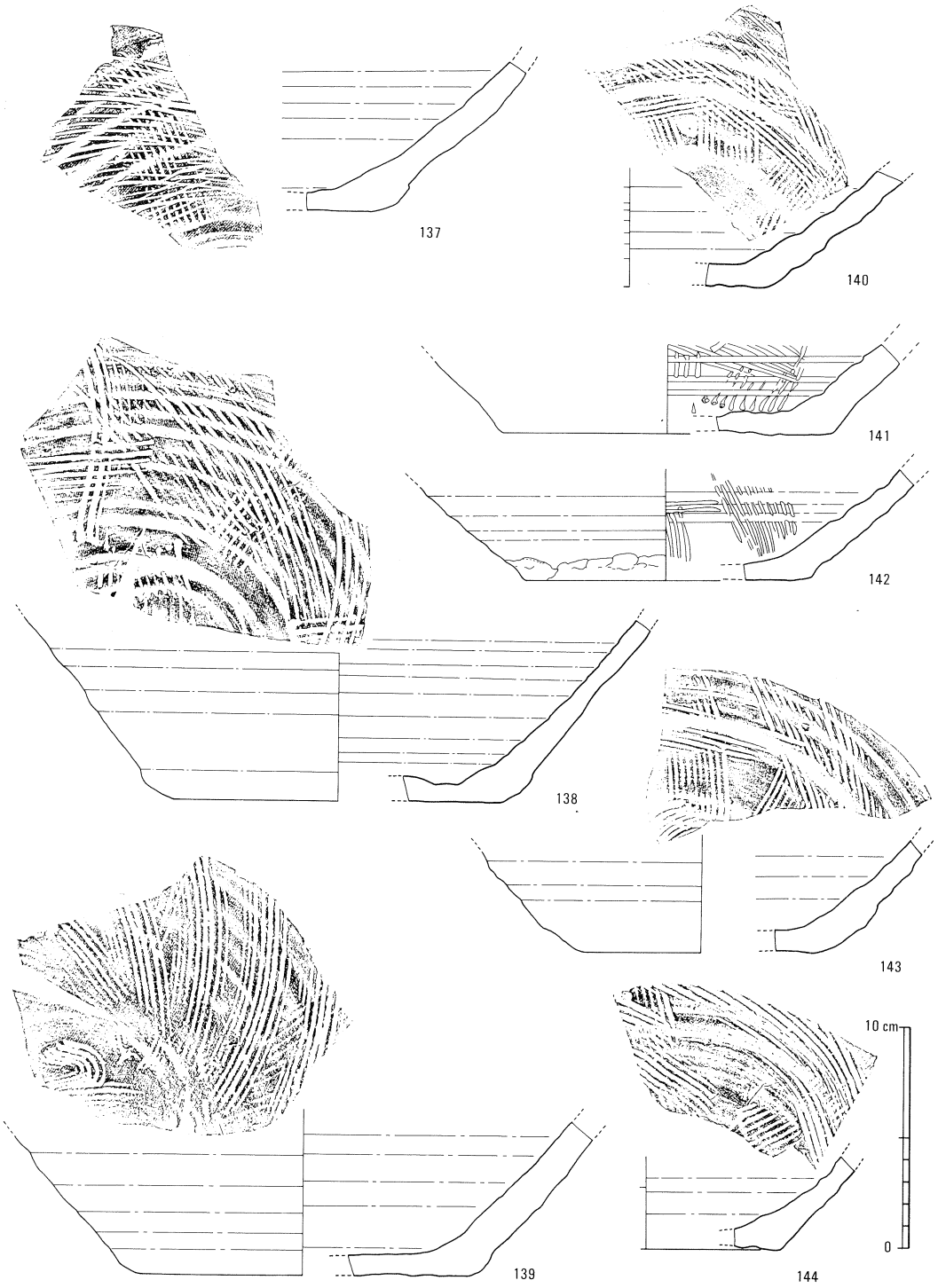
第 97 図　備前系陶器実測図（9）



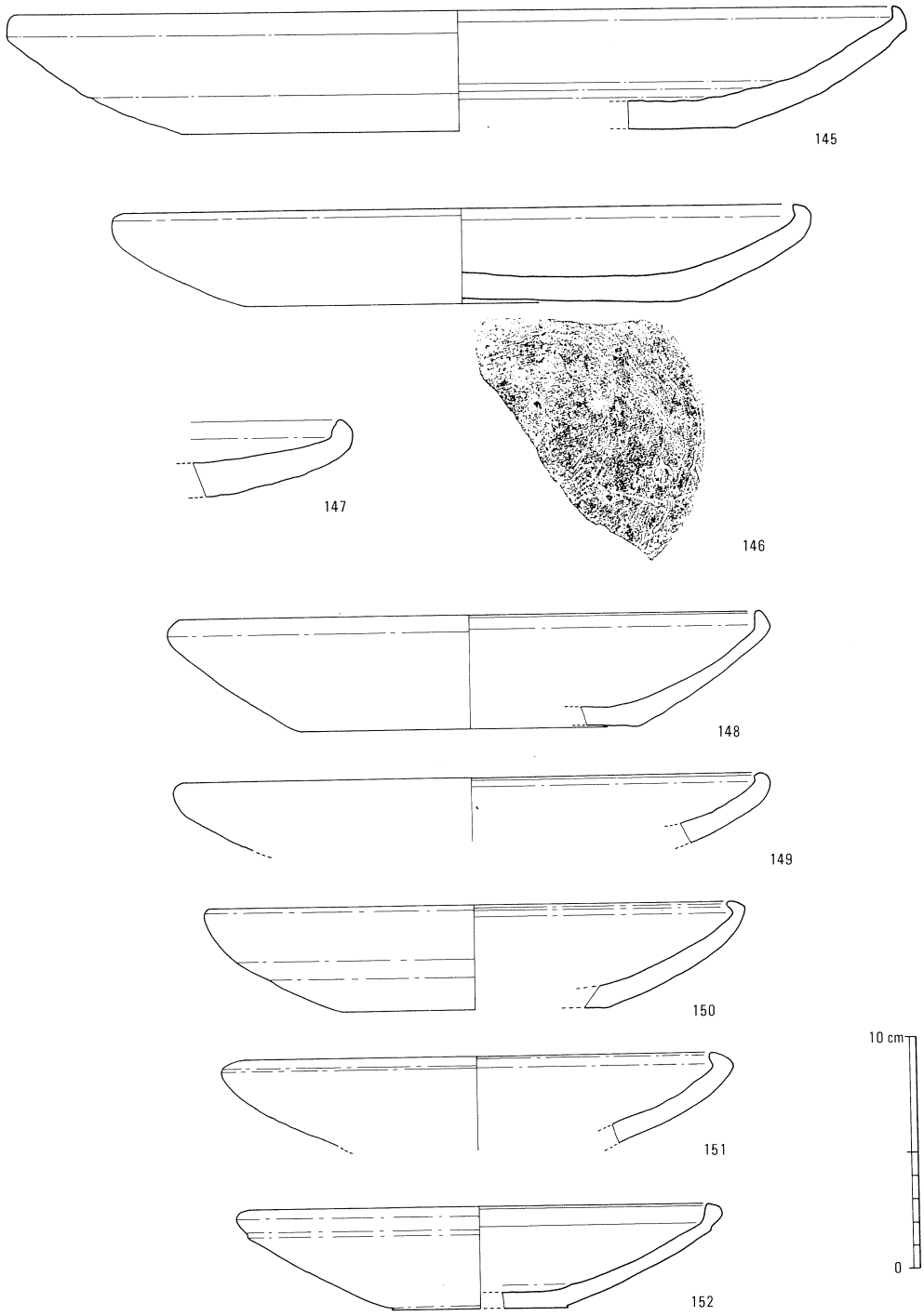
第 98 図　備前系陶器実測図（10）



第 99 図　備前系陶器実測図（11）



第100図　備前系陶器実測図（12）



第101図　備前系陶器実測図（13）

12. 美濃・瀬戸系陶器（第102図～103図　図版55～56）

灰釉　皿　（第102図　1～3・5～22）　口縁部が外反するもの（1～3・9）、口縁が外反せず、丸く収めてあるもの（10・12・13）、折縁のもの（8・11・14～22）の三種に大別できる。そのうち折縁型式のものには内面に花弁を形どって陰刻を施した、いわゆる菊皿（17～22）も多い。見込底部、外面底部に、ほぼ円形に重ね焼の痕跡を残すものが多い。

鉄釉　皿　（第102図　4・23）　いずれも特色ある形態である。4は底部が箒笥底様で口縁にかけてほとんど反りを持たない。23は波状口縁で高台は低い。

志野　（第102図24～30・32・50・103）内外面に花弁を形どり、それにあわせて口縁を波状に形どった菊皿が多い。略全面に乳白色や灰白色の長石釉がかかり、内面見込底部、及び外面底部に3～4ケ所重ね焼痕が残る。50は碗か鉢であろう。まず長石釉をかけ、その上に鉄釉で文様を描いている。高台は分厚で、偏平である。

灰釉　碗　（第102図　23）　体部から口縁にかけて反りがなく、深めの碗である。外面高台近くまで黄緑色の釉がかかる。

鉄釉　碗　（第103図　34～47）　口縁にかけて反りがなく、やや浅めの碗（34）と、いわゆる天目茶碗（35～47）がある。いずれも高台を削り出し、外面下半にいたるまで茶褐色や黒褐色の鉄釉をかけている。素地に鉄化粧がみられるものもある。

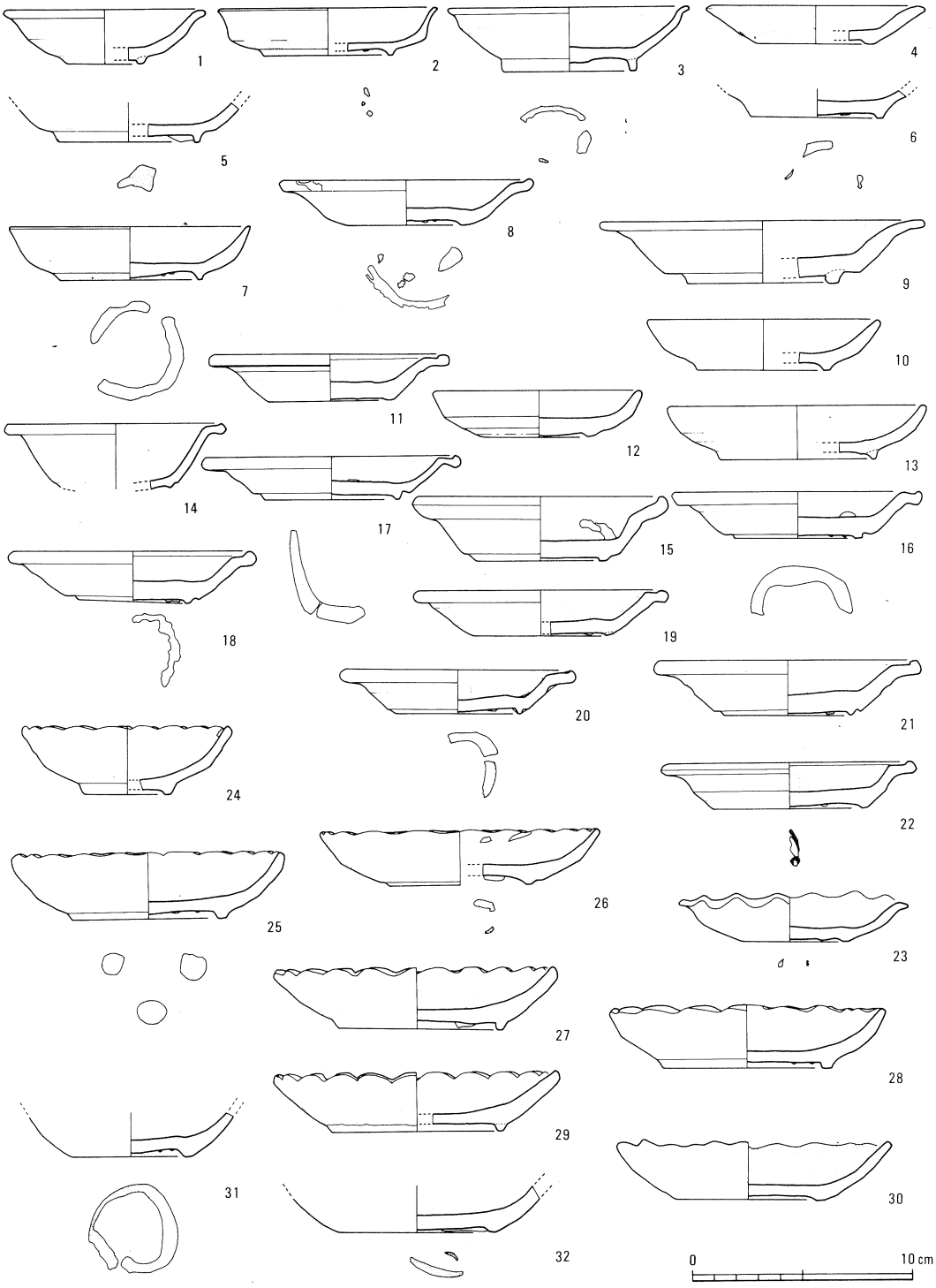
織部　（第103図　51）　外面に鉄釉と長石釉を塗り分けた小壷である。底部には回転糸切り痕を残し、外面下半は削って調整している。江戸時代の初期のものであろう。

その他　（第103図　48・49・52）　48は外面に鉄釉をかけ内面は上部に僅かに釉がかかり、それ以下は鉄化粧を施した小壷である。49は茶入れであろう。明瞭な肩を持ち、外面下半は回転削りを施している。外面に鉄釉をかけている。他の美濃焼製品と比し、胎土がよく締まり緻密である。52は花器等の底部であろうか。底部に回転糸切り痕があり、外面に透明度の多い暗緑色釉をかけている。15世紀前半頃に生産されたものであろう。

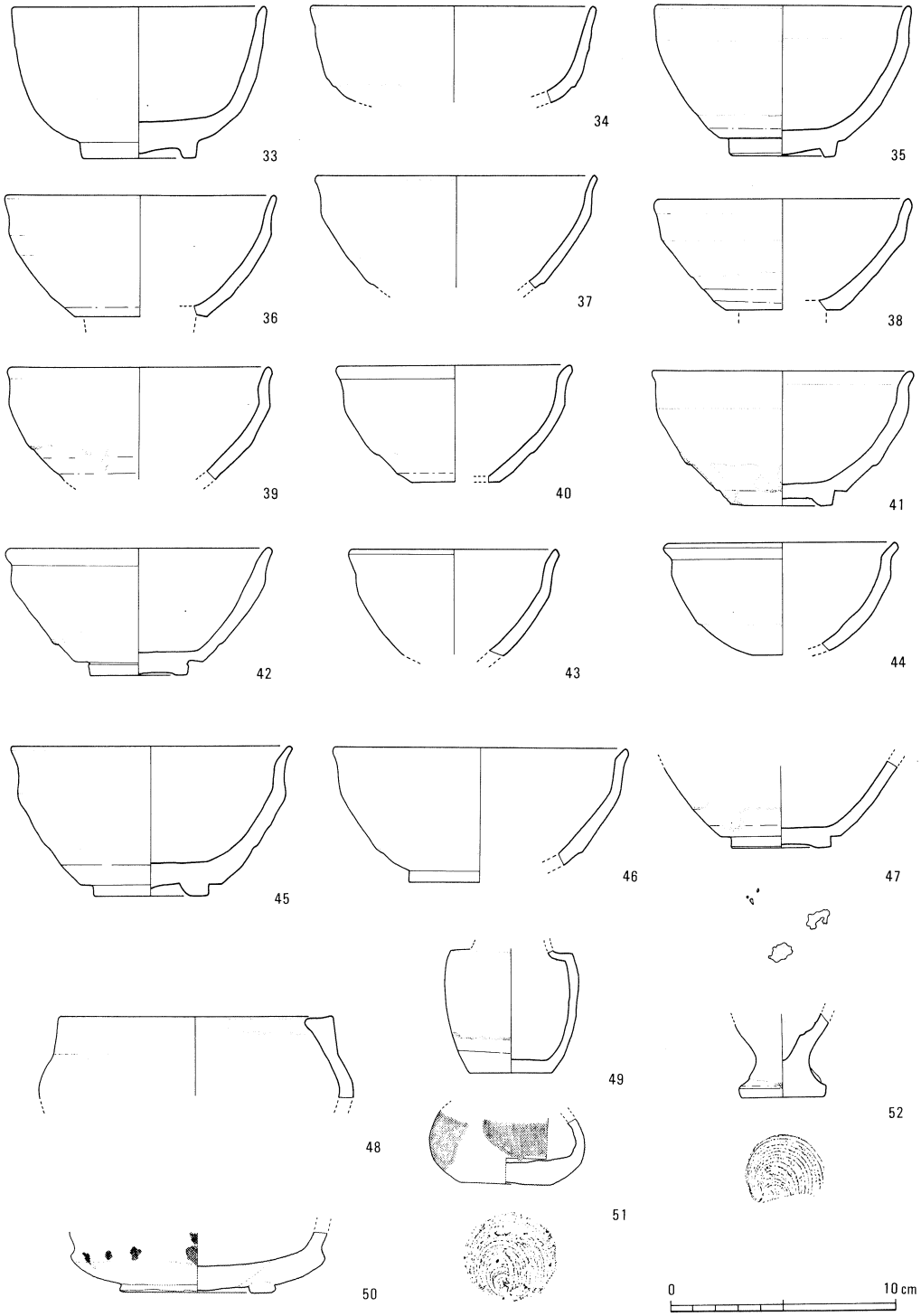
今回の調査において、美濃焼の出土量は相当量に及ぶが、陶磁器全体量からみれば、その割合は僅かである。1～4各層から出土しているが、下層ほど出土量が増える傾向がある。これらの美濃焼は大部分がいわゆる大窯で焼成されたものであり、凡そ室町時代末から桃山時代にかけての生産と考えられる。おそらく桃山末～江戸時代になると、唐津等の九州系陶磁の大量生産の開始と共に、美濃焼の当地方への流通量が激減したのであろう。

参考文献

田口昭二他『大川東窯』岐阜県瑞浪市教育委員会　昭和54年3月



第102図　美濃・瀬戸系陶器実測図（1）



第103図　美濃・瀬戸系陶器実測図（2）

13. かわらけ（第104図～108図　図版57）

数多くのかわらけが出土したが、その大多数が皿である。皿はその形態から、大きく二種に分類が可能である。

A類　底部から口縁にかけてやや内湾気味に立ち上がる浅い皿で、最も一般的にみられる形態である。これらは、底部や口縁部の形態から細分が可能である。

底部からみると、底部中心に外部から凹みをつくったもの（21、31、34、49、83など）底部が平らなもの（1、10、46、70など）、丸底のもの（16、17、30、33、36など）、回転糸切りにより切り放しているもの（5、43、78、116など）の四型式に分類できる。

口縁からみると、内湾気味に端部まで至り先端を円くおさめるもの（1、10、43、50、89など）、端部が内湾気味で内面に段を設けるもの（18、36、45、51、87など）、外反りに開きながら端部に至り、先端を円くおさめるもの（13、41、48、56、78など）に分類できる。

一方、口径の大きさでも概ね三分類できそうである。すなわち、口径がおよそ9㎝以下のもの（1～99）、およそ12㎝以上のもの（92～117）、その中間のものの三種だが、厳密な線引は不可能である。

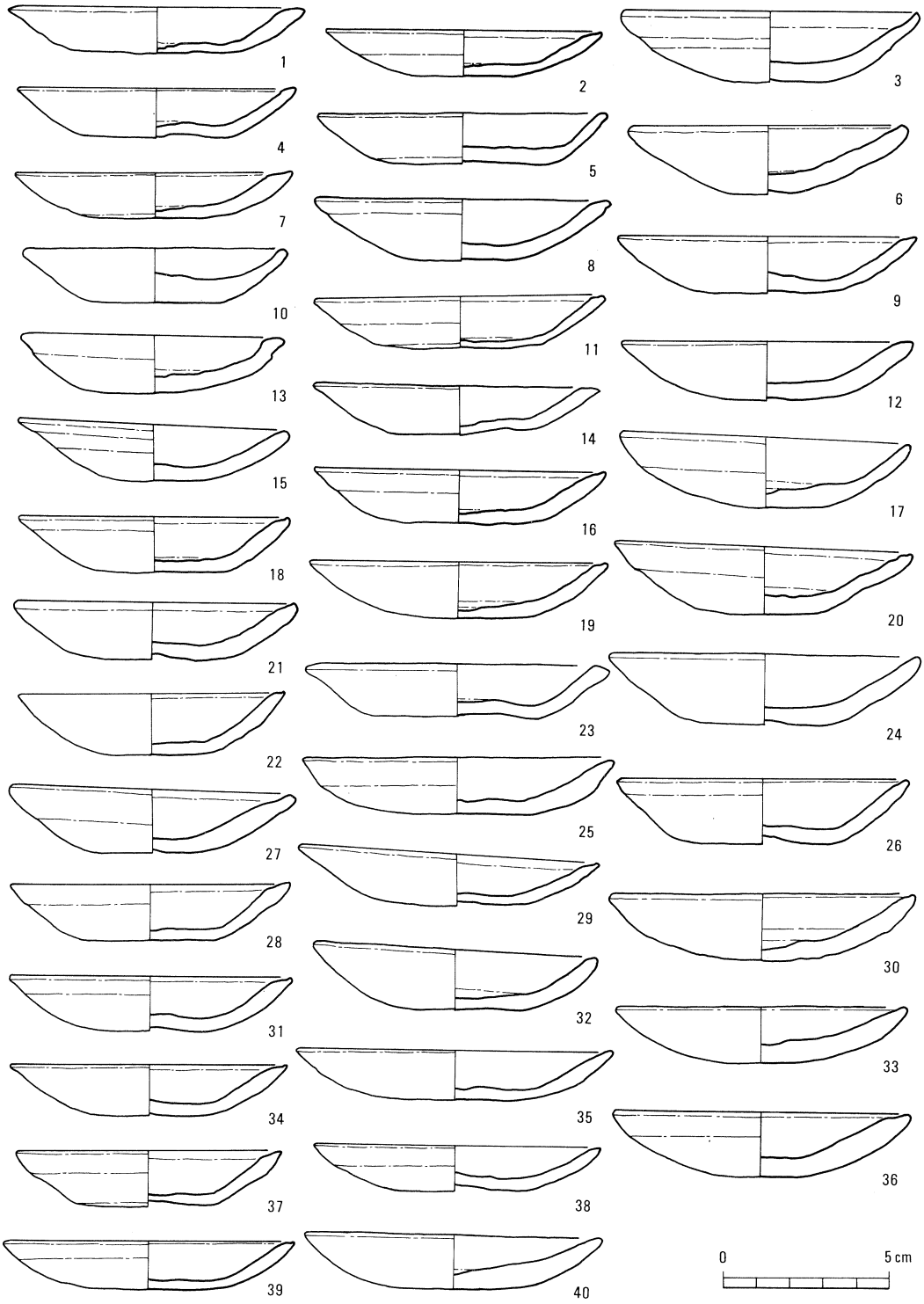
特殊なものとして、87は内面に布目圧痕がみられるが、型によって形作ったと考えられる。また72、99、100、101は、内面底部から口縁にかけて「の」字状に強いナデにより凹めている。灯明の芯を引き出すためのものであろうか。

皿A類はその大部分に、内面底部や口縁部周辺を中心に、ススの付着や油痕がみられる。ほとんどが灯明皿として使用されたらしい。

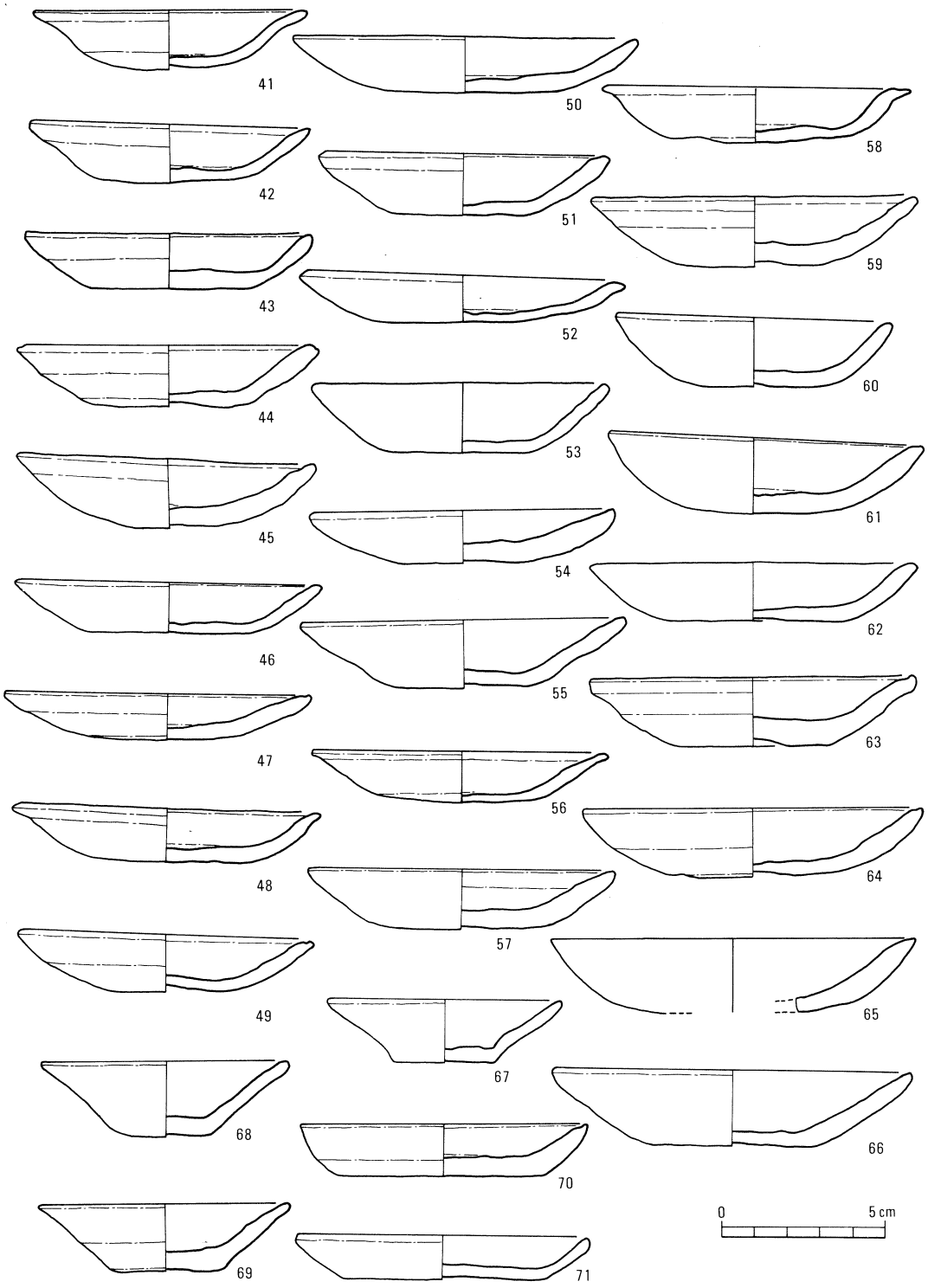
B類　明瞭な底部をもつ深めの皿で、底部から口縁にかけて、やや外湾気味かほぼまっすぐ立ち上がる。口縁端は丸くおさめている。形態、大きさから二種に細分可能である。67～69は非常に小形で、口径に比し底径が小さい。一方、108、110、118は、やや大形で底径も比較的大きい。67、108は静止糸切痕、68、118は回転糸切痕がみられる。

119、120は上記の皿類とはやや異質である。119は全体に分厚で、特に底部が厚く上げ底様である。内面に広い範囲にわたって油痕がみられ、燈明皿か燈明皿をのせる台として利用された可能性がある。120は口径が大きく、底に三足をもつ。内面底部に不定方向のナデを施した後、内外面に回転ナデを施す。香炉等の仏具であろう。

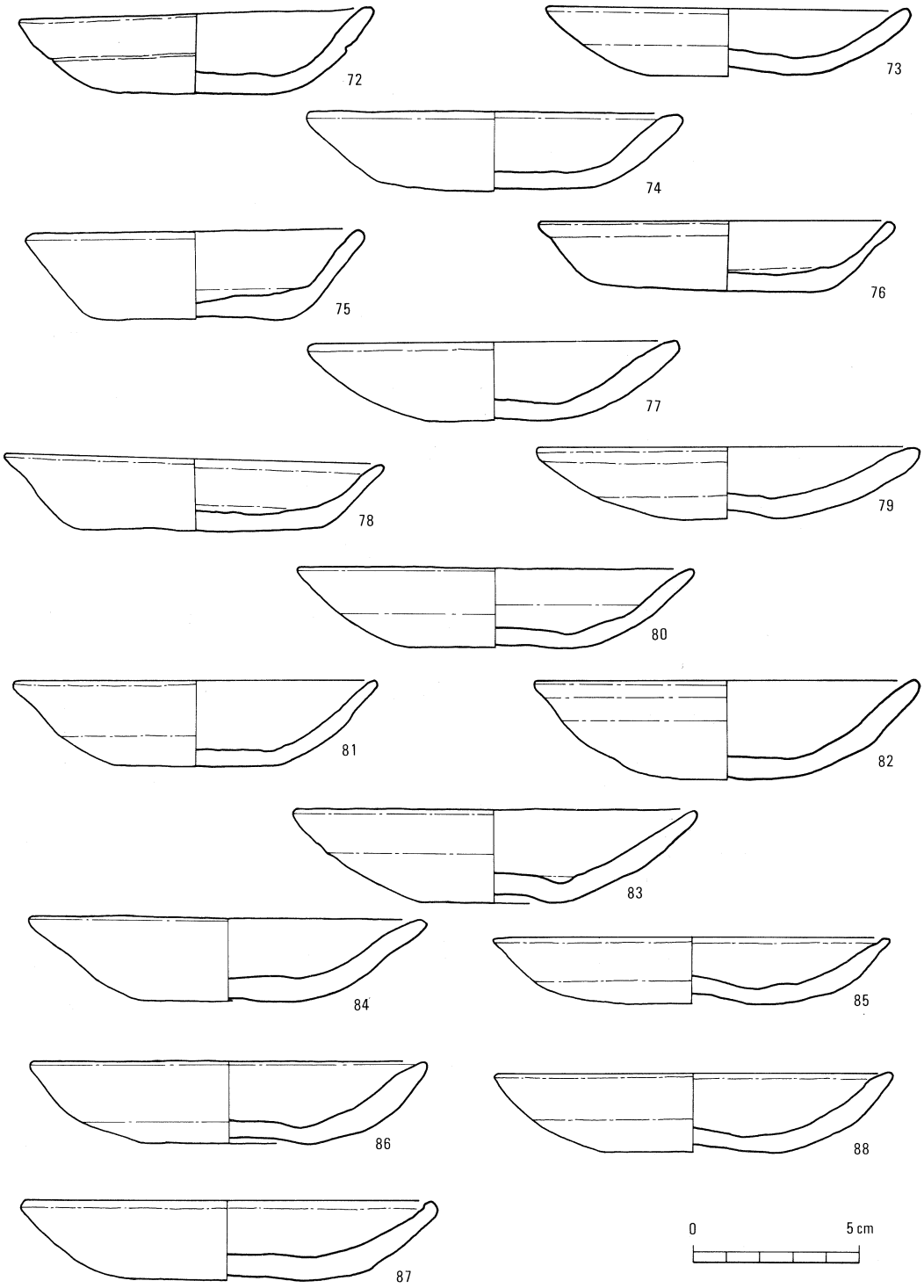
この他に、「壽」等の吉祥句を墨書したかわらけが数片あるが、小片の為図示はしなかった（図版57）。かわらけのほとんどは、内面に黒変した油や燈心が付着しているため、燈明皿として使用されたのであろうが、いくらかは他の目的で作られたものもあった。



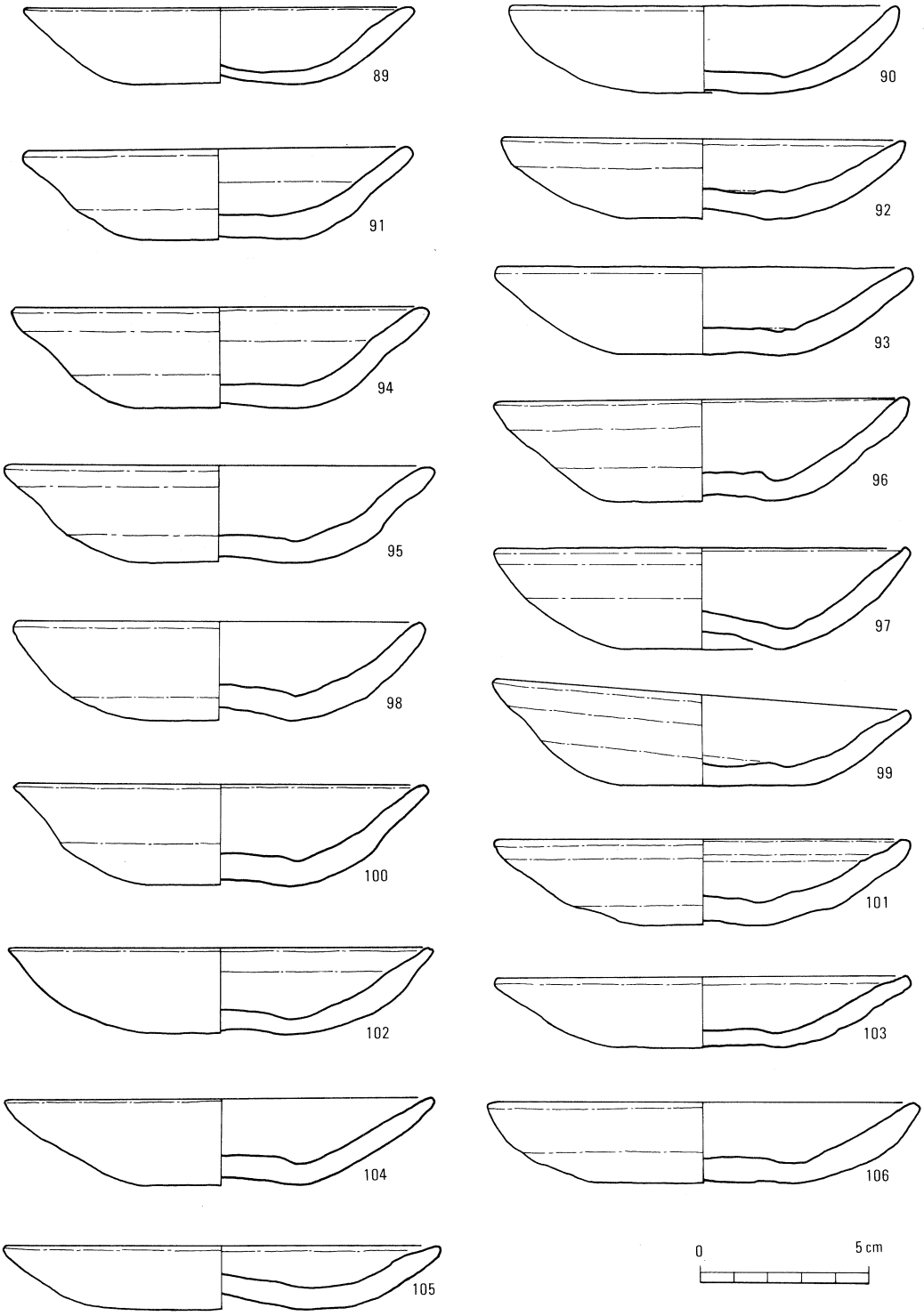
第104図　かわらけ実測図（1）



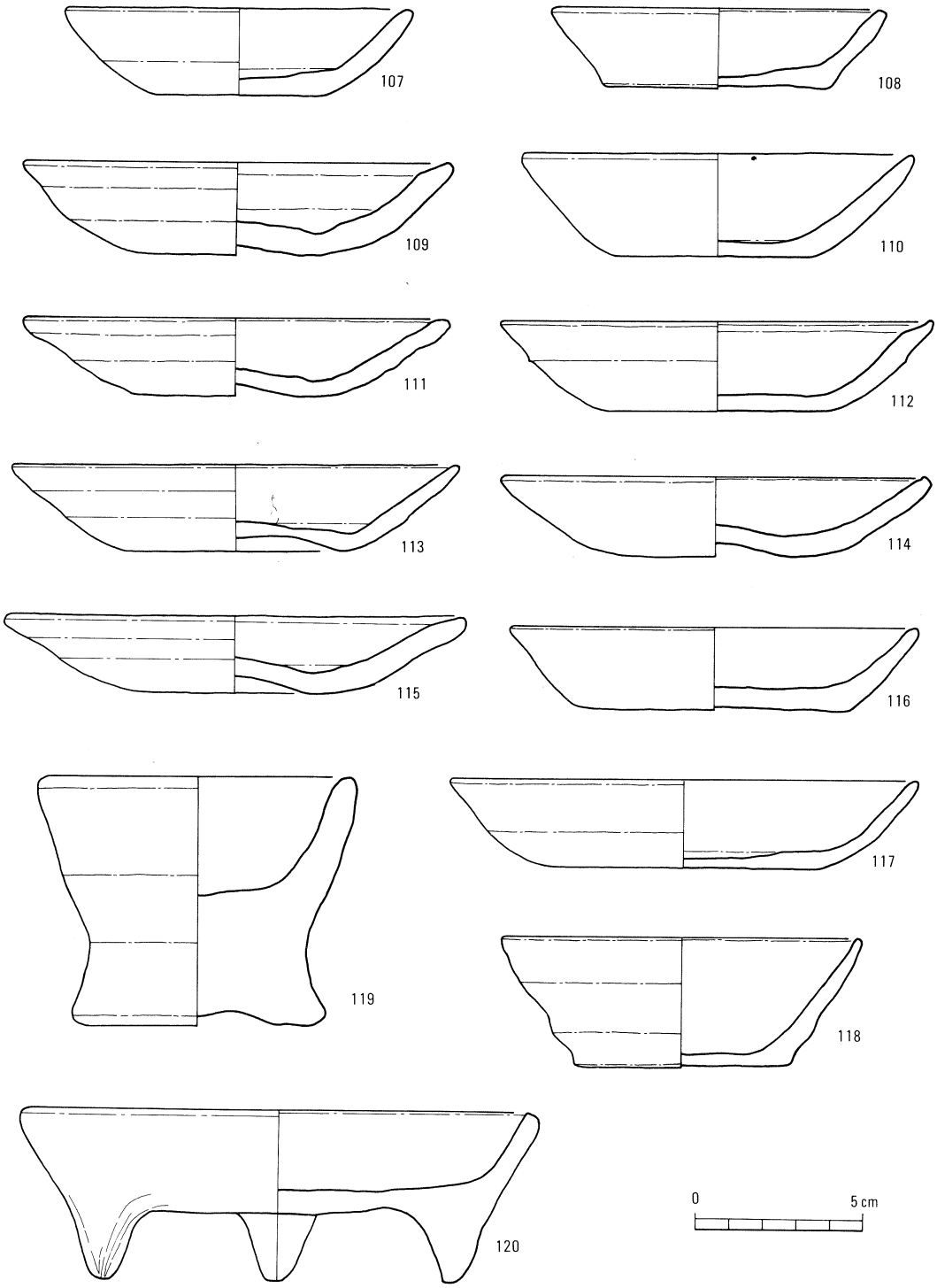
第105図　かわらけ実測図（2）



第106図　かわらけ実測図（3）



第107図　かわらけ実測図（4）



第108図　かわらけ実測図（5）

14. 円盤状土製品（第 109 図～ 114 図　図版58～61）

陶磁器を打ち闕いて円形にしたものを円盤状土製品と仮称することにした。流砂からの出土も含めて合計 106 点ある。個々の計測値と観察は遺物一覧表にまとめた。

利用されている陶磁器は、唐津系、伊万里系、備前、信楽、瓦、中国製陶磁、染付と多彩である。このうち、備前の甕を利用したものが最も多い。Ⅰ、Ⅱ区のどの遺構面からも出土している。

種類は最大径によって、A（2 ㎝以下）、B（3 ㎝以下）、C（4 ㎝以下）、D（5 ㎝以下）、E（6 ㎝以下）、F（7 ㎝以下）、G（8 ㎝以下）、H（9 ㎝以下）の 8 種類に分類した。平均重量は、それぞれ、1.6 g（A類）、10.1g（B類）、22.3 g（C類）、38.9 g（D類）、58.9 g（E類）、83.4 g（F類）、93.5 g（G類）、209.6 g（H類）である。全体の平均重量は 45.6 g である。A類からH類のうち、D類が35個あり最も数が多い。これらの種類によって時期が異なるような出土状態は示さなかった。

この種類の遺物の性格については、これまで不明な点が多い。富田川河床遺跡の周辺遺跡では、史跡富田城関連遺跡の一つ西ノ坊調査区から、B類が 8 個、C類が 1 個まとまって出土している（川原和人他『史跡富田城関連遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会　昭和58年）。西ノ坊調査区からは数棟の掘立柱建物が検出されており、それに伴う円盤状土製品はいずれも備前製のものである。富田川河床遺跡が幾度も水没した城下町である為か、円盤状土製品の出土状態にはまとまりがない。これに対し西ノ坊調査区出土例はこの種の遺物の性格を考えるうえに一つの示唆を与えたものと云える。

円盤状土製品のほとんどは、周辺を打ち掻いたままであり、中には高台を無視して製作されたものもある。(第 111 図69）。周縁が磨滅しているのは僅かに瓦製のもの一例だけであった（第 112 図 85 ）。これについては、他の資料とは別の機能を考えるべきであろう。恐らくほとんどは、図示した状態のままで、それもあまり磨滅することがない方法によって使用されたものと考えられる。また、かわらけ製や、木製のもの等がなく、中には比較的軟弱な唐津系陶器製のものもみられるが（第 109 図 1 ）、多くはある程度の硬度が必要であったと思われる。さらに、あらかじめ、この種のものを目的に製作、焼成したものが皆無であることは、日常生活のうえの必需品ではなかったことを示すものであろう。小形のA類と、大形のH類との間には、約 7 ㎝の差があるが、西ノ坊調査区出土例から類推すれば比較的サイズの近いものどうしを数個から十数個集めて使用されていたことが考えられよう。

15. 瓦（第115図～118図　図版62～63）

巴瓦（第115図1～13、第116図14）　合計14点ありいずれも破片である。瓦当文様は、三つ巴文である。巴の頭部は丸く、尾は長く細くのびるが、それぞれの尾と接しない。外区には巴の周囲に珠文をめぐらし、幅の広い周縁がつく。瓦当の径は約15㎝と推定される。厚さは中央付近で約2㎝を測る。

丸瓦部は厚さ2.4㎝で、凸面はきれいにヘラナデ調整され、凹面には糸切痕と細かな布目痕が残り未調整である。

瓦当面の珠文から、大別すると二種の巴瓦が認められる。A類は珠文が大きくその数が17個のもの（第115図1、2、3、4、5、6、7）である。B類はA類に比較すると珠文が小さく、その数も多いと考えられるものである（第115図9、10、11、12、13、第116図14）。

軒平瓦（第116図15～18）　第116図15は、中心飾りに三角形の塔状の文様を置き、左右には均整唐草文がのびるものの破片である。桑原英二氏分類の第Ⅰ類である（桑原英二『まぼろしの戦国城下町』昭和49年）。16は桐を中心飾りとし、左右に均整唐草文様を配している。桑原分類の第Ⅱ類である（桑原英二前提書）。17、18は瓦当面が剥離したものである。18には接合の為の刻み目がみられる。

熨斗瓦（第117図19～24）　いずれも破片であり全体を知ることはできないが、丸瓦や平瓦にみられるカーブがないことから、熨斗瓦と考えた。

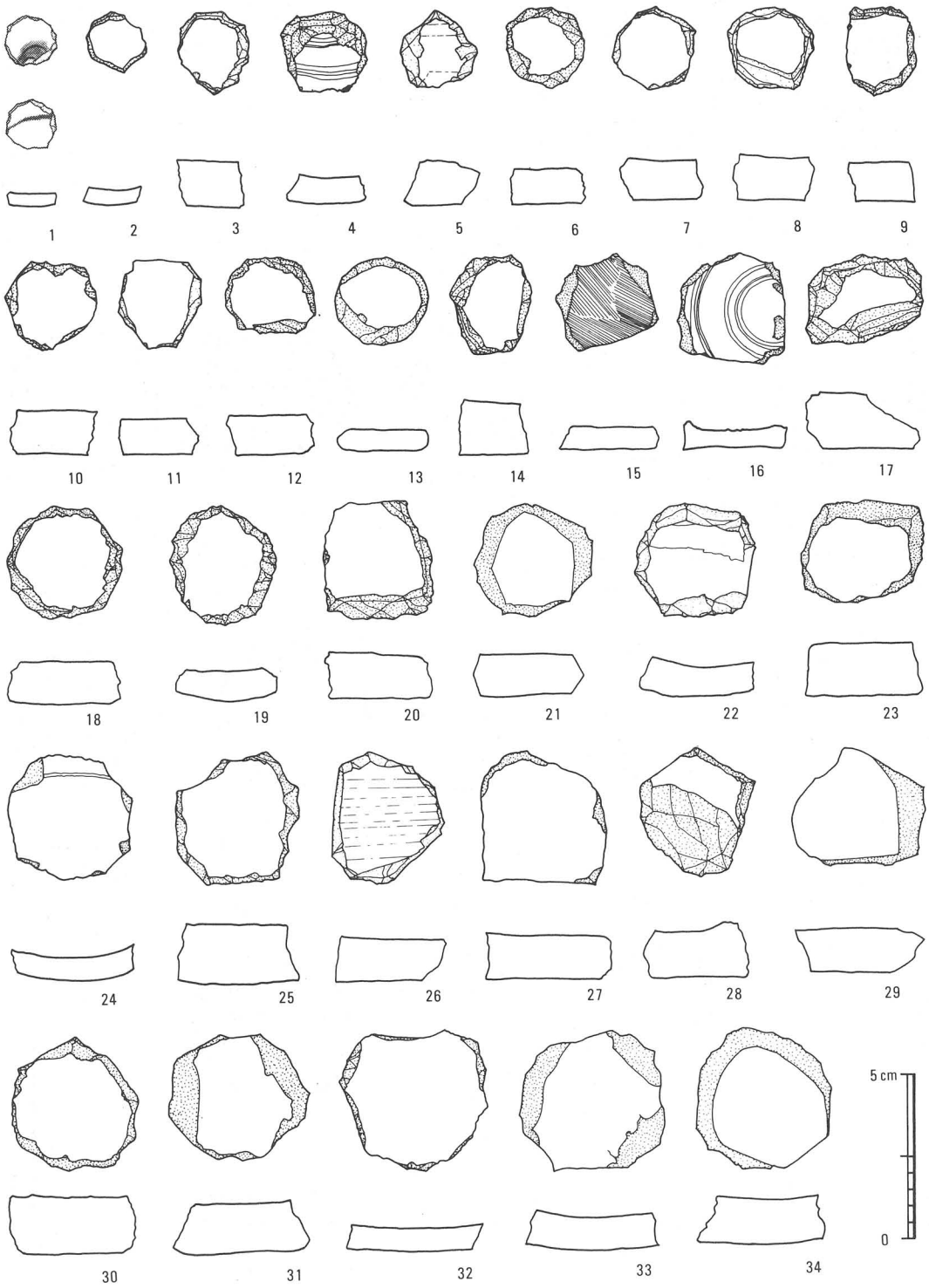
棟込瓦（第117図25）　長さ9㎝、推定幅12㎝、厚さ2㎝を測る。普通の丸瓦を焼成前に切断して作ってある。凸面はヘラナデ調整、凹面は糸切痕、布目痕、また布に縫いつけられていたと思われる紐の痕が残り未調整。棟込瓦のうち輪違いと考えられる。

鳥衾（第117図26）　破片で全体を知ることはできないが、26は鳥衾と考えられるものである。文様はなく周縁も幅約1.2㎝を測る無文のものである。推定径は約16㎝である。恐らく棟の先端の鬼瓦に固定された鳥衾であろう。

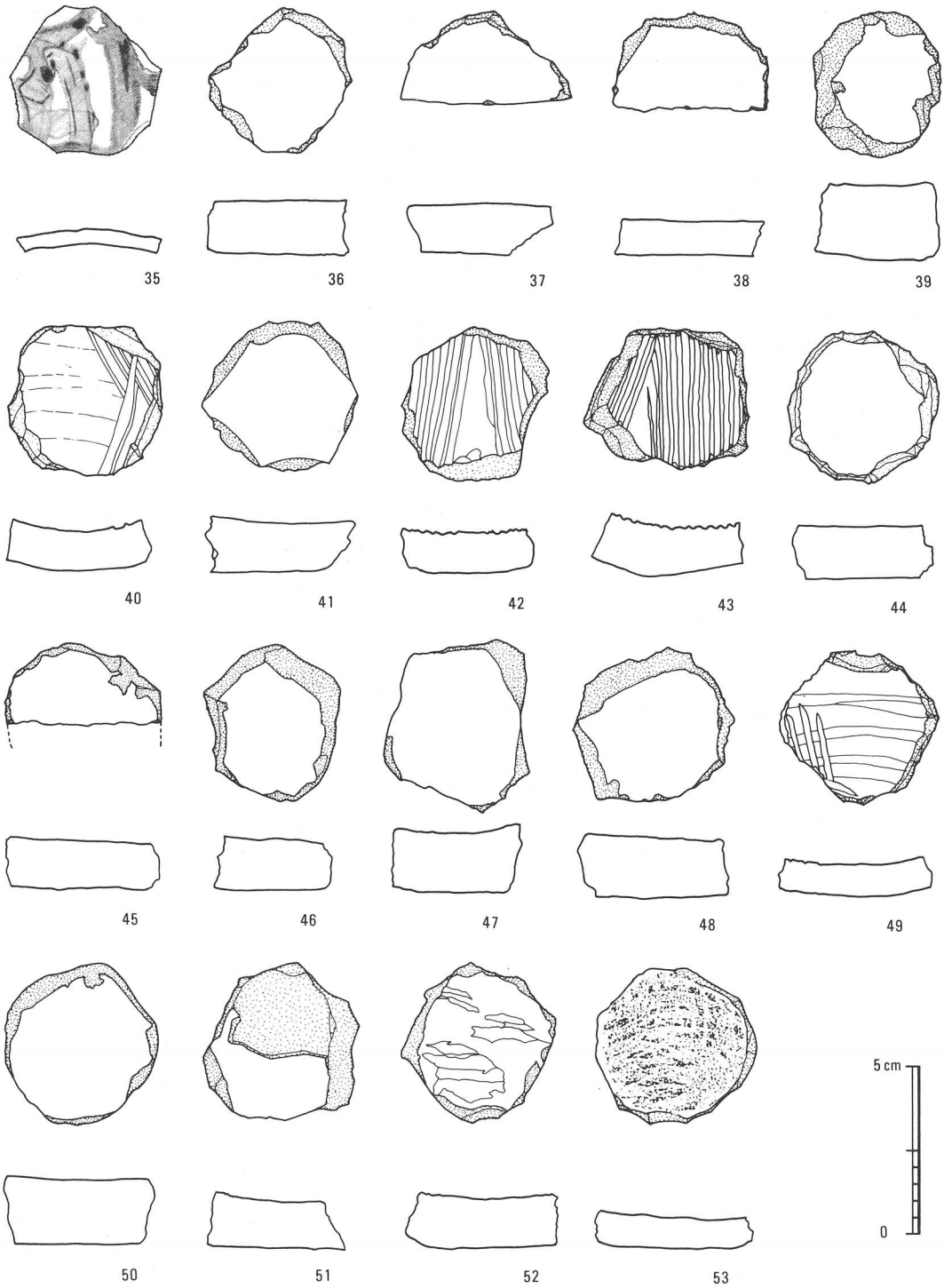
鬼瓦（第117図27）　27は鬼瓦と考えられるものの破片である。厚さは約6㎝を測る。中央を深くヘラ状工具で抉り凹め、無文の周縁を作り出している。下部にみられる半円形のカーブは丸瓦刳りであろう。

打ち闕き面戸瓦（第118図28、29）　28、29はいずれも普通の丸瓦を再利用した打ち闕き面戸瓦である。

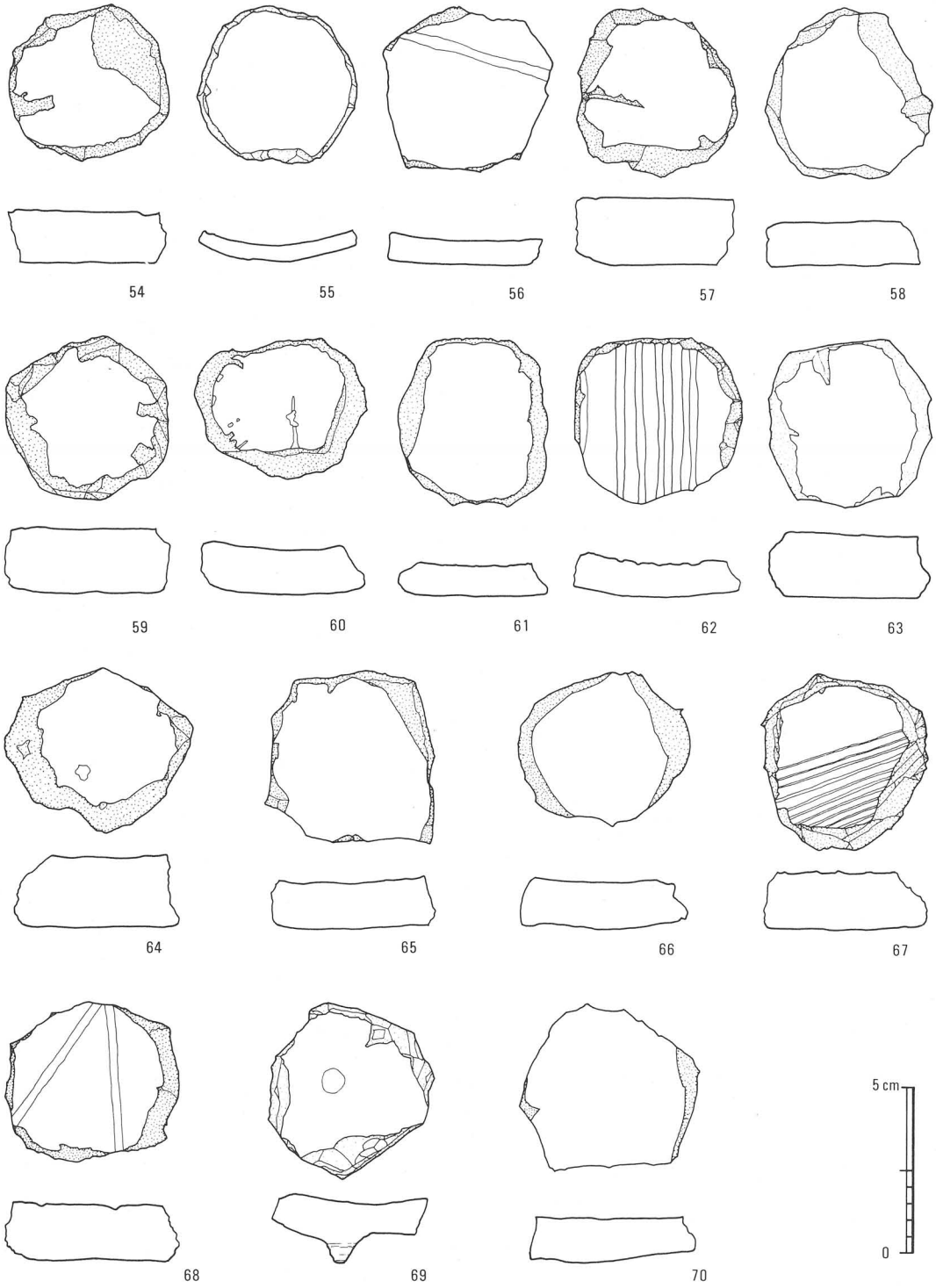
鯱（第118図30）　30は大棟の両端に置かれた鯱と考えられる。顔、ひれ、うろこなどの表現はないが、顔の口の部分であろう。内面に粘土紐を積み上げた痕がみられる。



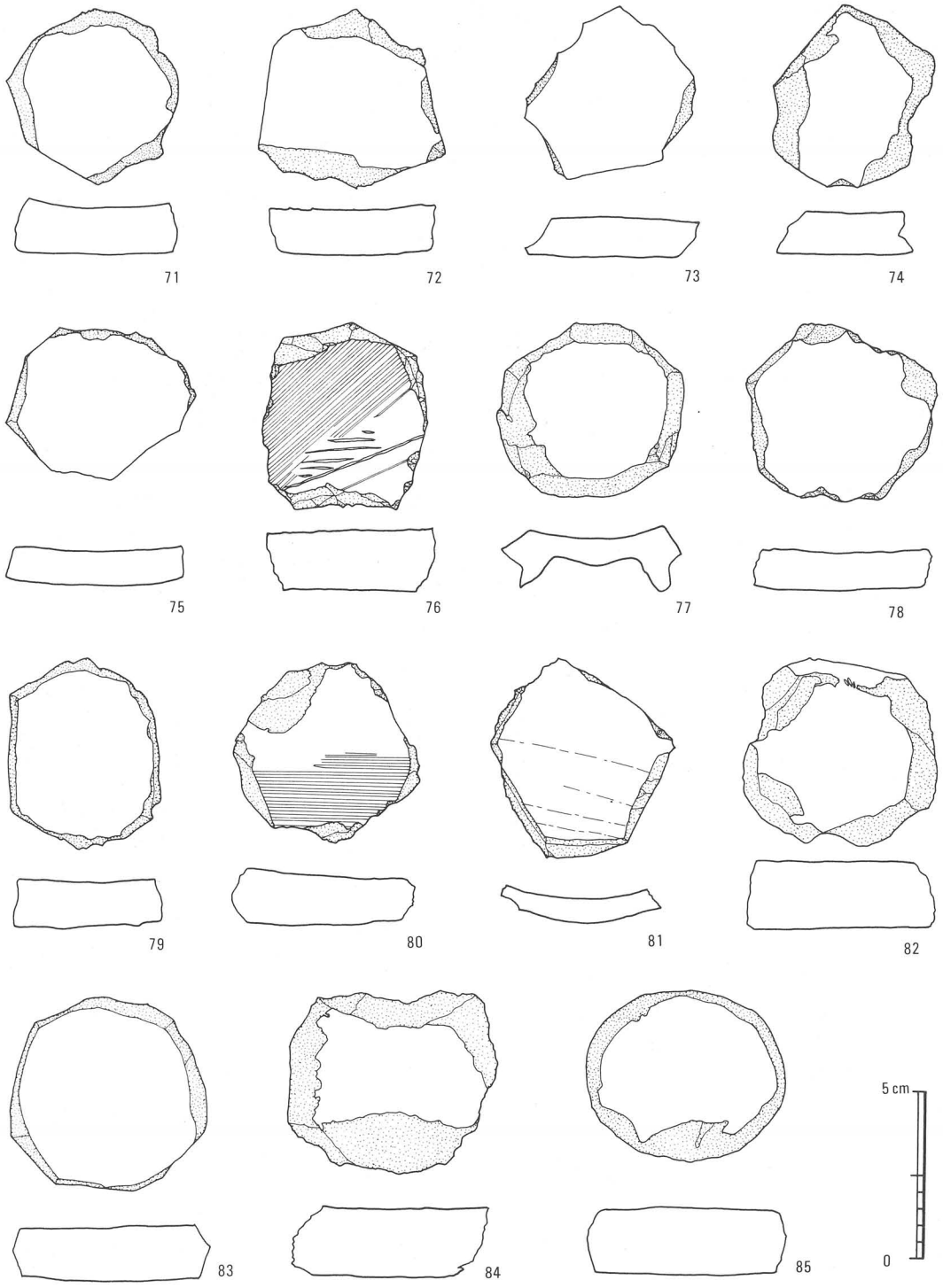
第109図　円盤状土製品実測図（1）



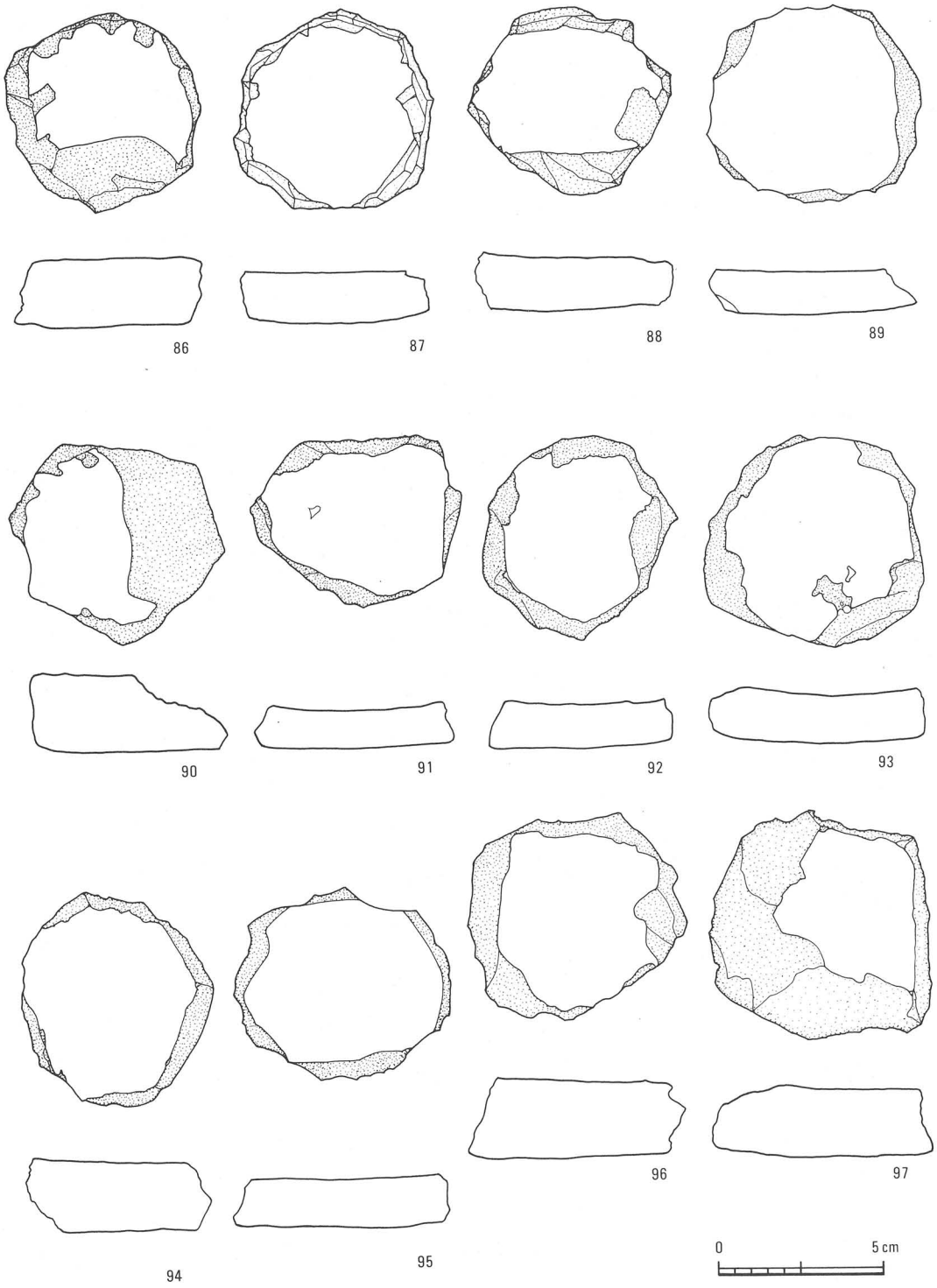
第110図　円盤状土製品実測図（2）



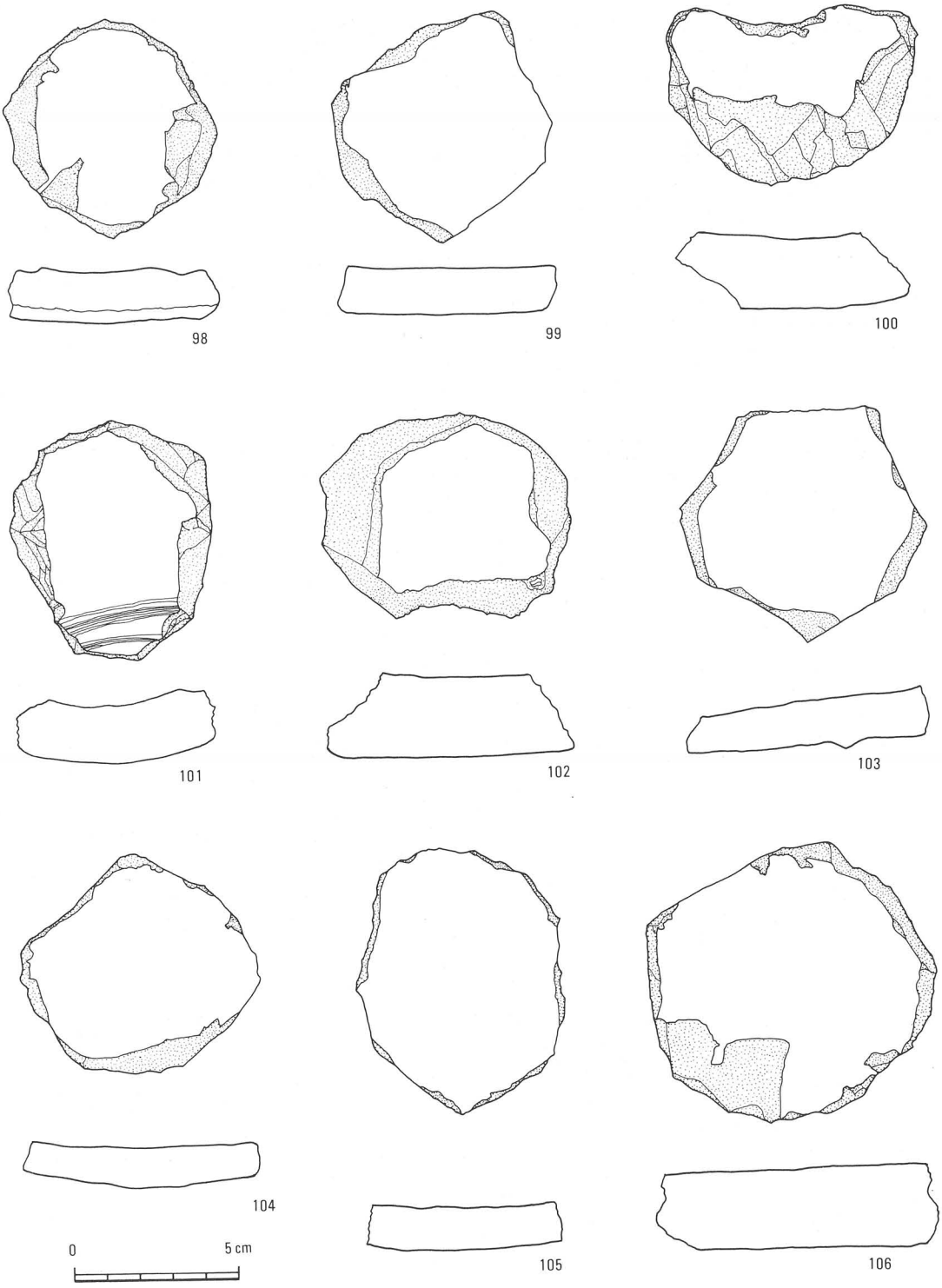
第111図　円盤状土製品実測図（3）



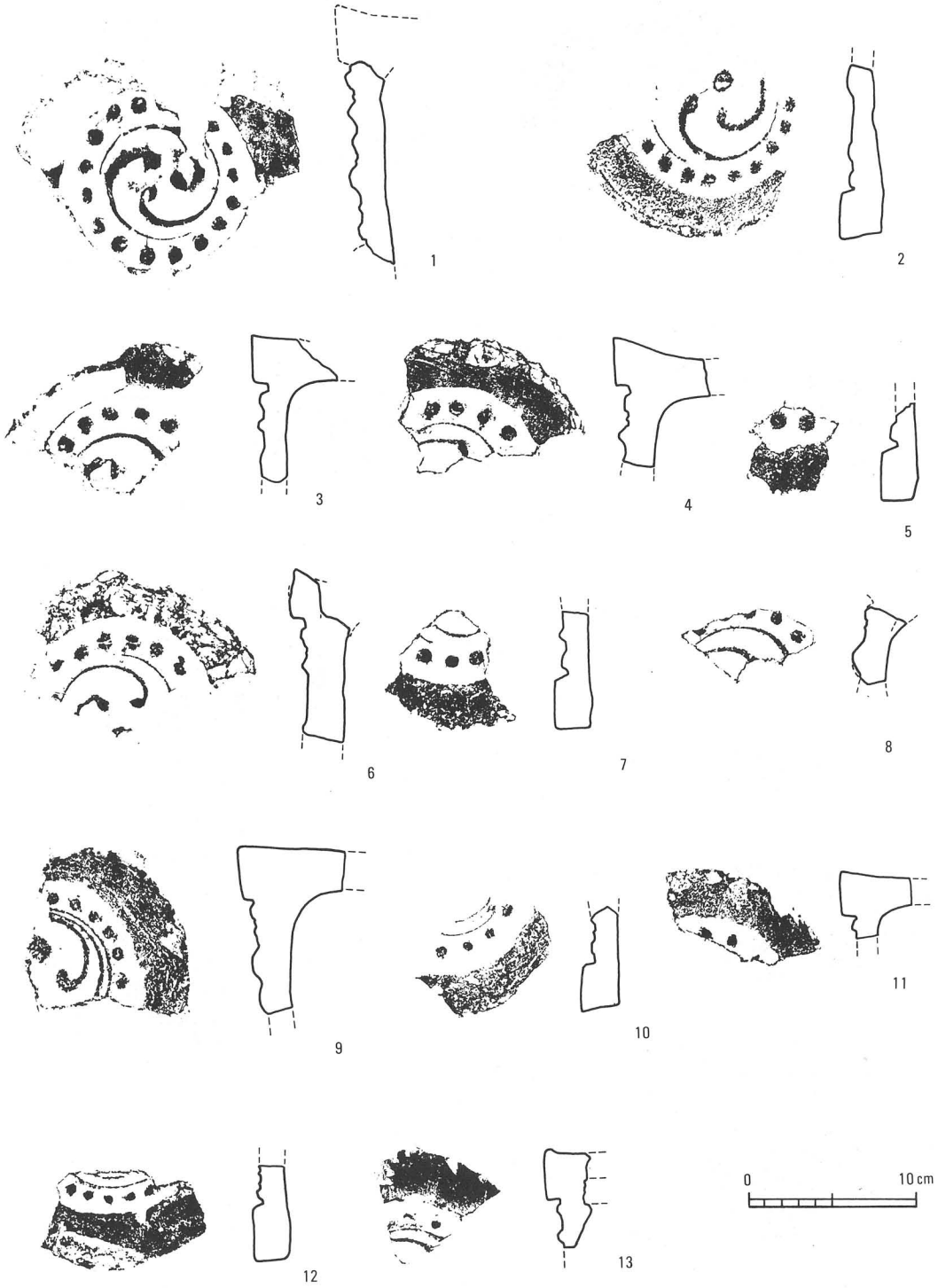
第112図　円盤状土製品実測図（4）



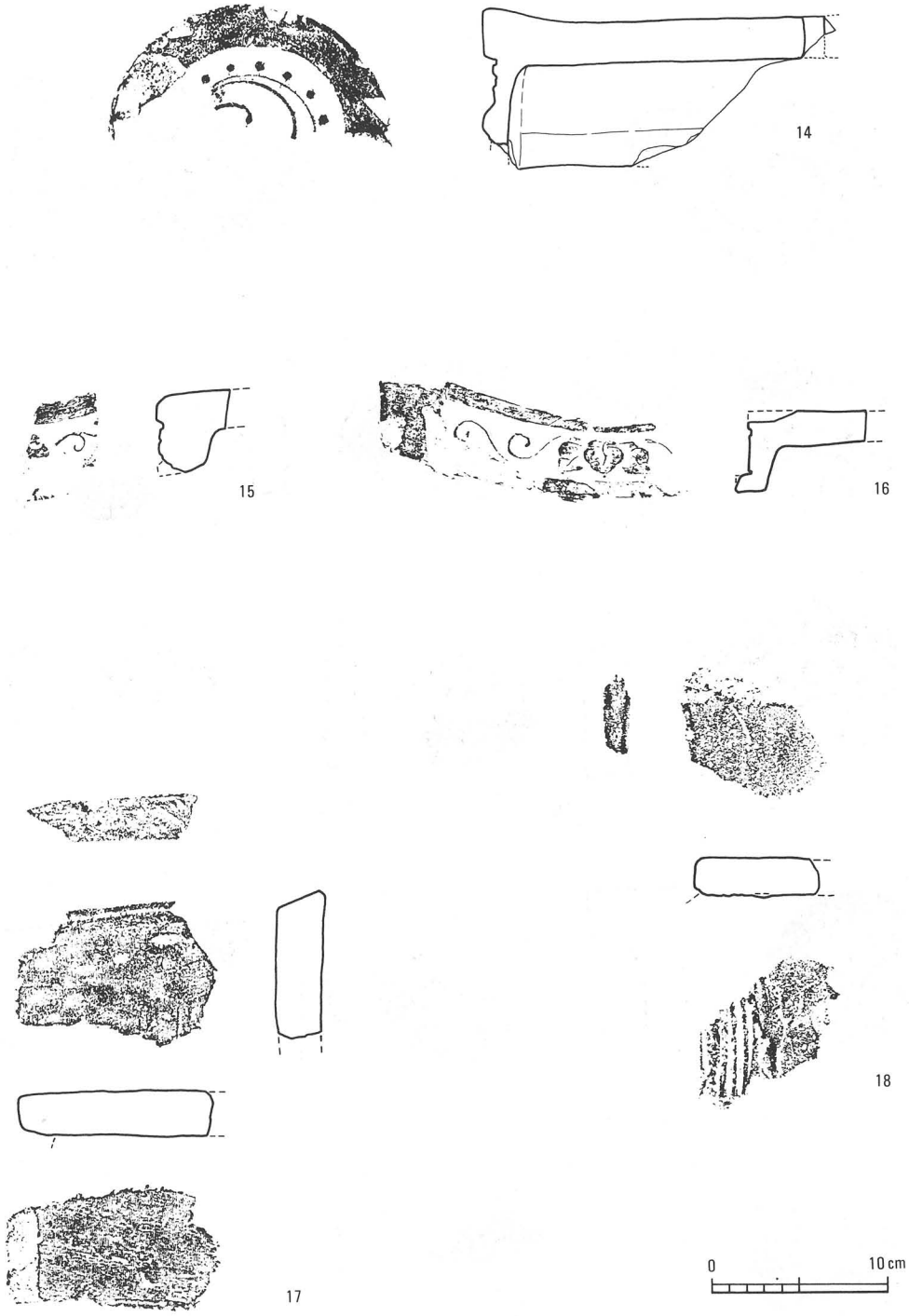
第113図　円盤状土製品実測図（5）



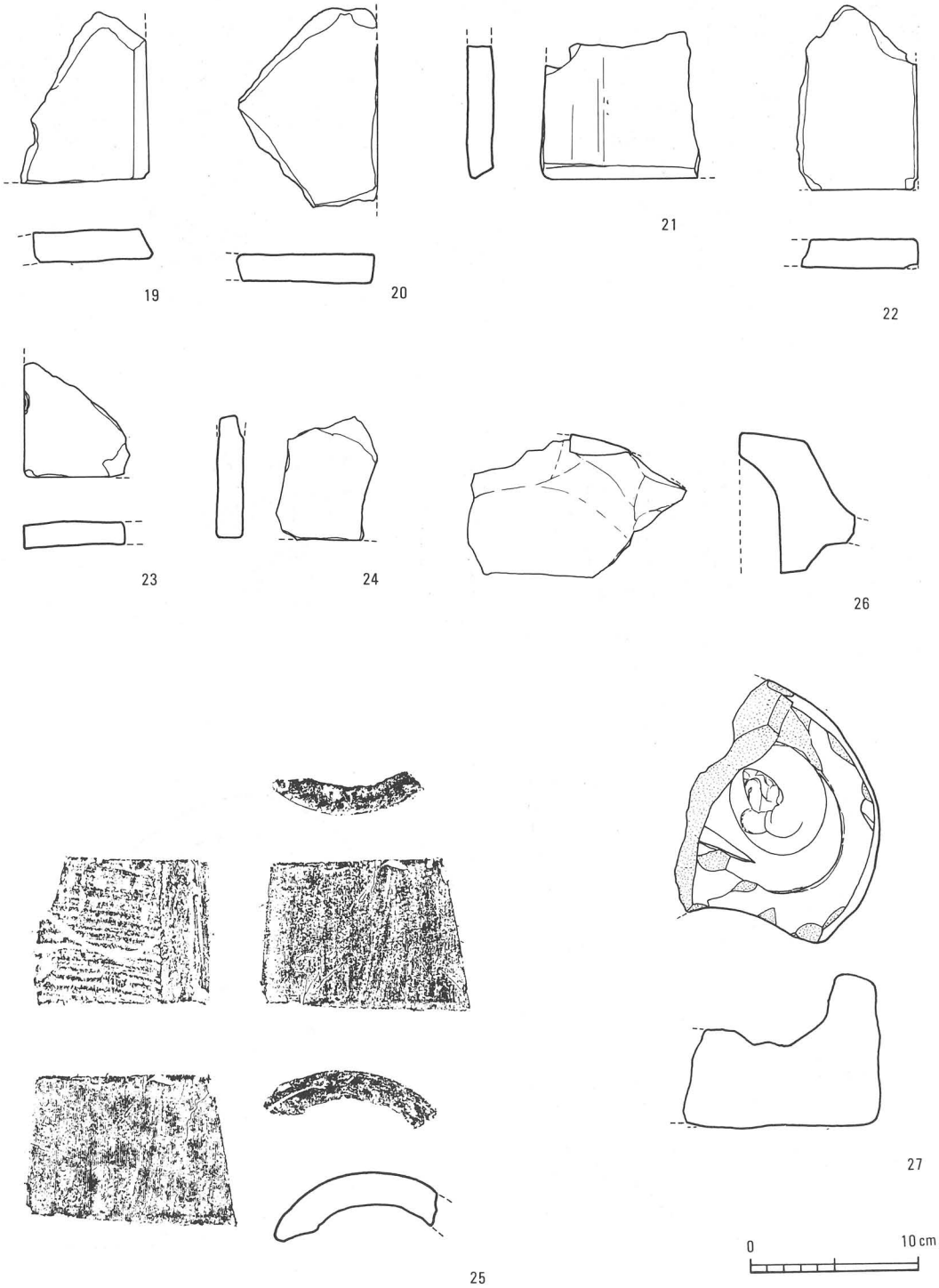
第114図　円盤状土製品実測図（6）



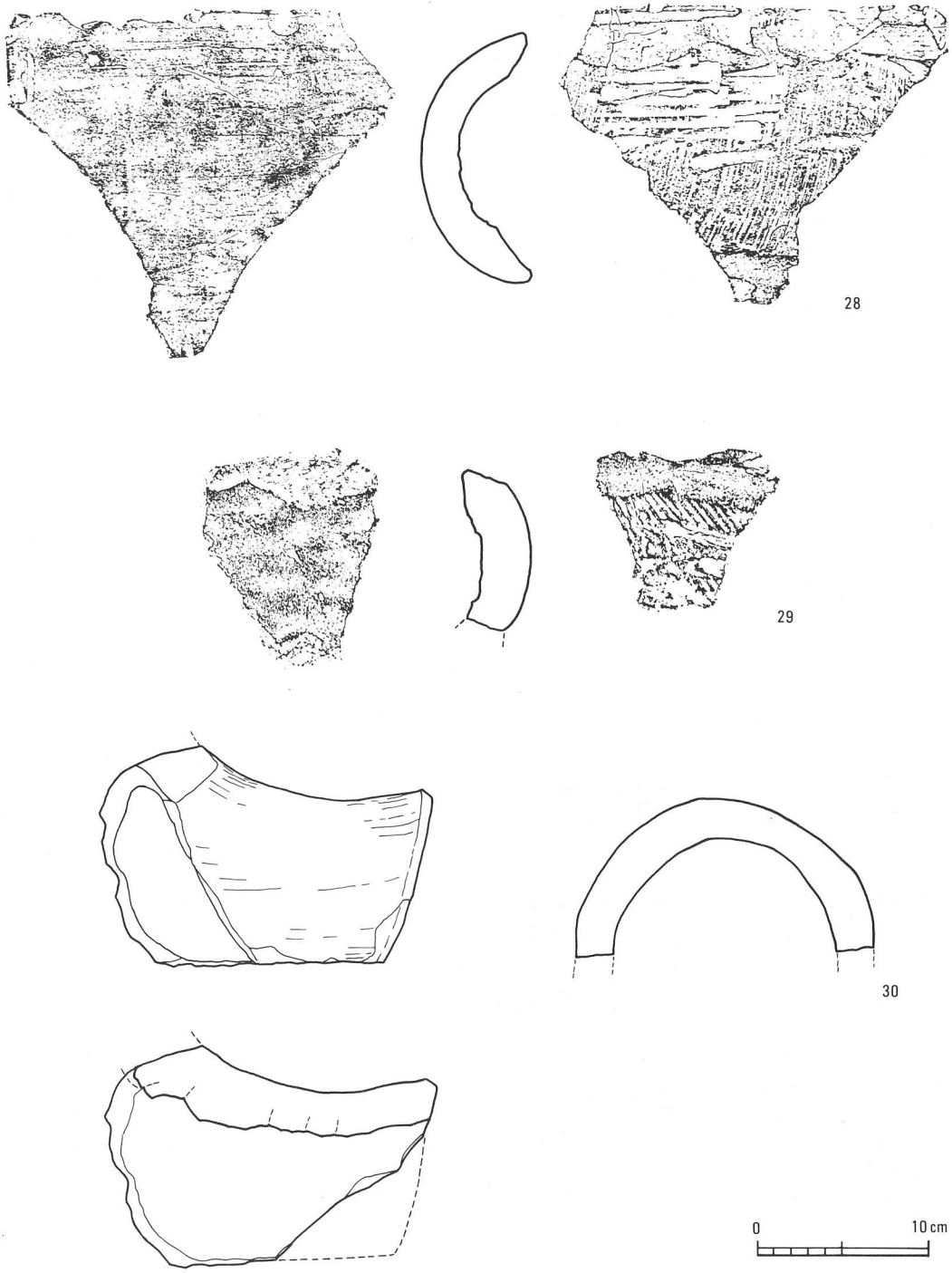
第115図　瓦実測図（1）



第116図　瓦実測図（2）



第117図　瓦実測図（3）



第118図　瓦実測図（4）

16. 火縄式銃砲（第119図　図版64）

第119図は火縄式銃砲である。銃尾を全て失っており、現存部は85㎝を測る。銃身は銃口より13㎝あたりでわずかにくびれている。断面は外側が8角形、銃口の径は1.5㎝ある。銃身の上には目当である照星と照門がつけられている。照星は銃口より1㎝、照門は68.2㎝の位置にある。銃身の側面につけられた火皿は完全なままで残っていて真鍮製である。長さ3.6㎝、幅2.2㎝、厚さ1.6㎝ある。銃身がはめ込まれる木質部の銃床は約73㎝現存する。銃床の下にはカルカを収納する為の径1㎝の孔があけられているが、この部分は下半が失われている。銃身を銃床につなぎ留めるシノギ目は4ケ所ある。それぞれのシノギ目の中央までの間隔は19.2㎝の等間隔である。シノギ目の金具は真鍮製で径は1.2㎝である。

銃口の径からこの火縄銃に使用される弾丸は推定すれば、五匁玉ということになる。鉛の弾丸は県内ではこれまで富田川河床遺跡、鹿足郡六日市町河床遺跡等からの出土例がある。

以上の様な火縄式銃砲の特徴は、和製であり、その製造年代は慶長の中頃（1605年前後）から元和（1615～1623年）ごろの間と考えられるものである。この火縄式銃砲の形態からみた年代観は、本年度調査区出土の他の遺物のそれと矛盾するものではない。

参考文献

(1)　所　荘吉『図解古銃事典』昭和46年

(2)　卜部吉博他『中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和55年3月

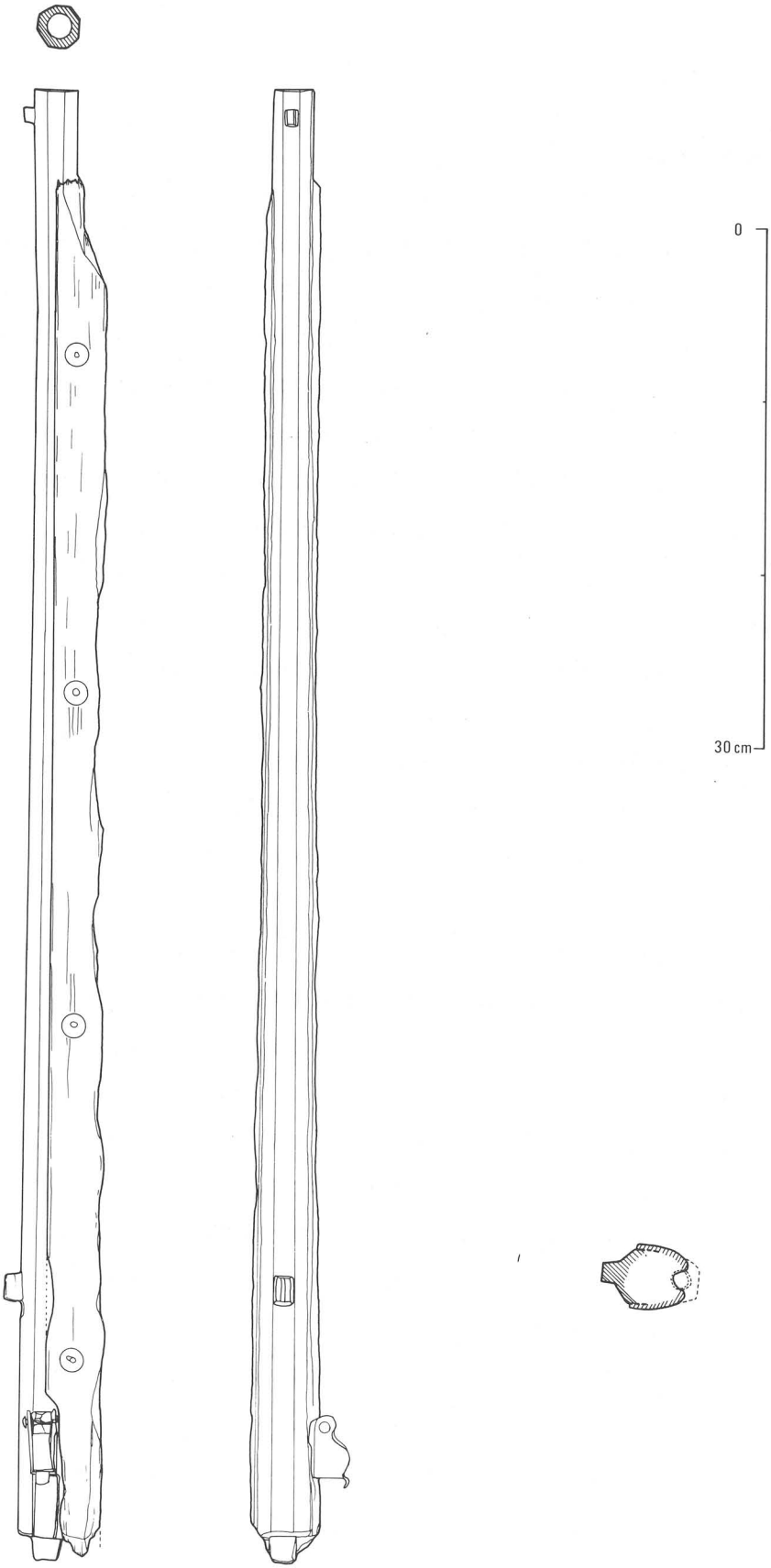
(3)　内田律雄『富田川河床出土の鉄砲』『八雲立つ風土記の丘』昭和55年3月

17. その他の遺物

ルツボ　第29図25～31はルツボと考えられる遺物である。大別してA・B・Cの三種ある。A類は、口径に対し器高が低く単純な口縁を呈するもの（25、26、27、28）、B類は器高が高く、口唇がわずかに外反するもの（29）、C類は底部に撮み状の突起がつくもの（30、31）である。C類の突起は恐らく火箸等ではさむよう工夫されたものと思われる。いずれも赤褐色の溶解物が付着している。

以上の他、瓦器の小破片が少量出土している。土鍋等の破片と思われるが図示できなかった。

また、本年度の調査では、獣骨類、魚介類も出土した。主なものは、ニシ類、サザエ、サルボウ、シジミ、イヌ、イノシシ等がある。これらについての詳しい同定は別に報告する予定である。



第119図　火縄式銃砲実測図

Ⅶ 小　　結

昭和57年度の富田川河床遺跡発掘調査の概要は以上に述べたごとくである。最後に、この度の調査結果を踏まえて、発掘調査区内の遺跡の年代について若干の考察を行ない結びとしたい。

まずⅠ区についてであるが、第1遺構面～第3遺構面で、それぞれ建物跡やそれに関係する石列が検出された。それらは、層位や、遺構の位置は少しずつ異なるものであるが、遺構の方向はほぼ同じであった。それぞれの遺構の方向は前年度（昭和56年度調査区）調査区上流側で検出されたそれの方向と一致しており、関連した遺構群であることが知られる。

Ⅰ区の第1遺構面、及び第1・第2遺構面間層から出土した、最も新しい時期の遺物である伊万里系磁器をみると、凡そ、1630年～1660年代の間に生産されたものであり（第86図1、19、24、37）、遺構の年代の下限はほぼその頃と考えられよう。最上層である第1遺構面出土の伊万里系磁器の中に、この時期を下る資料がみられないことは、寛文6年（1666年）の大洪水と年代的に符合する。

Ⅰ区の年代の上限は、第3遺構面の構築土から出土した和製火縄式銃砲によって推定することができる。すなわち、出土した火縄銃の形式は、その製造年代が慶長の中頃から元和年間（1605年前後から1623年）にかけてのものと考えられるからである。従って、第3遺構面の年代はそれ以降に限定される。第3遺構面より下層では伊万里磁器が出土していないので、Ⅰ区の各遺構面の年代は凡そ次のようになる。

第1遺構面 ―― ｝ 1630年頃～1666年（寛文6年）
第2遺構面 ―― ｝

第3遺構面 ―― 1605年頃～1630年前後

Ⅱ区は、上流側において比較的保存状態良好な土層を確認することができた（第25図）。上層より第1遺構面～第4遺構面として呼び、それぞれの遺構面に建物跡や、それを区画したと思われる石列・杭列・溝、井戸等を検出した。さらに、第2遺構面と第3遺構面の間には、寛文6年（1666年）以前の洪水によると考えられる流砂が流れ込んでいるのを確認した。

Ⅱ区においては、本来ならば、Ⅰ区、或いは昭和55年度、56年度調査区、また、広瀬町教育委員会によって昭和49年から3ケ年にわたり行われた新宮橋下流調査区等で発見され

たような掘立柱建物跡や礎石、道路、溝、石列等が残存していたとも思われるが、同様で良好な遺構は検出できなかった。建物を区画していたと考えられる石列は、多くの部分が欠落し、遺構そのものが全くみあたらなかったところも多く、寛文6年の大洪水以外にも度重なる大小の洪水や増水があったことが想像された。また、石列とは別に平地を区画する杭列やしがらみ状遺構が多く検出されたのもⅡ区の特徴である。さらに、特に第3・第4遺構面でみられたように、矩折状に連なった石列は、月山々裾に近いⅡ区の町並が、自然地形にかなり制約されていたことを推測させるものであった。これらのことは、Ⅱ区に明確な建物跡が少なかったこととともに、富田城下町の全体像を復元するうえに新しい知見となりうるであろう。

Ⅱ区では第2遺構面と第3遺構面の間に存在する流砂（第3遺構流砂）を界にして、遺構・遺物が異なった様相を示した。遺構は第2遺構面の上に第1遺構面が、第4遺構面の上に第3遺構面が連続して構築されており、どちらの遺構面にともなう石材なのか不明確な部分のある石列もみられた。遺物で特徴的なのは、伊万里系磁器が第3・第4遺構面からは出土しなかったことである。第1、第2遺構面、及び第3遺構流砂出土の伊万里系磁器をみると、概ね、1630年代から1660年代にかけての年代幅におさめることができ、それ以降に下る資料はみられない。Ⅰ区と同様にⅡ区の年代の下限は、寛文6年（1666年）としてよかろう。このことは他の遺物の出土状況とも矛盾するものでない。また、第4遺構面の構築土から出土した遺物の中で最も新しい年代を知ることのできる資料である、例えば第49図16の中国製染付をみると、16世紀末～17世紀初頭に製作されたものと考えられるので、最下の遺構を凡そ1600年前後として大差なかろう。さらに、1600年以降、1666年以前の洪水の記録は、寛永12年（1635年）に一度みられ、第3遺構流砂を、各遺構面のありかたからもこれにあてることができ、肥前有田の磁器が全国的に流布しはじめるのが1630年代とされていることともよく符合する。このような年代観からⅡ区の各遺構面は次のように考えることができる。

第1遺構面――1666年（寛文6年）～1640年前後

第2遺構面――1640年前後～1635年

第3遺構流砂――1635年（寛永12年）

第3遺構面――
第4遺構面――　}1635年～1600年前後

以上のことから、富田川河床遺跡における昭和57年度調査区である、Ⅰ区、Ⅱ区は、少なくとも慶長以降に計画された町並であることが窺える。

遺　物　一　覧　表 (1)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
45	26－1	須恵器蓋坏身	最大径 14 cm 器高 4.5 cm	Ⅱ区最下層試掘坑	K
	〃－2	〃		Ⅱ区第三遺構流砂	K－7
	〃－3	〃		Ⅱ区最下層試掘坑	K－9
	〃－4	須恵器坏	高台径 10.0 cm	流砂	K－6
	〃－5	有孔円盤	径 1.8 cm 厚さ 0.8 cm	Ⅱ区ＳＤ０２	K石－3
	〃－6	小形手捏土器	最大径 2.7 cm 器高 1.8 cm	Ⅱ区第三遺構流砂	R－82－2
	〃－7	土師器把手		Ⅱ区最下層試掘坑	K－3
	〃－8	土師器甕		〃	K－8
	〃－9	甑底部	最大径 34 cm	〃	K－4
	〃－10	土師器口縁	口径 20.5 cm	〃	K－5
46	27－1	宝篋印塔九輪	長さ 36.6 cm	Ⅱ区ＳＤ０１	ＳＲ－1
	〃－2	茶臼		Ⅱ区第１遺構	ＳＲ－3
	〃－3	五輪塔地輪	19.4 × 20 cm	流砂	ＳＲ－2
47	28－4	砥石	長さ 27 cm 厚さ 6 cm	Ⅱ区ＳＸ０１	Ｋ１－1
	〃－5	砥石		Ⅱ区ＳＢ０４	Ｋ１－2
	〃－6	〃	7.7×4.4 cm 厚さ 2.5 cm	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－68
	〃－7	〃	10.5×4.0 cm 厚さ 3 cm	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－67
48	29－8	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－75
	〃－9	〃		〃	ＫａＴ－74
	〃－10	〃	幅 3.4 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－69
	〃－11	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－76
	〃－12	〃	厚さ 0.6 cm	Ⅱ区ＳＢ０１	K－3
	〃－13	〃	幅 4.6 cm	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－78
	〃－14	〃	幅 4.2 cm	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＴ－72
	〃－15	硯	幅 5.9 cm 厚さ 1.1 cm	Ⅱ区ＳＤ０１	K－1
	〃－16	〃	厚さ 1.6 cm	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－70
	〃－17	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－71
	〃－18	〃	幅 5.7 cm 厚さ 1.0 cm	Ⅱ区第三遺構流砂	ＫａＴ－65
	〃－19	〃	厚さ 0.5 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－66
	〃－20	〃		Ⅱ区ＳＸ０４付近	K－2
	〃－21	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－77
	〃－22	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－79
	〃－23	〃	幅 4.6 cm 厚さ 0.6 cm	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－73
	〃－24	〃	幅 4.7 cm 厚さ 0.8 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－64
	〃－25	坩堝	径 4.3 cm 高さ 1.4 cm	Ⅱ区第三遺構流砂	ルツボ－3
	〃－26	〃	径 6.3 cm 高さ 2.0 cm	Ⅱ区ＳＡ１１下層	ルツボ－1
	〃－27	〃	径 7.2 cm 高さ 2.5 cm	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ルツボ－7
	〃－28	〃	径 7.0 cm 高さ 2.4 cm	Ⅱ区第３遺構流砂	ルツボ－2
	〃－29	〃	径 8.3 cm 高さ 4.4 cm	Ⅱ区ＳＸ０５	ルツボ－5

遺　物　一　覧　表 (2)

P	番　号	種　　類	特　　徴	出　土　遺　構	備　　考
48	29－30	坩堝	径 5.1 cm　高さ 3.1 cm	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ルツボ－6
	〃－31	〃	径 5.6 cm　高さ 3.6 cm	Ⅱ区最下層	ルツボ－4
	〃－32	和鏡	径 11.2 cm　菊花雙鶴文	Ⅱ区ＳＢ１１	
49	30－1	鍋把手			ＦＫ８
	〃－2	鍬先	長さ32 cm　最大幅14.5 cm	Ⅱ区第３遺構流砂	ＦＫ１
	〃－3	鉈	長さ 26 cm　幅 5.5 cm	Ⅱ区ＳＸ０５	ＦＫ７
50	31－4	飾り金具		Ⅱ区ＳＸ０５	ＦＫ 25
	〃－5	〃		Ⅱ区ＳＤ０１	ＦＫ３
	〃－6	滑車	径 2.0 cm　厚さ 0.6 cm	Ⅱ区ＳＤ０４	ＦＫ 20
	〃－7	釘	幅 0.6 × 0.6 cm	Ⅱ区ＳＡ１１下層	ＦＫ９
	〃－8	〃	幅 0.3 × 0.4 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＦＫ 13
	〃－9	〃	長さ 7.5 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＦＫ 16
	〃－10	〃	0.3 × 0.4 cm	〃	ＦＫ 16
	〃－11	〃	幅 0.4 × 0.6 cm	Ⅱ区ＳＡ０２	ＦＫ 10
	〃－12	〃	長さ 9.5 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＦＫ 18
	〃－13	不明	長さ 7.5 cm	Ⅱ区ＳＸ０８	ＦＫ 24
	〃－14	〃	長さ 5.3 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＦＫ 16
	〃－15	〃	長さ 12.0 cm	Ⅱ区第２遺構覆土	ＦＫ 17
	〃－16	〃	長さ 9.0 cm	Ⅱ区第３遺構覆土	ＦＫ 23
	〃－17	煙管	長さ 7.4 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＦＫ 20
	〃－18	〃	長さ 6.0 cm	Ⅰ区第１遺構面	ＦＫ 19
	〃－19	〃	長さ 5.4 cm	Ⅱ区第２遺構覆土	ＦＫ 17
	〃－20	〃	長さ 2.7 cm	Ⅱ区ＳＤ０１	ＦＫ 21
	〃－21	〃	長さ 4.7 cm	Ⅱ区ＳＡ０８	ＦＫ５
	〃－22	〃	長さ 5.4 cm	Ⅰ区Ｎａ２２	ＦＫ 12
	〃－23	〃	長さ 4.1 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＦＫ 20
	〃－24	胄	飾り金具　長さ 10.2 cm	Ⅱ区ＳＤ０１	ＦＫ２
	〃－25	毛抜き	長さ 7.7 cm	Ⅰ区第３遺構	ＦＫ 11
	〃－26	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	ＦＫ４
	〃－27	胄	飾り金具	Ⅰ区第３遺構	ＦＫ 14
	〃－28	鐔	2.4 × 1.6 cm	Ⅱ区ＳＢ０４	ＦＫ 13
	〃－29	小柄		Ⅰ区第３遺構覆土	ＦＫ６
	〃－30	〃		Ⅱ区	ＦＲ３
	〃－31	〃		Ⅱ区ＳＡ１１	ＦＫ 15
	〃－32	〃		Ⅱ区	Ｆ－2
	〃－33	不明		Ⅱ区ＳＸ０８	ＦＫ－24
	〃－34	鈴		Ⅱ区ＳＤ０１	
	〃－35	青銅製円板	7.5×7.5 cm　厚さ 0.7 cm	〃	ＦＲ－1
	〃－36	経筒蓋	径 8.6 cm　高さ 3.6 cm	Ⅱ区第３遺構流砂	

遺　物　一　覧　表 (3)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
50	31－37	経筒蓋	径 9 ㎝　高さ 4 ㎝	Ⅱ区ＳＢ１０	
	〃－38	六器	碗形　口径 6.4 ㎝	Ⅱ区ＳＸ１３	
58	35－1	下駄	油桐	Ⅱ区第３遺構面	ＷＮ－58
	〃－2	〃	松	Ⅱ区ＳＡ１１下層	ＷＮ－69
	〃－3	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＷＮ－11
	〃－4	〃	油桐	Ⅱ区遺構ＳＡ１１下層	ＷＮ－68
	〃－5	〃	松	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－42
59	36－6	〃	油桐	Ⅱ区第１遺構覆土	ＷＮ－14
	〃－7	〃	ホウノキ	Ⅱ区ＳＡ０８	ＷＮ－56
	〃－8	〃	松	Ⅱ区ＳＢ０６	ＷＮ－4
	〃－9	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－8
60	37－10	〃	杉	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－44
	〃－11	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０６	ＷＮ－66
	〃－12	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－40
	〃－13	〃	油桐	Ⅱ区ＳＢ１０	ＷＮ－30
61	38－14	〃	松	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－49
	〃－15	〃	杉	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－10
	〃－16	〃	松	Ⅱ区ＳＤ０１	ＷＮ－6
	〃－17	〃	〃	Ⅱ区第１遺構	ＷＮ－13
	〃－18	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＷＮ－7
62	39－19	〃	栗	Ⅱ区第３遺構	ＷＲ－2
	〃－20	〃	39－19とセット 栗	〃	ＷＲ－3
	〃－21	〃	台松　歯ホウノキ	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＷＲ－6
	〃－22	〃	台〃　歯松	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＷＮ－35
	〃－23	〃	台〃　歯？	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－43
63	40－24	〃	台〃　歯ホウノキ	Ⅱ区第３遺構覆土	ＷＲ－4
	〃－25	〃	台油桐　歯ホウノキ	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＷＮ－27
	〃－26	〃	台松？　歯雑木類	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＷＮ－72
	〃－27	〃	台松　歯ホウノキ	Ⅰ区第３遺構覆土	ＷＮ－3
64	41－28	〃	台杉　歯雑木類	Ⅱ区ＳＡ１１下層	ＷＮ－70
	〃－29	〃	松	Ⅱ区ＳＡ０８	ＷＮ－5
	〃－30	〃	台油桐　歯杉	Ⅱ区ＳＸ０４	ＷＮ－65
	〃－31	〃	ホウノキ	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－38
65	42－32	鞘	杉？	Ⅱ区ＳＢ１０	ＷＮ－52
	〃－33	〃		Ⅰ区第１遺構	ＷＮ－61
	〃－34	〃	ホウノキ	Ⅱ区ＳＡ０８	ＷＮ－37
	〃－35	不明	杉	Ⅰ区第１遺構	ＷＮ－60
	〃－36	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－45
	〃－37	桶	〃	〃	ＷＮ－9

遺　物　一　覧　表 (4)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
65	42－38	不明	杉	Ⅱ区ＳＢ０８	ＷＮ－53
	〃－39	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０構築土	ＷＮ－73
	〃－40	〃	樫	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＷＮ－71
66	43－41	羽子板	長さ 30.5 cm　杉	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＲ－1
	〃－42	〃	松	〃	ＷＮ－39
	〃－43	不明	長さ 24 cm　杉	Ⅱ区ＳＡ０８	ＷＮ－54
	〃－44	〃		Ⅱ区ＳＢ１２	ＷＮ－59
	〃－45	〃	長さ 16 cm　杉	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＷＮ－36
	〃－46	有孔円盤		Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＷＮ－32
67	44－47	曲物	直径 24.5 cm　杉	Ⅱ区ＳＢ１０	ＷＮ－29
	〃－48	〃	漆塗　〃	Ⅱ区ＳＡ０２	ＷＮ－18
	〃－49	〃	直径 19 cm　〃	Ⅱ区ＳＥ０３	ＷＮ－51
	〃－50	蓋	直径 16.2 cm　〃	Ⅱ区第２遺構	ＷＮ－21
	〃－51	重箱？	漆塗　〃	Ⅱ区ＳＸ０４	ＷＮ－64
	〃－52	板状製品	長さ 18.8 cm　〃	Ⅱ区第３遺構	ＷＮ－57
68	45－53	曲物	径13.6cm 高さ8.6cm　杉	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－23
	〃－54	〃	直径8.4cm 高さ7cm杉・桜皮	Ⅱ区ＳＡ１１下層	ＷＮ－67
	〃－55	〃	直径 9.2 cm　杉	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－48
	〃－56	不明	長さ 27 cm　〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＷＮ－12
	〃－57	〃	長さ 29.4 cm　〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－41
	〃－58	曲物？	〃	〃	ＷＮ－50
	〃－59	不明	〃	Ⅱ区ＳＡ０８	ＷＮ－55
69	46－60	鍬	栗	Ⅱ区第２遺構	ＷＮ－52
	〃－61	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ０２	ＷＮ－20
	〃－62	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－22
	〃－63	〃	〃	Ⅱ区第２遺構	ＷＮ－15
	〃－64	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１	ＷＮ－34
70	47－65	酒杯	赤漆塗　杉？	Ⅱ区ＳＡ０２	ＷＮ－19
	〃－66	皿	漆塗　碁笥底	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－24
	〃－67	杯	漆塗　雑木類	Ⅱ区ＳＫ０１床下	ＷＮ－63
	〃－68	〃	〃　〃	Ⅱ区	ＷＮ－26
	〃－69	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＷＲ－5
	〃－70	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＤ０１	ＷＮ－25
	〃－71	〃	〃	Ⅱ区ＳＤ０４	ＷＮ－47
	〃－72	〃	〃　雑木類	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＷＮ－28
	〃－73	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－46
	〃－74	〃	〃　ホウノキ？	Ⅱ区ＳＢ１０	ＷＮ－31
	〃－75	〃	〃　欅？	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＷＮ－33
	〃－76	〃	〃　杉？	Ⅱ区最下層	ＷＮ－16

遺　物　一　覧　表　(5)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
70	47－77	杯	漆塗　雑木類	Ⅱ区ＳＢ１２	ＷＮ－17
	〃－78	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＷＮ－1
	〃－79	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０８	ＷＮ－2
73	48－1	染付坏	玉取獅子	Ⅱ区ＳＢ０６下層	
	〃－2	〃	花文	Ⅱ区ＳＢ０５	
	〃－3	〃	唐草文	Ⅱ区	
	〃－4	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	
	〃－5	〃	見込玉取獅子	Ⅱ区ＳＢ０６下層	
	〃－6	〃	二次焼成	Ⅱ区ＳＢ１１下層	
	〃－7	〃	唐草文	Ⅱ区第３遺構流砂	
74	49－8	〃	草花文	Ⅱ区ＳＢ０４	Ｔ－5
	〃－9	〃	見込草花文	Ⅱ区ＳＢ０５	Ｔ－1
	〃－10	〃	花文	Ⅱ区ＳＤ０２	Ｔ－8
	〃－11	青磁坏	見込花文印	Ⅰ区第1第２遺構面間層	ＫａＴ－45
	〃－12	〃			
	〃－13	〃		Ⅰ区第３遺構覆土	ＫａＴ－48
	〃－14	染付小坏	見込山水文、底「福」	Ⅱ区ＳＢ１２	
	〃－15	〃	見込花文、底墨書「十一」	Ⅰ区第1第２遺構面間層	ＫａＴ－46
	〃－16	染付小碗	見込野菜文　口唇虫喰	Ⅱ区最下層	
	〃－17	三彩鳥型水注		Ⅱ区流砂	
75	50－18	染付皿	見込野菜文　口唇虫喰	Ⅱ区ＳＤ０１	
	〃－19	〃	〃　〃	〃	
	〃－20	〃	〃　〃	〃	
	〃－21	〃	〃　〃	〃	
	〃－22	〃	輪花型打見込山水文虫喰	Ⅱ区ＳＢ１２下層	
	〃－23	〃	見込玉取獅子虫喰	Ⅱ区ＳＡ１１	
	〃－24	〃	唐草文	Ⅱ区第３遺構流砂	
	〃－25	〃	見込玉取獅子	Ⅱ区第２遺構覆土	
76	51－26	〃	碁司底	Ⅰ区第３遺構	ＫａＴ－49
	〃－27	〃		Ⅱ区ＳＤ０６下層	
	〃－28	〃	玉取獅子	Ⅱ区ＳＸ０５下層	
	〃－29	〃	底墨書	Ⅱ区ＳＸ０５下層	
	〃－30	〃		Ⅱ区ＳＡ０８	Ｔ－7
	〃－31	〃	漆接合	Ⅰ区第３遺構	ＫａＴ－39
	〃－32	〃		Ⅱ区流砂	
	〃－33	青磁皿	輪花線刻唐草文	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＫ－194
	〃－34	〃		Ⅰ区第２遺構	ＫａＴ－50
	〃－35	壷底部	鉄釉	Ⅱ区ＳＸ０５	
77	52－1	碗	高台砂目当	Ⅱ区ＳＢ１０下層	朝Ｎ３

遺　物　一　覧　表 (6)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
77	52－ 2	白磁碗	内面に4箇所砂目当	Ⅱ区ＳＡ０８	朝Ｎ６
	〃－ 3	〃	〃	Ⅱ区第３遺構覆土	朝Ｎ１
	〃－ 4	〃	口径 14.2㎝ 器高12.3㎝	Ⅱ区ＳＢ１２下層	朝Ｎ２
	〃－ 5	碗	内面、高台砂目当	Ⅱ区ＳＸ０４	朝Ｎ９
	〃－ 6	〃	高台４箇所砂目当	Ⅱ区流砂	朝Ｎ 11
	〃－ 7	〃	乳白色釉　高台砂付着	Ⅱ区第１遺構覆土	朝Ｎ７
	〃－ 8	〃		Ⅱ区ＳＸ０４	朝Ｎ 10
	〃－ 9	〃	内面高台砂目当　三島手	Ⅱ区ＳＡ１１	
	〃－ 10	白磁碗	高台砂付着	Ⅱ区ＳＢ１２下層	朝Ｎ８
	〃－ 11	碗		Ⅱ区ＳＸ０３	朝Ｎ９
	〃－ 12	白磁皿	内面五箇所砂目当	Ⅱ区ＳＢ０６下層	朝Ｎ５
83	53－ 1	唐津碗	絵唐津	Ⅱ区ＳＡ１１下層	ＫａＮ－55
	〃－ 2	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＴ－11
	〃－ 3	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－85
	〃－ 4	〃	〃　片口？	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＮ－40
	〃－ 5	〃		Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＫ－182
	〃－ 6	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－37
	〃－ 7	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－214
	〃－ 8	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－27
	〃－ 9	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＮ－50
	〃－ 10	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－6
	〃－ 11	〃	〃	Ⅱ区Ｓ０４下層	ＫａＫ－87
	〃－ 12	〃		Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－86
	〃－ 13	〃	絵唐津	Ⅱ区流砂	ＫａＫ－1
	〃－ 14	〃		Ⅱ区ＳＢ１１	ＫａＮ－45
	〃－ 15	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＮ－39
	〃－ 16	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－28
	〃－ 17	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－79
	〃－ 18	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－12
84	54－ 19	〃	絵唐津	Ⅱ区最下層	ＫａＫ－46
	〃－ 20	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－235
	〃－ 21	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－170
	〃－ 22	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－236
	〃－ 23	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－51
	〃－ 24	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－50
	〃－ 25	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－52
	〃－ 26	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－210
	〃－ 27	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－5
	〃－ 28	〃		〃	ＫａＫ－45

遺　物　一　覧　表 (7)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
84	54－29	唐津碗	磁器ねらい	Ⅱ区ＳＤ０２	ＫａＮ－3
	〃－30	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－162
	〃－31	〃		Ⅱ区ＳＢ１１	ＫａＫ－156
	〃－32	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＫ－159
	〃－33	〃		Ⅱ区　〃　下層	ＫａＮ－11
	〃－34	〃		Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－190
	〃－35	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－17
	〃－36	〃	磁器ねらい	Ⅱ区流砂	ＫａＴ－249
85	55－37	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１最下層	ＫａＮ－24
	〃－38	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－25
	〃－39	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－151
	〃－40	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２　〃	ＫａＫ－61
	〃－41	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－82
	〃－42	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－177
	〃－43	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＮ－36
	〃－44	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－33
	〃－45	〃	〃	Ⅱ区　〃　下層	ＫａＮ－53
	〃－46	〃	高台胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－173
	〃－47	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－32
	〃－48	〃		Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－219
	〃－49	〃	高台胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－11
	〃－50	〃	〃	Ⅱ区第３遺構	ＫａＦ－2
	〃－51	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－20
	〃－52	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ１１下層	ＫａＮ－54
	〃－53	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－215
	〃－54	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－8
	〃－55	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－231
	〃－56	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－13
	〃－57	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＴ－237
86	56－58	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－6
	〃－59	〃	〃	Ⅱ区最下層	ＫａＫ－69
	〃－60	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＫ－2
	〃－61	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－34
	〃－62	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０・ＳＸ１３	ＫａＫ－55
	〃－63	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－26
	〃－64	〃	〃	Ⅱ区　〃　下層	ＫａＫ－83
	〃－65	〃	〃	Ⅱ区　〃　・０５	ＫａＮ－49
	〃－66	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－145
	〃－67	〃	絵唐津？	Ⅱ区ＳＡ０２	ＫａＫ－97

遺　物　一　覧　表　(8)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
86	56－68	唐津碗	絵唐津	Ⅱ区ＳＸ１３	ＫａＫ－96
	〃－69	〃	磁器ねらい	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＮ－2
	〃－70	〃		Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＮ－48
	〃－71	〃	磁器ねらい	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－160
	〃－72	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－26
	〃－73	〃	高台釉砂目当磁器ねらい	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－1
	〃－74	〃	底部砂付着	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－60
	〃－75	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－221
	〃－76	〃	高台釉胎土目当磁器ねらい	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＮ－19
	〃－77	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－23
87	57－78	唐津小碗	高台釉胎土目当磁器ねらい	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－10
	〃－79	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ１０	ＫａＴ－8
	〃－80	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ０８	ＫａＴ－246
	〃－81	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－232
	〃－82	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１	ＫａＮ－44
	〃－83	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－31
	〃－84	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－98
	〃－85	〃	底部回転糸切痕	Ⅱ区ＳＸ１０	ＫａＫ－111
	〃－86	唐津碗	絵唐津上野高取系砂目当	Ⅱ区ＳＢ０５下層	ＫａＫ－47
	〃－87	〃	上野高取系	Ⅱ区第２遺構	ＫａＫ－71
	〃－88	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－150
	〃－89	〃	〃	Ⅰ区第３遺構覆土	ＫａＴ－35
	〃－90	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＮ－2
	〃－91	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０４	ＫａＴ－26
	〃－92	〃	〃	Ⅰ区第１遺構Ｎ０２	ＫａＴ－27
	〃－93	〃	高麗茶碗写し？ｏｒ呉器茶碗	Ⅰ区第１遺構	ＫａＴ－53
	〃－94	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－149
	〃－95	〃	天目様	Ⅱ区最下層	
88	58－96	唐津皿	碗形皿絵唐津	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－1
	〃－97	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－212
	〃－98	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－62
	〃－99	〃	〃　内面胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－62
	〃－100	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＴ－4
	〃－101	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ０８	ＫａＴ－203
	〃－102	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ０８	ＫａＴ－201
	〃－103	〃	〃	Ⅱ区第３遺構	ＫａＴ－244
	〃－104	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－10
	〃－105	〃	〃	Ⅱ区第３遺構	ＫａＦ－1
89	59－106	〃	絵唐津波縁形皿胎土目当	Ⅱ区最下層	ＫａＴ－12

遺物一覧表 (9)

P	番号	種類	特徴	出土遺構	備考
89	59－107	唐津皿	絵唐津波縁形皿胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＮ－56
	〃－108	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－228
	〃－109	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－66
	〃－110	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＮ－42
	〃－111	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＫ－147
90	60－112	〃	絵唐津波縁形皿	Ⅱ区最下層	ＫａＫ－70
	〃－113	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－63
	〃－114	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－3
	〃－115	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－67
	〃－116	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１	ＫａＫ－158
	〃－117	〃	絵唐津波縁形皿	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－4
	〃－118	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－65
	〃－119	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＮ－43
	〃－120	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－240
91	61－121	〃	絵唐津波縁形皿	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－59
	〃－122	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１	ＫａＫ－154
	〃－123	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－2
	〃－124	〃	〃	Ⅱ区最下層	ＫａＴ－14
	〃－125	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＫ－57
	〃－126	〃	〃　砂目当	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＮ－57
	〃－127	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－16
	〃－128	〃	〃	Ⅱ区第３遺構	ＫａＴ－242
	〃－129	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＴ－1
92	62－130	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－18
	〃－131	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＴ－20
	〃－132	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	
	〃－133	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－34
	〃－134	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－220
	〃－135	〃	絵唐津碗形皿？	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－39
	〃－136	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－25
	〃－137	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－29
	〃－138	〃	〃	Ⅱ区第２遺構	ＫａＫ－116
93	63－139	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－229
	〃－140	〃	〃　波縁形皿？	Ⅱ区最下層	ＫａＫ－128
	〃－141	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－9
	〃－142	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－216
	〃－143	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＫ－203
	〃－144	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－209
	〃－145	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－8

遺物一覧表 (10)

P	番号	種類	特徴	出土遺構	備考
93	63－146	唐津皿		Ⅱ区第1遺構	KaK－89
94	64－147	〃	碗形皿　胎土目当	Ⅱ区SB04下層	KaK－77
	〃－148	〃	〃	Ⅱ区SB12下層	KaT－3
	〃－149	〃	〃	Ⅱ区SB10下層	KaK－188
	〃－150	〃	〃	Ⅱ区SB04	KaT－233
	〃－151	〃	〃	Ⅱ区SB04下層	KaK－84
	〃－152	〃	〃	Ⅱ区　〃	KaK－78
	〃－153	〃	〃	Ⅱ区SB04	KaT－239
	〃－154	〃	〃	Ⅱ区　〃	KaT－234
	〃－155	〃	〃　砂目当？	Ⅱ区　〃　下層	KaK－75
	〃－156	〃	碗形皿	Ⅱ区SB12	KaK－169
	〃－157	〃	〃	Ⅱ区	
	〃－158	〃	〃	Ⅱ区SB04・05	KaK－5
	〃－159	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区　〃	KaN－21
	〃－160	〃	碗形皿	Ⅱ区SB04	KaK－161
	〃－161	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区　〃	KaK－38
	〃－162	〃	〃	Ⅱ区　〃　下層	KaK－76
95	65－163	〃	〃	Ⅱ区SB05	KaK－141
	〃－164	〃	〃	Ⅱ区SB06下層	KaK－181
	〃－165	〃	碗形皿　砂目当	Ⅱ区第3構流砂	KaK－137
	〃－166	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区SB10	KaT－225
	〃－167	〃	〃　内面胎土目当	Ⅱ区SA10	KaT－9
	〃－168	〃	〃	Ⅱ区SB04	KaT－230
	〃－169	〃	波縁形皿胎土目当	Ⅱ区SB10	KaT－226
	〃－170	〃	縁付形皿	Ⅱ区SB10	KaT－224
	〃－171	〃	碗形皿胎土目当	Ⅱ区SB06	KaT－213
	〃－172	〃	碗形皿	Ⅱ区SB05	KaK－140
	〃－173	〃	〃	Ⅱ区SE01	KaK－202
	〃－174	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区SB04	KaK－7
	〃－175	〃	〃　砂目当？	Ⅱ区第3遺構覆土	KaA－1
	〃－176	〃	波縁付形皿	Ⅱ区SB06下層	KaK－172
	〃－177	〃	縁反形皿	Ⅱ区SB04	KaN－52
	〃－178	〃	〃	Ⅱ区SB11	KaK－157
	〃－179	〃	〃	Ⅱ区SB04	KaK－164
	〃－180	〃	〃	Ⅱ区SX03	KaK－91
	〃－181	〃	磁器ねらい？	Ⅱ区SB11下層	KaN－12
96	66－182	〃	碗形皿波縁	Ⅱ区SB04	KaT－
	〃－183	〃	碗形皿	Ⅱ区SX02	KaK－110
	〃－184	〃	〃	Ⅱ区SA10	KaT－7

遺　物　一　覧　表 (11)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
96	66－185	唐津皿	碗形皿	Ⅱ区ＳＢ０９	ＫａＫ－103
	〃－186	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－241
	〃－187	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－29
	〃－188	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－35
	〃－189	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－99
	〃－190	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＮ－35
	〃－191	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＮ－57
	〃－192	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－81
	〃－193	〃	碗形皿	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＮ－46
	〃－194	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－31
	〃－195	〃	碗形皿	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＮ－17
	〃－196	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－33
	〃－197	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－5
	〃－198	〃	〃	Ⅱ区流砂	ＫａＫ－3
	〃－199	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＮ－37
	〃－200	〃	〃　内面釉付着	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＮ－47
	〃－201	〃	碗形皿	Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＮ－22
	〃－202	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＮ－41
	〃－203	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－80
	〃－204	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－30
	〃－205	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－107
97	67－206	〃	胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＫ－64
	〃－207	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＫ－148
	〃－208	〃	縁付形皿胎土目当	Ⅱ区第３遺構	ＫａＩ－1
	〃－209	〃	碗形皿	Ⅱ区ＳＡ１０	ＫａＴ－6
	〃－210	〃	縁付形皿回転糸切痕	Ⅱ区最下層	ＫａＴ－13
	〃－211	〃	縁付形皿？	Ⅱ区第３遺構	ＫａＴ－207
	〃－212	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－206
	〃－213	〃	〃	Ⅱ区第３遺構	ＫａＴ－208
	〃－214	〃	縁付形皿	Ⅱ区　〃	ＫａＴ－243
	〃－215	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－174
	〃－216	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－205
	〃－217	〃	縁付形皿	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－32
	〃－218	〃	〃　胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－183
	〃－219	〃	縁付形皿	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－222
98	68－220	〃	胎土目当	Ⅱ区第２遺構	ＫａＫ－112
	〃－221	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＫ－139
	〃－222	〃	胎土目当？	Ⅱ区ＳＢ１２下層	ＫａＴ－2
	〃－223	〃	胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－171

遺　物　一　覧　表 (12)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
98	68－224	唐津皿	胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＫ－166
	〃－225	〃		Ⅱ区ＳＡ０８	ＫａＴ－202
	〃－226	〃	胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－184
	〃－227	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＫ－186
	〃－228	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－163
	〃－229	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＫ－15
	〃－230	〃	胎土目当	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－36
	〃－231	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－40
	〃－232	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－179
	〃－233	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－227
	〃－234	〃		Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－217
	〃－235	〃	胎土目当	Ⅱ区最下層	ＫａＫ－127
	〃－236	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＫ－189
	〃－237	〃		Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－175
	〃－238	〃	胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＫ－168
	〃－239	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＫ－187
	〃－240	〃		Ⅱ区第３遺構覆土	ＫａＩ－2
	〃－241	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－238
	〃－242	〃	胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－14
99	69－243	〃	縁付形皿砂目当	Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＫ－144
	〃－244	〃	〃	Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＫ－200
	〃－245	〃	〃	Ⅱ区第２遺構覆土	ＫａＫ－152
	〃－246	〃	〃	Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＫ－88
	〃－247	〃	〃	Ⅰ区第３遺構覆土	ＫａＴ－57
	〃－248	〃	〃	Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＫ－142
	〃－249	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０９	ＫａＫ－117
	〃－250	〃	〃	Ⅰ区第１第２遺構間層	ＫａＴ－44
	〃－251	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－7
	〃－252	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＫ－146
	〃－253	〃	縁付形皿	Ⅰ区第２遺構覆土	ＫａＴ－54
	〃－254	〃	〃　砂目当	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＮ－58
	〃－255	〃	〃	Ⅱ区第２遺構覆土	ＫａＫ－101
100	70－256	〃	溝縁形皿砂目当	Ⅱ区ＳＸ０８	ＫａＫ－102
	〃－257	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－118
	〃－258	〃	〃　回転糸切痕	Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＫ－191
	〃－259	〃	溝縁形皿砂目当	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－49
	〃－260	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＮ－60
	〃－261	〃	〃	Ⅰ区第１遺構	ＫａＴ－58
	〃－262	〃	〃　回転糸切痕	Ⅱ区第２遺構覆土	ＫａＫ－105

遺　物　一　覧　表 (13)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
100	70－263	唐津皿	溝縁形皿	Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＫ－54
	〃－264	〃	〃	Ⅰ区第１遺構面	ＫａＴ－37
	〃－265	〃	〃　砂目当	Ⅱ区ＳＤ０２	ＫａＫ－74
	〃－266	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＮ－61
	〃－267	〃	〃	Ⅱ区流砂	ＫａＫ－92
	〃－268	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－136
101	71－269	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＮ－15
	〃－270	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＫ－90
	〃－271	〃	〃	Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＫ－201
	〃－272	〃	〃	Ⅱ区流砂	ＫａＫ－94
	〃－273	〃	〃　回転糸切痕	Ⅱ区ＳＸ０４	ＫａＴ－23
	〃－274	〃	溝縁形皿	Ⅱ区ＳＤ０２	ＫａＫ－73
	〃－275	〃	〃　砂目当	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－178
	〃－276	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－133
	〃－277	〃	〃	Ⅱ区最下層	ＫａＴ－22
	〃－278	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－134
102	72－279	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－135
	〃－280	〃	〃　磁器ねらい？	Ⅱ区最下層	ＫａＫ－153
	〃－281	〃	砂目当	Ⅱ区ＳＥ０４	ＫａＫ－108
	〃－282	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－138
	〃－283	〃	砂目当	Ⅱ区第２遺構覆土	ＫａＫ－115
	〃－284	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－106
	〃－285	〃	〃	Ⅱ区第３　〃	ＫａＫ－125
	〃－286	〃	〃	Ⅱ区第１　〃	ＫａＫ－95
	〃－287	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－143
	〃－288	〃	〃	Ⅰ区第１遺構ＮＯ１０	ＫａＴ－36
	〃－289	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ１３	ＫａＫ－104
	〃－290	〃		Ⅰ区第１遺構	ＫａＴ－61
103	73－291	唐津鉢	絵唐津鉢	Ⅱ区ＳＸ０４	ＫａＴ－24
	〃－292	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＫ－68
	〃－293	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－30
	〃－294	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＫ－167
	〃－295	〃	〃	Ⅱ区最下層	ＫａＴ－21
104	74－296	〃	鉢胎土目当	Ⅱ区第２遺構	ＫａＫ－93
	〃－297	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－13
	〃－298	〃	鉢	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－223
	〃－299	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－41
	〃－300	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０５下層	ＫａＫ－17
	〃－301	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－72

遺　物　一　覧　表 (14)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
105	75－302	唐津鉢	絵唐津胎土目当	Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＮ－59
	〃－303	〃	絵唐津	Ⅱ区最下層	ＫａＫ－126
106	76－304	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４下層・	ＫａＫ－44
107	77－305	〃	胎土目当	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＫ－16
	〃－306	〃	絵唐津	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－19
	〃－307	〃	〃	Ⅱ区第３遺構	ＫａＡ－2
	〃－308	〃		Ⅰ区ＳＫ０１	ＫａＴ－59
	〃－309	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－53
	〃－310	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＮ－18
	〃－311	〃	外溝縁砂目当	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－154
108	78－312	〃	絵唐津外溝縁	Ⅱ区ＳＫ０１	ＫａＴ－34
109	79－313	〃		Ⅰ区流砂	ＫａＴ－40
	〃－314	〃	絵唐津	Ⅱ区ＳＢ０８	ＫａＫ－120
	〃－315	〃	〃	Ⅰ区第１遺構ＮＯ１３	ＫａＴ－33
	〃－316	〃		Ⅱ区ＳＢ０８	ＫａＫ－128
	〃－317	〃	絵唐津	Ⅱ区第３遺構覆土	ＫａＴ－245
	〃－318	〃		Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＫ－4
110	80－319	唐津擂鉢		Ⅱ区第１遺構覆土	ＢＩ－73
	〃－320	〃		Ⅱ区ＳＸ０８	ＫａＫ－119
	〃－321	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－9
	〃－322	〃		Ⅱ区ＳＡ１１	ＢＩ－53
	〃－323	〃	回転糸切痕	Ⅱ区ＳＡ０１	ＢＩ－116
111	81－324	〃	底部回転糸切痕	Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＴ－16
	〃－325	〃		Ⅰ区第３遺構下層	ＢＩ－118
	〃－326	〃	回転糸切痕	Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＮ－23
	〃－327	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－128
	〃－328	〃		Ⅱ区ＳＤ０１	ＢＩ－123
	〃－329	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－121
112	82－330	唐津徳利	上野高取系	Ⅱ区第２遺構	ＫａＫ－123
	〃－331	〃		Ⅱ区ＳＢ１２	ＫａＴ－10
	〃－332	〃	朝鮮唐津	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－100
	〃－333	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－130
	〃－334	〃		Ⅰ区　〃　覆土	ＫａＴ－52
	〃－335	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－132
	〃－336	唐津香炉	切高台	Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－165
	〃－337	絵唐津蓋	回転糸切痕	Ⅱ区　〃	ＫａＫ－42
	〃－338	絵唐津碗		Ⅱ区　〃　・０５	ＫａＮ－20
	〃－339	唐津小壷		Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＫ－176
	〃－340	唐津茶入		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－25

遺　物　一　覧　表 (15)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
112	82－341	唐津高坏？		Ⅱ区ＳＸ１３	ＫａＫ－58
113	83－342	絵唐津壷		Ⅱ区ＳＥ０２付近	Ｒ82－1
	〃－343	〃		Ⅱ区ＳＸ０７	ＫａＫ－122
	〃－344	唐津壷		Ⅱ区ＳＸ１３	ＫａＫ－56
	〃－345	絵唐津深鉢	取手	Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＫ－180
	〃－346	唐津片口		Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＴ－15
	〃－347	〃	〃	Ⅱ区第３遺構覆土	ＫａＫ－124
	〃－348	〃	胴部波状沈線	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＮ－1
	〃－349	唐津鉢？		Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＫ－199
114	84－350	唐津平鉢		Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－218
	〃－351	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＮ－38
	〃－352	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＮ－14
	〃－353	〃		Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＫ－43
	〃－354	唐津壷	無首	Ⅱ区ＳＡ０８	ＫａＴ－204
	〃－355	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－18
115	85－356	〃		Ⅰ区第１・第２遺構間層	ＫａＴ－51
	〃－357	壷		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＫ－19
	〃－358	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＫ－21
	〃－359	〃	格子目叩き痕	Ⅱ区ＳＤ０１	ＢＩ－25
	〃－360	〃	胴部突帯文	Ⅱ区第１遺構覆土	ＢＩ－125
	〃－361	越前擂鉢	無釉	Ⅱ区ＳＸ０８	ＢＩ－122
	〃－362	〃	〃	Ⅰ区第２遺構覆土	ＫａＴ－63
117	86－1	伊万里		Ⅰ区第１遺構	ＫａＴ－42
	〃－2	〃		Ⅱ区ＳＸ０４	ＫａＴ－263
	〃－3	〃		Ⅱ区第２遺構覆土	Ⅰ－Ｎ２
	〃－4	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－252
	〃－5	〃		Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＫ－197
	〃－6	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＫ－196
	〃－7	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＫ－198
	〃－8	〃　碗		Ⅱ区ＳＡ０２	ＫａＴ－260
	〃－9	〃	白磁	Ⅰ区第１遺構	ＫａＴ－28
	〃－10	〃		Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＫ－192
	〃－11	〃		Ⅱ区ＳＡ０１	ＫａＴ－259
	〃－12	〃	染付	Ⅱ区ＳＥ０２内	ＫａＴ－262
	〃－13	〃	〃	Ⅰ区	
	〃－14	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０８	Ⅰ－Ｎ14
	〃－15	〃　皿	〃	Ⅱ区ＳＥ０１内	ＫａＫ－204
	〃－16	〃　碗	〃	Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－257
	〃－17	〃	〃	Ⅱ区	Ⅰ－Ｎ15

遺　物　一　覧　表 (16)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
117	86－18	伊万里碗	染付	Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－255
	〃－19	〃	〃	Ⅱ区第１・第２遺構間層	ＫａＴ－30
	〃－20	〃	〃	Ⅱ区ＳＤ０１	ＫａＫ－195
118	87－21	〃	〃　網目文	Ⅱ区第１遺構覆土	Ｉ－Ｎ 13
	〃－22	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＴ－251
	〃－23	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＫａＴ－256
	〃－24	〃	〃	Ⅰ区第１・第２遺構間層	ＫａＴ－31
	〃－25	〃　皿	染付	Ⅱ区　〃　遺構覆土	Ｉ－Ｎ 11
	〃－26	〃	〃	〃	Ｉ－Ｎ 9
	〃－27	〃	〃	〃	Ｉ－Ｎ 3
	〃－28	〃	〃	〃	Ｉ－Ｎ 4
	〃－29	〃	〃	〃	Ｉ－Ｎ 10
	〃－30	〃	〃	Ⅱ区流砂	Ｉ－Ｎ 5
	〃－31	〃	〃	Ⅱ区第１遺構覆土	Ｉ－Ｎ 12
	〃－32	〃	〃	Ⅱ区第３　〃　流砂	Ｉ－Ｎ 8
	〃－33	〃	〃	Ⅱ区	ＫａＴ－261
	〃－34	〃	〃	Ⅰ区第１遺構	ＫａＴ－29
119	88－35	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ０１	ＫａＴ－258
	〃－36	〃	波縁青磁釉	Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－253
	〃－37	〃	染付波縁皿	Ⅰ区第１遺構Ｎ０１	ＫａＴ－41
	〃－38	〃	染付	Ⅱ区　〃　覆土	Ｉ－Ｎ 7
	〃－39	〃	〃　波縁皿	Ⅱ区　〃	ＫａＴ－254
	〃－40	〃	染付	Ⅱ区　〃	Ｉ－Ｎ 16
	〃－41	〃	〃	Ⅱ区　〃	Ｉ－Ｎ 6
	〃－42	〃	青磁	Ⅱ区ＳＸ０８	Ｉ－Ｎ 1
121	89－1	備前徳利		Ⅱ区ＳＢ１０	ＢＩ－18
	〃－2	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩＮ－8
	〃－3	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＴ－31
	〃－4	備前		Ⅱ区第２遺構覆土	ＢＩＮ－5
	〃－5	備前花瓶	口縁下に小孔	Ⅱ区ＳＢ０５	ＢＩ－35
	〃－6	備前	〃　にスタンプ文	Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－16
	〃－7	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩＮ－7
	〃－8	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＢＩ－36
	〃－9	〃　鉢		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－129
	〃－10	〃		Ⅰ区第１・第２遺構間層	ＫａＴ－32
	〃－11	〃　壷		Ⅱ区第３遺構流砂	ＢＩ－37
	〃－12	〃　鉢		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－8
	〃－13	〃		Ⅱ区ＳＡ１１	ＢＩ－52
122	90－14	備前壷		Ⅱ区第２遺構覆土	ＢＩ－14

遺　物　一　覧　表 (17)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
122	90－15	備前壷		Ⅱ区ＳＢ１０	ＢＩ－1
	〃－16	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＢＩＮ－9
	〃－17	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩＮ－6
	〃－18	〃		Ⅱ区ＳＡ０８	ＢＩ－33
	〃－19	〃		Ⅱ区ＳＡ０８	ＢＩ－29
	〃－20	〃		Ⅱ区ＳＢ１１	ＢＩ－120
	〃－21	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＢＩ－87
	〃－22	〃	肩部円形活字	Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＢＩＮ－16
	〃－23	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＢＩＮ－4
	〃－24	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＢＩ－117
	〃－25	〃	胴部にヘラ記号	Ⅱ区第２遺構覆土	ＢＩ－13
	〃－26	〃	〃 突帯	Ⅱ区ＳＢ１０	ＢＩ－4
	〃－27	〃		Ⅱ区ＳＫ０１	ＢＩ－32
	〃－28	〃	胴部突帯	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＢＩＮ－20
	〃－29	〃		Ⅱ区第３遺構覆土	ＢＩ－70
	〃－30	〃		Ⅱ区第３遺構	ＢＩ－30
123	91－31	備前壷	回転糸切痕	Ⅱ区ＳＢ０１	ＢＩ－20
	〃－32	〃		Ⅱ区ＳＢ０５下層	ＢＩ－11
	〃－33	〃	底部ヘラ記号	Ⅱ区　〃	ＢＩ－12
	〃－34	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＢＩ－28
	〃－35	〃		Ⅱ区第２遺構	ＢＩ－82
	〃－36	〃	底部ヘラ記号	Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－9
	〃－37	備前甕口縁		Ⅱ区ＳＤ０２	ＢＩ－87
	〃－38	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＢＩ－77
	〃－39	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＢＩＮ－7
	〃－40	〃		Ⅱ区第３遺構覆土	ＢＩ－71
	〃－41	〃		Ⅱ区ＳＸ０９	ＢＩＮ－28
	〃－42	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＢＩＮ－8
	〃－43	〃		Ⅱ区ＳＤ０１	ＢＩ－62
	〃－44	〃		Ⅱ区ＳＡ０８	ＢＩ－19
	〃－45	〃		〃	ＢＩ－109
	〃－46	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＢＩ－84
	〃－47	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＢＩ－79
	〃－48	〃		Ⅱ区最下層	ＢＩ－83
	〃－49	〃		Ⅱ区ＳＤ０２	ＢＩ－88
	〃－50	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＢＩ－78
	〃－51	〃		Ⅱ区ＳＤ０１	ＢＩ－61
	〃－52	〃		Ⅱ区ＳＸ０６	ＢＩ－63
	〃－53	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＢＩ－66

遺　物　一　覧　表 (18)

P	番　号	種　類	特　徴	出土遺構	備　考
123	91－54	備前甕口縁		Ⅱ区第1遺構覆土	BⅠ－76
	〃－55	〃		Ⅱ区SX08	BⅠ－114
124	92－56	〃		Ⅱ区SB06下層	BⅠ－67
	〃－57	〃		Ⅱ区SB10構築土	BⅠN－14
	〃－58	〃		Ⅱ区第1遺構覆土	BⅠN－2
	〃－59	〃		Ⅱ区SB10	BⅠ－102
	〃－60	〃		Ⅱ区第2遺構覆土	BⅠN－23
	〃－61	〃		Ⅱ区SA03	BⅠ－111
	〃－62	〃		Ⅱ区SB11下層	BⅠN－22
	〃－63	〃		Ⅱ区第1遺構覆土	BⅠ－75
	〃－64	〃		Ⅰ区第3遺構覆土	BⅠ－68
	〃－65	〃		Ⅱ区SB05	BⅠ－65
	〃－66	〃		Ⅱ区SA08	BⅠ－17
	〃－67	〃		Ⅱ区第3遺構流砂	BⅠN－5
	〃－68	〃		Ⅱ区SX02	BⅠN－26
	〃－69	〃		Ⅱ区第3遺構流砂	BⅠN－10
	〃－70	〃		Ⅱ区SD02	BⅠ－86
	〃－71	〃		Ⅱ区第2遺構覆土	BⅠN－1
	〃－72	〃		Ⅱ区第3遺構流砂	BⅠN－6
125	93－73	〃		Ⅱ区SX04	BⅠ－64
	〃－74	〃		Ⅱ区SA08	BⅠ－108
	〃－75	〃		Ⅱ区SX05下層	BⅠ－104
	〃－76	〃		Ⅱ区SA03	BⅠ－106
	〃－77	〃		Ⅱ区第3遺構流砂	BⅠN－3
	〃－78	〃		Ⅱ区SX05	BⅠN－23
	〃－79	〃		Ⅱ区SB04下層	BⅠN－17
	〃－80	〃		Ⅱ区SA08	BⅠ－110
	〃－81	〃		Ⅱ区第3遺構流砂	BⅠN－12
	〃－82	〃		Ⅱ区　〃	BⅠN－11
	〃－83	備前甕底部		Ⅱ区最下層	BⅠ－136
126	94－84	〃		Ⅱ区第3遺構	BⅠ－7
	〃－85	〃		Ⅱ区SB10下層	BⅠ－135
	〃－86	〃		Ⅱ区SB10構築土	BⅠN－15
	〃－87	〃		Ⅱ区SX08	BⅠ－113
	〃－88	〃		Ⅱ区SD02	BⅠ－90
	〃－89	〃		Ⅱ区SB04下層	BⅠN－19
127	95－90	備前甕	ヘラ記号三	Ⅱ区流砂	BⅠ－99
	〃－91	〃	ヘラ記号二石入	Ⅱ区　〃	BⅠ－98
	〃－92	〃	〃	Ⅱ区第3遺構覆土	BⅠ－72

遺　物　一　覧　表 (19)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
127	95－93	備前甕	ヘラ記号二石入	Ⅱ区ＳＸ０５下層	ＢＩ－105
	〃－94	〃	〃	Ⅱ区ＳＸ０８	ＢＩ－115
	〃－95	〃	ヘラ記号　ひらがな	Ⅱ区第１遺構覆土	ＢＩ－74
	〃－96	〃	ヘラ記号	Ⅱ区ＳＡ０８	ＢＩ－24
	〃－97	〃	〃	Ⅱ区　〃	ＢＩ－21
	〃－98	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１	ＢＩ－101
128	96－99	備前擂鉢		Ⅱ区ＳＡ１１下層	ＢＩ－15
	〃－100	〃		Ⅱ区ＳＸ０３	ＢＩＮ－27
	〃－101	〃		Ⅱ区第３遺構覆土	ＢＩ－59
	〃－102	〃		Ⅱ区第２遺構	ＢＩ－81
	〃－103	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	ＢＩＮ－25
	〃－104	〃		Ⅱ区ＳＸ０５下層	ＢＩ－58
	〃－105	〃		Ⅱ区ＳＡ１１	ＢＩ－50
	〃－106	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	ＢＩＮ－24
129	97－107	〃		Ⅱ区　〃	ＢＩＮ－12
	〃－108	〃		Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＢＩＮ－18
	〃－109	〃		Ⅱ区ＳＢ０６	ＢＩＮ－17
	〃－110	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－100
	〃－111	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	ＢＩ－97
	〃－112	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＢＩ－26
	〃－113	〃		Ⅱ区ＳＢ１１	ＢＩ－48
	〃－114	〃		Ⅱ区ＳＤ０１	ＢＩＮ－13
	〃－115	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩＮ－14
	〃－116	〃		Ⅱ区　〃	ＢＩ－91
	〃－117	〃		Ⅰ区第３遺構	ＢＩＮ－19
130	98－118	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－96
	〃－119	〃		Ⅱ区ＳＸ０８	ＢＩ－69
	〃－120	〃		Ⅰ区第３遺構	ＢＩＮ－15
	〃－121	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＢＩ－56
	〃－122	〃		Ⅰ区第３遺構	ＢＩＮ－16
	〃－123	〃		Ⅱ区第２遺構	ＢＩ－57
	〃－124	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－46
	〃－125	〃		Ⅰ区第３遺構	ＢＩＮ－18
	〃－126	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－130
	〃－127	〃		Ⅱ区ＳＸ０８	ＢＩ－22
131	99－128	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－131
	〃－129	〃		Ⅱ区ＳＸ０８	ＢＩＮ－1
	〃－130	〃		Ⅱ区ＳＢ１０構築土	ＢＩＮ－13
	〃－131	〃		Ⅱ区ＳＢ０６	ＢＩ－94

遺　物　一　覧　表 (20)

P	番　号	種　類	特　徴	出土遺構	備　考
131	99－132	備前擂鉢		Ⅱ区ＳＢ０５	ＢＩ－47
	〃－133	〃		Ⅱ区ＳＢ１２	ＢＩ－55
	〃－134	〃		Ⅱ区第１遺構	ＢＩ－80
	〃－135	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－133
	〃－136	〃		Ⅱ区ＳＡ０８	ＢＩ－107
132	100－137	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－127
	〃－138	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－126
	〃－139	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＢＩ－60
	〃－140	〃		Ⅱ区ＳＡ１０	ＢＩ－92
	〃－141	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＢＩＮ－21
	〃－142	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＢＩＮ－20
	〃－143	〃		Ⅱ区ＳＡ１０	ＢＩ－93
	〃－144	〃		Ⅱ区第２遺構覆土	ＢＩ－23
133	101－145	備前平鉢		Ⅱ区ＳＢ０４	ＢＩ－95
	〃－146	〃	底部ヘラ記号	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＢＩＮ－21
	〃－147	〃		Ⅱ区ＳＢ１２	ＢＩＮ－10
	〃－148	〃		Ⅱ区第３遺構	ＢＩ－27
	〃－149	〃		Ⅱ区ＳＢ１２	ＢＩＮ－9
	〃－150	〃		Ⅱ区ＳＢ１１	ＢＩ－49
	〃－151	〃		Ⅱ区最下層	ＢＩ－10
	〃－152	〃		Ⅰ区第３遺構	ＫａＴ－43
135	102－ 1	美濃・瀬戸皿		Ⅰ区第３遺構	Ｍ－20
	〃－ 2	〃	重焼痕　ワドチ	Ⅱ区流砂	Ｍ－44
	〃－ 3	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＤ０２	Ｍ－26
	〃－ 4	〃		Ⅱ区ＳＡ１１下層	Ｍ－15
	〃－ 5	〃	重焼痕　ワドチ	Ⅱ区流砂	Ｍ－45
	〃－ 6	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＸ０８	Ｍ－48
	〃－ 7	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＢ１２	Ｍ－27
	〃－ 8	〃	〃　釉付着　ワドチ	Ⅱ区ＳＡ１０	Ｍ－33
	〃－ 9	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＭＮ－11
	〃－10	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	
	〃－11	〃	折縁	Ⅰ区第３遺構	Ｍ－21
	〃－12	〃		Ⅱ区流砂	Ｍ－24
	〃－13	〃		Ⅰ区第３遺構	Ｍ－18
	〃－14	〃	折縁	Ⅱ区流砂	Ｍ－43
	〃－15	〃	重焼痕折縁	Ⅱ区ＳＢ０６	Ｍ－29
	〃－16	〃	〃　ワドチ	Ⅱ区ＳＡ１１	Ｍ－25
	〃－17	〃	〃　菊皿　ワドチ	Ⅱ区第３遺構流砂	Ｍ－35
	〃－18	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＭＮ－5

遺　物　一　覧　表 (21)

P	番　号	種　　類	特　　徴	出　土　遺　構	備　　考
135	102－19	美濃・瀬戸皿	重焼痕折縁菊皿　ワドチ	Ⅱ区ＳＢ１１下層	Ｍ－22
	〃－20	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＸ０５下層	ＭＮ－13
	〃－21	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＢ０４	ＭＮ－3
	〃－22	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＸ０５	Ｍ－38
	〃－23	〃	重焼痕波縁	Ⅰ区第３遺構	
	〃－24	〃	志野菊皿	Ⅱ区流砂	Ｍ－41
	〃－25	〃	重焼痕志野菊皿　ピンアト	Ⅱ区ＳＢ１２下層	Ｍ－32
	〃－26	〃	〃　〃	Ⅱ区ＳＢ０６下層	Ｍ－36
	〃－27	〃	〃　〃	Ⅱ区最下層	ＭＮ－4
	〃－28	〃	〃	Ⅱ区第３遺構	Ｍ－31
	〃－29	〃	〃	Ⅱ区ＳＡ１１下層	Ｍ－16
	〃－30	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	
	〃－31	〃	重焼　ワドチ	Ⅱ区ＳＡ０８	Ｍ－28
	〃－32	〃	〃　〃	Ⅱ区流砂	Ｍ－42
136	103－33	美濃・瀬戸碗			Ｍ－34
	〃－34	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	Ｍ－46
	〃－35	〃	天目	Ⅱ区ＳＢ０４	ＭＮ－1
	〃－36	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０６下層	Ｍ－17
	〃－37	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０５	Ｍ－49
	〃－38	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＭＮ－6
	〃－39	〃	〃	Ⅰ区第３遺構	Ｍ－19
	〃－40	〃	〃	Ⅱ区　〃　流砂	Ｍ－47
	〃－41	〃	〃	Ⅰ区ＳＢ０４	ＭＮ－2
	〃－42	〃	〃	Ⅰ区ＳＢ１１下層	
	〃－43	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４下層	Ｍ－40
	〃－44	〃	〃	Ⅱ区第１遺構	Ｍ－37
	〃－45	〃	〃	Ⅱ区最下層	Ｍ－23
	〃－46	〃	〃	Ⅱ区ＳＢ０４下層	Ｍ－39
	〃－47	〃	〃	Ⅱ区第３遺構流砂	Ｍ－14
	〃－48	〃　壷		Ⅱ区ＳＸ０５下層	ＭＮ－12
	〃－49	〃　茶入		Ⅱ区ＳＢ０４	ＭＮ－9
	〃－50	〃　碗	鉄釉絵付	Ⅱ区ＳＤ０１	ＭＮ－7
	〃－51	〃　・織部	回転糸切痕	Ⅱ区第１遺構覆土	ＭＮ－10
	〃－52	〃　・花瓶	〃	〃	Ｍ－8
138	104－1	かわらけ		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－81
	〃－2	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－105
	〃－3	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－173
	〃－4	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－163
	〃－5	〃		Ⅱ区ＳＸ１５	ＫａＴ－124

遺　物　一　覧　表 (22)

P	番　号	種　類	特　徴	出土遺構	備　考
138	104－6	かわらけ		Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－150
	〃－7	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－99
	〃－8	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－120
	〃－9	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－85
	〃－10	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－118
	〃－11	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－100
	〃－12	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－155
	〃－13	〃		Ⅰ区第２遺構覆土	ＫａＴ－56
	〃－14	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＴ－138
	〃－15	〃		Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＴ－169
	〃－16	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－103
	〃－17	〃		Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＴ－170
	〃－18	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－108
	〃－19	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－86
	〃－20	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－92
	〃－21	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－83
	〃－22	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－96
	〃－23	〃		Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＴ－183
	〃－24	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－182
	〃－25	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	ＫａＴ－117
	〃－26	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－153
	〃－27	〃		Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＴ－111
	〃－28	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－98
	〃－29	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－82
	〃－30	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－128
	〃－31	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－107
	〃－32	〃		Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＴ－116
	〃－33	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－187
	〃－34	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－106
	〃－35	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－95
	〃－36	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＴ－177
	〃－37	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－89
	〃－38	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－101
	〃－39	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－109
	〃－40	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－185
139	105－41	〃		Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＴ－112
	〃－42	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－91
	〃－43	〃		Ⅱ区ＳＸ０５下層	ＫａＴ－126
	〃－44	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－151

遺　物　一　覧　表 (23)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
139	105－45	かわらけ		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－139
	〃 －46	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－154
	〃 －47	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－102
	〃 －48	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－119
	〃 －49	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－88
	〃 －50	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－189
	〃 －51	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－87
	〃 －52	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－80
	〃 －53	〃		Ⅱ区ＳＸ０５下層	ＫａＴ－127
	〃 －54	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－167
	〃 －55	〃		Ⅱ区ＳＢ０４下層	ＫａＴ－171
	〃 －56	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－94
	〃 －57	〃		Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－152
	〃 －58	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－84
	〃 －59	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－136
	〃 －60	〃		Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－157
	〃 －61	〃		Ⅱ区第２遺構覆土	ＫａＴ－178
	〃 －62	〃		Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＴ－184
	〃 －63	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－197
	〃 －64	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－90
	〃 －65	〃		Ⅱ区ＳＢ０４・０５	ＫａＴ－113
	〃 －66	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－175
	〃 －67	〃		Ⅱ区ＳＢ１１	ＫａＴ－142
	〃 －68	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	ＫａＴ－166
	〃 －69	〃		Ⅱ区第３遺構覆土	ＫａＴ－174
	〃 －70	〃		Ⅱ区ＳＢ１１最下層	ＫａＴ－93
	〃 －71	〃	回転糸切痕	Ⅱ区ＳＢ０６	ＫａＴ－158
140	106－72	〃	内面？状ナデ	Ⅱ区ＳＢ０６下層	ＫａＴ－115
	〃 －73	〃		Ⅱ区ＳＢ１２　〃	ＫａＴ－112
	〃 －74	〃		Ⅱ区ＳＢ０６　〃	ＫａＴ－181
	〃 －75	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－180
	〃 －76	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	ＫａＴ－123
	〃 －77	〃		Ⅱ区ＳＢ１１下層	ＫａＴ－172
	〃 －78	〃	回転糸切痕	Ⅰ区ＳＺ０１ＮＯ３	ＫａＴ－148
	〃 －79	〃		Ⅱ区ＳＢ１１	ＫａＴ－141
	〃 －80	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－193
	〃 －81	〃		Ⅰ区第１遺構覆土	ＫａＴ－60
	〃 －82	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－195
	〃 －83	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－200

遺　物　一　覧　表 (24)

P	番　号	種　類	特　徴	出土遺構	備　考
140	106－ 84	かわらけ		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－188
	〃 － 85	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－134
	〃 － 86	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－192
	〃 － 87	〃	内面布目痕	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－161
	〃 － 88	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－144
141	107－ 89	〃		Ⅱ区ＳＸ０８付近	ＫａＴ－146
	〃 － 90	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－194
	〃 － 91	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－131
	〃 － 92	〃		Ⅱ区第２遺構	ＫａＴ－140
	〃 － 93	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－198
	〃 － 94	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－129
	〃 － 95	〃		Ⅱ区ＳＢ　〃	ＫａＴ－121
	〃 － 96	〃		Ⅱ区　〃	ＫａＴ－135
	〃 － 97	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－199
	〃 － 98	〃		Ⅱ区第１遺構	ＫａＴ－168
	〃 － 99	〃	内面？状ナデ	Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－159
	〃 －100	〃	内面？状ナデ	Ⅱ区　〃	ＫａＴ－160
	〃 －101	〃	内面？状ナデ	Ⅱ区ＳＢ０５	ＫａＴ－149
	〃 －102	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－130
	〃 －103	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－176
	〃 －104	〃		Ⅱ区第２遺構覆土	ＫａＴ－156
	〃 －105	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－165
	〃 －106	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－132
142	108－107	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－179
	〃 －108	〃	静止糸切痕？	Ⅱ区ＳＸ０２	ＫａＴ－145
	〃 －109	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－164
	〃 －110	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－190
	〃 －111	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－133
	〃 －112	〃		Ⅱ区ＳＸ０５　〃	ＫａＴ－125
	〃 －113	〃		Ⅱ区第１遺構覆土	ＫａＴ－191
	〃 －114	〃		Ⅱ区ＳＢ１０	ＫａＴ－162
	〃 －115	〃		Ⅱ区ＳＢ１０ＳＸ１３	ＫａＴ－196
	〃 －116	〃		Ⅱ区第２遺構覆土	ＫａＴ－143
	〃 －117	〃		Ⅱ区最下層	ＫａＴ－97
	〃 －118	〃		Ⅱ区ＳＸ０７	ＫａＴ－147
	〃 －119	〃		Ⅱ区ＳＢ１０構築土	ＫａＴ－114
	〃 －120	〃		Ⅱ区ＳＢ１０下層	ＫａＴ－137
145	109－ 1	円盤状土製品（伊万里）	径 1.5 cm　1.2 g	Ⅱ区	Ｔ－92
	〃 － 2	〃　（白磁）	径 1.8 cm　2.0 g	Ⅰ区第３遺構	Ｔ－81

遺　物　一　覧　表 (25)

P	番　号	種　　類	特　　徴	出　土　遺　構	備　　考
145	109－3	円盤状土製品（備前）	径 2.4 cm　10.1 g	Ⅱ区ＳＢ１１下層	Ｔ－85
	〃－4	〃	径 2.4 cm　6.5 g	Ⅱ区第3遺構	Ｔ－79
	〃－5	〃　（備前）	径 2.4 cm　7.5 g	Ⅱ区ＳＢ１０	Ｔ－90
	〃－6	〃	径 2.4 cm　9.2 g	Ⅱ区	Ｔ－62
	〃－7	〃	径 2.5 cm　10.1 g	Ⅱ区ＳＢ０４	Ｔ－91
	〃－8	〃	径 2.5 cm　11.6 g	Ⅱ区　〃	Ｔ－86
	〃－9	〃	径 2.6 cm　10.7 g	Ⅱ区流砂	Ｔ－75
	〃－10	〃	径 2.6 cm　12.6 g	Ⅱ区ＳＢ０６下層	Ｔ－73
	〃－11	〃	径 2.6 cm　10.2 g	Ⅱ区	Ｔ－89
	〃－12	〃	径 2.7 cm　12.0 g	Ⅱ区第１遺構覆土	Ｔ－63
	〃－13	〃　（土師器）	径 2.8 cm　5.5 g	Ⅱ区ＳＡ１１下層	Ｔ－70
	〃－14	〃　（備前）	径 2.9 cm　14.7 g		Ｔ－72
	〃－15	〃	径 3.1 cm　8.0 g	Ⅱ区ＳＢ１１下層	Ｔ－49
	〃－16	〃　（中国白磁）	径 3.3 cm　11.1 g	Ⅱ区最下層	Ｔ－33
	〃－17	〃　（備前）	径 3.4 cm　19.7 g		Ｔ－77
	〃－18	〃	径 3.4 cm　21.7 g	Ⅱ区流砂	Ｔ－64
	〃－19	〃　（唐津）	径 3.5 cm　13.0 g	Ⅱ区ＳＤ０２下層	Ｔ－76
	〃－20	〃　（備前）	径 3.5 cm　25.1 g	Ⅱ区ＳＢ１１	Ｔ－65
	〃－21	〃	径 3.5 cm　19.5 g	Ⅱ区第２遺構	Ｎｉ－2
	〃－22	〃	径 3.5 cm　18.0 g	Ⅱ区ＳＢ０５	Ｔ－82
	〃－23	〃	径 3.6 cm　22.1 g	Ⅱ区	Ｔ－34
	〃－24	〃　（備前壷）	径 3.7 cm　17.0 g	Ⅱ区ＳＢ０６	Ｔ－15
	〃－25	〃　（備前）	径 3.7 cm　39.1 g	Ⅱ区ＳＸ０８	Ｔ－58
	〃－26	〃	径 3.8 cm　25.0 g	Ⅱ区　〃	Ｔ－84
	〃－27	〃	径 3.8 cm　34.1 g	Ⅱ区流砂	Ｔ－23
	〃－28	〃	径 3.9 cm　25.5 g	Ⅱ区第３遺構覆土	Ｔ－71
	〃－29	〃	径 3.9 cm　19.7 g	Ⅱ区ＳＢ１１	Ｎｉ－8
	〃－30	〃	径 3.9 cm　37.6 g	Ⅱ区　〃　下層	Ｔ－45
	〃－31	〃	径 4.1 cm　31.2 g	Ⅱ区流砂	Ｔ－22
	〃－32	〃　（唐津）	径 4.1 cm　21.1 g	Ⅱ区ＳＸ０８	Ｔ－74
	〃－33	〃	径 4.2 cm　30.0 g	Ⅱ区ＳＡＯ８覆土	Ｎｉ－7
	〃－34	〃　（備前）	径 4.3 cm　32.2 g	Ⅱ区	Ｎｉ－5
146	110－35	〃　（中国染付）	径 4.3 cm　13.2 g	Ⅱ区ＳＢ１１下層	Ｔ－35
	〃－36	〃　（備前）	径 4.3 cm　38.0 g	Ⅱ区ＳＸ０８	Ｔ－57
	〃－37	〃	径 3.4 cm　24.7 g	Ⅱ区流砂	Ｔ－56
	〃－38	〃　（中国白磁）	径 4.4 cm　21.6 g	Ⅱ区第１遺構覆土	Ｔ－32
	〃－39	〃　（〃　瓦）	径 4.4 cm　43.7 g	Ⅰ区第３　〃	Ｔ－39
	〃－40	〃　（備前擂鉢）	径 4.4 cm　41.1 g	Ⅱ区ＳＸ０５	Ｔ－95
	〃－41	〃　（備前）	径 4.4 cm　36.2 g	Ⅱ区ＳＸ０４	Ｎｉ－10

遺　物　一　覧　表 (26)

P	番　号	種　　類	特　　徴	出　土　遺　構	備　　考
146	110－42	円盤状土製品（備前擂鉢）	径 4.5cm　31.6g	Ⅱ区流砂	T－17
	〃－43	〃	径 4.5cm　46.1g	Ⅱ区SD01	T－80
	〃－44	〃　（瓦）	径 4.5cm　35.2g	Ⅰ区第1・2遺構間層	T－87
	〃－45	〃　（備前）	径 4.6cm　23.6g	Ⅱ区流砂	T－51
	〃－46	〃	径 4.6cm　37.5g	Ⅱ区　〃	T－30
	〃－47	〃　（甕）	径 4.6cm　55.7g	Ⅱ区SX08	T－13
	〃－48	〃	径 4.6cm　56.1g	Ⅱ区　〃	T－16
	〃－49	〃　（備前）	径 4.6cm　27.1g	Ⅱ区第3遺構流砂	T－78
	〃－50	〃　（瓦）	径 4.6cm　51.7g	Ⅱ区SB11下層	T－27
	〃－51	〃　（備前）	径 4.7cm　42.5g	Ⅱ区流砂	T－44
	〃－52	〃　（瓦）	径 4.7cm　42.6g	Ⅱ区第3遺構流砂	T－10
	〃－53	〃　（須恵器）	径 4.7cm　31.5g	Ⅱ区SB12下層	T－20
147	111－54	〃　（備前）	径 4.8cm　50.7g	Ⅱ区流砂	T－50
	〃－55	〃	径 4.8cm　15.6g	Ⅱ区　〃	T－93
	〃－56	〃　（備前）	径 4.9cm　30.0g	Ⅱ区第1遺構覆土	T－26
	〃－57	〃　（瓦）	径 4.9cm　55.5g	Ⅱ区SD01	T－42
	〃－58	〃	径 4.9cm　37.0g	Ⅱ区第3遺構流砂	T－54
	〃－59	〃	径 4.9cm　57.2g	Ⅱ区最下層	T－61
	〃－60	〃	径 5.0cm　34.1g	Ⅱ区SD01	T－11
	〃－61	〃　（備前甕）	径 5.0cm　31.6g	Ⅱ区SX01	T－14
	〃－62	〃　（〃　擂鉢）	径 5.0cm　36.6g	Ⅱ区SD01	T－68
	〃－63	〃　（〃　甕）	径 5.0cm　72.7g	Ⅱ区SD10下層	T－18
	〃－64	〃　（瓦）	径 5.0cm　62.5g	Ⅱ区流砂	T－19
	〃－65	〃　（備前）	径 5.0cm　62.0g	Ⅱ区　〃	T－53
	〃－66	〃	径 5.1cm　47.5g	Ⅱ区第3遺構流砂	Ni－4
	〃－67	〃	径 5.1cm　64.5g	Ⅱ区流砂	T－67
	〃－68	〃	径 5.2cm　60.6g	Ⅱ区第1遺構覆土	T－38
	〃－69	〃	径 5.2cm　41.5g	Ⅱ区第3　〃	T－94
	〃－70	〃　（備前）	径 5.2cm　41.0g	Ⅱ区流砂	Ni－6
148	112－71	〃　（〃　甕）	径 5.2cm　51.6g	Ⅱ区　〃	T－8
	〃－72	〃　（〃　）	径 5.2cm　54.5g	Ⅱ区SD01	T－43
	〃－73	〃　（〃　）	径 5.2cm　38.6g	Ⅱ区流砂	Ni－3
	〃－74	〃	径 5.3cm　41.6g	Ⅱ区SX08	T－29
	〃－75	〃　（唐津）	径 5.3cm　35.2g	Ⅱ区SD01	T－28
	〃－76	〃　（備前）	径 5.4cm　74.6g	Ⅱ区流砂	T－66
	〃－77	〃　（伊万里碗）	径 5.4cm　46.1g	Ⅱ区　〃	T－12
	〃－78	〃　（備前）	径 5.4cm　48.2g	Ⅱ区　〃	T－36
	〃－79	〃　（〃　甕）	径 5.5cm　56.6g	Ⅱ区SA01	T－1
	〃－80	〃　（〃　）	径 5.5cm　51.5g	Ⅱ区流砂	T－47

遺　物　一　覧　表 (27)

P	番　号	種　類	特　徴	出土遺構	備　考
148	112－81	円盤状土製品（備前壷）	径 5.6cm　29.6g	Ⅱ区流砂	T－83
	〃－82	〃（瓦）	径 5.7cm　74.6g	Ⅱ区最下層	T－55
	〃－83	〃（備前）	径 5.8cm　77.2g	Ⅱ区流砂	Ni－1
	〃－84	〃（瓦）	径 5.9cm　90.6g	Ⅱ区SB04	T－48
	〃－85	〃（甕）	径 5.9cm　72.5g	Ⅰ区第1・2遺構間層	T－52
149	113－86	〃（瓦）	径 5.9cm　77.1g	Ⅰ区第1遺構覆土	T－37
	〃－87	〃（備前）	径 5.9cm　72.6g	Ⅱ区SB04	T－88
	〃－88	〃	径 6.0cm　63.5g	Ⅱ区	T－69
	〃－89	〃	径 6.0cm　74.5g	Ⅱ区SB10構築土	Ni－9
	〃－90	〃（瓦）	径 6.0cm　87.1g	Ⅱ区第3遺構流砂	T－9
	〃－91	〃（備前甕）	径 6.1cm　57.0g	Ⅱ区SX08付近	T－6
	〃－92	〃	径 6.1cm　66.1g	Ⅱ区SX08	T－5
	〃－93	〃	径 6.3cm　97.0g	Ⅱ区SD01	T－4
	〃－94	〃	径 6.3cm　84.7g		T－46
	〃－95	〃（備前）	径 6.4cm　76.6g	Ⅱ区SD	Ni－11
	〃－96	〃（瓦）	径 6.6cm　104.5g	Ⅱ区最下層	T－21
	〃－97	〃	径 6.6cm　98.6g	Ⅱ区流砂	T－40
150	114－98	〃（備前甕）	径 6.7cm　85.5g	Ⅱ区SX04	T－7
	〃－99	〃	径 6.7cm　80.6g	Ⅱ区SD01	T－2
	〃－100	〃（瓦）	径 7.1cm　90.2g	Ⅱ区SB10	T－60
	〃－101	〃	径 7.2cm　89.0g	Ⅱ区流砂	T－59
	〃－102	〃	径 7.5cm　125.6g	Ⅱ区第3遺構流砂	T－31
	〃－103	〃（備前甕）	径 7.5cm　100.5g	Ⅱ区第1遺構覆土	T－3
	〃－104	〃（信楽）	径 7.6cm　61.1g	Ⅱ区流砂	T－24
	〃－105	〃（備前）	径 8.0cm　94.6g	Ⅱ区SB04下層	T－25
	〃－106	〃（瓦）	径 8.6cm　209.6g	Ⅱ区第3遺構流砂	T－41
151	115－1	巴文軒丸瓦		Ⅰ区第1遺構	R－28
	〃－2	〃		Ⅰ区第3　〃　覆土	R－17
	〃－3	〃		Ⅱ区SB04	R－29
	〃－4	〃		Ⅱ区SX10	R－27
	〃－5	〃		Ⅱ区SB11	R－24
	〃－6	〃		Ⅱ区第1遺構覆土	R－18
	〃－7	〃		Ⅱ区SB10	R－22
	〃－8	〃		Ⅱ区第1遺構覆土	R－21
	〃－9	〃		Ⅱ区第3遺構流砂	R－25
	〃－10	〃		Ⅱ区SX09	R－19
	〃－11	〃		Ⅱ区第3遺構流砂	R－26
	〃－12	〃		Ⅱ区SB06	R－23
	〃－13	〃		Ⅱ区第2遺構面	R－20

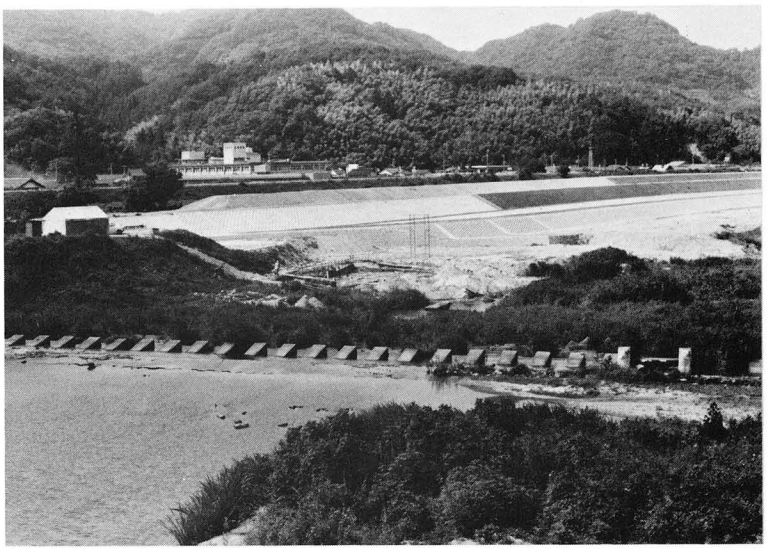
遺　物　一　覧　表 (28)

P	番　号	種　類	特　徴	出　土　遺　構	備　考
	116－14	巴文軒丸瓦		Ⅱ区ＳＢ０４	Ｒ－16
	〃 －15	軒平瓦		Ⅱ区第３遺構流砂	Ｒ－13
152	〃 －16	〃		Ⅱ区　〃	Ｒ－12
	〃 －17	〃		Ⅱ区ＳＸ０５	Ｒ－14
	〃 －18	〃		Ⅱ区第３遺構流砂	Ｒ－15
	117－19	熨瓦		Ⅱ区ＳＡ０８	Ｒ－7
	〃 －20	〃		Ⅰ区第３遺構	Ｒ－10
	〃 －21	〃		Ⅰ区　〃	Ｒ－6
	〃 －22	〃		Ⅱ区　〃　流砂	Ｒ－8
153	〃 －23	〃		Ⅰ区第１〃面	Ｒ－5
	〃 －24	〃		Ⅱ区ＳＢ０４	Ｒ－9
	〃 －25	棟込瓦		Ⅰ区ＳＡ０２付近	Ｒ－3
	〃 －26	鳥衾		Ⅱ区ＳＸ０５	Ｒ－30
	〃 －27	鬼瓦		Ⅱ区ＳＢ１２	Ｒ－1
	118－28	打ち掻き面戸瓦		Ⅱ区流砂	Ｒ－2
154	〃 －29	〃		Ⅱ区ＳＢ０６	Ｒ－4
	〃 －30	鯱		Ⅱ区ＳＸ０５	Ｒ－11
156	119	火縄式銃砲		Ⅰ区第３遺構下層	

Ⅱ区SD01

図版 2

冨田城千畳平からみた冨田川河床遺跡



Ⅰ区を冨田橋（南）よりみる

Ⅰ区よりⅡ区をみる（右上の建物は広瀬町立歴史民俗資料館）

Ⅰ区　第１遺構面（北側より）

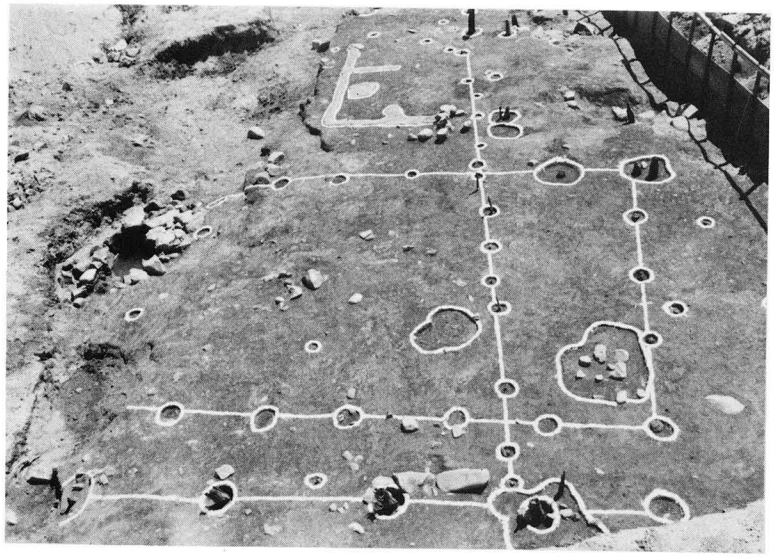
Ⅰ区　第１遺構面（西側より）

Ⅰ区　第１遺構面（南側より）

Ⅰ区　第１遺構面

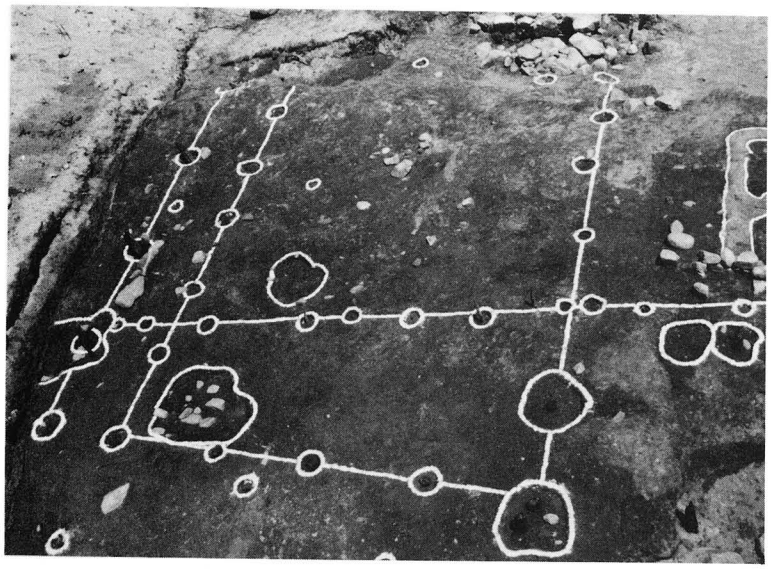
Ⅰ区　第１遺構面

Ⅰ区　第１遺構面

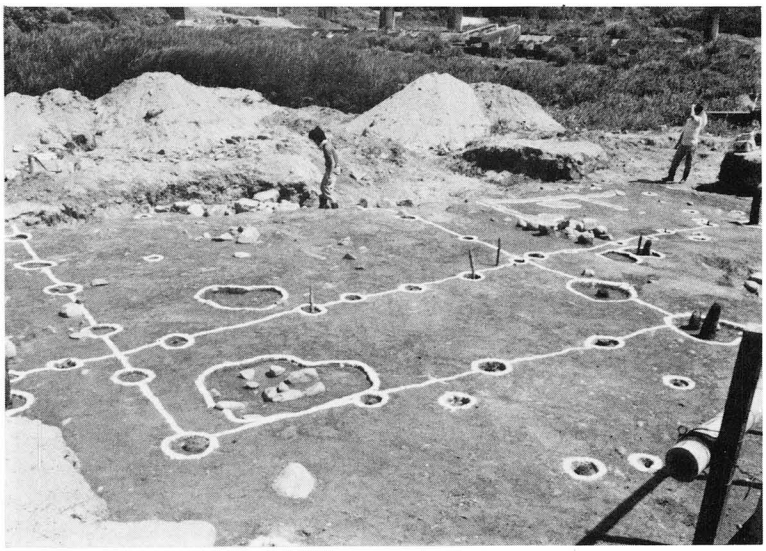


Ⅰ区　第２遺構面（北側より）
SB02、03、SA01

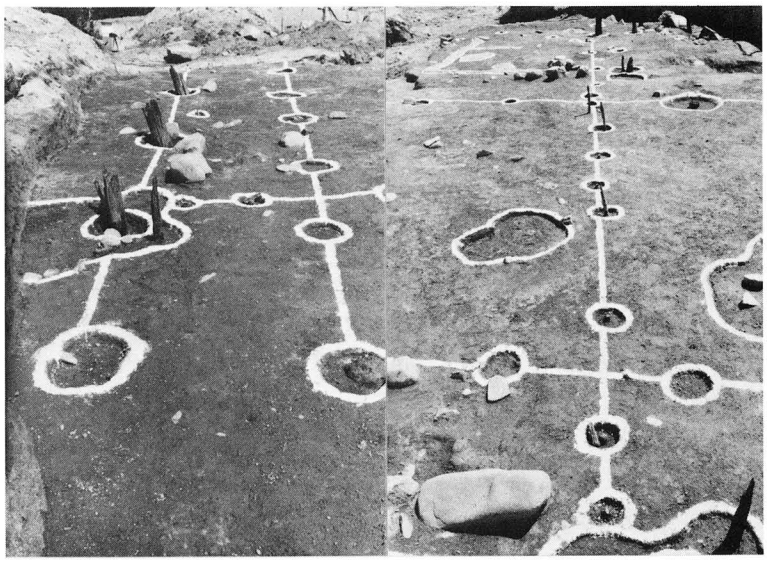
Ⅰ区　第２遺構面（北側より）
SA01



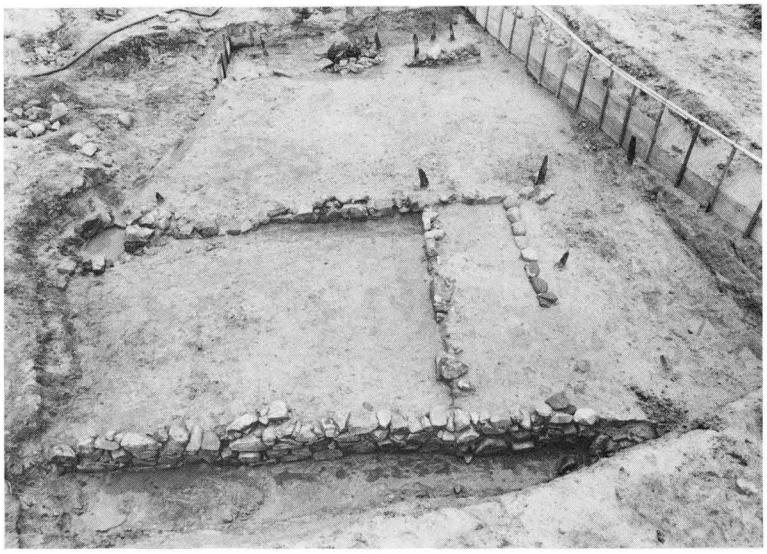
Ⅰ区　第２遺構面（北側より）
SA01、SB02、03



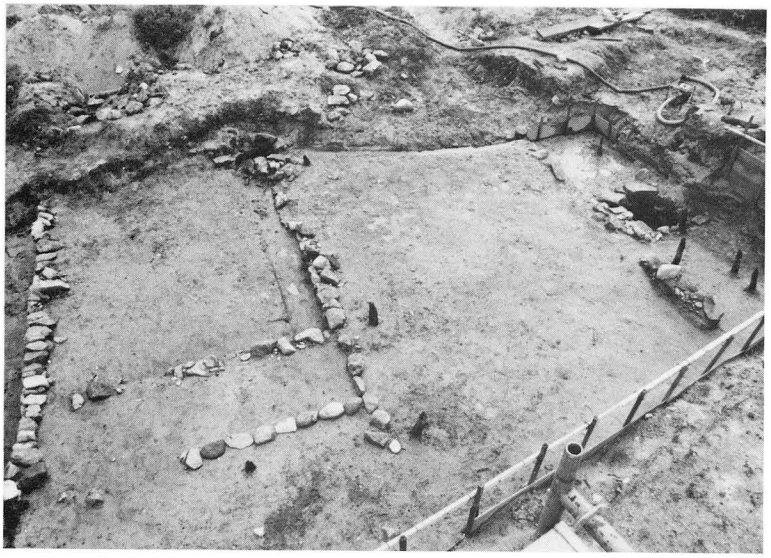
Ⅰ区　第２遺構面



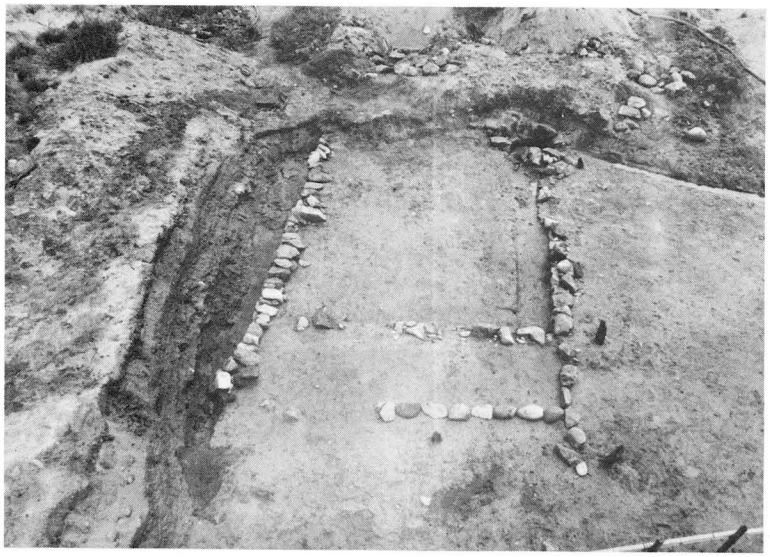
Ⅰ区　第２遺構面
（左：西側より　右：SA01）



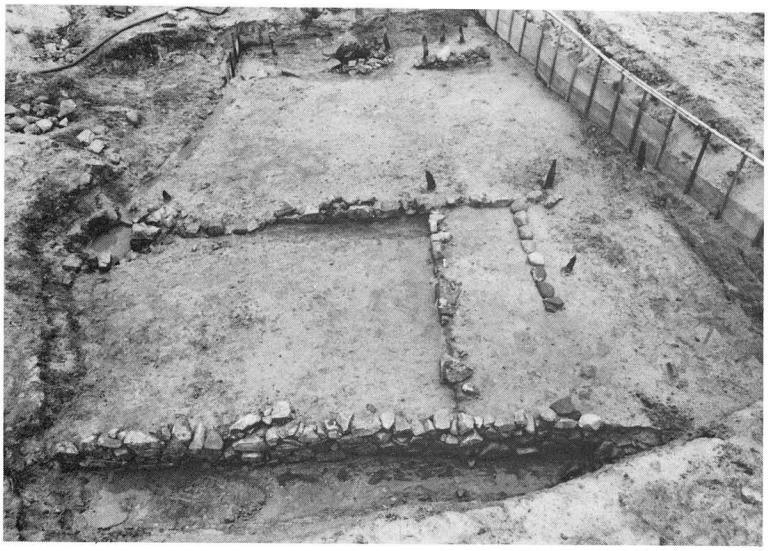
Ⅰ区　第３遺構面
（北側より）



Ⅰ区　第３遺構面（西側より）



Ⅰ区　第３遺構面（西側より）



Ⅰ区　第３遺構面（北側より）

Ⅰ区　SE01

Ⅰ区　SE02

Ⅰ区　遺物出土状態（絵唐津315）

Ⅰ区　SK02

Ⅰ区　火縄銃出土状態

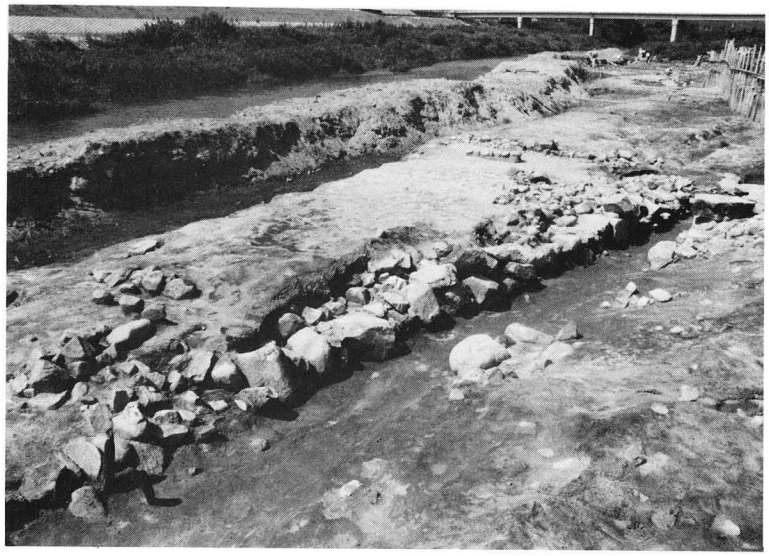
Ⅱ区　遠影（川の向うは広瀬の町並）

Ⅱ区　全影（下流側から）

Ⅱ区　全影（第１遺構面）

Ⅱ区　第１遺構面（SD01）

Ⅱ区　第１遺構面（SD01）



Ⅱ区　第１遺構面 SD01（上流より）

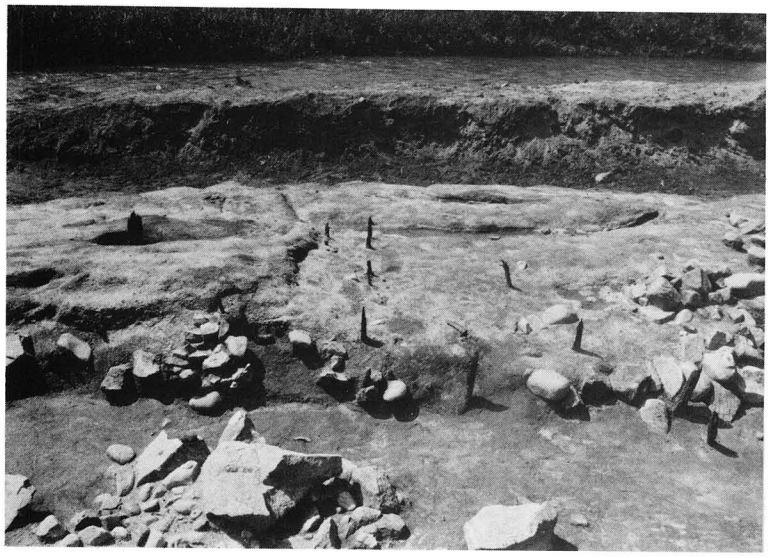
Ⅱ区　第１遺構面

Ⅱ区　第１遺構面

Ⅱ区　第１遺構面 SB01（下流側より）

Ⅱ区　第１遺構面

Ⅱ区　第１遺構面

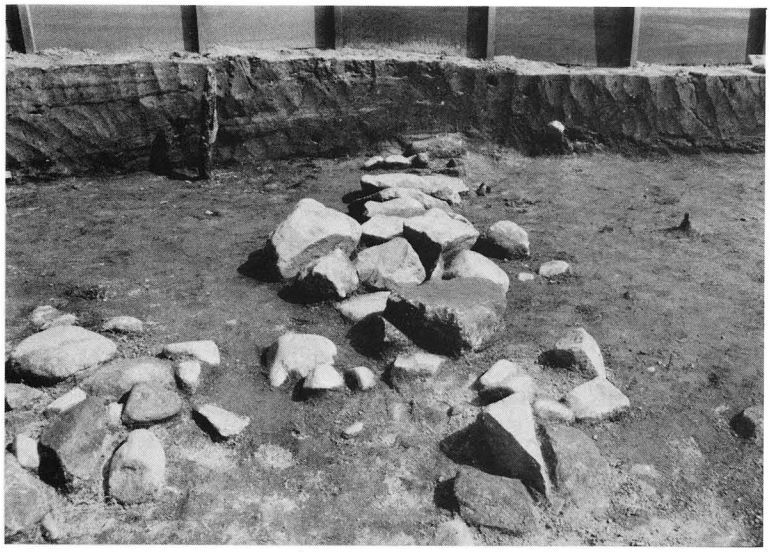


Ⅱ区　第１遺構面

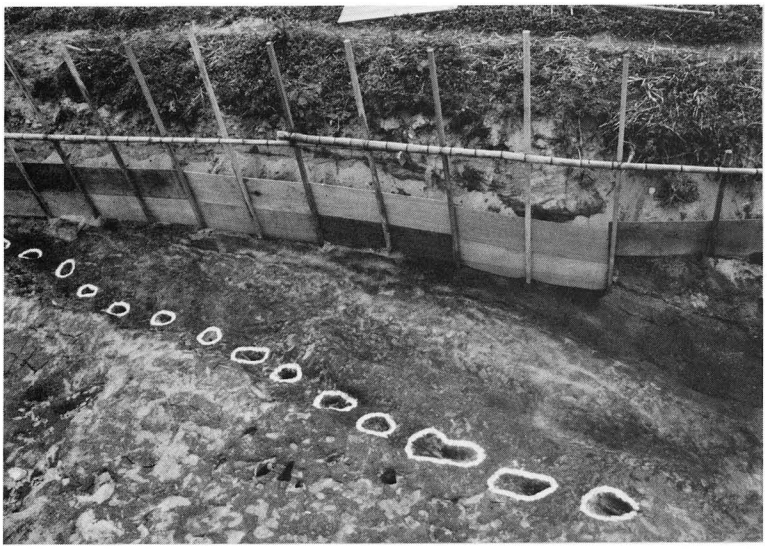
Ⅱ区　第１遺構面

Ⅱ区　全影（上流側より）

Ⅱ区　第３遺構面（上流側より）



Ⅱ区　SX08



Ⅱ区　SA02

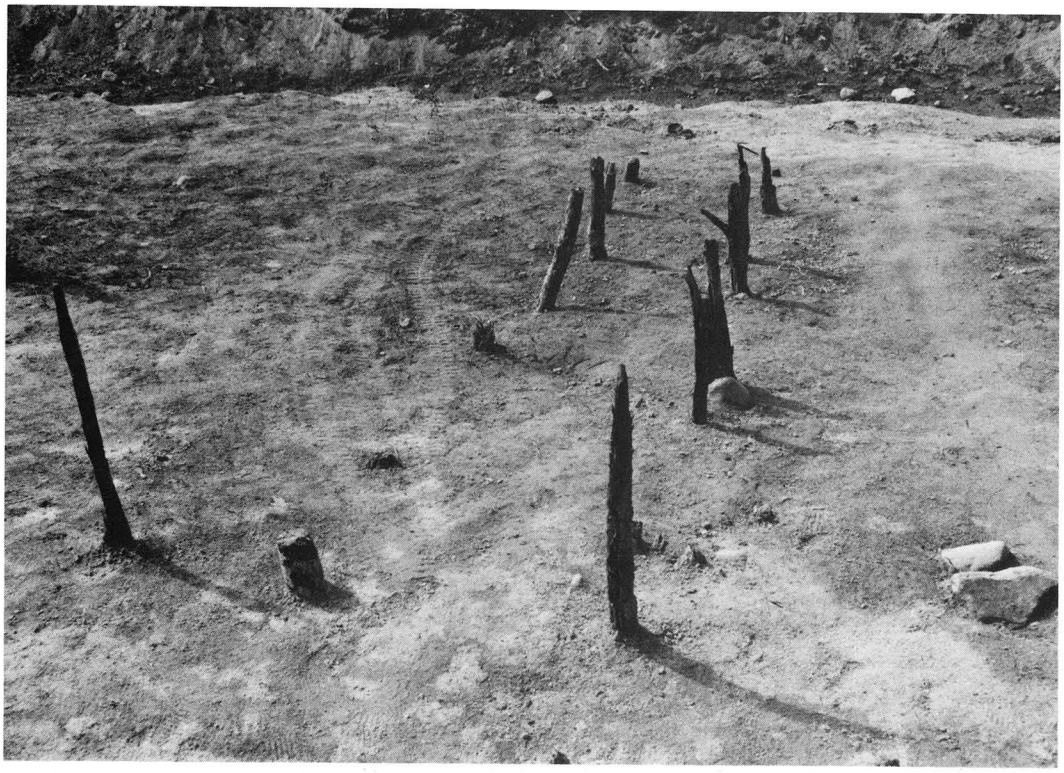
Ⅱ区　SA04

Ⅱ区　SX04、11、SB09

Ⅱ区　SB09、08

Ⅱ区　SX04

Ⅱ区　SA06



Ⅱ区　SA07

Ⅱ区　SD02（下流より）

Ⅱ区　SD02（上流より）

Ⅱ区　SX14・SB10